㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第221集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ

―甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査―

古墳時代本文編

1997

群馬県教育委員会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第221集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第46集

白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ

―甘楽パーキングエリア地内遺跡の調査―

古墳時代本文編

1 9 9 7

群　馬　県　教　育　委　員　会
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
日　本　道　路　公　団

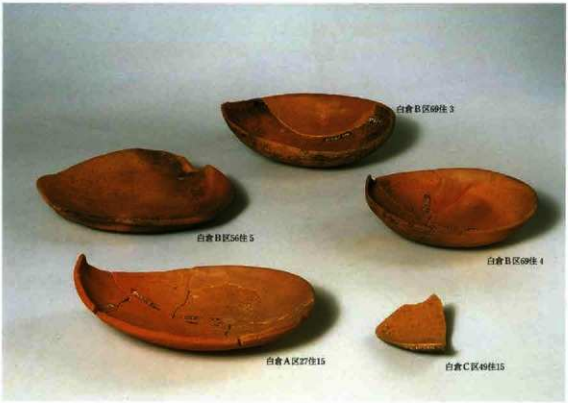
鏑川流域を中心とした群馬県の地形（南から）（飯塚聡氏県文化財保護課職員原画）

遺跡を南から望む

遺跡地の現況と周辺の地形（北から）

樹皮製曲物（天引Ｃ区72号粘土採掘坑出土）

樹皮製曲物（天引Ｃ区26号粘土採掘坑出土）



木の葉形坏

胎土の異なる甑（白倉B区20住6）

胎土の異なる甑（白倉C区11住9）

手鏡形土製品（左から白倉B区3住21、同区10住18、同区54住15）

土　鈴（白倉C区49住14）

動物意匠の土製品（魚形）
（白倉C区49住12）

動物意匠の土製品
（白倉A区85住28）

金具（白倉A区26住30）

佐　波　理
（白倉B区51住9）

白倉B区12号住13（高坏）

白倉C区4住17（甑）

畿内産土師器
（天引44住2）

白倉A区34号住出土高坏

白倉B区65住6

白倉B区84号住出土高坏

序

関越自動車道藤岡ジャンクションから分岐して長野・新潟に向かう上信越自動車道は、平成８年11月に長野市まで開通するところとなりました。この高速自動車道は、群馬西部の藤岡市から富岡市にかけては鏑川のつくった河岸段丘と、それに連なる丘陵上を走り、その穏やかな鏑の谷の景観は、ドライバーの人々の目を楽しませています。

この鏑の段丘上には、数多くの遺跡が分布することで知られています。その一つである甘楽郡甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡も、上信越自動車道建設にかかわる発掘調査によって旧石器時代から中・近世以降に至るまでの各時代にわたる遺構・遺物が発見され、古代から連綿と続く人々の営みを知ることができます。

本遺跡の発掘調査による旧石器時代から古墳時代前期の遺構・遺物については、既に『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅰ～Ⅲとして報告しました。本書は、その後に続く、６～７世紀の遺構・遺物を対象とした古墳時代編として報告します。その中で特質されるものに、白玉の製作工房跡、土器などの原料を得るために掘られた粘土採掘坑や曲物とよぶ樹皮製の容器など、めずらしい遺構・遺物を掲載しています。

『白倉下原・天引向原』Ⅳの刊行にあたり、その成果が研究者をはじめ、地域の社会教育・学校教育に活用され、この地域の歴史解明の一助になれば幸いに存じます。

また、発掘調査・整理事業を進めるにあたって、日本道路公団・群馬県教育委員会・甘楽町教育委員会をはじめとして、関係された諸機関の皆様の暖かいご援助・ご協力に厚く感謝し、序といたします。

平成９年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小寺弘之

例　　言

1　本書は関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「白倉下原・天引向原遺跡」（事業名称原西Ⅰ、原西Ⅱ、原西）の発掘調査報告書である。

本書は白倉下原・天引向原遺跡の古墳時代後期編であり、『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅳとして本文編、写真図版編、遺物観察表編の３分冊となっている。『同』Ⅰは旧石器時代編、『同』Ⅱは縄文時代編、『同』Ⅲは弥生～古墳時代編として既に刊行されており、本報告書Ⅳとともに、『同』Ⅴ奈良時代以降を取り扱った報告書が刊行される。

2　白倉下原遺跡は群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉字下原地内、天引向原遺跡は同大字天引字向原地内に所在し、遺跡名は大字名と小字名を採用している。

3　本遺跡の発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。

4　実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上越線地域埋蔵文化財調査を目的に設置された、関越自動車道上越線調査事務所（多野郡吉井町南陽台に所在）が担当した。

整理事業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（勢多郡北橘村大字下箱田に所在）が担当した。

5　調査期間及び担当者　（職名はその年度における職名を示し、必要に応じて現職を記した。）

(1)　発掘調査

調査期間　平成元年４月１日～平成３年８月20日

調査担当者　右島和夫（平成元・２年度　専門員）
藤巻幸男（〃　元年度　主任調査研究員）
飯田陽一（〃　２・３年度　主任調査研究員）
内木真琴（〃　元年度　調査研究員、現群馬県立前橋工業高等学校教諭）
小島達夫（〃　元・２年度　調査研究員、現エクアドル日本人学校教諭）
小林裕二（〃　２年度　調査研究員、現群馬県立前橋西高等学校教諭）
木村　收（〃　２年度　調査研究員）
亀山幸弘（〃　３年度　調査研究員、現伊勢崎市立北小学校教諭）
櫻井美枝（〃　３年度　調査研究員）
関口博幸（〃　元年度　調査研究員、現安中市立第二中学校教諭）
大橋初子（旧姓飯塚）（〃　元・２年度　調査研究員、現群馬県社会福祉課）

嘱託員　外山政子（〃　元・２・３年度　現法政大学修士課程在学中）

(2)　整理業務　整理期間　平成６年４月１日～平成９年３月31日

整理担当者　藤巻幸男（平成８年度）、木村　收（平成６～８年度）

(3)　事　務　常務理事　邊見長雄（平成元～４年度）、中村英一（平成５～７年度）、菅野　清
事務局長　松本治一（平成元～３年度）、近藤　功（平成４～６年度）、原田恒弘
管理部長　田口紀雄（平成元・２年度）、佐藤　勉（平成３～５年度）、蜂巣　実
調査研究部担当部長　神保侑史（平成元～７年度）、赤山容造（平成８年度）
調査研究部担当課長　岸田治男（平成６・７年度）、平野進一（平成８年度）

総務課長　斎藤俊一（平成６年度）、小渕　淳

総 務 課　国定　均（平成６・７年度係長代理、平成８年度係長）、笠原英樹（平成６・７年度係長代理、平成８年度係長）、須田朋子（主任）、吉田有光（主任）、柳岡良宏（主任）、高橋定義（平成６・７年度主事）、宮崎忠司（平成８年度主事）、非常勤嘱託員　大澤友治

関越自動車道上越線調査事務所

所　長　高橋一夫（平成元・２年）、阿部千明（平成３年４月～11月　故人）
松本浩一（平成３年12月～平成４年３月）、吉田　肇（平成４・５年度）

総括次長　片桐光一（平成元年度）、大澤友治（平成２・３年度）

次　長　徳江　紀（平成元・２年度）

庶務調査課長　依田治雄（平成４・５年度）

課　長　鬼形芳夫（平成元・２年度）、依田治雄（平成３年度）

庶 務 課　係長代理　宮川初太郎（平成元・２年度）、主任　国定　均（平成元年度）、主任　笠原秀樹（平成２・３年度）、主任　吉田有光（平成４・５年度）

6　報告書作成関係者

編　集　木村　收、藤巻幸男

本文執筆　外山政子（Ｖ－３）、藤巻幸男（Ⅲ－３～７、Ｖ－４，８）、(株）パレオ・ラボ（Ⅳ）
木村　收（上記以外）

遺構写真　発掘担当者

遺物観察　観察表　藤巻幸男と黒澤はるみ（白倉Ｃ区を除く）、木村　收（白倉Ｃ区）
なお、土器の年代観については中沢　悟（当事業団専門員）の意見によるところが大きく、須恵器の年代観については坂口　一（当事業団専門員）によるところが大きいが、最終的な責任は編集者にある。

保存処理　関　邦一（当事業団技師）、土橋まり子（当事業団非常勤嘱託員）、小材浩一、小沼恵子
萩原妙子（当事業団補助員）

遺物写真　佐藤元彦（当事業団技師）

整理補助　平成６～８年度　高橋裕美、渡部あい子、狩野芳子、清野幸子、若海美奈子（旧姓林）狩野弘子　平成６年度　長岡和恵、平成６・７年度　高瀬真由美、平成８年度　山田キミ子（以上原西　平成６・７年度、平成８年度　原西Ⅰ）　黒澤はるみ（嘱託員）、笠井初子、狩野君江、田中のぶ子、大澤亜矢子、加藤和子、横尾智子（以上平成８年度　原西Ⅱ）

木器実測及びプレパラート作成　平成５年度　高橋真樹子、高橋節子、五十嵐由美子、伊東博子（当事業団補助員）

器械実測　平成６～８年度　長沼久美子(当事業団嘱託員)、伊藤淳子、千代谷和子、岩渕節子、南雲富子、光安文子、萩原光枝、立川千栄子（当事業団補助員）

7　委託関係

遺構図全体測量　㈱三陽測量（一部）、㈱シン技術コンサル

全体図素図　㈱シン技術コンサル

白倉Ｃ区を除く小形土器実測　㈲前橋文化財研究所

カマドに使用された礫の実測　㈱技研測量設計

航空写真　㈲青高館、㈱シン技術コンサル、たつみ写真スタジオ

トレース　㈱測研

種子、炭化材、木製品の同定と粘土及び土器胎土分析及び上記本文　㈱パレオ・ラボ

白倉Ｂ区75号住居出土滑石分布素図作成　㈱システム提案

8　石材鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）にお願いした。

9　出土した遺物や図面に関しては、群馬県埋蔵文化財調査センターに一括して保管してある。

10　発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏に御教示・御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。(敬称略、五十音順)

甘楽町教育委員会、甘楽町農業協同組合、甘楽町白倉地区と天引地区の地権者、小安和順

11　発掘調査従事者

飯塚弘美、牛込かね代、浦辺重代、小柏きみ子、小山田光代、加藤あい子、加辺幸子、黒沢とき、斎藤吉江、鈴木みや、関口治郎、関口とみ子、久保みち子、高木とり、谷川あさ子、長岡裕治、布瀬川はつ子、布瀬川まさ子、堀口文内、松井昭子、宮前美恵子、森田たか子、山崎章子、山崎和子、山崎丈輝、山田けさ、横山フサ、太田順子、小沢清次、小野秀雄、金田ユミ子、金田和子、金田子之吉、久保初江、桜井康弘、神保貢治、関口嘉一、関口エイ、高木甚三郎、布瀬川千代松、堀越みな子、松井みよ子、向井まさ江、山田長治、吉井秀雄、堀口巌、秋山いね子、高田ウタ子、鈴木いせ、山田文子、吉田さく、吉田德重、吉田をとの、落合和子、山崎甲子郎、設楽とめ、大河原初枝、吉田ナツ、黒沢清子、森平幸子、長岡三郎、設楽うた志、安藤ハツエ、、高橋弘、設楽まつ江、田中洋子、鈴木日出子、小川美佐子、己斐智子、高田文子、小沢剛、浅川啓子、井上慎也（以上、原西Ⅰ遺跡班）

岸今朝義、寺尾久吉、福田一男、折茂七郎、神保利政、仲沢一郎、三木伴次郎、吉田一二三、神保光明、塚越　進、黒沢章一郎、古館　明、田中和満、木村利雄、古館繁男、堀越件吾、山崎　明、古口三郎、山崎常夫、浦辺保司、神保君江、千代延八重子、黒沢千代子、春山米子、加部まき江、真加部鈴枝、酒井とし子、福田とみ、黒沢フジミ、堀越美恵子、神保和子、峰岸百合子、関口いちゑ、加藤秀子、箭原慶子、白井さ津き、加部恵美子、堀越智子、田中みつ江、須田シゲ子、滝上光代、春山ふさ江、安藤きく、小林美枝子、小林きん、斎藤淑江、浦辺ふさの、神保京子、堀越よし、金田あい子、新井すみ子、清水直美、林　かつ、柿田久枝、折茂すい、関口仲江、寺尾フジ江、田村ハツ子、芝塚なみ、西みよ子、高橋時枝、富田房三郎（以上、原西Ⅱ遺跡班）

凡　　例

1．本報告書は、『本文編』『遺物観察表編』『写真図版編』の３分冊からなり、遺物の観察表と遺構及び遺物写真は別冊となっている。この分冊は本文編にあたり、本文編は前半に各遺構及び遺物の説明を行い、後半に遺構・遺物図版を掲載する構成となっている。前半に用いられる挿図については第☆図、後半に用いられる挿図については図☆と呼称する。

2．挿図中に使用した方位記号の方向は座標北を指す(国家座標IX系)。また、竪穴住居跡の主軸は、カマドを有する壁に直交する住居中心線を主軸とし、カマド方位が住居主軸と大きく異なる場合には別途、カマド方位を記載した。

3．竪穴住居の面積は、１／20の平面図上で住居のうわば線上をプラニメーターで２回計測した平均値を使用した。

4．各遺構の長さ（計測値）は、遺構のうわばを計測している。また、カマドについては、両袖石が確認されているもののみ内側を計測して、焚口幅とした。さらに、袖石が検出された事例にのみ、床面と袖石頂部の比高を計測して焚口高とした。

5．竪穴住居跡の遺構図の縮尺は１/60とし、カマド図については１/30となっている。その他の遺構図面及び遺物の縮尺は、各図中に表示してある。また、生活什器である甕や坏については、１／４縮尺を原則としたが、整理作業工程との関係から、白倉Ｃ区のみ、甕類１／４、坏類１／３となっている。

6．遺物実測図中における表示は次のことを意味する。

砥石の研ぎ面

7．遺構図面中における表示は、個別図にことわりがないかぎり次のことをあらわす。

焼土　粘土　ローム塊

● 土器・土製品　■ 石器・石製品・礫　▲ 炭化材　□ 鉄器・鉄滓

白倉Ｃ区のみ　○ 縄文・弥生土器　△ 縄文・弥生石器　★ 陶磁器

8．遺構及び遺物の計測値について

(1)　（　）内の計測値は、推定値を示す。

(2)　＜　＞内の計測値は、残存値を示す。

(3)　－となっているものは、計測不可能もしくは不必要と判断したものである。

9．遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1)　石器類の重量は全て残存値を示す。

(2)　胎土中の砂粒の大きさは、＞2㎜＝礫、2～0.02㎜＝砂 とした。

(3)　色調については、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修の新版標準土色帖に基づいている。

10．本文中の第１図に使用した地図は、国土地理院200,000分の１地勢図であり、第５図に使用した地図は、国土地理院25,000分の１地形図「上野吉井」「富岡」である。また、第４図に使用した地図は、甘楽町都市計画図（2,500分の１）を原図としている。

11．個別遺構図において、該当する遺構を切る遺構については、上場線のみを表現し、下場線については表現しなかった。

本文編目次

例　　言
凡　　例
本文編　目次
本文編　遺構・遺物図版目次
本文編　挿図・表目次
遺物観察表編　目次
写真図版編　目次
抄　　録

Ⅰ　発掘調査の経過 …… 3

1　発掘調査に至る経過 …… 3
2　発掘調査の方法と経過 …… 4
(1)　グリッドの設定 …… 4
(2)　発掘調査の方法 …… 4
(3)　発掘調査の経過 …… 6
(4)　整理計画と経過 …… 7

Ⅱ　立地環境と発掘区の概要 …… 8

1　地理的環境 …… 8
2　歴史的環境 …… 10
3　基本土層 …… 16
4　発掘調査区の概観 …… 17
(1)　旧石器時代 …… 17
(2)　縄文時代 …… 18
(3)　弥生時代 …… 19
(4)　古墳時代 …… 20
(5)　奈良～平安時代 …… 21
(6)　中近世以降 …… 22

Ⅲ　古墳時代後期の遺構と遺物 …… 23

1　遺構と遺物の概要 …… 23
(1)　はじめに …… 23

(2) 遺構について……23
(3) 遺物について……24
2 竪穴住居跡……24
3 土　　坑 ……103
4 溝 ……109
5 円形周溝遺構 ……109
6 粘土採掘坑 ……110
7 粘 土 土 坑 ……116

Ⅳ 出土遺物の理科学的分析 ……117

1 竪穴住居跡出土炭化材の樹種分析 ……117
2 遺構出土種実の分析 ……128
3 粘土採掘坑出土木製品の樹種分析 ……131
4 土器の胎土と地山粘土の分析 ……140

Ⅴ 成果と問題点 ……155

1 土器の遺構間接合について ……155
2 土地利用変遷について ……162
3 住居内に廃棄されたカマド構築石材について
—被熱痕跡の観察から— ……172
4 竪穴住居の観察 ……189
5 土師器製作手法について ……193
6 木の葉形坏について ……198
7 白玉製作工程と出土状態 ……204
8 粘土採掘坑出土の曲物容器 ……211
9 特殊遺物について ……216

遺構・遺物図版

図 1
〜
図 371

本文編　遺構・遺物図版

図１　白倉ＡＫ１号住居跡
図２　白倉ＡＫ２号・５号住居跡
図３　白倉ＡＫ３号住居跡
図４　白倉ＡＫ４号・11号住居跡
図５　白倉ＡＫ８号住居跡
図６　白倉ＡＫ７号・15号住居跡
図７　白倉ＡＫ10号・19号住居跡
図８　白倉ＡＫ14号住居跡
図９　白倉ＡＫ20号・22号住居跡
図10　白倉ＡＫ23号住居跡
図11　白倉ＡＫ24号・29号・25号住居跡
図12　白倉ＡＫ26号住居跡
図13　白倉ＡＫ26号住居跡
図14　白倉ＡＫ27号・48号住居跡
図15　白倉ＡＫ28号住居跡
図16　白倉ＡＫ28号・35号住居跡
図17　白倉ＡＫ30号住居跡
図18　白倉ＡＫ31号住居跡
図19　白倉ＡＫ31号住居跡
図20　白倉ＡＫ33号住居跡
図21　白倉ＡＫ33号住居跡
図22　白倉ＡＫ34号住居跡
図23　白倉ＡＫ34号住居跡
図24　白倉ＡＫ36号住居跡
図25　白倉ＡＫ41号・45号住居跡
図26　白倉ＡＫ42号住居跡
図27　白倉ＡＫ44号住居跡
図28　白倉ＡＫ47号住居跡
図29　白倉ＡＫ53号住居跡
図30　白倉ＡＫ54号・55号・57号住居跡
図31　白倉ＡＫ58号・59号・61号住居跡
図32　白倉ＡＫ64号・66号住居跡
図33　白倉ＡＫ62号・72号・74号住居跡
図34　白倉ＡＫ65号住居跡
図35　白倉ＡＫ67号住居跡
図36　白倉ＡＫ73号住居跡
図37　白倉ＡＫ76号・77号住居跡
図38　白倉ＡＫ80号・81号住居跡
図39　白倉ＡＫ82号・83号・84号住居跡
図40　白倉ＡＫ85号住居跡
図41　白倉ＡＫ85号住居跡
図42　白倉ＡＫ85号住居跡
図43　白倉ＡＫ86号・92号・95号住居跡
図44　白倉ＡＫ87号・88号・91号住居跡
図45　白倉ＡＫ93号住居跡
図46　白倉ＡＫ94号住居跡
図47　白倉ＡＫ94号・99号住居跡
図48　白倉ＡＫ99号住居跡
図49　白倉ＡＫ101号住居跡
図50　白倉ＡＫ103号住居跡
図51　白倉ＡＫ104号住居跡
図52　白倉ＡＫ105号住居跡
図53　白倉ＡＫ106号住居跡
図54　白倉ＡＫ107号・109号住居跡
図55　白倉ＡＫ112号住居跡
図56　白倉ＡＫ113号・114号・115号住居跡
図57　白倉ＡＫ117号住居跡
図58　白倉ＡＫ117号・116号・120号住居跡
図59　白倉ＢＫ３号住居跡
図60　白倉ＢＫ３号住居跡
図61　白倉ＢＫ10号住居跡
図62　白倉ＢＫ10号住居跡
図63　白倉ＢＫ10号住居跡
図64　白倉ＢＫ12号住居跡
図65　白倉ＢＫ12号・16号住居跡
図66　白倉ＢＫ16号住居跡
図67　白倉ＢＫ17号住居跡
図68　白倉ＢＫ17号住居跡
図69　白倉ＢＫ20号住居跡
図70　白倉ＢＫ20号・21号跡
図71　白倉ＢＫ20号・21号住居跡
図72　白倉ＢＫ22号住居跡
図73　白倉ＢＫ23号住居跡
図74　白倉ＢＫ23号住居跡
図75　白倉ＢＫ24号・28号住居跡
図76　白倉ＢＫ28号住居跡
図77　白倉ＢＫ29号住居跡
図78　白倉ＢＫ29号住居跡
図79　白倉ＢＫ30号住居跡
図80　白倉ＢＫ33号住居跡
図81　白倉ＢＫ34号住居跡
図82　白倉ＢＫ35号住居跡
図83　白倉ＢＫ37号住居跡
図84　白倉ＢＫ38号・50号住居跡
図85　白倉ＢＫ45号住居跡
図86　白倉ＢＫ45号住居跡
図87　白倉ＢＫ47号住居跡
図88　白倉ＢＫ47号・51号住居跡
図89　白倉ＢＫ52号住居跡
図90　白倉ＢＫ52号住居跡
図91　白倉ＢＫ54号住居跡
図92　白倉ＢＫ54号住居跡
図93　白倉ＢＫ54号住居跡
図94　白倉ＢＫ55号住居跡
図95　白倉ＢＫ56号住居跡
図96　白倉ＢＫ58号・59号住居跡
図97　白倉ＢＫ61号住居跡
図98　白倉ＢＫ62号・70号住居跡
図99　白倉ＢＫ65号住居跡
図100　白倉ＢＫ69号住居跡
図101　白倉ＢＫ72号住居跡
図102　白倉ＢＫ73号住居跡
図103　白倉ＢＫ75号住居跡
図104　白倉ＢＫ75号住居跡
図105　白倉ＢＫ75号住居跡
図106　白倉ＢＫ78号住居跡
図107　白倉ＢＫ82号住居跡
図108　白倉ＢＫ84号住居跡
図109　白倉ＢＫ85号Ａ住居跡
図110　白倉ＢＫ85号Ｂ・Ｃ住居跡
図111　白倉ＢＫ94号住居跡
図112　白倉ＣＫ２号住居跡
図113　白倉ＣＫ３号住居跡
図114　白倉ＣＫ４号住居跡
図115　白倉ＣＫ４号住居跡
図116　白倉ＣＫ５号住居跡
図117　白倉ＣＫ６号住居跡
図118　白倉ＣＫ11号住居跡
図119　白倉ＣＫ11号・16号住居跡
図120　白倉ＣＫ12号住居跡
図121　白倉ＣＫ13号住居跡

図122　白倉C区13号・21号住居跡
図123　白倉C区15号A住居跡
図124　白倉C区15号B住居跡
図125　白倉C区17号住居跡
図126　白倉C区18号住居跡
図127　白倉C区18号住居跡
図128　白倉C区18号住居跡
図129　白倉C区19号住居跡
図130　白倉C区25号住居跡
図131　白倉C区28号・37号住居跡
図132　白倉C区33号住居跡
図133　白倉C区33号・58号住居跡
図134　白倉C区33号住居跡
図135　白倉C区36号住居跡
図136　白倉C区38号住居跡
図137　白倉C区38号住居跡
図138　白倉C区42号住居跡
図139　白倉C区48号住居跡
図140　白倉C区49号住居跡
図141　白倉C区49号・61号住居跡
図142　白倉C区50号住居跡
図143　白倉C区50号住居跡
図144　白倉C区52号A・B住居跡
図145　白倉C区52号A住居跡・65号住居跡
図146　白倉C区60号住居跡
図147　白倉C区60号住居跡
図148　白倉C区62号住居跡
図149　白倉C区62号住居跡
図150　白倉C区74号・88号住居跡
図151　白倉C区79号住居跡
図152　天引地区7号・52号住居跡
図153　天引地区44号住居跡
図154　天引地区50号住居跡
図155　天引地区57号住居跡
図156　天引地区57号住居跡
図157　天引地区71号・87号住居跡
図158　天引地区73号住居跡
図159　天引地区73号・149号住居跡
図160　天引地区115号住居跡
図161　天引地区124号・148号住居跡
図162　天引地区141号住居跡
図163　白倉A区1・2号住居出土遺物
図164　白倉A区2・3号住居出土遺物
図165　白倉A区3号住居出土遺物
図166　白倉A区3・4・5号住居出土遺物
図167　白倉A区7号住居出土遺物
図168　白倉A区8号住居出土遺物
図169　白倉A区10・11・14号住居出土遺物
図170　白倉A区14号住居出土遺物
図171　白倉A区14号住居出土遺物
図172　白倉A区15・19・20号住居出土遺物
図173　白倉A区22号住居出土遺物
図174　白倉A区23・24・25号住居出土遺物
図175　白倉A区25号住居出土遺物
図176　白倉A区26号住居出土遺物
図177　白倉A区26・27号住居出土遺物
図178　白倉A区27・28号住居出土遺物
図179　白倉A区28号住居出土遺物
図180　白倉A区28・29号住居出土遺物
図181　白倉A区30・31号住居出土遺物
図182　白倉A区31号住居出土遺物
図183　白倉A区31号住居出土遺物
図184　白倉A区33号住居出土遺物
図185　白倉A区33号住居出土遺物
図186　白倉A区34号住居出土遺物
図187　白倉A区34・35・36号住居出土遺物
図188　白倉A区41・42号住居出土遺物
図189　白倉A区44・45号住居出土遺物
図190　白倉A区47・53号住居出土遺物
図191　白倉A区54・57・58号住居出土遺物
図192　白倉A区61・62・65号住居出土遺物
図193　白倉A区66・67号住居出土遺物
図194　白倉A区72・73・74・76・77・80号住居出土遺物
図195　白倉A区81・82・85号住居出土遺物
図196　白倉A区85号住居出土遺物
図197　白倉A区85号住居出土遺物
図198　白倉A区85・86・92・93号住居出土遺物
図199　白倉A区94号住居出土遺物
図200　白倉A区95・99号住居出土遺物
図201　白倉A区99・101号住居出土遺物
図202　白倉A区103・104号住居出土遺物
図203　白倉A区105・106号住居出土遺物
図204　白倉A区107・109・112・113号住居出土遺物
114・115・116号住居出土遺物
図205　白倉A区117・120号住居出土遺物
図206　白倉B区3号住居出土遺物
図207　白倉B区3号住居出土遺物
図208　白倉B区10号住居出土遺物
図209　白倉B区10・12号住居出土遺物
図210　白倉B区12号住居出土遺物
図211　白倉B区16号住居出土遺物
図212　白倉B区16・17号住居出土遺物
図213　白倉B区20号住居出土遺物
図214　白倉B区21・22号住居出土遺物
図215　白倉B区21・22・23号住居出土遺物
図216　白倉B区23号住居出土遺物
図217　白倉B区24号住居出土遺物
図218　白倉B区28号住居出土遺物
図219　白倉B区29号住居出土遺物
図220　白倉B区30・33・72号住居出土遺物
図221　白倉B区33・72・34号住居出土遺物
図222　白倉B区34・35号住居出土遺物
図223　白倉B区35・37号住居出土遺物
図224　白倉B区37・38号住居出土遺物
図225　白倉B区45号住居出土遺物
図226　白倉B区47号住居出土遺物
図227　白倉B区50・51・52号住居出土遺物
図228　白倉B区52号住居出土遺物
図229　白倉B区52号住居出土遺物
図230　白倉B区52・54号住居出土遺物
図231　白倉B区54号住居出土遺物
図232　白倉B区55号住居出土遺物
図233　白倉B区55・56号住居出土遺物
図234　白倉B区58号住居出土遺物
図235　白倉B区58・61号住居出土遺物
図236　白倉B区61・62号住居出土遺物
図237　白倉B区62・65号住居出土遺物
図238　白倉B区65・69号住居出土遺物
図239　白倉B区70・73・75号住居出土遺物
図240　白倉B区75号住居出土遺物
図241　白倉B区75号住居出土遺物
図242　白倉B区75号住居出土遺物
図243　白倉B区75号住居出土遺物
図244　白倉B区75号住居出土遺物

図245　白倉B区75号住居出土遺物
図246　白倉B区75・78号住居出土遺物
図247　白倉B区78号住居出土遺物
図248　白倉B区78・82号住居出土遺物
図249　白倉B区84号住居出土遺物
図250　白倉B区84・85号住居出土遺物
図251　白倉B区94号住居出土遺物
図252　白倉C区２号住居出土遺物
図253　白倉C区３号住居出土遺物
図254　白倉C区３・４号住居出土遺物
図255　白倉C区４号住居出土遺物
図256　白倉C区４号住居出土遺物
図257　白倉C区５号住居出土遺物
図258　白倉C区５・６号住居出土遺物
図259　白倉C区６・11号住居出土遺物
図260　白倉C区11号住居出土遺物
図261　白倉C区12号住居出土遺物
図262　白倉C区12・13号住居出土遺物
図263　白倉C区13号住居出土遺物
図264　白倉C区15・16号住居出土遺物
図265　白倉C区17号住居出土遺物
図266　白倉C区17号住居出土遺物
図267　白倉C区18号住居出土遺物
図268　白倉C区18号住居出土遺物
図269　白倉C区18号住居出土遺物
図270　白倉C区18・19号住居出土遺物
図271　白倉C区19号住居出土遺物
図272　白倉C区19・21号住居出土遺物
図273　白倉C区21・25号住居出土遺物
図274　白倉C区25・28・33号住居出土遺物
図275　白倉C区33号住居出土遺物
図276　白倉C区33号住居出土遺物
図277　白倉C区33・36号住居出土遺物
図278　白倉C区36号住居出土遺物
図279　白倉C区36号住居出土遺物
図280　白倉C区36号住居出土遺物
図281　白倉C区36・37号住居出土遺物
図282　白倉C区38号住居出土遺物
図283　白倉C区38号住居出土遺物
図284　白倉C区42号住居出土遺物
図285　白倉C区48号住居出土遺物
図286　白倉C区48・49号住居出土遺物
図287　白倉C区49号住居出土遺物
図288　白倉C区49・50号住居出土遺物
図289　白倉C区50号住居出土遺物
図290　白倉C区50号住居出土遺物
図291　白倉C区50・52・58号住居出土遺物
図292　白倉C区60号住居出土遺物
図293　白倉C区60号住居出土遺物
図294　白倉C区61・62号住居出土遺物
図295　白倉C区62号住居出土遺物
図296　白倉C区62・65号住居出土遺物
図297　白倉C区74・79・88号住居出土遺物
図298　天引地区７・44・50・52号住居出土遺物
図299　天引地区52・57号住居出土遺物
図300　天引地区57号住居出土遺物
図301　天引地区71号住居出土遺物
図302　天引地区73号住居出土遺物
図303　天引地区87・115号住居出土遺物
図304　天引地区124・141号住居出土遺物
図305　天引地区141・149号住居出土遺物
図306　白倉A区６号・18号・43号・46号土坑
47号・64号・68号土坑
図307　白倉A区71号・白倉B区４号・５号・９号・14号土坑
図308　白倉B区17号・25号・35号・37号・40号・42号土坑
図309　白倉B区45号・46号・60号・61号・70号土坑
71号・72号・74号・76号・91号土坑
図310　白倉B区111号・117号・138号・146号土坑
154号・177号・178号・203号土坑
図311　白倉B区206号・221号・229号・252号・254号土坑
図312　白倉B区271号・275号・293号土坑
白倉C区４号・10号・12号・22号土坑
24号・25号・33号土坑
図313　白倉C区54号・65号・66号・80号土坑
83号・93号・111号・156号土坑
天引C区34号・41号土坑
図314　天引C区67号・92号・95号土坑
107号・134号・174号土坑
図315　白倉B区５号溝
図316　白倉C区１号円形周溝遺構
図317　天引C区１号粘土採掘坑
図318　天引C区２号・３号粘土採掘坑
図319　天引C区４号粘土採掘坑
図320　天引C区６号・24号・29号粘土採掘坑
図321　天引C区６号・24号・29号粘土採掘坑断面図
図322　天引C区５号・７号粘土採掘坑
図323　天引C区８号・11号・28号粘土採掘坑
図324　天引C区９号・10号・12号・32号粘土採掘坑
図325　天引C区10号・12号・32号粘土採掘坑断面図
図326　天引C区13号・14号・52号粘土採掘坑
図327　天引C区14号・15号・52号粘土採掘坑
図328　天引C区16号・17号粘土採掘坑
図329　天引C区18号・20号粘土採掘坑
図330　天引C区19号・22号粘土採掘坑
図331　天引C区21号・36号・37号粘土採掘坑
図332　天引C区23号・31号・45号粘土採掘坑
図333　天引C区25号・26号・67号粘土採掘坑
図334　天引C区30号粘土採掘坑
図335　天引C区33号・34号・35号粘土採掘坑
図336　天引C区38号・39号・40号粘土採掘坑
41号・42号・43号・50号粘土採掘坑
図337　天引C区44号・65号粘土採掘坑
図338　天引C区46号・47号・48号・49号・51号粘土採掘坑
図339　天引C区53号・54号・55号・68号粘土採掘坑
図340　天引C区57号・60号・61号粘土採掘坑
図341　天引C区57号・60号・61号粘土採掘坑断面図
図342　天引C区62号粘土採掘坑
図343　天引C区69号・70号粘土採掘坑
図344　天引C区71号・72号粘土採掘坑
図345　天引C区73号・74号粘土採掘坑
図346　天引C区75号・76号粘土採掘坑
図347　天引C区１号粘土坑群
図348　天引C区２号・３号粘土坑群
図349　白倉A区・B区・C区・天引C区土坑出土遺物
図350　天引C区土坑・白倉B区溝出土遺物
図351　天引C区１・２・３号粘土採掘坑出土遺物
図352　天引C区４・６・７・８・９号粘土採掘坑出土遺物
図353　天引C区11・12・13号粘土採掘坑出土遺物
図354　天引C区15号粘土採掘坑出土遺物
図355　天引C区16・17・18号粘土採掘坑出土遺物
19・20・21号粘土採掘坑出土遺物
図356　天引C区22・23・24・26・28号粘土採掘坑出土遺物
図357　天引C区28・30・32号粘土採掘坑出土遺物
37・44・46号粘土採掘坑出土遺物

図358　天引C区47・48・51号粘土採掘坑出土遺物
52・57・61号粘土採掘坑出土遺物
図359　天引C区62号粘土採掘坑出土遺物
図360　天引C区62号粘土採掘坑出土遺物
図361　天引C区62号粘土採掘坑出土遺物
図362　天引C区65・70・74号粘土採掘坑出土遺物
図363　天引C区粘土採掘坑出土木器
図364　天引C区粘土採掘坑出土木器
図365　天引C区粘土採掘坑出土木器
図366　天引C区粘土採掘坑出土木器
図367　天引C区粘土採掘坑出土木器
図368　天引C区粘土採掘坑出土木器
図369　天引C区粘土採掘坑出土曲物
図370　天引C区粘土採掘坑出土木器
図371　天引C区粘土採掘坑出土木器

本文編挿図目次

第1図　白倉下原・天引向原遺跡位置図……1
第2図　グリッド配置図……5
第3図　鋼川流域の地質図……9
第4図　周辺地形と遺跡……12
第5図　周辺の遺跡……13
第6図　基本層序……16
第7図　古墳時代中・後期全体図……25, 26
第8図　白倉A区古墳時代中・後期住居全体図……31
第9図　白倉B区古墳時代中・後期住居全体図……32
第10図　白倉C区古墳時代中・後期住居全体図……33
第11図　天引地区古墳時代中・後期住居全体図……34
第12図　古墳時代の土坑分布……103
第13図　古墳時代の土坑全体図(1)……104
第14図　古墳時代の土坑全体図(2)……105
第15図　古墳時代の土坑全体図(3)……106
第16図　天引C区粘土採掘土坑群全体図……111
第17図　天引C区粘土採掘坑底面レベル一覧……112
第18図　樹皮構造……137
第19図　胎土分析をおこなった土器……141
第20図　粘土サンプル試料採集地点……142
第21図　土器および粘土採掘坑試料中の粒子組成図……148
第22図　第1～第2主成分散布図……149
第23図　住居開発合(1)……156
第24図　住居開発合(2)……157
第25図　住居開発合(3)……158
第26図　住居開発合(4)……159
第27図　住居開発合(5)……160
第28図　住居開発合(6)……161
第29図　4世紀の遺構分布……165
第30図　5世紀前半の遺構分布……166
第31図　5世紀後半の遺構分布……167
第32図　6世紀前半の遺構分布……168
第33図　6世紀後半の遺構分布……169
第34図　7世紀前半の遺構分布……170
第35図　7世紀後半の遺構分布……171
第36図　カマド復元図と使用痕跡凡例……173
第37図　白倉A区31号住居カマド石材……179
第38図　白倉A区31号住居投げこまれたカマド石材……180
第39図　白倉B区29号住居カマド石材……181
第40図　白倉A区117号住居カマド石材……182
第41図　白倉B区54号住居カマド石材(1)……183
第42図　白倉B区54号住居カマド石材(2)……184
第43図　白倉A区23号住居カマド石材(1)……185
第44図　白倉A区23号住居カマド石材(2)……186
第45図　白倉B区78号住居カマド石材(1)……187
第46図　白倉B区78号住居カマド石材(2)……188
第47図　白倉A区1号住居……189
第48図　白倉A区1号住居撮影図……190
第49図　白倉A区47号住居……191
第50図　白倉A区47号住居撮影図……192
第51図　接合痕に刻みがある土器(1)……194
第52図　接合痕に刻みがある土器(2)……195
第53図　製作途中で焼成されたと思われる土器……195
第54図　胎土の異なる土器……196
第55図　胴下部で器形が変換する土器……196
第56図　木葉形坏を出土した遺跡……199
第57図　県内出土の木葉形坏(1)……200
第58図　県内出土の木葉形坏(2)……201
第59図　県内出土の木葉形坏(3)……202
第60図　県内出土の木葉形坏(4)……203
第61図　滑石製白玉の製作工程……205
第62図　白倉B区75号住居滑石分布(1)……206
第63図　白倉B区75号住居滑石分布(2)……207
第64図　白倉B区75号住居滑石分布(3)……208
第65図　白倉B区75号住居滑石分布(4)……209
第66図　白倉B区75号住居滑石分布(5)……210
第67図　天引C区粘土採掘坑出土の曲物容器……211
第68図　72号例の縛り方(1)……212
第69図　72号例の縛り方(2)……213
第70図　26号例の縛り方(1)……214
第71図　26号例の縛り方(2)……215
第72図　出土した特殊遺物(1)……217
第73図　出土した特殊遺物(2)……218

本文編表目次

表1　周辺の遺跡……14, 15
表2　竪穴住居跡一覧表……28～30
表3　土坑一覧表……107, 109
表4　天引C区粘土採掘坑一覧表……113, 114
表5　天引C区粘土採掘坑出土遺物一覧表……114, 115
表6　天引C区粘土土坑一覧……116
表7　出土炭化材樹種同定一覧……124～126
表8　地区別樹種一覧……127
表9　遺構出土種実一覧表……129, 130
表10　木製品の樹種別集計表……138
表11　木製品の樹種同定結果……139
表12　分析した土器及び粘土試料……140
表13　土器胎土試料及び粘土試料中の粒子組成……146
表14　胎土と粘土粒子組成の主成分分析結果……147
表15　土器胎土の部位ごとの特徴……153
表16　竪穴住居時期別一覧表……163
表17　竪穴住居面積時期別一覧表……164
表18　カマド位置時期別一覧表……164
表19　木葉形坏出土遺跡一覧表……198
表20　白倉B区75号住居出土滑石一覧表……205

遺物観察表編目次

遺物観察表

住跡

白倉A区 1 号住居出土遺物……1
白倉A区 2 号住居出土遺物……1
白倉A区 3 号住居出土遺物……3
白倉A区 4 号住居出土遺物……4
白倉A区 5 号住居出土遺物……5
白倉A区 7 号住居出土遺物……6
白倉A区 8 号住居出土遺物……8
白倉A区10号住居出土遺物……10
白倉A区14号住居出土遺物……12
白倉A区15号住居出土遺物……14
白倉A区19号住居出土遺物……14
白倉A区20号住居出土遺物……14
白倉A区22号住居出土遺物……15
白倉A区23号住居出土遺物……16
白倉A区24号住居出土遺物……17
白倉A区25号住居出土遺物……17
白倉A区26号住居出土遺物……19
白倉A区27号住居出土遺物……20
白倉A区28号住居出土遺物……22
白倉A区29号住居出土遺物……24
白倉A区30号住居出土遺物……24
白倉A区31号住居出土遺物……26
白倉A区33号住居出土遺物……29
白倉A区34号住居出土遺物……30
白倉A区35号住居出土遺物……32
白倉A区36号住居出土遺物……33
白倉A区41号住居出土遺物……33
白倉A区42号住居出土遺物……33
白倉A区44号住居出土遺物……34
白倉A区45号住居出土遺物……34
白倉A区47号住居出土遺物……35
白倉A区53号住居出土遺物……35
白倉A区54号住居出土遺物……36
白倉A区57号住居出土遺物……37
白倉A区58号住居出土遺物……37
白倉A区61号住居出土遺物……39
白倉A区65号住居出土遺物……39
白倉A区66号住居出土遺物……41
白倉A区67号住居出土遺物……41
白倉A区72号住居出土遺物……42
白倉A区73号住居出土遺物……42
白倉A区74号住居出土遺物……43
白倉A区76号住居出土遺物……43
白倉A区77号住居出土遺物……44
白倉A区80号住居出土遺物……44
白倉A区81号住居出土遺物……45
白倉A区82号住居出土遺物……45
白倉A区85号住居出土遺物……45
白倉A区86号住居出土遺物……48
白倉A区92号住居出土遺物……48
白倉A区93号住居出土遺物……49
白倉A区94号住居出土遺物……49
白倉A区95号住居出土遺物……50
白倉A区99号住居出土遺物……50
白倉A区101号住居出土遺物……54
白倉A区103号住居出土遺物……55
白倉A区104号住居出土遺物……55
白倉A区105号住居出土遺物……57
白倉A区106号住居出土遺物……58
白倉A区107号住居出土遺物……59
白倉A区109号住居出土遺物……59
白倉A区112号住居出土遺物……59
白倉A区113号住居出土遺物……60
白倉A区114号住居出土遺物……60
白倉A区115号住居出土遺物……60
白倉A区116号住居出土遺物……60
白倉A区117号住居出土遺物……61
白倉B区 3 号住居出土遺物……62
白倉B区10号住居出土遺物……64
白倉B区12号住居出土遺物……67
白倉B区16号住居出土遺物……68
白倉B区17号住居出土遺物……70
白倉B区20号住居出土遺物……71
白倉B区21号住居出土遺物……72
白倉B区22号住居出土遺物……72
白倉B区23号住居出土遺物……74
白倉B区24号住居出土遺物……75
白倉B区28号住居出土遺物……75
白倉B区29号住居出土遺物……76
白倉B区30号住居出土遺物……79
白倉B区33号住居出土遺物……79
白倉B区72号住居出土遺物……79
白倉B区34号住居出土遺物……80
白倉B区35号住居出土遺物……81
白倉B区37号住居出土遺物……82
白倉B区38号住居出土遺物……83
白倉B区45号住居出土遺物……83
白倉B区47号住居出土遺物……84
白倉B区50号住居出土遺物……85
白倉B区51号住居出土遺物……85
白倉B区52号住居出土遺物……86
白倉B区54号住居出土遺物……88
白倉B区55号住居出土遺物……91
白倉B区56号住居出土遺物……92
白倉B区58号住居出土遺物……92
白倉B区61号住居出土遺物……94
白倉B区62号住居出土遺物……96
白倉B区65号住居出土遺物……97
白倉B区69号住居出土遺物……98
白倉B区70号住居出土遺物……99
白倉B区73号住居出土遺物……100
白倉B区75号住居出土遺物……100
白倉B区78号住居出土遺物……105
白倉B区82号住居出土遺物……107
白倉B区84号住居出土遺物……108
白倉B区86号住居出土遺物……110
白倉B区94号住居出土遺物……111
白倉C区 2 号住居出土遺物……112
白倉C区 3 号住居出土遺物……112
白倉C区 4 号住居出土遺物……113

白倉C区5号住居出土遺物 ……114
白倉C区6号住居出土遺物 ……115
白倉C区11号住居出土遺物 ……116
白倉C区12号住居出土遺物 ……117
白倉C区13号住居出土遺物 ……118
白倉C区15号住居出土遺物 ……118
白倉C区16号住居出土遺物 ……119
白倉C区17号住居出土遺物 ……119
白倉C区18号住居出土遺物 ……120
白倉C区19号住居出土遺物 ……122
白倉C区21号住居出土遺物 ……123
白倉C区25号住居出土遺物 ……124
白倉C区28号住居出土遺物 ……125
白倉C区33号住居出土遺物 ……125
白倉C区36号住居出土遺物 ……127
白倉C区37号住居出土遺物 ……129
白倉C区38号住居出土遺物 ……129
白倉C区42号住居出土遺物 ……131
白倉C区48号住居出土遺物 ……131
白倉C区49号住居出土遺物 ……132
白倉C区50号住居出土遺物 ……133
白倉C区52号住居出土遺物 ……135
白倉C区58号住居出土遺物 ……135
白倉C区60号住居出土遺物 ……135
白倉C区61号住居出土遺物 ……136
白倉C区62号住居出土遺物 ……137
白倉C区65号住居出土遺物 ……138
白倉C区74号住居出土遺物 ……138
白倉C区79号住居出土遺物 ……138
白倉C区88号住居出土遺物 ……138
天引地区7号住居出土遺物 ……138
天引地区44号住居出土遺物 ……139
天引地区50号住居出土遺物 ……139
天引地区52号住居出土遺物 ……139
天引地区57号住居出土遺物 ……140
天引地区71号住居出土遺物 ……142
天引地区73号住居出土遺物 ……143
天引地区87号住居出土遺物 ……144
天引地区115号住居出土遺物 ……145
天引地区124号住居出土遺物 ……146
天引地区141号住居出土遺物 ……148
天引地区149号住居出土遺物 ……148

土坑

白倉A区6号土坑出土遺物 ……149
白倉A区18号土坑出土遺物 ……149
白倉A区43号土坑出土遺物 ……149
白倉A区64号土坑出土遺物 ……149
白倉B区5号土坑出土遺物 ……149
白倉B区45号土坑出土遺物 ……149
白倉B区229号土坑出土遺物 ……150
白倉C区12号土坑出土遺物 ……150
白倉C区80号土坑出土遺物 ……150
白倉C区111号土坑出土遺物 ……150
天引C区67号土坑出土遺物 ……150
天引C区174号土坑出土遺物 ……150

その他

白倉A区遺構外出土遺物 ……150
白倉B区5号溝出土遺物 ……150

粘土採掘坑

天引地区1号粘土採掘坑出土遺物 ……151
天引地区2号粘土採掘坑出土遺物 ……151
天引地区3号粘土採掘坑出土遺物 ……151
天引地区4号粘土採掘坑出土遺物 ……151
天引地区6号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区7号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区8号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区9号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区11号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区12号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区13号粘土採掘坑出土遺物 ……152
天引地区15号粘土採掘坑出土遺物 ……153
天引地区16号粘土採掘坑出土遺物 ……153
天引地区17号粘土採掘坑出土遺物 ……153
天引地区18号粘土採掘坑出土遺物 ……153
天引地区19号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区20号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区21号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区22号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区23号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区24号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区26号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区28号粘土採掘坑出土遺物 ……154
天引地区30号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区32号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区37号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区44号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区46号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区47号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区48号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区51号粘土採掘坑出土遺物 ……155
天引地区52号粘土採掘坑出土遺物 ……156
天引地区57号粘土採掘坑出土遺物 ……156
天引地区61号粘土採掘坑出土遺物 ……156
天引地区62号粘土採掘坑出土遺物 ……156
天引地区65号粘土採掘坑出土遺物 ……157
天引地区70号粘土採掘坑出土遺物 ……157
天引地区74号粘土採掘坑出土遺物 ……157
天引地区76号粘土採掘坑出土遺物 ……157
天引C区粘土採掘坑出土木器 ……158

住居出土遺物一覧表

白倉A区1号住居出土遺物 ……160
白倉A区2号住居出土遺物 ……160
白倉A区3号住居出土遺物 ……160
白倉A区4号住居出土遺物 ……160
白倉A区5号住居出土遺物 ……160
白倉A区7号住居出土遺物 ……160
白倉A区8号住居出土遺物 ……161
白倉A区10号住居出土遺物 ……161
白倉A区14号住居出土遺物 ……161
白倉A区15号住居出土遺物 ……161
白倉A区19号住居出土遺物 ……161
白倉A区20号住居出土遺物 ……161
白倉A区22号住居出土遺物 ……162
白倉A区23号住居出土遺物 ……162
白倉A区24号住居出土遺物 ……162
白倉A区25号住居出土遺物 ……162
白倉A区26号住居出土遺物 ……162

白倉A区27号住居出土遺物 ……162
白倉A区28号住居出土遺物 ……163
白倉A区29号住居出土遺物 ……163
白倉A区30号住居出土遺物 ……163
白倉A区31号住居出土遺物 ……163
白倉A区33号住居出土遺物 ……163
白倉A区34号住居出土遺物 ……163
白倉A区35号住居出土遺物 ……164
白倉A区36号住居出土遺物 ……164
白倉A区41号住居出土遺物 ……164
白倉A区42号住居出土遺物 ……164
白倉A区44号住居出土遺物 ……164
白倉A区45号住居出土遺物 ……164
白倉A区47号住居出土遺物 ……165
白倉A区53号住居出土遺物 ……165
白倉A区54号住居出土遺物 ……165
白倉A区55号住居出土遺物 ……165
白倉A区57号住居出土遺物 ……165
白倉A区58号住居出土遺物 ……165
白倉A区61号住居出土遺物 ……166
白倉A区64号住居出土遺物 ……166
白倉A区65号住居出土遺物 ……166
白倉A区66号住居出土遺物 ……166
白倉A区67号住居出土遺物 ……166
白倉A区72号住居出土遺物 ……166
白倉A区73号住居出土遺物 ……167
白倉A区74号住居出土遺物 ……167
白倉A区76号住居出土遺物 ……167
白倉A区77号住居出土遺物 ……167
白倉A区80号住居出土遺物 ……167
白倉A区81号住居出土遺物 ……167
白倉A区82号住居出土遺物 ……168
白倉A区85号住居出土遺物 ……168
白倉A区86号住居出土遺物 ……168
白倉A区87号住居出土遺物 ……168
白倉A区88号住居出土遺物 ……168
白倉A区92号住居出土遺物 ……168
白倉A区93号住居出土遺物 ……169
白倉A区94号住居出土遺物 ……169
白倉A区95号住居出土遺物 ……169
白倉A区99号住居出土遺物 ……169
白倉A区101号住居出土遺物 ……169
白倉A区103号住居出土遺物 ……169
白倉A区104号住居出土遺物 ……170
白倉A区105号住居出土遺物 ……170
白倉A区106号住居出土遺物 ……170
白倉A区107号住居出土遺物 ……170
白倉A区109号住居出土遺物 ……170
白倉A区112号住居出土遺物 ……170
白倉A区113号住居出土遺物 ……171
白倉A区114号住居出土遺物 ……171
白倉A区115号住居出土遺物 ……171
白倉A区116号住居出土遺物 ……171
白倉A区117号住居出土遺物 ……171
白倉B区 3 号住居出土遺物 ……171
白倉B区10号住居出土遺物 ……171
白倉B区12号住居出土遺物 ……172
白倉B区16号住居出土遺物 ……172
白倉B区17号住居出土遺物 ……172
白倉B区20号住居出土遺物 ……172
白倉B区21号住居出土遺物 ……172
白倉B区22号住居出土遺物 ……172
白倉B区23号住居出土遺物 ……173
白倉B区24号住居出土遺物 ……173
白倉B区28号住居出土遺物 ……173
白倉B区29号住居出土遺物 ……173
白倉B区30号住居出土遺物 ……173
白倉B区33号住居出土遺物 ……173
白倉B区34号住居出土遺物 ……174
白倉B区35号住居出土遺物 ……174
白倉B区37号住居出土遺物 ……174
白倉B区38号住居出土遺物 ……174
白倉B区45号住居出土遺物 ……174
白倉B区47号住居出土遺物 ……174
白倉B区50号住居出土遺物 ……175
白倉B区51号住居出土遺物 ……175
白倉B区52号住居出土遺物 ……175
白倉B区54号住居出土遺物 ……175
白倉B区55号住居出土遺物 ……175
白倉B区56号住居出土遺物 ……175
白倉B区58号住居出土遺物 ……176
白倉B区61号住居出土遺物 ……176
白倉B区62号住居出土遺物 ……176
白倉B区65号住居出土遺物 ……176
白倉B区69号住居出土遺物 ……176
白倉B区70号住居出土遺物 ……176
白倉B区72号住居出土遺物 ……176
白倉B区73号住居出土遺物 ……177
白倉B区75号住居出土遺物 ……177
白倉B区78号住居出土遺物 ……177
白倉B区82号住居出土遺物 ……177
白倉B区84号住居出土遺物 ……177
白倉B区85号住居出土遺物 ……177
白倉B区94号住居出土遺物 ……177
白倉C区 2 号住居出土遺物 ……178
白倉C区 3 号住居出土遺物 ……178
白倉C区 4 号住居出土遺物 ……178
白倉C区 5 号住居出土遺物 ……178
白倉C区 6 号住居出土遺物 ……178
白倉C区11号住居出土遺物 ……178
白倉C区12号住居出土遺物 ……178
白倉C区13号住居出土遺物 ……178
白倉C区15号住居出土遺物 ……178
白倉C区16号住居出土遺物 ……178
白倉C区17号住居出土遺物 ……178
白倉C区18号住居出土遺物 ……178
白倉C区19号住居出土遺物 ……178
白倉C区21号住居出土遺物 ……178
白倉C区25号住居出土遺物 ……178
白倉C区28号住居出土遺物 ……178
白倉C区33号住居出土遺物 ……178
白倉C区36号住居出土遺物 ……179
白倉C区37号住居出土遺物 ……179
白倉C区38号住居出土遺物 ……179
白倉C区42号住居出土遺物 ……179
白倉C区48号住居出土遺物 ……179
白倉C区49号住居出土遺物 ……179
白倉C区50号住居出土遺物 ……179
白倉C区52号住居出土遺物 ……179
白倉C区58号住居出土遺物 ……179
白倉C区60号住居出土遺物 ……179
白倉C区61号住居出土遺物 ……179
白倉C区62号住居出土遺物 ……179
白倉C区65号住居出土遺物 ……179

白倉C区74号住居出土遺物 ……179
白倉C区79号住居出土遺物 ……179
白倉C区88号住居出土遺物 ……179
天引地区7号住居出土遺物 ……180
天引地区44号住居出土遺物 ……180
天引地区50号住居出土遺物 ……180
天引地区52号住居出土遺物 ……180
天引地区57号住居出土遺物 ……180
天引地区71号住居出土遺物 ……180
天引地区73号住居出土遺物 ……180
天引地区87号住居出土遺物 ……181
天引地区115号住居出土遺物 ……181
天引地区124号住居出土遺物 ……181
天引地区141号住居出土遺物 ……181
天引地区148号住居出土遺物 ……181
天引地区149号住居出土遺物 ……181

写真図版編目次

PL. 1 航空写真(昭和22年米軍撮影)
PL. 2 遺跡周辺航空写真
PL. 3 発掘区合成航空写真
PL. 4 航空写真　現況と周辺地形(南東から)
調査区全景(南から)
PL. 5 白倉A区・B区全景
PL. 6 白倉B区・C区全景
PL. 7 天引地区全景
PL. 8 白倉A区1号・2号・3号住居
PL. 9 白倉A区3号・4号・5号住居
PL. 10 白倉A区7号・8号住居
PL. 11 白倉A区8号・10号・11号・14号住居
PL. 12 白倉A区14号・15号・19号住居
PL. 13 白倉A区18号・19号・20号・22号・23号住居
PL. 14 白倉A区23号・24号・25号住居
PL. 15 白倉A区25号・26号住居
PL. 16 白倉A区26号・27号・28号・29号住居
PL. 17 白倉A区27号・28号・29号住居
PL. 18 白倉A区27号・28号・30号・31号・41号住居
PL. 19 白倉A区31号・33号住居
PL. 20 白倉A区33号・34号・35号・36号住居
PL. 21 白倉A区34号・35号・36号・42号住居
PL. 22 白倉A区44号・45号・47号住居
PL. 23 白倉A区53号・54号・57号・58号・59号住居
PL. 24 白倉A区61号・62号・64号・65号住居
PL. 25 白倉A区66号・67号・72号・73号住居
PL. 26 白倉A区74号・76号・77号・80号住居
81号・82号・83号住居
PL. 27 白倉A区84号・85号・86号住居
PL. 28 白倉A区87号・88号・91号・92号・93号・94号住居
PL. 29 白倉A区94号・95号・99号・101号住居
PL. 30 白倉A区101号・103号住居
PL. 31 白倉A区103号・104号・105号・106号住居
PL. 32 白倉A区106号・107号・109号住居
PL. 33 白倉A区112号・113号・114号住居
PL. 34 白倉A区115号・116号・117号・120号住居
PL. 35 白倉B区3号住居
PL. 36 白倉B区10号住居
PL. 37 白倉B区12号・16号住居
PL. 38 白倉B区17号・20号住居
PL. 39 白倉B区21号・22号・23号住居
PL. 40 白倉B区23号・24号・28号住居
PL. 41 白倉B区28号・29号住居
PL. 42 白倉B区29号・30号・33号住居
PL. 43 白倉B区34号・35号住居
PL. 44 白倉B区37号・38号・45号住居
PL. 45 白倉B区45号・47号住居
PL. 46 白倉B区47号・50号・51号・52号住居
PL. 47 白倉B区52号住居
PL. 48 白倉B区54号住居
PL. 49 白倉B区55号・56号住居
PL. 50 白倉B区58号住居
PL. 51 白倉B区61号・62号・65号住居
PL. 52 白倉B区65号・69号・70号住居
PL. 53 白倉B区70号・72号・73号住居
PL. 54 白倉B区75号住居
PL. 55 白倉B区75号・78号住居
PL. 56 白倉B区78号・82号・84号住居
PL. 57 白倉B区84号・85号A・B住居
PL. 58 白倉B区85号A・C・94号住居
PL. 59 白倉C区2号・3号・4号住居
PL. 60 白倉C区4号・5号・11号住居
PL. 61 白倉C区6号・11号・12号・22号・33号住居
PL. 62 白倉C区12号・13号・15号住居
PL. 63 白倉C区16号・17号住居
PL. 64 白倉C区2号・17号・18号・19号住居
PL. 65 白倉C区19号・20号・21号・25号・33号・38号住居
PL. 66 白倉C区33号・36号・37号・38号住居
PL. 67 白倉C区38号・42号・48号住居
PL. 68 白倉C区48号・49号住居
PL. 69 白倉C区50号・52号・60号住居
PL. 70 白倉C区60号・61号・62号・65号住居
PL. 71 白倉C区44号・45号・62号・65号住居
74号・79号・88号住居
PL. 72 天引地区7号・44号・50号住居
PL. 73 天引地区50号・52号住居
PL. 74 天引地区57号住居
PL. 75 天引地区57号・71号・73号住居
PL. 76 天引地区73号・87号住居
PL. 77 天引地区115号・124号住居
PL. 78 天引地区124号・141号住居
PL. 79 天引地区141号・148号・149号住居
PL. 80 白倉A区1号・2号住居出土遺物
PL. 81 白倉A区3号住居出土遺物
PL. 82 白倉A区4号・7号・8号住居出土遺物
PL. 83 白倉A区8号・10号・11号住居出土遺物
PL. 84 白倉A区14号住居出土遺物
PL. 85 白倉A区15号・19号・20号・22号住居出土遺物
PL. 86 白倉A区23号・25号住居出土遺物
PL. 87 白倉A区26号・27号住居出土遺物
PL. 88 白倉A区27号・28号・29号・30号住居出土遺物
PL. 89 白倉A区31号住居出土遺物
PL. 90 白倉A区33号住居出土遺物
PL. 91 白倉A区34号・36号住居出土遺物
PL. 92 白倉A区42号・44号・45号・47号住居出土遺物
PL. 93 白倉A区53号・54号・57号・58号住居出土遺物

61号・62号・65号住居出土遺物
P L.94 白倉A区66号・67号・73号・76号住居出土遺物
77号・82号・85号住居出土遺物
P L.95 白倉A区85号・86号・93号住居出土遺物
P L.96 白倉A区94号・95号・99号住居出土遺物
P L.97 白倉A区99号・101号・103号・104号住居出土遺物
P L.98 白倉A区105号・106号・107号・112号住居出土遺物
113号・114号・116号・117号住居出土遺物
P L.99 白倉B区3号・10号住居出土遺物
P L.100 白倉B区10号・12号住居出土遺物
P L.101 白倉B区12号・16号住居出土遺物
P L.102 白倉B区16号・17号・20号住居出土遺物
P L.103 白倉B区20号・21・22号住居出土遺物
P L.104 白倉B区21・22号・23号住居出土遺物
P L.105 白倉B区24号・28号・29号住居出土遺物
P L.106 白倉B区30号・33・72号・34号住居出土遺物
P L.107 白倉B区34号・35号・37号・45号・47号住居出土遺物
P L.108 白倉B区51号・52号住居出土遺物
P L.109 白倉B区52号・54号住居出土遺物
P L.110 白倉B区55号・56号住居出土遺物
P L.111 白倉B区58号・61号住居出土遺物
P L.112 白倉B区61号・62号・65号住居出土遺物
P L.113 白倉B区69号・70号住居出土遺物
P L.114 白倉B区70号・73号・75号住居出土遺物
P L.115 白倉B区75号住居出土遺石
P L.116 白倉B区75号住居出土遺石
P L.117 白倉B区78号住居出土遺物
P L.118 白倉B区82号・84号・85号・94号住居出土遺物
P L.119 白倉C区2号・3号住居出土遺物
P L.120 白倉C区4号住居出土遺物
P L.121 白倉C区4号・5号住居出土遺物
P L.122 白倉C区5号・6号・11号住居出土遺物
P L.123 白倉C区11号・12号住居出土遺物
P L.124 白倉C区13号・15号住居出土遺物
P L.125 白倉C区16号・17号住居出土遺物
P L.126 白倉C区18号住居出土遺物
P L.127 白倉C区18号・19号住居出土遺物
P L.128 白倉C区19号・21号住居出土遺物
P L.129 白倉C区21号・25号住居出土遺物
P L.130 白倉C区28号・33号出土遺物
P L.131 白倉C区33号・36号住居出土遺物
P L.132 白倉C区36号住居出土遺物
P L.133 白倉C区36号・37号・38号住居出土遺物
P L.134 白倉C区38号・42号住居出土遺物
P L.135 白倉C区48号住居出土遺物
P L.136 白倉C区49号住居出土遺物
P L.137 白倉C区50号住居出土遺物
P L.138 白倉C区50号住居出土遺物
P L.139 白倉C区52号・58号・60号住居出土遺物
P L.140 白倉C区61号・62号・65号住居出土遺物
74号・79号・88号住居出土遺物
P L.141 天引地区44号・50号・52号・57号住居出土遺物
P L.142 天引地区57号・71号・73号住居出土遺物
P L.143 天引地区73号・87号・115号住居出土遺物
P L.144 天引地区124号・141号・149号住居出土遺物
P L.145 白倉A区1号・4号・5号・7号住居出土こも編石
8号・19号・23号住居出土こも編石
31号・67号住居出土こも編石
P L.146 白倉A区26号・27号・28号・30号住居出土こも編石
33号・35号・53号住居出土こも編石
P L.147 白倉A区58号・65号・76号住居出土こも編石
86号・95号・99号住居出土こも編石
P L.148 白倉A区101号・104号・105号住居出土こも編石
106号・109号・117号住居出土こも編石
白倉B区10号・29号住居出土こも編石
P L.149 白倉B区29号・50号・51号・52号住居出土こも編石
54号・58号・61号・62号住居出土こも編石
75号・84号・85号住居出土こも編石
P L.150 天引地区57号・73号・87号・124号住居出土こも編石
白倉A区23号住居出土カマド石
P L.151 白倉A区23号・31号住居出土カマド石
P L.152 白倉A区31号・117号住居出土カマド石
P L.153 白倉B区29号・54号住居出土カマド石
P L.154 白倉B区54号・78号住居出土カマド石
P L.155 白倉AK6号・43号・64号土坑
白倉BK5号・45号・229号土坑
白倉CK12号・80号土坑
P L.156 白倉AK47号・68号・71号土坑
白倉BK5号・14号・17号・25号・35号土坑
P L.157 白倉BK37号・40号・42号・46号・47号土坑
60号・61号・70号・71号土坑
P L.158 白倉BK72号・74号・76号・91号・111号土坑
117号・138号・146号土坑
P L.159 白倉BK154号・156号・161号・177号土坑
178号・198号・203号・206号土坑
P L.160 白倉BK221号・252号・254号土坑
271号・275号・293号土坑
白倉CK4号・10号土坑
P L.161 白倉CK22号・33号・54号・66号・83号・93号土坑
天引CK28号・41号・42号・34号土坑
P L.162 天引CK41号・92号・95号・96号土坑
100号・107号・134号土坑
P L.163 白倉CK111号溝・白倉BK5号溝
天引CK174号土坑・粘土採掘坑群
P L.164 天引CK粘土採掘坑群調査風景・1号粘土採掘坑
P L.165 天引CK1号・2号・3号粘土採掘坑
P L.166 天引CK4号・5号・6号粘土採掘坑
P L.167 天引CK7号・8号・9号粘土採掘坑
P L.168 天引CK11号・12号・13号・32号粘土採掘坑
P L.169 天引CK14号・15号・16号・17号粘土採掘坑
P L.170 天引CK18号・19号粘土採掘坑
P L.171 天引CK20号・21号・22号・24号粘土採掘坑
P L.172 天引CK23号・25号・26号粘土採掘坑
P L.173 天引CK28号・29号・30号粘土採掘坑
P L.174 天引CK31号・32号・33号・34号粘土採掘坑
P L.175 天引CK36号・37号・38号・39号粘土採掘坑
40号・50号・51号・52号粘土採掘坑
P L.176 天引CK41号・42号・43号・44号粘土採掘坑
45号・46号・47号粘土採掘坑
P L.177 天引CK48号・49号・50号・51号・52号粘土採掘坑
P L.178 天引CK53号・54号・55号粘土採掘坑
57号・60号・65号粘土採掘坑
P L.179 天引CK61号・62号粘土採掘坑
P L.180 天引CK67号・68号・69号・70号粘土採掘坑
P L.181 天引CK71号・72号粘土採掘坑
P L.182 天引CK73号・74号・75号・76号粘土採掘坑
P L.183 天引CK1号・2号・3号粘土土坑群
P L.184 白倉AK6号・18号・43号・64号土坑出土遺物
天引CK174号土坑出土遺物
1号・2号・3号・4号粘土採掘坑出土遺物
P L.185 天引CK8号・9号・11号・12号粘土採掘坑出土遺物
13号・15号・18号・19号粘土採掘坑出土遺物
P L.186 天引CK18号・19号・22号・23号粘土採掘坑出土遺物
24号・26号・28号・29号粘土採掘坑出土遺物

32号・37号・44号・46号粘土採掘坑出土遺物
P L.187　天引C区46号・47号・48号・51号粘土採掘坑出土遺物
52号・57号・61号・62号粘土採掘坑出土遺物
P L.188　天引C区62号・65号・74号・76号粘土採掘坑出土遺物
P L.189　天引C区26号粘土採掘坑出土曲物(NO34)
P L.190　天引C区26号粘土採掘坑出土曲物(NO34)
P L.191　天引C区72号粘土採掘坑出土曲物(NO62)
P L.192　天引C区72号粘土採掘坑出土曲物(NO62)
P L.193　天引C区粘土採掘坑出土木器
P L.194　天引C区粘土採掘坑出土木器
P L.195　天引C区粘土採掘坑出土木器
P L.196　天引C区粘土採掘坑出土木器
P L.197　天引C区粘土採掘坑出土木器
P L.198　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.199　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.200　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.201　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.202　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.203　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.204　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.205　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.206　出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真
P L.207　出土した大型植物化石
P L.208　出土木材の顕微鏡写真
P L.209　出土木材の顕微鏡写真
P L.210　出土木材の顕微鏡写真
P L.211　出土木材の顕微鏡写真
P L.212　出土木材の顕微鏡写真
P L.213　出土木材の顕微鏡写真
P L.214　出土木材の顕微鏡写真
P L.215　土器切断面　実体顕微鏡写真
P L.216　土器切断面　実体顕微鏡写真
P L.217　土器胎土中の粒子の顕微鏡写真
P L.218　土器胎土中の粒子の顕微鏡写真
P L.219　土器胎土および粘土採掘坑試料中の粒子の顕微鏡写真

抄　　録

1　発掘調査区の概略

今回の発掘調査区は、群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉・天引に所在する。発掘調査は、1989年４月１日から開始され、1991年８月20日をもって終了した。発掘調査区は県西部地域を東流する鏑川によって形成された河岸段丘の上位段丘面に立地する。遺跡名称は白倉下原遺跡、天引向原遺跡と２つ使用されているが、調査区は連続している。

発掘調査区においては、旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中近世以降の土地利用痕跡が重層的に検出されている。本書では、おおよそ６～７世紀代の遺構と遺物が対象となり、古墳時代編として報告する。５世紀以前については、既刊報告書『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅲ　弥生～古墳時代編に掲載されている。また、今回７世紀代を古墳時代として取り扱ってはいるが、あくまでも便宜的な用語として用いている。

2　遺構数量（本報告書に掲載されたものに限る）

竪穴住居跡163軒　粘土採掘坑67基　粘土土坑20基　土坑67基　溝１条　円形周溝遺構１基

竪穴住居跡時期別内訳　　（　）内は既刊『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅲに掲載された住居跡軒数

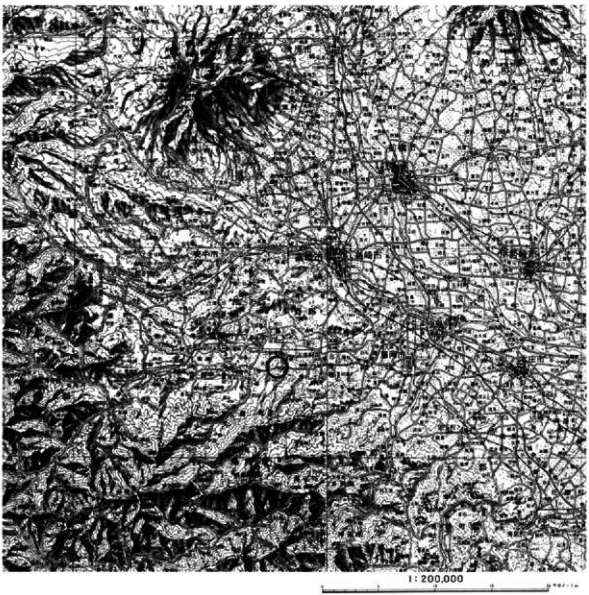
	白倉Ａ区	白倉Ｂ区	白倉Ｃ区	天引地区	合計
４世紀	０軒	０軒	０軒	０軒 (22軒)	０軒 (22軒)
５世紀前半	３軒	０軒 （１軒）	０軒	０軒 （７軒）	３軒 （８軒）
５世紀後半	４軒	１軒	１軒	３軒	９軒
６世紀前半	26軒	16軒	５軒	１軒	48軒
６世紀後半	16軒	16軒	18軒	３軒	53軒
７世紀前半	５軒	２軒	７軒	４軒	18軒
７世紀後半	５軒	５軒	１軒	１軒	12軒
時期不明	17軒	１軒	１軒	１軒	20軒
合計	76軒	41軒 （１軒）	33軒	13軒 (29軒)	163軒 (30軒)

3　まとめ

竪穴住居跡は、土器編年から見た場合には、弥生時代後期樽式期以降11世紀に至るまで連綿と検出されており、６～７世紀もその例外ではない。しかしながら、時期及び調査区による検出数の増減は顕著で、６世紀になると以前の居住域とは異なる場所から多く検出されるが、７世紀に入ると検出数が極端に減少する。特筆される遺構としては、白玉工房跡や天引地区でまとまって検出された粘土採掘坑がある。

遺物においては、当該期の土器を中心に多くの遺物が出土している。その中で特筆されるべきものとして、樹皮製曲物２点と梯子３点（粘土採掘坑内出土）、土鈴１点、木葉形坏５点、手鎧形土製品３点、魚形（動物意匠）土製品１点、特徴的な製作方法が観察される土師器群、などがあげられる。

白倉下原・天引向原遺跡Ⅳ



第１図　白倉下原・天引向原遺跡位置図

Ⅰ　発掘調査の経過

1　発掘調査に至る経過

関越自動車道上越線（上信越自動車道）は首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車国道として、日本道路公団によって建設される。起点を東京都練馬として新潟県上越市まで総延長280km(内練馬～藤岡間は関越自動車道新潟線と併用）である。平成５年３月27日開通した藤岡インター～佐久インター間は約69kmで、群馬県藤岡市（5.6km)、吉井町（6.3km)、甘楽町（4.3km)、富岡市（11.6km)、妙義町（2.5km)、松井田町（19.5km)、下仁田町（5.3km)、長野県佐久市（11.9km）の各市町を通過する。

群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が施行命令を受けている。同56年群馬県藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町（東部）・松井田町（東部)、同57年松井田町（西部）・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。関越自動車道上越線全体にかかる埋蔵文化財の取り扱い及び調査経過は次のとおりである。

昭和49年度　藤岡市～下仁田町間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会は県企画部幹線交通課に対し文化財保護法の遵守、国・県・市町村の指定文化財をさけ、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度　県教委文化財保護課は路線通過地周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を行い、その結果は同年３月藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県（企画部交通対策課）より報告された。

昭和59年度　建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教育委員会にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。

昭和60年度　県教育委員会は分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・淡い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定し、55遺跡を認定した。(後の試掘により52遺跡に変更）そして、埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

① 発掘調査終了年度を昭和65年度末（平成２年度末）とする。

② 群馬県埋蔵文化財調査事業団を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。

③ 事業団の出張所（上越線調査事務所）を開設し、整理作業も併せ行う。

④ 機関別対応面積は次のとおりとする。

埋文事業団　約76万㎡　富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調　査　会　約22万㎡　妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教育委員会に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受け、群馬県埋蔵文化財調査事業団及び、各遺跡調査会等に再委託のかたちで委託契約を締結し、調査を実施する。

昭和61年度　４月、埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、４班15人体制で発足。調査を開始する。以後、６班22人体制(昭63)、９班36人体制（昭63)、12班45人体制（平元)、12班45人体制(平２)。平成２年度までに一部を残し発掘調査は終了した。

整理事業は昭和63年度より併行して実施していたが、平成３年度からは本部においても整理事業が始まった。上越線調査事務所は平成５年度末をもって閉鎖され、その後本部で整理事業を行い、本年度をもって全事業が終了した。

2　発掘調査の方法と経過

(1)　グリッドの設定

白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査部分は甘楽パーキングエリアと西方の本線部分よりなる。建設工事用測量杭のＳＴＡ－153～158が、ほぼ発掘調査範囲に該当する。この範囲内を覆うことができるように、白倉下原遺跡と天引向原遺跡で異なった国家座標を原点としてグリッドを設定した。具体的には、第２図を参照して欲しいが、調査区北東端の国家座標Ｘ＝26950、Ｙ＝－79540を白倉下原遺跡の座標原点、Ｘ＝26950、Ｙ＝－79320を天引向原遺跡の座標原点とし、５ｍ四方のグリッドを設定した。グリッドは北東コーナーの杭を基準にして、南方向及び西方向に１、２、３…　と両者共に算用数字で呼称した。前述したように、白倉下原地区と天引向原地区では国家座標原点が異なるため、同じグリッド番号が両方の地区に存在することになった。グリッド番号をもとに遺構の位置などを検索したりする場合などには、必ず地区を確かめて欲しい。

(2)　発掘調査の方法

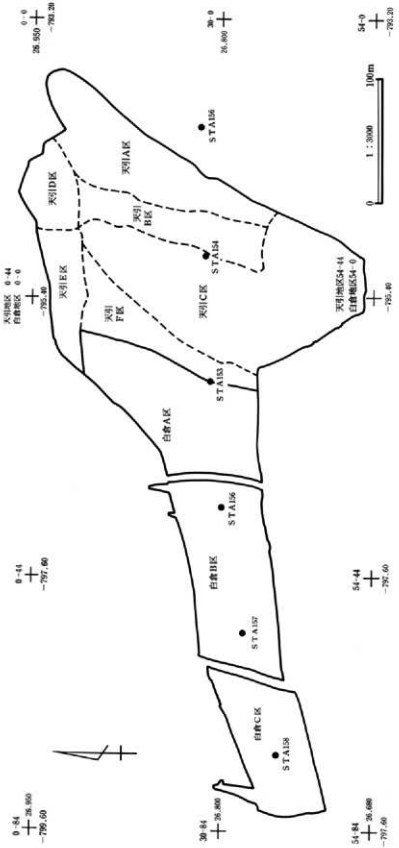
発掘調査対象地は、高速道路の本線部分にあたる東西に長い西側部分と、甘楽パーキング予定地にあたる広大な東側部分からなっている。前者は甘楽町大字白倉字下原の一部であることから「白倉下原遺跡」とし、後者は甘楽町大字天引字向原の一部であることから「天引向原遺跡」と呼称して調査を進めてきた。しかしながら、この２つの遺跡名称をあたえるほどには各時代における様相が異なっているわけではなく、時代によって２つの地区の土地利用は似ていたり、異なっていたりするのが実態であった。また、各時代の土地利用も、当然のことではあるが発掘調査区内に収まるわけでもなく、例えばある時代の集落遺跡の範囲が、異なった時代の集落遺跡の範囲とは異なっていると考えたほうが自然であろうし、溝や道などを考えた場合、遺跡名称に反映される範囲がどこまでかも不明となってしまう。

今回の報告では、２つの「遺跡」について、発掘調査区の西寄りを「白倉下原遺跡」、東寄りを「天引向原遺跡」としてはいるが、現実には地区としての意味合いしかもっていないことを確認したい。

さて、白倉下原遺跡は、発掘調査区内をちょうど３等分するように２本の町道が南北に通っていた。そこで地区内を東から順に「白倉Ａ区」、「白倉Ｂ区」、「白倉Ｃ区」と小区分した。遺構名称は各区分ごとの通し番号として、「白倉Ａ区21号住居」、「白倉Ｂ区８号土坑」といった具合に呼称することとした。一方、天引向原遺跡は、舌状台地や谷地などの地形をもとにＡ～Ｆ６つの小区分を行なった。遺構名称については、竪穴住居跡については「天引向原地区」全体の通し番号とし、土坑などの他の遺構については各区分ごとの通し番号として、「天引59号住居」、「天引Ａ区６号土坑」といった具合に呼称することにした。各地区の範囲は第２図「グリッド配置図」を参照して欲しい。

いささか前置きが長くなってしまったが、以下に調査方法について述べていきたい。

発掘調査は、おおむね最初にバックフォーによって表土を除去したのちに、杭打ち（外部委託）、遺構確認、個別遺構調査、航空写真（全体図作成を兼ねて外部委託）といった流れですすめられた。調査期間との関係で重機を使用したわけだが、多くの情報が表土中に含まれていたであろうことを考えると、残念でならない。個別遺構調査にあたっては、遺構確認の段階で相対的に新しい想定された遺構から調査を行い、一定範囲において弥生時代以降の調査が終了した段階で、縄文時代の遺構調査を行ない、旧石器時代試掘（結果によって本調査）を行っている。遺構内の遺物取り上げについては、これも調査期間との関係で完形に近い土器や大形の遺物については出土位置を記録したが、他の遺物については任意となってしまったものが多い。遺構図は原則的に1/20の図面を作成し、必要に応じて（例えばカマド図など）1/10の図面を作成した。全体図（素図）については、1/100図面作製を、ほとんど外部委託した。


0-0
26.850
−792.20
300-0
26.800
54-0
−792.20
1:3000
0
100m
STA156
STA154
STA153
STA157
STA158
STA155
STA152
光明AK
光明BK
光明CK
光明DK
光明EK
光明FK
白倉AK
白倉BK
白倉CK
光明DK 0-44
白倉BK 0-0
−795.40
光明BK54-44
白倉BK54-0
−795.40
0-44
−797.60
54-44
−797.60
0-84
26.850
−799.60
300-84
26.800
54-84
26.600
−797.60

第2図　グリッド配置図

(3) 発掘調査の経過

本遺跡は調査対象予定地が65000㎡あまりに及ぶ広大なものであることと、試掘調査の結果から平成元・2年度の2ケ年を費やし、2つの調査班（事業名称を取って原西Ⅰ班・原西Ⅱ班とした）で現地調査に望むこととした。実際に調査を進めてみると、予想通り各時代の諸遺構が数多く発見されたのに加えて、旧石器時代の本調査や、年次の途中で工事工程との関係から緊急に他遺跡への調査の応援も何度かあり、調査期間を第2年次終了後、1班分のみ残して平成3年度も調査を継続して実施し、最終的には平成3年8月20日に終了した。

以下、各年度毎の調査の経過を簡単に跡付けてみたい。

平成元年度の発掘調査　当該年度の調査は、白倉地区から開始した。原西Ⅰ班が白倉A区を、原西Ⅱ班が白倉B・C区を担当した。

A区では、主として古墳時代後期の住居跡が寸分の隙間もないほどに数多く発見され、これに調査の大半を費やした。A区を担当していたⅠ班は、10月から翌年2月まで調査を休止し、当時急を要していた中高瀬観音山遺跡の調査に出向いた。

一方、C区を担当したⅡ班によって進められていた調査では、A区と同様に古墳時代後期以降の住居跡が数多く確認されたが、それとともに縄文時代や弥生時代の諸遺構も数多く確認された。遺構面の状況からすると、現在の耕作土を除去した状態で弥生時代以降の各遺構が確認できるので、まず平安時代から順次時代を溯るように調査していった。住居跡の大半を占める古墳時代後期以降のものは、遺存状態がよく出土遺物も豊富であった。12月に入ると調査地点をB区へと移動させていった。B区の調査は、工事工程との関係から、北側1/3を先行させた。

平成2年度の発掘調査　当該年度は、上越線全域における調査の最終年度にあたっていたため、まさしく分・秒きざみのめまぐるしい調査工程の中で1年間が進んだ。基本的には、原西Ⅰ・Ⅱ班が合体して白倉B区から天引地区へと調査を進めていった。白倉B区の水場（後に池に改修）も、この年度に調査されている。その間、一時的に矢田遺跡班、多比良遺跡班が調査に加わり、さらに2月からは調査の全工程を終了した内匠遺跡班、井出遺跡班が合流した。

白倉B区の調査は、前年度の後半に引き続いて調査区の南側2/3が対象となった。この範囲で確認された遺構の主体をなすのは、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡と縄文時代前期から後期にかけての住居跡・土坑であった。

これらの調査を9月中に終了させると、引き続いて、白倉A・B区の旧石器の調査を行った。

11月いっぱいで白倉地区の調査が完了したのをうけて、調査の主力を徐々に天引地区へと移動させていった。それ以前に実施していた遺構の分布状況の確認作業により、調査区の南寄りに極度の密集部分が広がっていることが明らかになっていた。そこで遺構の分布の希薄な北半分をまず終了させ、終わり次第、南側へと及ぼしていくことにした。

調査を進めてみると北半分には、点々と弥生後期・古墳前期の住居が確認されたのに加えて、平安時代の小規模寺院跡のかすかな痕跡が発見されたのが目立った程度であった。

南寄りの部分では、弥生時代後期から平安時代にかけての住居跡が、折り重なるように確認され、遺構の範囲確定や遺物の帰属決定に手間取った。2月以降、調査地には、担当者と作業員の人波と足の踏み場もないほどの住居跡でごった返し、本来の原西Ⅰ・Ⅱの担当者は、その交通整理と調査の記録化に走りまわった。

平成3年度の調査　天引地区の南寄りで調査未了となった部分のため1班が残ってこれに当たった。本報告に関わるものとしては、南端寄りに分布していた住居群の調査であった。また、調査を始めつつ中途になってしまった遺構も数多く存在していた。これらの調査は、6月いっぱいでほぼ終了することができた。残りの2ケ月の期間は、東側の斜面部に密集していた古墳時代後期の粘土採掘坑の調査と最終的なチェックの作業にあてた。

(4) 整理計画と経過

白倉下原・天引向原遺跡では、発掘調査終了時点で出土遺物量から約10年の整理期間が算定された。その後、発掘調査担当者の協議によって、報告書は時代別の編集方針をとることで合意し、それを受けて、本調査区の報告書は平成4年度から整理事業が開始された。既に、平成4～5年度においては、旧石器時代～古墳時代中期の遺構及び遺物を対象とした整理が3班各2年行われ、『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅰ旧石器時代編、『同』Ⅱ縄文時代編、『同』Ⅲ弥生～古墳時代編（5世紀まで）の3冊が刊行されている。また、平成5年度において6世紀以降の木器実測とプレパラート作成及び写真撮影が、木器班を中心に行われた。

さて、6世紀以降の遺構・遺物については、平成6年度1班、平成7年度1班、平成8年度2班の体制で整理事業を実施し、平成8年度末には『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅳ古墳時代編（6～7世紀を対象）と『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅴ奈良～江戸時代編の2冊が刊行される予定である。

平成6年度の整理　1班で整理事業を行ない、白倉C区の遺構・遺物の整理を行った。同区出土土器の接合復元作業を行い、写真撮影の後に実測遺物の選定を行った。実測は機械実測を併用し、終了後トレースを外注した。その後、遺構図面修正及び出土遺物の位置を図面にしるし、遺構図トレースを外注した。継続して、写真図版と遺物観察表の作成や竪穴住居跡事実記載を行った。1月以降は白倉B区出土土器の接合復元を開始し3月に至った。

なお、年度末に来年度及び再来年度整理計画を見直したところ、本年度のペースで整理を行った場合、遺物量が多いことから再来年度2冊の報告書刊行は困難であることが予想された。そこで、より一層の努力を行うとともに、本年度末～来年度においては、大量の遺物実測を外部発注することによって報告書刊行にむけて万全を期することとした。

平成7年度の整理　1班で整理事業を行った。昨年度からの継続である白倉B区出土土器の接合復元から始まって、白倉A区、天引地区の土器接合復元を行った。各地区の土器接合復元が終了した段階で随時、石器・石製品についても分類を行い、遺物写真撮影を行った。接合復元が終了した土器については、地区と数量がまとまった段階で甕や甑といった大形品と坏などを中心とした小形品に分けて、大形品については、機械実測を行い、小形品については実測を外部発注した。遺物の接合復元は、なんとか年度内に行うことができた。

平成8年度の整理　原西Ⅰ班と原西Ⅱ班の2班体制で整理を行った。各班における整理事業について概述したい。

原西Ⅰ班　竪穴住居跡の図面修正及び出土遺物の位置を図面にしるしていった。白倉C区を除く6世紀以降の竪穴住居跡軒数は約260軒で、10月末まで行った。その間も含め、随時、遺物実測図面と住居跡図面トレースを外部委託し、併せて竪穴住居跡遺構図版と写真図版を作成した。その後、全体図等を作成し、原西Ⅱ班が作成した竪穴住居跡出土遺物図版と写真図版及び竪穴住居跡以外の遺構・遺物図版と写真図版を組み合わせていった。

原西Ⅱ班　機械実測を終了した大形土器実測図の修正と金属器実測を、およそ8月まで行ない、観察表を作成していった。その後、竪穴住居跡以外の全ての遺構図面修正を行い、遺物及び遺構トレースを外注した。その後、遺物図版及び遺物写真図版と竪穴住居以外の遺構図版及び写真図版を作成した。その後、原西Ⅰ班が作成した竪穴住居跡図版と同写真図版を組み合わせていった。

なお、平成6年度以降の整理作業を行う過程で、既刊報告書に掲載すべきであった遺漏事項が確認された。その中で、5世紀代に含まれることについては『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅳに掲載し、それ以外は『同』Ⅴに〈補遺〉として掲載した。Ⅴに掲載した〈補遺〉の中には、既刊本において約束した遺構外出土縄文土器分布や弥生時代の菅玉などがある。残念ながら縄文時代遺構外出土石器分布については、時間的制約から掲載できなかった。

II　立地環境と発掘区の概要

1　地理的環境

白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査区は、群馬県南西部に位置する富岡市街地東方の、甘楽郡甘楽町大字白倉・天引両地内に所在する。発掘調査区は鏑川によって形成された上位と下位の二つの河岸段丘面のうち、高位の段丘面である上位段丘面に立地している。

鏑川は群馬・長野県境の八風山麓に源を発し、途中下仁田町本宿付近で、同じく群馬・長野県境の荒船山麓に源を発する市野萱川と合流した後、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市の群馬県南西部地域を東に流れ下り、その後高崎市阿久津町付近で利根川の一支流である烏川へと合流する。鏑川を上流に遡っていくと、内山峠を越えて長野県佐久市へと抜けることができ、古くから中部地方と関東地方とを結ぶ交通の要衝的機能を持った地域である。

鏑川右岸（南岸）一帯には上位段丘面と下位段丘面の二段の河岸段丘が形成されているが、特に富岡市東部から藤岡市にかけての中下流域では、上位段丘面の発達が著しい。逆に、左岸（北岸）では上位・下位とも河岸段丘の発達はほとんど見られない。こうした経緯については、右岸地域の地盤の隆起によって、鏑川の流路が次第に南から北へと移動したことに起因していると言われる。つまり、鏑川は最初に南側から上位段丘面を形成させて、その後下位段丘を形成させながら、流路を北へと次第に移動させた結果であると捉えられている。この流路移動自体は自然史的なタイムスケールのなかで現在でも進行中であり、今では下位段丘面を10m程侵食した河床を鏑川は流れている。

上位段丘面には、北西約40kmのところに聳える浅間山を給源とした、浅間室田軽石層（As-MP）をはじめとする複数の軽石層群と風化ローム層とが互層となって、2m程の厚さで堆積している。さらに、ローム層の下層には風化した暗褐色粘土層が堆積し、この上部には鹿児島湾を給源とする姶良Tn火山灰が1～2cmの厚さで純層ないしブロック状に堆積していることから、遅くとも22,000年～25,000年前頃には上位段丘面の形成が終了したことは確実で、さらに白倉下原・天引向原遺跡の旧石器時代の石器群がATT下層から出土していることを考え併せれば、この年代をさらに遡ることは間違いないであろう。　これに対して、下位段丘面にはほとんどの地域でローム層の堆積が見られないことから、上位段丘にローム層が堆積している頃には、この面の何れかを鏑川が流れていたことが推測される。

白倉下原・天引向原遺跡の発掘調査区が立地するのは上位段丘面で、南側地形は丘陵地帯が続いたのち、稲含山や牛伏山をはじめとする標高1,200～1,500m程の山地が東西に連なってひかえている。この山地に源を発する雄川、白倉川、天引川、大沢川、矢田川、土合川などの中小河川が段丘面を開析しながら北流し、鏑川に直交するように合流している。さらに、これらの中小河川に注ぐ支谷が樹枝状に発達して、上位段丘面を東西に分断し、いくつもの舌状に延びる台地を形成している。

発掘調査区は、大きく見ると東側を天引川、西側を白倉川の中小河川によって大きく開析された上位段丘面に立地する。白倉下原地区は、東を天引向原地区の間を流れる小支谷に、西を白倉川によって画される。調査区は大部分がローム台地であるが、白倉B区の西側には谷津が検出されており、この谷津は北側に向かって台地を開析する小支谷となる。天引向原地区は東を三途川、西を小支谷によって画された台地上が主たる調査区である。西の小支谷以外にも谷津が検出されており、この2つの谷は北東部分で合わさって三途川へと連なっている。

発掘調査区の北側約900mには上位と下位の段丘面を画する比高20m程の崖線が東西に走っている。

第3図　鶴川流域の地質図

2　歴史的環境

はじめに

白倉下原・天引向原遺跡においては、旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中近世以降の遺物及び土地利用痕跡が重層的に検出されている。そして、この中の旧石器時代から古墳時代中期（おおむね5世紀）にかけては既刊報告書に掲載されている。そこで、ここでは重複する時代も考慮して古墳時代以降の歴史的環境について述べていきたい。

ここでは周辺遺跡の図を2枚用意した。第4図が1万分の1図で、表1に示した遺跡以外にも近くの中世塔婆や重要と思われる小字などをとともに、地形を理解してもらうために用意した。図5は通常の5万分の1図で範囲を広げた周辺遺跡図である。そして、第5図に対応するように周辺遺跡の表を（表1）作成したので利用してほしい。

さて、周辺地域における古墳時代以降の土地利用は当然のことながら地形に大きく規定される部分が少なくない。第5図で示した遺跡分布は現代の開発との関連を如実に示しているが、それだけではなく地形との関連で一定の傾向を示している。当遺跡も含む鏑川上位段丘上には多くの遺跡がマッピングされている（例えば1～21など）が古墳群や集落遺跡、城館趾が主体となる傾向が強い。それは、当遺跡を中心とした周辺地形と遺跡分布を示した第4図からも読み取れよう。鏑川上位段丘面以外に、下位段丘面右岸の鏑川に近接した部分にも古墳群及び集落遺跡が多く分布している(29～36など)。ここは、鏑川の自然堤防による微高地となっている。

さて、田畠などの生産跡であるが、近世のものは別として、それより古い時代の検出例は少なく、特に水田は甘楽条里遺跡（22）の第3～5調査区（第4図参照）と長根羽田倉遺跡（4）において浅間B軽石（1108年）に覆われた水田が検出されたに過ぎない。ちなみに甘楽条里遺跡は、その名が示すように条里地割がつい最近まで残っていた場所である。この条里地割がどこまで溯るかは不明であるが、甘楽条里に代表される鏑川下位段丘面が古代にまで溯る生産跡であった可能性は指摘できよう。このような微高地の存在や地割は昭和22年米軍撮影の航空写真（写真図版編ＰＬ１）からも読み取ることができる。

それでは、時代ごとに述べてみよう。

古墳時代　集落遺跡は鏑川上位段丘面上と下位段丘面の鏑川右岸縁辺で多く分布する。この中で前期の集落遺跡は、当遺跡（1）以外には神保富士塚遺跡（3）、西原遺跡(11)、や福島鹿嶋下遺跡(33)、福島駒形遺跡（34）などと多くない。

中期になると神保富士塚遺跡と西原遺跡を除く上記の遺跡以外では下小塚遺跡（20）で住居跡が見つかっている。特にこの遺跡では、当遺跡でも出土した高坏脚部を再利用した羽口が少なくとも12点出土しており注目されよう。また、甘楽条里遺跡（22）の20調査区（第4図）でも竪穴住居跡が見つかっているが、ここは鏑川上位段丘直下の下位段丘面にあたり、集落検出例が少ない立地である。おそらく微高地であったと思われる。

後期（便宜的に7世紀も含める）になると集落遺跡は増加し、さらに6世紀は検出住居跡数が最大になると思われる。後期の竪穴住居跡は当遺跡以外に多数存在するため、詳しくは表1を参照して欲しい。また、表に示すことはできなかったが、当遺跡の北側にある麻場城跡周辺（第4図参照）では、おそらくこの段階の竪穴住居跡のソイルマークが多く見受けられる。丸山遺跡（20）でも同時期の竪穴住居跡が検出されていることから、当遺跡から北側900m段丘面境までは同期の集落遺跡が広がっていた可能性があろう。

古墳時代中期以降、この地域ではいくつかの特徴ある事象が認められる。まず、滑石を用いた石製模造品や臼玉を製作した遺跡が多く認められることである。それは、鏑川上流の維川や大沢川で原石が採集されることに起因するが、このような遺跡は当遺跡以外に神保富士塚（3）、笹(21)、甘楽条里(22)、福島鹿嶋下（33）、福島駒形（34）の各遺跡が該当し

よう。他に、木の葉形坏の分布と、土師器製作技法の共通性があげられる。

古墳は集落遺跡と似た場所に立地し、大半が後期以降の群集墳である。比較的新しい古墳調査例の中で注目されるものとして、片山1号墳（25）の粘土槨と副葬品、大山1号古墳（30）から出土した鉋載品の轡、しの塚古墳（36）で見られた墳丘全面葺石などがあげられよう。

また、方形周溝墓は当遺跡以外では、神保植松（2）、長根安坪（3）、天引狐崎（7）の各遺跡で見つかっており、特に長根安坪遺跡では14基が調査された。

奈良・平安時代　この時代の集落遺跡では例外なく古墳時代の竪穴住居跡が検出されており、集落遺跡の立地は前代と同じである。また、当遺跡からは平安時代の寺院跡が検出されているが、麻場城趾の南西で当遺跡から500m北側あたりには同期の瓦が散布している。

生産跡としては、浅間B軽石（1108年）下の水田が長根羽田倉遺跡（4）と甘楽条里遺跡（22）の第3～5地点で見つかっている。またこの軽石下の畠は僅かながら当遺跡でも検出されている。

次に文献資料から当遺跡周辺について『群馬県史』資料編4（1985）・通史編2（1991）を参考にして簡単に触れてみよう。

10世紀前半の実用百科事典として著名な和名類聚抄では、甘楽郡に13の郷名がしるされているが、その中に新屋郷がある。また、ほぼ同時期に完成した延喜式には、上野国内に9つの御牧がありその中に「新屋牧」があり新屋郷を中心とした場所に設置されたと考えられている。この新屋郷は甘楽町大字天引字新屋周辺と推定され、この小字所在地は当遺跡の北方約200mに位置しており、新屋以外にも隣接して新井谷と新屋下の小字も見受けられる（第4図参照）。他に文献資料では国司によって作成されたとされ伝来している『上野国神名帳』に「新屋明神」の名がみえる。

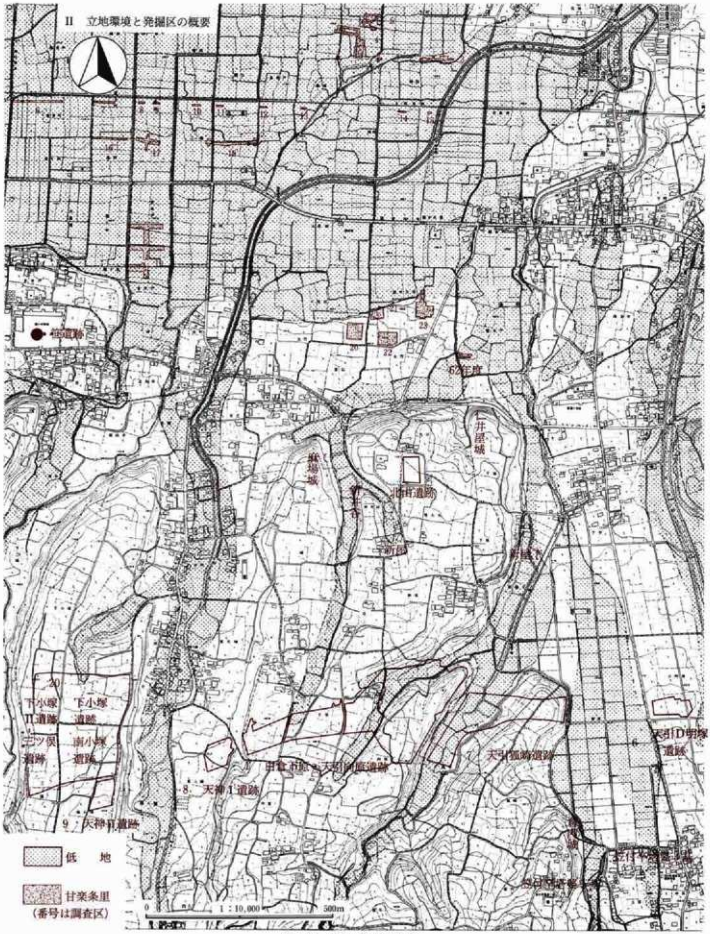
新屋郷が出土文字資料として最初にあらわれるのは平城京跡出土木簡であり、（表）「上野國甘樂群新屋郷□□」（裏）「上戸宋宜部猪万呂養銭□」とある。衛士の養銭に付けられたものとのことであるが、新屋郷において宮門の警備といった朝廷に直接結び付く人物が存在していたことと、上戸という経済力が注目されよう。この木簡は溝からの出土とのことで、いっしょに出土した木簡から726年～770年の年代が与えられている。8世紀のある段階で、確実に新屋郷が存在した根拠となろう。

平安時代になると当遺跡では、墨書土器などに「新井」がみられるようになる。このことから新屋郷との関連が考えらよう。同様に出土文字資料の中に「午」が多数見られ、この文字が馬を意味するとすれば「新屋牧」との関係が考えられるだろう。

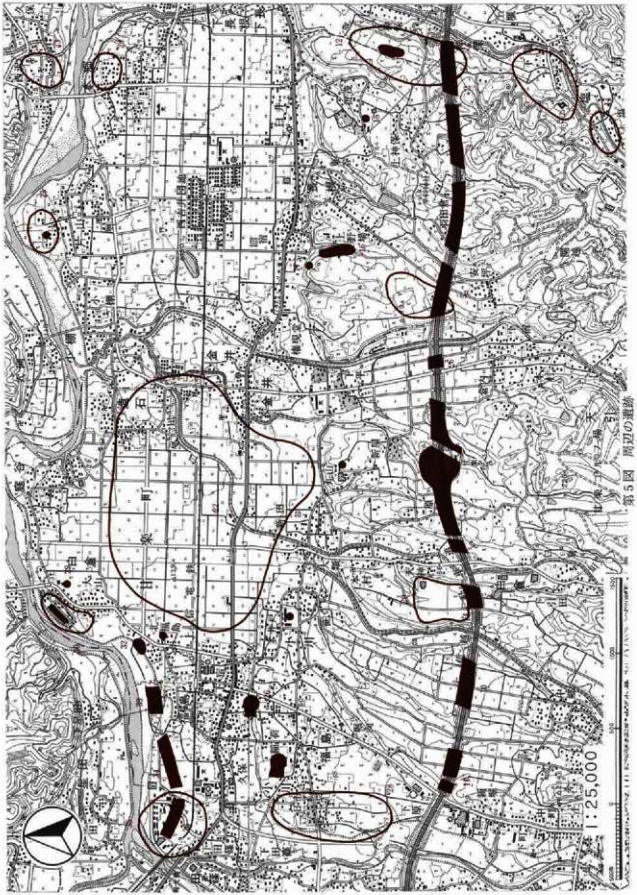
また、当遺跡の南方標高650mの山中に白倉神社がある。この神社は南北朝期に成立した神道集にある「白鞍大明神」とされ、一説には上野国神名帳にある新屋明神ではないかとされている。この神社は天狗伝承をもち、山岳信仰との拘わりが想定されるが、当遺跡の11世紀の竪穴住居跡から出土した鉄鐸も、このような背景で出土したのかもしれない。

中・近世　中世では当遺跡の北方約600mには麻場城趾が、また麻場城趾の東方約500mには仁井屋城趾がある。前者は城趾公園整備により平成元年～3年に発掘調査が行われている。この2つの城趾は台地先端に立地しており2つ1組の別城1郭という形態をとっている。2つ合わせて白倉城とよばれ白倉氏の居城であった。当遺跡の南東には、県指定重要文化財の笠付塔婆（第4図参照）がある。2カ所存在し合計4基となるが、13世紀末～14世紀初頭の紀年銘がある。板碑と同じ性格であるが笠付であることと、石材が牛伏砂岩であることに注目したい。

近世では浅間A軽石に拘わる生産跡がいくつか検出されている。多くが軽石を集めて復旧をはかった際にできた灰掻き山下での検出である。当遺跡でも灰掻き山下で畠が検出されている。


4区遺跡
6区住居
井屋敷
北村遺跡
下小塚
II遺跡
下小塚
遺跡
南小塚
遺跡
南小塚
遺跡
天神1遺跡
天神II遺跡
天引遺跡遺跡
天引D中塚
遺跡
低　地
甘楽条里
（番号は調査区）
1：10,000
500m

第4図　周辺地形と遺跡



第5図　周辺の遺跡

Ⅱ　立地環境と発掘区の概要

表1　周辺の遺跡

番号	遺跡名	遺跡の概要など	参考文献など
1	白倉下原・天引向原遺跡	本報告書に掲載	
2	神保植松遺跡	古墳時代の住居跡・土坑・方形周溝墓・古墳が検出された。奈良～平安時代の竪穴住居跡。また、中世城郭「植松城」の主郭部分を調査している。明青花を出土した竪穴状遺構など。	谷藤編1997『神保植松遺跡』 御群馬県埋蔵文化財調査団（以下群埋文と略）
3	神保富士塚遺跡	古墳時代前期の竪穴住居跡４軒・後期住居跡32軒。奈良～平安時代の竪穴住居144軒を検出。古墳時代前期の住居からヒスイ製勾玉と碧玉製の管玉が出土している。他に江戸時代の竪穴状遺構など。	小野編1993『神保富士塚遺跡』 群埋文
4	長根羽田倉遺跡	古墳時代後期の竪穴住居跡62軒、飛鳥・奈良時代の住居跡24軒、平安時代の住居跡45軒が検出された。他に浅間B軽石下の水田が見つかっている。古墳時代後期の祭祀遺構から滑石製馬形や他の石製模造品が出土している。	鹿沼編1990『長根羽田倉遺跡』 群埋文
5	長根安坪遺跡	古墳時代の方形周溝墓14基と後期古墳15基。古墳～平安時代の竪穴住居跡49軒が調査された。	菊池編1997『長根安坪遺跡』群埋文
6	天引口明塚遺跡	２基の古墳が調査された。他に３基の古墳の存在が伝えられているが、現在は削平され畑地化されている。	右島編1992『神保下條遺跡』群埋文所収
7	天引狐崎遺跡	古墳時代の方形周溝墓４基と後期古墳２基が調査された。他に竪穴住居跡１軒が検出された。他に谷地部から不朝の遺構。	坂井編1996『天引狐崎遺跡』Ⅱ 群埋文
8	天神Ⅰ遺跡	古墳時代後期の竪穴住居跡６軒が検出。	松田編1994『天神Ⅰ遺跡他』 山崎考古学研究所
9	天神Ⅱ遺跡	古墳時代後期の竪穴住居跡18軒と同時期の小鍛冶２軒。木の葉形坏出土。	同　上
10	松葉修学寺遺跡	古墳時代後期の竪穴住居跡51軒と奈良～平安時代の竪穴住居跡19軒。	同　上
11	西原遺跡	古墳～奈良平安時代の竪穴住居跡30軒。他に砦（中世）が検出された。	同　上
12	神保古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では63基をあげている。	1938『上毛古墳総覧』群馬県
13	塩Ⅰ古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では10基をあげている。	同　上
14	塩Ⅱ古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では12基をあげている。	同　上
15	折茂東遺跡	古墳時代前～後期と平安時代の竪穴住居跡が検出されている。	『折茂東遺跡』1987吉井町教
16	西馬籠・長根宿遺跡	古墳時代前期と平安時代の竪穴住居跡及び奈良時代の遺物集中地点。	1987『西場脇・長根宿遺跡』吉井町教育委員会
17	慈行寺古墳	直径40mの大型円墳。墳丘より古式土師器が採集されている。	
18	安坪古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では44基をあげている。	1938『上毛古墳総覧』群馬県
19	丸山遺跡	古墳時代後期の土師器が甘楽町古代館に展示。	小安和順氏より御教示
20	下小塚・下小塚Ⅱ 南小塚・三ツ俣	弥生時代～平安時代の集落遺跡。出土遺物が白倉下原・天引向原遺跡と大変によかっている。	同　上
21	笠遺跡	弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡。滑石製模造品が多数出土。	
22	甘楽条里遺跡	24の調査区に別れて調査されている。３～５調査区ではA・B下水田が検出。20～23調査区では弥生時代後期～平安時代の竪穴住居が検出されている。	小安編1984～1989『甘楽条里遺跡』
23	岩崎古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では６基をあげている。	1938『上毛古墳総覧』群馬県
24	本郷古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基をあげている。	同　上
25	片山古墳群	古墳時代後期の群集墳。上毛古墳総覧では７基をあげている。また、群集墳とは別に中期初頭の小型前方後円墳が平成３年に調査され粘土槨が検出。	
26	天皇塚古墳	笹森稲荷古墳の北東400mに位置し、竪穴系の主体部と思われる。	1981『群馬県史』資料編編３
27	笹森稲荷古墳	甘楽地域最大の前方後円墳で全長100mで周濠をもつ。埴輪型横穴式石室をもち、６世紀後半の築造である。	
28	二日市古墳群	現在20基程の円墳が残る。５世紀後半頃からの築造が考えられる。	
29	大山鬼塚古墳	円墳で舟形石棺を伴う。５世紀後半と推定。遺物は東京国立博物館蔵。	1981『群馬県史』資料３
30	大山古墳群（西大山遺跡）	古墳の周堀４基が調査され、１号古墳から５世紀後半の船載品の「くつわ」が出土。他に平安時代の刻書土器。浅間A軽石下の溝と掘立柱建物１棟。	小安編1996『西大山遺跡』甘楽町教育委員会
31	青木畑Ⅰ・Ⅱ　中椿遺跡	古墳時代後期と奈良～平安時代の竪穴住居20軒が調査された。	長谷部編1983『青木畑Ⅰ・Ⅱ　中椿遺跡』　甘楽町教委

番号	遺跡名	遺跡の概要など	参考文献など
32	福島椿森遺跡	中世の土坑墓3基と掘立柱建物数棟と柵列。浅間A軽石を含む溝とピット。	平成8年　群埋文調査
33	福島鹿嶋下遺跡	古墳時代前期から後期前半にかけて17軒の竪穴住居が検出された。焼失住居が3軒。滑石製品の工房跡から数千点におよぶ多量の臼玉や未製品が出土。	
34	福島駒形遺跡	古墳時代前期～後期にかけての竪穴住居跡34軒を調査。石製模造品や臼玉の製作を行った住居2軒がみつかった。他に、同時期の掘立柱建物。7世紀前半と考えられる古墳1基。	1995『年報』14　群埋文
35 ・ 36	塚原古墳群 田篠塚原遺跡	7基の円墳を調査した。すべて円墳で、この内1基は周堀のみであったが、他は主体部の調査を行っている。4号墳とした「しの塚古墳」は墳丘全面を葺石でおおった両袖形横穴石室をもつ古墳である。 この古墳群は、塚原古墳群とよばれ、20基ほどの円墳から成っている。7世紀代の築造が考えられる。 発掘調査では、浅間A軽石下の田畠も検出されている。	1996『年報』15　群埋文

3　基本土層

白倉下原・天引向原遺跡は鋼川右岸の上位段丘面に立地している。上位段丘面では基本的に表土層(耕作土)、ローム層、粘土層、礫層の堆積が認められる。表土層中には、1783年（天明3年）に噴出した浅間A軽石（As-A）、1108年（天仁元年）に噴出した浅間B軽石（As-B）を含んでいる。しかし、純層での堆積は確認できなかった。

第Ⅰ層　黒褐色土層（表土層）　耕作土である。攪拌された浅間A軽石を多く含んでいる。浅間A軽石は純層では認められないが、灰掻き山直下で検出された畠址の畝間では純層で堆積している。浅間B軽石は台地部では認められなかったが、谷部では堆積している部分もある。また、浅間C軽石の堆積はいずれの部分でも認められなかった。

第Ⅱ層　暗褐色土層　漸移層で、白倉B区とC区の遺構確認面である。縄文時代の遺物包含層でもある。なお、第Ⅱ層は、白倉B区とC区では存在するが他の地区では、その後の土地利用によって大半が消失していた。

第Ⅲ層　明黄褐色ローム層　白倉A区及び天引地区の遺構確認面である。堅く締まるローム層で、浅間板鼻黄褐色軽石（As-YP）を多く含む。

第Ⅳ層　黄褐色ローム層　Ⅲ層に比較してやや軟質で、粘性を持つ。浅間白糸軽石（As-SP）の可能性がある白色の軽石を含む。

第Ⅴ層　黄褐色ローム層　浅間板鼻褐色軽石（As-BP）をブロック状に含む。

第Ⅵ層　明黄褐色軽石層　明黄褐色を呈する浅間板鼻軽石（As-BP）の純層で、堅く締まる。

第Ⅶ層　灰褐色軽石層　灰褐色を呈するAs-BPの純層で、堅く締まる。

第Ⅷ層　暗褐色ローム層　粘性のあるローム層で下半部ではAs-MPを少量含んでいる。

第Ⅸ層　明赤褐色軽石層　明赤褐色を呈する浅間室田軽石（As-MP）の純層である。

第Ⅹ層　灰白色軽石層　Ⅸと同じAs-MPの純層であるが、粒子は細かい。水成作用によって色調が変化し、下半部では一部粘土化している。

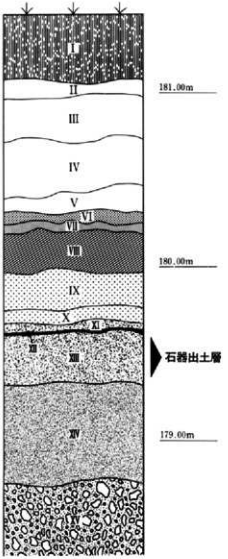
第Ⅺ層　暗褐色粘土層　堅く締まる粘土層。

第Ⅻ層　乳白色火山灰層　姶良Tn火山灰（ＡＴ）の純層である。非常にきめ細かいガラス室の粒子である。

第XIII層　暗褐色粘土層　堅く締まる粘土層で、石器包含層である。平均２cm程の小礫を多く含む。

第XIV層　青灰色粘土層　きめ細かい粒子で構成される。

第XV層　礫層　礫は比較的小型のものを主体とし礫種は結晶片岩とチャートを主体とする。



第６図　基本層序

4　発掘調査区の概観

ここでは、時代別に発掘調査区内を概観したい。調査区内については、時代別に５冊の報告書が刊行されるわけで、詳細はそちらに拠られたい。

(1)　旧石器時代

この時代の具体的な内容は、『白倉下原・天引向原遺跡Ⅰ』(1994) に拠られたい。

旧石器時代の調査は、縄文時代以降の調査が終了した段階で、ローム層が確認されている部分に対して行われた。基本的には調査区ごとに２×４ｍの試掘坑を設定し、文化層が確認された場合には本調査を行った。結果的には、表土下約２ｍの部分に堆積する姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）層直下から文化層が確認され、白倉Ａ区・白倉Ｂ区・白倉Ｃ区で各１カ所、天引地区で２カ所の合計５カ所で本調査を行った。

白倉Ａ区では、舌状台地から６カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。403点の石器類が出土し、ナイフ形石器・台形様石器・局部磨製石斧などが出土している。

白倉Ｂ区では、平坦な台地上から４カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。120点の石器類が出土し、出土石器は白倉Ａとほぼ同じ器種が出土している。

白倉Ｃ区では、谷頭部から40ｍ程奥に入った台地上から、台形様石器などが３点出土している。

天引地区では、舌状台地の先端部（天引Ａ区）と台地の奥部分（天引Ｃ区）を調査した。舌状台地の先端部では、13カ所のブロックが環状ブロック群を構成して検出されている。268点の石器類が出土し、ナイフ形石器・台形様石器・楔形石器などが出土している。台地の奥部分では、小規模なブロック１カ所から、台形様石器など10点が出土している。

整理作業によって、石器群の母岩と多数の接合資料が確認され、石器製作技術を考察するための基礎的なデーターと集落研究を行う上での基礎的なデーターを呈示することができた。

白倉Ａ区旧石器遺物出土状態

(2) 縄文時代

この時代の詳細は『白倉下原・天引向原遺跡』II (1994) に拠られたい。

縄文時代は、前期中葉黒浜式期から後期前半堀之内２式期までの遺構と遺物が主体を占めている。検出された遺構の内訳は、竪穴住居跡43軒、竪穴状遺構１基、埋甕12基、土坑290基である。以下に、時期ごとの様相について概述していきたい。

前期　黒浜式期の住居３軒と諸磯式期の住居５軒が検出されている。黒浜式期では、有尾式土器も多く出土しており、白倉Ｃ区を中心に70基近くの土坑が検出されている。諸磯式期は、ほとんどが諸磯ｂ(新)式期に帰属し、前後の時期の遺物は極めて少ない。また、遺構分布は、黒浜式期とは異なり、調査区全体に遺構が散在する状況が見受けられる。

中期　勝坂Ⅱ式期の住居４軒、勝坂式終末期の住居14軒、加曽利Ｅ３式期の住居７軒、加曽利Ｅ４式期の住居２軒が検出されている。この中で、勝坂式終末期の土器群は、今後の当該期の編年研究に寄与するであろう良好な資料である。勝坂式期の遺構は、白倉Ａ区と天引Ｃ区に別れて検出されているが、加曽利Ｅ式期の遺構は、白倉Ｂ区を中心に検出される傾向をもつ。加曽利Ｅ４式期の住居の中で、１軒は柄鏡形状を呈するものと思われる。

後期　称名寺式期の住居４軒と堀之内１式期の住居４軒が検出されている。遺構の残存状態が悪いものもあるが、敷石住居及びその系譜をひくものが多いのが特色であろう。傾向として、称名寺式期の敷石住居は、全面に配石が施されるのに対して、堀之内式期に入ると、柄部を中心とした部分的な配石に変わるようである。この時期は、白倉Ｂ区に遺構が多く分布する傾向が見受けられた。堀之内２式期は、住居は検出されなかったものの、13基の土坑が白倉Ｂ区を中心に調査された。とりわけ、白倉Ｂ区６号土坑からは、トチノキの炭化種実がまとまって出土している。年代測定も併せて行い、土器の年代観に近い測定値を得ている。

なお、『白倉下原・天引向原遺跡』Ｖの報告書において遺構外出土土器時期別分布を付図として掲載している。

白倉Ｂ区26号住居跡

(3) 弥生時代

この時代の詳細は『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅲに拠られたい。弥生時代は、竪穴住居跡59軒と土坑33基及び方形周溝墓２基が検出されている。

竪穴住居跡59軒の各地区ごとにおける内訳は、白倉Ａ区の２軒、同Ｂ区の４軒、同Ｃ区の16軒に対して、天引地区は37軒と圧倒的に多い。これらは、すべて弥生時代後期樽式期に属しており、樽式土器およびその系譜に連なる土器を伴っている。樽式４段階区分（４段階は、樽４式あるいは樽式系土器と呼ばれ、古式土師器が共伴する段階）を用いれば、検出された竪穴住居跡は、全て樽１～３式期（段階）に帰属する。この時期区分をもとにして、住居の分布傾向を見ると、広い地域の中にまんべんなく集落が継続的に形成されていくのではなく、各時期ごとに占地箇所を変えている点が特徴的である。すなわち、第１段階は白倉Ｃ区、第２段階は白倉Ｂ区および天引地区、第３段階は天引地区に分布の顕著な集中傾向が認められる。

このうち、白倉Ｃ区で確認された第１段階の住居15軒では、いずれからも磨製石鏃の製作に関わる遺物類が出土している。これらすべての住居がまったくの同時期に存在したとは言い難いが、極めて接近した時期の所産であることは間違いない。おそらく磨製石鏃の製作を専門的に行っていた集落であったと思われる。

白倉Ｂ区の東寄りにある第２段階の４軒の住居も、適当な間隔をおいて一箇所に集中しており、集落の１単位を反映している可能性が強い。

一方、天引地区での第２段階以降の展開過程を見てみると、集落の中心は常にその南寄りの地域で進んでいることがわかる。古墳時代前期以降の集落域が北寄りにあるのと対照的であり、興味深い点である。

土坑の大半は、中期前半の限られた時期に集中し、白倉Ｂ区及びＣ区において群をなしている。形態は袋状を呈し、貯蔵穴であった可能性が強い。

白倉Ｃ区で検出された２基の方形周溝墓は、樽３式よりも後出する時期と思われ、この時期の竪穴住居跡は、検出されなかった。

天引地区　弥生時代住居跡

(4)　古墳時代

古墳時代については、『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅲ（1944）及び『同』Ⅳ（1997）に分かれて掲載されている。原則的には、カマドを持たない炉の段階（おおむね5世紀前半以前）が同『Ⅲ』に、カマドを持つ段階（おおむね5世紀後半以降）が『同』Ⅳに分かれることになる。ただ、白倉A区において竪穴住居跡北側が破壊されていた3軒（5世紀前半）については、『同』Ⅳに掲載してしまった。

この時代では、竪穴住居跡193軒と他に粘土採掘坑が67基とまとまって検出されている。

竪穴住居跡は、4世紀代（S字状口縁台付甕の段階）においては、弥生時代終末期の分布を踏襲するかのように天引地区だけで検出されている。5世紀に入ると天引地区とともに白倉地区にも少数検出される。そして、6世紀に入ると、天引地区ではあまり検出されず、白倉地区において多量に検出され、7世紀段階では、逆に検出数も減少する。単純に時期別の竪穴住居跡軒数だけ比べれば、4世紀22軒、5世紀20軒、6世紀101軒、7世紀30軒となり6世紀代の異常さが強調されよう。さらには、時期及び地区における竪穴住居跡の検出状況が一様ではないことが確認できよう。

竪穴住居跡から出土した特殊遺物は数多いが、幾つかを列挙してみると以下のようになる。小型仿製鏡1点（前期）、羽口に転用された高坏脚部（中期）1点、土鈴1点(以下後期)、木葉形坏5点、手鏡形土製品3点、魚形（動物窓匠）土製品、まとまった出土した白玉及び未製品、特徴的な製作方法が観察される土師器群など。

粘土採掘坑は天引地区の南東部分でまとまって検出されているが、時期的には5世紀終末から6世紀前半に限定される。この、粘土採掘坑からは同時期の樹皮製曲物2点と使用時の状態を示すと思われる梯子が3点出土している。

なお、今回7世紀を古墳時代に含めて報告するが、便宜的な措置として理解して戴きたい。

白倉8区　古墳時代後期住居跡

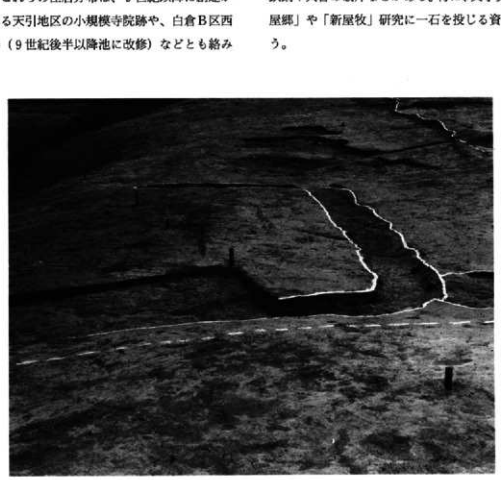
(5) 奈良・平安時代

この時期は『白倉下原・天引向原遺跡』Ⅴ（1997）に掲載される。出土遺物から想定される年代としては、おおむね8世紀から11世紀までが該当しよう。検出された遺構としては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝(道路状遺構)、畠の存在が推定される部分、及び小規模寺院跡、水場がある。

これらのうち中心的な位置を占めているのは竪穴住居跡であり、全部で150軒が数え上げられている。住居分布のおおまかな傾向を指摘すると、8世紀代は比較的散漫に各地区に分布していたのが、9世紀に入ると、白倉B区を中心とした部分に集中が見られる。ところが、B区には10世紀以降殆ど住居が検出されていない。また、天引地区においては、9世紀前半では殆ど住居がなかったが、9世紀後半以降11世紀に至るまでまとまって住居が検出されるようになる。これらの住居分布は、9世紀以降に創建が想定される天引地区の小規模寺院跡や、白倉B区西側の水場（9世紀後半以降池に改修）などとも絡みあった結果として理解されよう。住居のカマド位置も、時代が下るに従って北側→東側→南西隅へと検出位置が異なるようである。また、11世紀代の住居が17軒とまとまって検出されていることも特筆すべきことであろう。

小規模寺院跡であるが、ここでは、南北約10m、東西約40mの区域を削って平坦面をつくり、そこに長辺約10m、短辺約5mの雨落溝をめぐらせている建物跡の存在が推定された。後世の削平が著しく、柱穴、礎石等はすべて失っていた。この周囲からは、上野国分寺系の瓦が出土している。この建物跡の南側に隣接する平安時代の竪穴住居跡からは、同種の瓦とともに「福天寺」と墨書された須恵器が出土し、寺院跡との関係を推定させた。

さて、出土遺物の中で、特筆すべきものとして文字資料141点（新井・午・合）や、鋸1点、鉄鐸4点、鉄鍋や火舎の破片などがある。特に、文字資料は「新屋郷」や「新屋牧」研究に一石を投じる資料となろう。



天引地区　寺院跡

(6)　中近世以降

明確に中世と確定できる遺構は極めて少なく、可能性があるものとして宋銭のみを出土した墓や、焼けた骨片を伴った土坑程度である。また、生産跡としては、As-B（浅間Ｂ軽石）上の畠が１カ所検出されている。このように遺構としては少ないが中世の青磁や白磁の破片が調査区内から出土しており、生産跡や墓以外の土地利用もなされていたものと思われる。

近世の遺構としては、道状遺構がある。主な道状遺構は３条検出されているが、いずれも両脇に溝が付随していた。道状遺構のうち、２条は白倉Ｂ区内で検出されている。この場合、道幅は約５～６ｍで調査区を南北に分断するように全長約70m部分が検出されている。また残る１条は白倉Ａ区の南東から白倉Ｂ区の北東部にかけて検出されており、調査区を東西に横切るようにして検出されている。道幅は約５～６ｍで、全長約110m部分が検出されている。道状遺構は互いに交わってはいないが、発掘調査区外に延長した場合ほぼ直行することになる。

その他の遺構は農業生産に拘わるものが多かった。天引地区では６カ所畠が検出されている。大部分は台地の斜面部において As—A　（浅間Ａ軽石）の灰掻き山が検出され、その下から畠が検出されている。灰掻き山の存在から少なくとも天引地区の台地上においては、浅間Ａ軽石降下時にはかなりの範囲で畠作が行われていたものと思われる。また、天引地区北側の谷津では、水田跡を調査した。また、白倉Ａ区と天引地区で各１基、農業生産に関連すると思われる桶埋設土坑（木質は残存していなかった）が検出されている。他に、近世に関する遺構としては、墓壙が複数検出されている。その中の１基は、頭部に擂鉢（18世紀代）を被せた状態で検出された。

近代以降は、台地上については大部分が畠地として利用されたようである。今回の調査においても、時期を特定できなかった表土と同じ土壌の耕作溝を多数検出している。また、イモ穴と称される「イモ穴状土坑」もおそらくは近代以降の土地利用痕跡であろう。白倉Ｂ区を中心にして、きわめて新しい一辺２ｍ程度の方形土坑が多数検出されたが、これは「昭和20年代にリンゴの苗木を植えるために掘った穴である。」と、かつての土地所有者から話を聞くことができた。

天引地区浅間Ａ軽石の灰掻き山と直下の畠跡

Ⅲ　古墳時代後期の遺構と遺物

1　遺構と遺物の概要

(1)　はじめに

今回の調査では、多くの古墳時代後期に帰属する遺構や遺物が検出された。遺構の多くは、発掘調査時において、掘り込みを有していたために比較的容易に検出できた土地利用用の痕跡であった。それでは、今回検出できた遺構だけが当該期の土地利用痕跡であったのかというと、おそらくそうではない。

その理由の一つとして、本県北群馬郡子持村黒井峯遺跡や渋川市中筋遺跡などで明らかになった平地建物の存在があげられよう。今や日本の古墳時代を代表する集落遺跡である両遺跡は、榛名山を給源とする降下テフラによって直接被覆されていたために当時の地表面が残存しており、地面を殆ど掘りこまない平地建物の存在が明らかとなった。おそらく、当集落遺跡においても本来の地表面には平地建物が存在していたと考えるべきなのであろう。

また、当該期の遺構のいくつかは奈良時代以降の土地利用によって消滅してしまったことも想像にかたくはない。あるいは、遺構確認面を低く設定してしたために表土を重機によって掘削した際に破壊してしまった遺構も存在するかもしれない。そのような目で遺構全体図（第７図）を眺めると、よくも古墳時代後期の遺構が破壊されずに残ったと思うような場所さえ存在する。

このような、発掘調査中においてはわからない、いわば目に見えない土地利用痕跡の存在を知る手掛かりとして、どのような情報があるのだろうか。その一つに、各時期において、どれだけの遺物がどこから出土しているのかという情報があるだろう。今回の報告も、このようなことを念頭において整理作業に取り掛かったのではあるが、現実には全ての出土土器の時代を分類し集計することはできなかった。一つには、整理担当者の能力不足もあるが、縄文土器などと異なり破片の段階で世紀を特定することが困難であったことが一番の理由である。そこで、できうる最低限の情報として遺構の大部分を占める竪穴住居跡出土遺物については、観察表編の最後に住居出土遺物一覧表として示した。この表では各住居跡ごとに出土土器を縄文、弥生、古墳時代前中期、古墳時代後期、奈良、平安、中近世に分類し、他に石製品、鉄器、炭化材の出土点数を示してある。基本的に掲載してある本報告書の古墳時代後期出土遺物に関する情報は、奈良時代以降を取り扱う『Ⅴ』の報告書中住居出土遺物一覧表にも古墳時代後期出土土器点数として示してあるので参照してほしい。これらのデーターを各時代各時期ごとの分布図として示すことができればよかったのだが時間的制約から縄文時代のみを『Ⅴ』付図として提示できたに過ぎず悔やまれる。

なお、古墳時代後期半世紀ごとの遺構分布については、ここでは概略を記すにとどめ、具体的には図も含めて別項（Ⅴ―２　古墳時代の土地利用変遷）の中で触れていくことにする。また集落遺跡の様相を具体的に明らかにするための方法の一つとして、遺構間での遺物接合を行った。接合の事実は各遺構の記載にふられたいが、別項（Ⅴ―１　出土土器の遺構間接合事例について）でまとめて掲載したので併せて参照して欲しい。

また、全体図については古墳時代中・後期全体図（第７図）、竪穴住居跡のみの地区ごとの全体図（第８～11図）、土坑のみを掲載したもの（第13～15図）、粘土採掘坑群全体図（第16図）を作成した。必要に応じて利用して欲しい。

(2)　遺構について

今回の報告書で取り扱う遺構は、竪穴住居跡163軒、粘土採掘坑67基、粘土土坑20基、土坑67基、溝１条、円形周溝状遺構１基である。

当然のことではあるが遺構の主体を占めるのは竪

穴住居跡である。そこで、報告書の体裁は最初に竪穴住居跡の事実報告を行った後に、他の遺構についての記載を行うこととした。

竪穴住居跡の掲載は１：60でカマド図は必要に応じて１：30図を作成した。事実記載は本文編に記載し、住居遺構図、住居出土遺物図の順に掲載してある。遺物観察表と住居出土遺物一覧表は観察表編に、遺構及び遺物写真は写真図版編に掲載してある。

竪穴住居跡の分布傾向は、４～５世紀においては天引地区を中心としている。そして６世紀に入ると天引地区ではあまり検出されず白倉地区において多量に検出され７世紀に至る。しかしながら、時期ごとにおける検出住居跡の増減は顕著で、単純に時期ごとの竪穴住居跡数だけ比べれば、４世紀22軒、５世紀20軒、６世紀101軒、７世紀30軒となる。この数値が直接当時の村落人口に結び付くとは考えられないが、６世紀における竪穴住居跡数の増加傾向は上信越自動車道の周辺遺跡（例えば吉井町矢田遺跡や同町多比良追部野遺跡）でも見受けられる傾向である。

他の遺構として当遺跡を特徴付けるのは粘土採掘坑と粘土土坑である。天引地区の南東部分でまとまってみつかり、６世紀前半を中心とした時期に限定されている。

また、白倉Ｂ区北西部分では水場が見つかっている。ここは、奈良時代以降に池状遺構として円形の石垣が積まれることから、古墳時代分も含めて『Ⅴ』の報告書に掲載した。

(3)　遺物について

今回の報告においては、前述した理由により遺構外出土遺物及び他時期遺構内の古墳時代後期に帰属する遺物について積極的に資料化できなかった。遺構内出土遺物については、全ての遺物について調査時に出土位置を記録できればよかったのであるが、残念ながら任意で取り上げてしまっているものも多い。そこで、遺物観察表編中において住居出土土器一覧表中に、出土位置を記録した遺物（いわゆる点を取った遺物）と一括して取り上げた遺物の点数を遺物種類別に記載しておいた。また、出土位置を記録したものについては、図化にかかわりなく遺構の平面図及び断面図にドットとして落とした。不十分な記載方法とは思うが、ご寛容戴きたい。

さて、出土遺物の年代観であるが、在地土師器については、当事業団職員の中沢哲、桜岡正信、神谷佳明の各氏に、須恵器については坂口一氏によるところが大きいが、最終的な責任は編集担当にある。

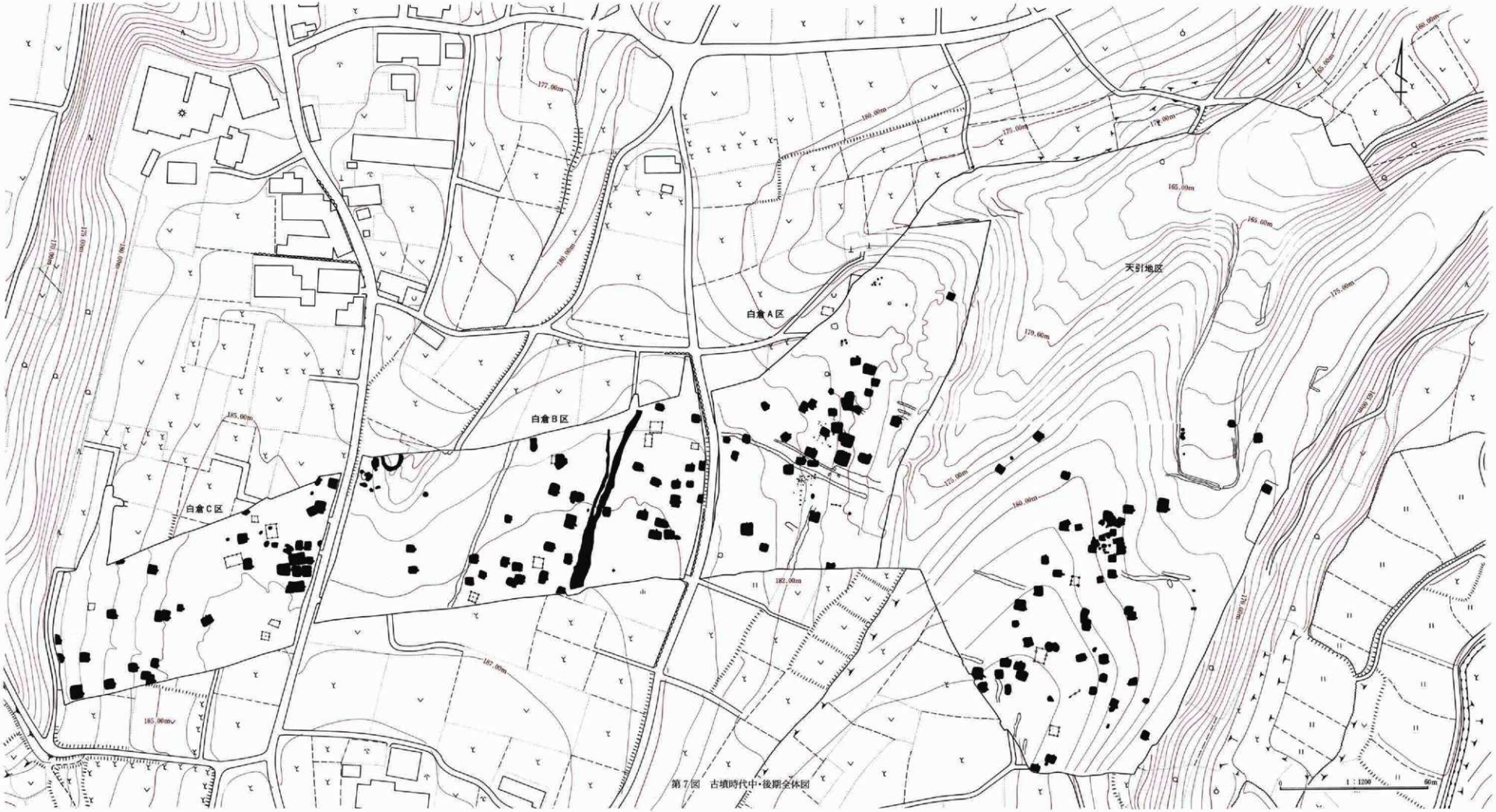
遺物掲載スケールは１／４を基本としたが、白倉Ｃ区においては坏類などの小形生活什器を１／３で表現している。また、遺物の種類によって倍率を変えている。

本報告書に掲載した土器群は５世紀後半～７世紀まで連続しており、甘楽地方の編年研究を進展させるであろう資料である。それだけでなく今回の出土遺物は希少性のあるものも含め様々な研究素材を提供してくれる。それらの多くは取り上げかたの濃淡はあるが成果と問題点で取り扱っているのでぜひとも参照してほしい。具体的には、出土土器の遺構間接合、住居内廃棄のカマド構築材、土師器製作手法、木の葉形坏、白玉製作工程、粘土採掘坑出土曲物、土鈴、手鏡形土製品、魚形土製品、佐波理などで、今後様々な場面で取り上げられるであろうことを確信している。

2　竪穴住居跡

本報告書で取り扱った竪穴住居跡は163軒である。

編集の関係で、一つの住居から得られる、事実記載、遺構図、出土遺物実測図、出土遺物観察表の各データーを別個に掲載している。そこで、各住居跡番号ごとに、各データーが検索できるように竪穴住居跡観察表（表２）を作成し次頁以降に掲載した。この表に合わせて時代、焼失住居の可能性、面積も示してあるので利用して欲しい。また、半世紀ごとの様相については成果と問題点の中で触れる予定だが、そこには半世紀ごとの時期別一覧表（表16　163頁）と時期別面積一覧表（表17　164頁）、時期別カマド位置一覧表（表18　164頁）があるので合わせて参



第7図　古墳時代中・後期全体図

照してほしい。

さて、以下に個別住居跡の報告にあたって留意したことについて述べておきたい。なお、個別住居跡の記載や各キャプションについては、繁雑さを避けるために「白倉A区21号住居」のように記載する。

事実記載は項目をたてて順次記載していった。その項目は、位置、遺構及び遺物の図と写真、形状、面積、主軸方位、壁と床面、覆土、カマド、貯蔵穴、柱穴、壁周溝、遺物出土状態、床下の状態、重複、時代である。必要に応じてこの他に、調査に至る経過を追加し、また、他の項目で触れた内容や、検出されていない住居内施設については項目を除いて記載している。

位置については、その住居跡が検出されたグリッドの中で一つを代表させて用いた。

主軸方位はカマドをもつ壁面を上にした際の主軸方位である。

カマドの計測値は袖先端部幅の焚口幅と、袖石が残っている場合にのみ焚口高を記載した。

貯蔵穴については、この名称が相応しいかは議論のあるところだとは思うが、「いわゆる貯蔵穴」として理解して戴きたい。

遺物出土状態では極力出土状態の事実を記載するように心掛けたつもりであるが不十分な点も多い。白倉C区では、出土状態にタイプA、Ba、B、Cの名称を用いて説明している。これは東京都八王子市宇津木台遺跡群Ⅳの報文中(土井、塩野崎1984)に用いられた手法であり、詳しくはそちらを参照してほしいが簡単に抜粋すると

「タイプA　住居廃絶時にそのまま残されたと認められるもの

タイプB　住居廃絶直後から、あまり時間的隔たりを持たずに廃棄されたと認められれるもの

タイプC　住居廃絶後、かなりの時間的隔たりを持って廃棄されたと認められるもの」となりタイプBaについては、タイプBのうち「床面付近に比較的安定した出土状態を示すものは、住居が廃絶された直後に廃棄されたもの」を示している。白倉C区から住居事実記載を書き始めた関係でこの記載方法を採用したが、少なくとも点を取る調査手法が当遺跡の場合徹底しておらず、この分類基準そのものが適応できないと考えて他地区では採用しなかった。

遺構内及び遺構間の接合事例は、整理作業の過程で確認できたもの全てを、住居平面図及び断面図に掲載した。また、時間の関係から図化できなかったものの接合関係が確認できた遺物については、接合資料としてアルファベットの小文字を付けて住居平面図に掲載し、器種と部位についてこの項目で補うことにした。床下の状態は、床下土坑の有無などについて記載している。本遺跡の調査では白倉B区の一部と白倉A区、天引地区において床下の調査を行う際、最初にジョレンで床面を数cm除去し、床面下に隠れている情報の採集を行った。そこでは、今まで床面まで調査した住居以前の居住痕跡（建て替え前の住居とか拡張前の住居と呼ばれることが多い）が床下土坑やカマド痕跡とともに現れた。そこで得た所見などをここでは記載している。床下土坑はアルファベット大文字で示し遺構平面図には破線で掘り方ラインも含めて表現している。

重複では遺構の先後関係を認定根拠も含め記載するように心掛けた。時代では、住居の時期を記載するようにした。住居の時期といった場合、住居の構築、存続、廃絶、さらに埋没時といったように、いくつかのステージが存在している。今回の報告では、住居に遺棄された土器もしくは廃絶後の一番新しい段階に認定される土器から想定される時期を記載するようにした。

住居内出土炭化材は通番で表し、遺構図にゴシック体で示し、樹種については表7（124～126頁）に記載してあるので参照して欲しい。

以上、竪穴住居跡の概要に触れることができなかったたが、概要も含め成果と問題点の「古墳時代の土地利用変遷」を参照して欲しい。

表２　竪穴住居跡一覧表

白倉下原Ａ

住居番号	時　　代	遺構図	遺構ＰＬ	遺物図	遺物ＰＬ	遺物観察表	遺物一覧表	焼	面積(m²)
1	６世紀前半	1	8	163	80, 145	1	160	○	38.2
2	５世紀前半	2	8	163, 164	80	1～3	160		27.1
3	７世紀前半	3	8, 9	164～166	81	3.4	160		22.3
4	６世紀前半	4	9	166	82, 145	4.5	160		*
5	６世紀前半	2	9	166	145	5, 6	160		26.0
7	６世紀後半	6	10	167	82, 145	6～8	160	○	14.9
8	６世紀前半	5	10, 11	168	82, 83, 145	8～10	161		(44.3)
10	７世紀後半	7	11	169	83	10, 11	161		(16.9)
14	６世紀後半	8	11, 12	169～171	84	12, 13	161		28.0
15	古墳時代後期	6	12	172	85	14	161	○	*
19	７世紀後半	7	12, 13	172	85, 145	14	161		12.6
20	６世紀後半	9	13	172	85	14, 15	161	○	*
22	７世紀前半	9	13	173	85	15, 16	162		8.9
23	６世紀後半	10	13, 14	174	86, 145, 150, 151	16, 17	162	○	23.9
24	７世紀前半	11	14	174	*	17	162		5.6
25	６世紀後半	11	14, 15	174, 175	86	17, 18	162		15.2
26	６世紀前半	12, 13	15, 16	176, 177	87, 146	19, 20	162		(26.9)
27	６世紀後半	14	16～18	177, 178	87, 88, 146	20～22	162	○	*
28	７世紀後半	15, 16	16～18	178～180	88, 146	22～24	163		22.3
29	古墳時代後期	11	16, 17	180	88	24	163		*
30	６世紀前半	17	18	181	88, 146	24, 25	163		23.7
31	６世紀前半	18, 19	18, 19	181～183	89, 145, 151, 152	26～28	163		19.2
33	６世紀後半	20, 21	19, 20	184, 185	90, 146	29, 30	163	○	27.1
34	６世紀前半	22, 23	20, 21	186, 187	91	30, 31	163	○	(35.4)
35	不　　明	16	20, 21	187	146	32	164		18.0
36	６世紀前半	24	20, 21	187	91	33	164		(26.1)
41	５世紀後半か	25	18	188	*	33	164		*
42	５世紀前半	26	21	188	92	33, 34	164		*
44	６世紀前半	27	22	189	92	34	164		*
45	５世紀前半	25	22	189	92	34, 35	164		*
47	６世紀前半	28	22	190	92	35	165		*
48	不　　明	14	*	*	*	*	*		*
53	６世紀後半	29	23	190	93, 146	35, 36	165		23.3
54	６世紀後半	30	23	191	93	36	165		*
55	不　　明	30	*	*	*	*	165		*
57	６世紀後半	30	23	191	93	37	165		*
58	７世紀前半	31	23	191	93, 147	37, 38	165	○	22.8
59	不　　明	31	23	*	*	*	*		*
61	不　　明	31	24	192	93	39	166		*
64	不　　明	32	24	*	*	*	166		(5.2)
65	７世紀後半	34	24	192	93, 147	39, 40	166	○	*
66	６世紀後半	32	25	193	94	41	166	○	21.0
67	６世紀前半	35	25	193	94, 145	41, 42	166		(44.8)
72	６世紀後半か	33	25	194	*	42	166		*
73	５世紀後半	36	25	194	94	42, 43	167		*
74	不　　明	33	26	194	*	43	167		*
76	６世紀後半	37	26	194	94, 147	43, 44	167	○	*
77	６世紀後半か	37	26	194	94	44	167	○	*
80	５Ｃ後～６Ｃ前	38	26	194	*	44	167		*
81	６世紀前半	38	26	195	*	45	167	○	*
82	６世紀前半	39	26	195	94	45	168		(19.4)
83	不　　明	39	26	*	*	*	*		*
84	不　　明	39	27	*	*	*	*		*
85	６世紀前半	40～42	27	195～198	94, 95	45～47	168	○	17.8
86	６世紀前半	43	27	198	95, 147	48	168	○	9.9
87	古墳時代後期	44	28	*	*	*	168	○	*
88	古墳後期か	44	28	*	*	*	168		*
91	古墳後期か	44	28	*	*	*	*		*
92	７世紀前半	43	28	198	*	48	168		*

住居番号	時　　代	遺構図	遺構ＰＬ	遺物図	遺物ＰＬ	遺物観察表	遺物一覧表	焼	面積(㎡)
93	6世紀前半	45	28	198	95	49	169		16.9
94	6世紀前半	46,47	28,29	199	96	49	169	○	*
95	不　明	43	29	200	96,147	50	169		*
99	6世紀前半	47,48	29	200,201	96,97,147	50~53	169		(25.0)
101	7世紀後半	49	29,30	201	97,148	54	169		25.7
103	6世紀後半	50	30,31	202	97	55	169	○	28.2
104	6世紀後半	51	31	202	97,148	55,56	170		17.7
105	6世紀前半	52	31	203	98,148	57	170	○	*
106	6世紀前半	53	31,32	203	98,148	58	170		*
107	6世紀前半	54	32	204	98	59	170	○	*
109	古墳時代後期	54	32	204	148	59	170	○	(14.4)
112	6世紀前半	55	33	204	98	59	170		12.8
113	古墳時代後期	56	33	204	98	60	171	○	*
114	6世紀後半	56	33	204	98	60	171		*
115	5世紀前半	56	34	204	*	60	171		*
116	5世紀後半	58	34	204	98	60	171		(12.9)
117	6世紀前半	57,58	34	205	98,148,152	61,62	171	○	*

白倉下原Ｂ区

住居番号	時　　代	遺構図	遺構ＰＬ	遺物図	遺物ＰＬ	遺物観察表	遺物一覧表	焼	面積(㎡)
3	6世紀前半	59,60	35	206,207	99	62~64	171	○	34.0
10	6世紀前半	61~62	36	208,209	99,100,148	64~66	171		57.7
12	6世紀前半	64,65	37	209,210	100,101,V-149	67,68	172		(28.8)
16	6世紀前半	65,66	37	211,212	101,102	68~70	172	○	*
17	6世紀後半	67,68	38	212	102	70	172	○	(46.2)
20	7世紀前半	69~70	38	213	102,103	71,72	172	○	(29.3)
21	6世紀後半	70,71	39	214,215	103,104	72,73	172		(18.7)
22	6世紀前半	72	39	214,215	103,104	72,73	172	○	8.9
23	7世紀前半	73,74	39,40	215,216	104	74	173		27.7
24	6世紀後半	75	40	217	105	75	173	○	*
28	6世紀後半	75,76	40,41	218	105	75,76	173	○	(14.6)
29	6世紀前半	77,78	41,42	219	105	76~78	173		(38.0)
30	6世紀後半	79	42	220	106	79	173	○	(26.3)
33	6世紀後半	80	42	220,221	106	79,80	173		*
34	6世紀前半	81	43	221,222	106,107	80,81	174		*
35	6世紀前半	82	43	222,223	107	81,82	174		*
37	6世紀前半	83	44	223,224	107	82,83	174		*
38	7世紀後半	84	44	224	*	83	174		6.9
45	6世紀前半	85,86	44,45	225	107	83,84	174		38.0
47	6世紀前半	87,88	45,46	226	107	84,85	174	○	20.7
50	6世紀後半b	84	46	227	149	85	175		(13.2)
51	6世紀後半	88	46	227	108,149	85,86	175		14.9
52	6世紀前半	89,90	46,47	227~230	108,109,149	86~88	175	○	(20.0)
54	6世紀前半	91~93	48	230,231	109,149,153,154	88~91	175	○	52.3
55	6世紀後半	94	49	232,233	110	91,92	175		22.3
56	6世紀後半	95	49	233	110	92	175		11.2
58	6世紀前半	96	50	234,235	111,149	92~94	176		(37.4)
59	古墳後期b	96	*	*	*	*	*		*
61	7世紀後半	97	51	235,236	111,112,149	94~96	176		14.5
62	7世紀後半	98	51	236,237	112,149	96,97	176		(26.3)
65	6世紀後半	99	51,52	237,238	112	97,98	176	○	23.1
69	6世紀後半	100	52	238	113	98	176		24.2
70	6世紀後半	98	52,53	239	113,114	99,100	176		*
72	7世紀後半	101	53	220,221	106	79,80	176		(11.6)
73	6世紀前半	102	53	239	114	100	177	○	*
75	5世紀後半	103~105	54,55	239~246	114~116,149	100~105	177		*
78	6世紀前半	106	55,56	246~248	117,154	105~107	177	○	*
82	6世紀後半	107	56	248	118	107,108	177		14.6
84	7世紀後半	108	56,57	249,250	118,149	108~110	177		21.2
85	7世紀後半,A	109,110	57,58	250	118,149	110,111	177		A.27.0
94	6世紀後半	111	58	251	118	111	177		*

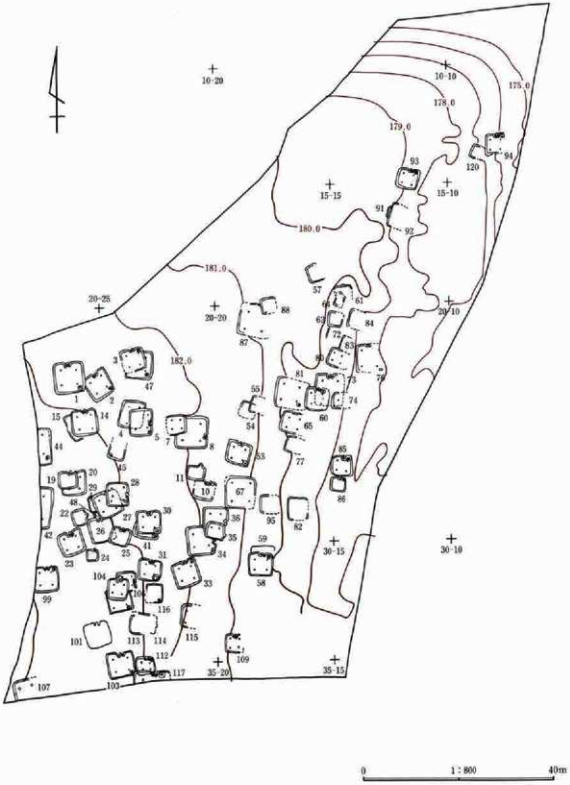
白倉下原C

住居番号	時　　代	遺構図	遺構PL	遺物図	遺物PL	遺物観察表	遺物一覧表	焼	面積(㎡)
2	6世紀後半	112	59,64	252	119	112	178		16.7
3	7世紀前半	113	59	253,254	119	112,113	178		24.2
4	6世紀後半	114,115	59,60	254～256	120,121	113,114	178		23.6
5	6世紀前半	116	60	257,258	121,122	114,115	178		＊
6	6世紀後半	117	61	258,259	122	115,116	178		(22.0)
11	6世紀後半	118,119	60,61	259,260	122,123	116	178		28.2
12	6世紀後半	120	61,62	261,262	123	117	178		＊
13	6世紀後半	121,122	62	262,263	124	118	178		29.9
15(A)	7世紀前半	123	62	264	124	118,119	178		26.7
15(B)	7世紀前半	124	62	264	124	118,119	178		23.0
16	6世紀後半	119	63	264	125	119	178		(26.1)
17	6世紀前半	125	63,64	265,266	125	119,120	178		＊
18	7世紀前半	126～128	64	267～270	126,127	120～122	178		26.2
19	7世紀前半	129	64,65	270～272	127,128	122,123	178		22.4
21	6世紀後半	122	65	272,273	128,129	123,124	178		＊
25	7世紀前半	130	65	273,274	129	124,125	178		26.2
28	7世紀前半	131	＊	274	130	125	178		(18.2)
33	6世紀前半	132～134	61,65,66	274～277	130,131	125～127	178	○	(29.1)
36	6世紀後半	135	66	277～281	131～133	127～129	179		9.0
37	6世紀前半	131	66	281	133	129	179		(13.1)
38	6世紀後半	136,137	65～67	282,283	133,134	129,130	179		28.8
42	6世紀後半	138	67	284	134	131	179		22.0
48	6世紀後半	139	67,68	285,286	135	131,132	179	○	10.9
49	6世紀後半	140,141	68	286～288	136	132	179		28.8
50	6世紀後半	142,143	69	288～291	137,138	133,134	179		25.1
52(A)	6世紀後半	144,145	69	291	139	135	179		15.5
52(B)	6世紀後半か	144	69	291	139	135	179		10.8
58	6世紀後半	133	＊	291	139	135	179	○	＊
60	6世紀前半	146,147	69,70	292,293	139	135,136	179		＊
61	7世紀前半	141	70	294	140	136,137	179		10.4
62	6世紀後半	148,149	70,71	294～296	140	137,138	179		(27.8)
65	6世紀後半	145	70,71	296	140	138	179		9.9
74	不　　明	150	71	297	140	138	179		＊
79	7世紀後半	151	71	297	140	138	179		＊
88	5世紀後半	150	71	297	140	138	179		＊

天引向原地区

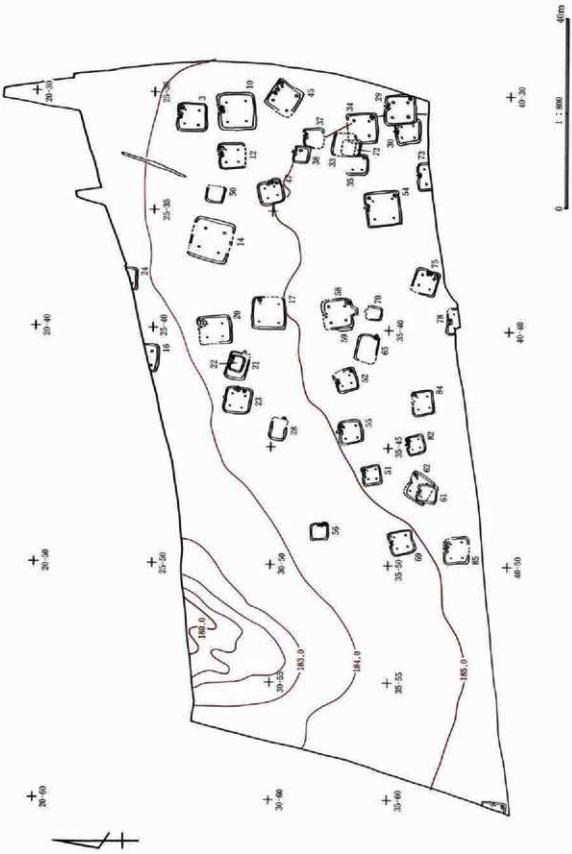
住居番号	時　　代	遺構図	遺構PL	遺物図	遺物PL	遺物観察表	遺物一覧表	焼	面積(㎡)
7	6世紀後半	152	72	298	＊	138,139	180		＊
44	7世紀後半	153	72	298	141	139	180		15.8
50	7世紀前半	154	72,73	298	141	139	180	○	10.9
52	5世紀後半	152	73	298,299	141	139,140	180	○	5.8
57	5世紀後半	155,156	74,75	299,300	141,142,150	140～142	180	○	13.7
71	5世紀後半	157	75	301	142	142,143	180		＊
73	6世紀後半	158,159	75,76	302	142,143,150	143,144	180		33.3
87	7世紀前半	157	76	303	143,150	144,145	181		9.8
115	6世紀後半	160	77	303	143	145,146	181		16.7
124	7世紀前半	161	77,78	304	144,150	146～148	181	○	(31.2)
141	7世紀前半	162	78,79	304,305	144	148	181	○	＊
148	不　　明	161	79	＊	＊	＊	181		＊
149	6世紀前半	159	79	305	144	148,149	181		＊

「焼」…焼失住居及びその可能性のあるものを○で表記。「＊」…該当数値がないことを表す。「Ⅴ」…「白倉下原・天引向原遺跡」Ⅴに掲載。

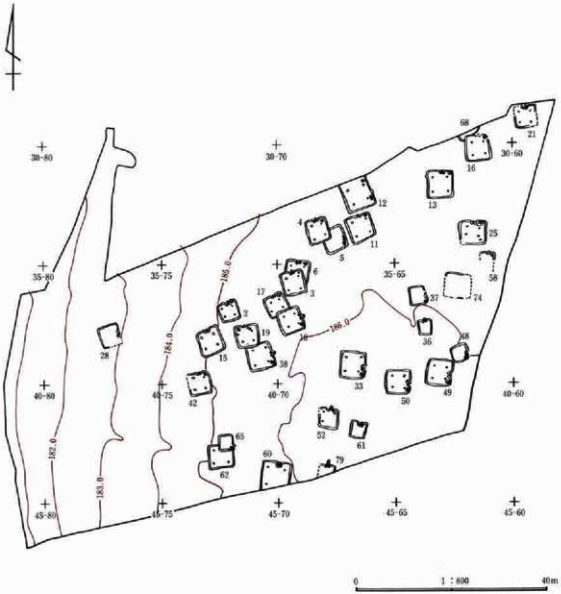


0　1:800　40m

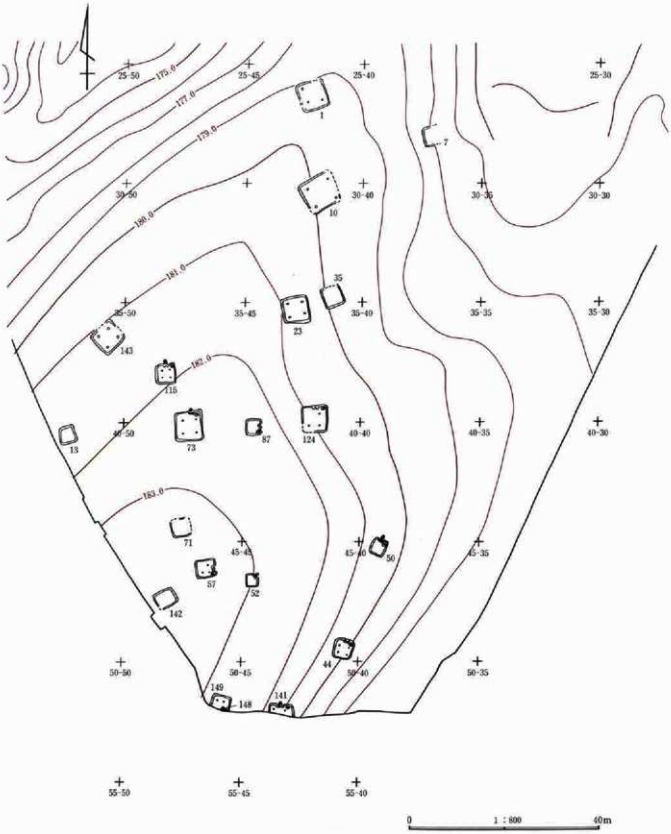
第8図　白倉A区古墳時代中・後期住居全体図



第９図　白倉Ⅱ区古墳時代中・後期住居全体図



第10図　白倉C区古墳時代中・後期住居全体図



第11図　天引地区古墳時代中・後期住居全体図

白倉A区1号住居

位　置　23—26他

遺　構　図1　PL8　　**遺　物**　図163　PL80

面　積　38.2㎡　　**主軸方位**　N—10°—E

形　状　短辺5.9～長辺6.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は34～40cmで南壁が焼けている。床面は最大5cmの比高がある。

覆　土　第一次埋没土はローム質の土壌である。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は48cm、焚口高は21cmで袖石・天井石・支脚はいずれも結晶片岩からなる。左袖石にのっていた天井石が、ずり落ちている。

貯蔵穴　上面方形を呈す。周囲を厚さ2cm程度の周提帯で方形に囲む。規模（長軸×短軸×深さ）は、97×67×70cmである。旧貯蔵穴は上面楕円形を呈す。規模は、95×55×70cmである。

柱　穴　7本検出された。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1:31×28cm、P2:34×28cm、P3:47×35cm、P4:45×38cm、P5:26×20cm、P6:60×47cm、P7:44×35cm。P5・P6・P7は旧住居に伴う。P3は旧住居と重複する。P2・P3は根巻き(粘土・ローム)が確認できた。

壁周溝　検出されたが平面図には記載がなかった。

遺物出土状態　1の長胴甕が廃絶時に近い土器と思われる。覆土一括の土器片と接合しているのは、1・3・4・eである。接合資料aは、A土坑と接合している。接合資料a・b・cは、すべて土師器の甑の破片である。(遺物観察表：1頁　出土遺物一覧表：160頁)

床下の状態　北壁の東側及び東壁に沿うように内側で旧住居の痕跡（平面図中破線）が確認されている。床下土坑が4基検出された。A・B土坑は旧住居に、C・D土坑は新住居に伴う。B土坑は、旧住居のカマドと考えられる。C・D土坑には、粘土とロームブロックが混入している。規模（径×深さ）は、A土坑：159～150×22cm、B土坑：50～41×—cm、C土坑：70～66×8cm、D土坑：77～62×19cm。

重　複　2号住居（5世紀後半）と重なる。遺構調査時では、先後関係は不明である。遺物からも不明であったが、出土土器から2号住居→1号住居の流れが想定できる。

時　代　6世紀前半

白倉A区2号住居

位　置　23—25他

遺　構　図2　PL8

遺　物　図163・164　PL80

面　積　27.1㎡　　**主軸方位**　N—30°—W

形　状　短辺4.7～長辺5.2mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は10～15cm。床面は最大7cmの比高がある。

覆　土　自然堆積

カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。　構造材はローム質土壌である。

貯蔵穴　楕円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、87×72×74cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1:23×26cm、P2:23×46cm、P3:27×63cm、P4:28×62cm。

遺物出土状態　残存状態のよい土器が多く出土した。壁高も低かったことから、いずれも廃絶時に近い遺物であろう。接合資料aは、土師器の甕の破片である。(遺物観察表：1・2・3頁　出土遺物一覧表：160頁)

重　複　1号住居（6世紀前半）と重複する。出土土器から2号住居→1号の先後関係が想定される。

時　代　5世紀前半

白倉A区3号住居

位　置　22—24他

遺　物　図3　PL8・9

遺　構　図164～166　PL81

面　積　22.3㎡　　主軸方位N—18°—W

形　状　短辺4.5～長辺4.6mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は40～70cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　東壁のほぼ中央で検出された。天井石は、袖石の前方より少し離れて検出されている。焚口幅は81cm、焚口高48cmで袖石・天井石は結晶片岩から

なる。構造材は粘土質土壌である。長胴甕（1と2）が懸けられていたと思われ、カマド周囲には遺棄されたと思われる土器が多数出土している。

貯蔵穴　楕円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、64×48×62cmである。

柱　穴　4本検出された。規模（径×深さ）、P1:21×5cm、P2:19×48cm、P3:20×54cm、P4:16×39cm。

壁周溝　掘り方の調査時に確認された。

遺物出土状態　カマドの項でも述べたように、この周りの土器群は遺棄された可能性が強い。長胴甕（2）の上に置かれた小型甕（9）や小型甕（6）の上に置かれた小型の甑などは、生活時の状況を示してると考えられる。4は4号住居・40号住居と、11・20は40号住居と、24は47号住居と住居間で接合した。接合資料aは土師器の甑、b・cは土師器の甕でいずれも破片である。（遺物観察表：3・4頁　出土遺物一覧表：160頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：205～132×52cm。

重　複　47号住居（6世紀前半）→3号住居→40号住居（9世紀前半）　47号住居のカマドを3号住居が破壊する。

時　代　7世紀前半

白倉A区4号住居

位　置　24—24他

遺　構　図4　PL9　**遺　物**　図166　PL82

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—107°—E

形　状　短辺4.7～5.2mの隅丸方形を呈する。

カマド　5号住居に破壊されるが、恐らく東カマドであろう。

貯蔵穴　隅丸方形を呈する。5号住居の掘り方調査の際に検出された。規模（長軸×短軸×深さ）は、75×60×〈80〉cmである。

柱　穴　3本検出された。規模（径×深さ）は、P1：30×68cm、P2：22×22cm、P3：30×68cm。

遺物出土状態　実測した1～5の土器はいずれも残存状態がよく遺棄されたものであろう。また、北壁に沿ってこも編石が出土している。（遺物観察表：4・5頁　出土遺物一覧表：160頁）

重　複　4号住居→5号住居（6世紀前半）先後関係は土層断面から。両住居の出土土器はいずれも6世紀前半である。

時　代　6世紀前半

白倉A区5号住居

位　置　25—23他

遺　構　図2　PL9　**遺　物**　図166　PL—

面　積　26.0m²　　**主軸方位**　N—94°—E

形　状　短辺4.5～長辺5.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は20～40cm。床面は最大8cmの比高がある。

覆　土　自然堆積

カマド　東壁の中央で検出された。構造材はロームブロックである。

貯蔵穴　楕円形を呈す。貯蔵穴を中心に南東隅では5～10cm程度掘り下げている。規模（長軸×短軸×深さ）は、63×55×74cmである。

柱　穴　9本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：32×114cm、P2：28×59cm、P3：22×21cm、P4：43×77cm、P5：50×56cm、P6：37×28cm、P7：28×27cm、P8：25×22cm、P9：43×51cm。P5～P9は掘り方調査の際検出された。

遺物出土状態　図化した2点の土器はいずれも土器片である。また、北東隅でこも編石がまとまって出土している。（遺物観察表：5・6頁　出土遺物一覧表：160頁）

床下の状態　床下土坑が5基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：78～68×67cm、B土坑：76～67×9cm、C土坑：111～100×4cm、D土坑：130～110×29cm、E土坑：64～79×40cm。

重　複　4号住居（6世紀前半）→5号住居（古墳時代後期）　先後関係は土層断面からで、両住居ともに6世紀前半。

時　代　6世紀前半

白倉A区7号住居

位　置　25—20他

遺　構　図6　PL10　**遺　物**　図167　PL82

面　積　14.9㎡　　**主軸方位**　N—1°—E

形　状　短辺3.4～長辺3.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は25～30cm。床面は最大9cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東よりで検出された。天井石が、ほぼ中央で割れて下に落ちている。天井石下から坏(7)が出土した。焚口幅は50cm、焚口高は25cmで、袖石・天井石は砂岩、支脚は結晶片岩からなる。

貯蔵穴　不定形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、58×53×70cmである。幅20cm・厚さ3cm程度の周提帯がめぐる。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1:24×27cm、P2:23×37cm、P3:34×25cm、p4:22×50cm。

遺物出土状態　貯蔵穴周辺の床面直上でまとまった遺物が検出されている。南壁周囲には遺物が、9の坏などのように投棄されたような状態で検出されている。また、中央やや南東寄りで、こも編石がまとまって出土している。(遺物観察表：6・7・8頁　出土遺物一覧表：160頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出された。A土坑の底面には粘土が貼られている。A土坑をC土坑が切る。規模(径×深さ)は、A土坑：120～119×20cm、B土坑：74～68×17cm、C土坑：113～88×28cm。

重　複　8号住居（6世紀前半）→7号住居→6号住居（9世紀後半）・8号住居と7号住居の先後関係は調査時の所見で、出土土器からも追認できる。

備　考　調査所見で焼失住居との記載があった。

時　代　6世紀後半

白倉A区8号住居

位　置　25—21他

遺　構　図5　PL11・12

遺　物　図168　PL82・83

面　積　(44.3㎡)　　**主軸方位**　N—92°—E

形　状　短辺6.3～長辺6.4mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は14～42cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から南側で検出された。焚口幅は44cm、焚口高は20cmで袖石・天井石は結晶片岩からなる。構造材は粘土である。なお、北壁のほぼ中心部で大型礫が検出され、対応する床が焼土化していることから北側にカマドがあった可能性がある。

貯蔵穴　円形を呈す。南東隅は貯蔵穴を中心に最大10cm程度の深さで、方形に掘り窪められている。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：38×93cm、P2：36×79cm、P3：44×80cm、P4：42×76cm。P1～P3は重複の可能性が強い。

壁周溝　部分的に検出されている。

遺物出土状態　2の小型甕や7の坏などは遺棄されたものであろう。接合資料aはt土師器の甑で各部の破片、bはt土師器の坏の破片である。(遺物観察表：8・9・10頁　出土遺物一覧表：161頁)

床下の状態　床下土坑が5基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:97～90×14cm、B土坑:134～55×12cm、C土坑:140～〈100〉×6cm、D土坑:92～〈85〉×10cm、E土坑:102～90×6cm。

重　複　8号住居（6世紀前半）→7号住居（6世紀後半）　出土土器型式より。

時　代　6世紀前半

白倉A区10号住居

位　置　28—21他

遺　構　図7　PL11　**遺　物**　図169　PL83

面　積　(16.9)㎡　　**主軸方位**　N—14°—E

形　状　短辺3.8～長辺4.4mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は30～56cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東側で検出された。構造材はロームブロックを主体とする。

柱　穴　1本検出された。規模(径×深さ)は、P1：45×14cm。P1は出入口施設に伴う可能性がある。

壁周溝　各壁で検出された。東壁を中心に10cm程度の小穴が多く検出された。

遺物出土状態　1の甕はカマドに懸けられていたものであろう。2の坏とこの甕は遺棄されたものと思われる。5の臼玉は1の甕の中から出土している。接合資料aは土師器の甕の胴下部～底部の残存である。また、6～11の甕の破片はいずれも接合痕の刻みを有する土器である。(遺物観察表：10・11頁　出土遺物一覧表：161頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。A土坑は貯蔵穴の可能性がある。規模（径×深さ）は、A土坑：60～58×30cm、B土坑：45～37×7cm。

重　複　10号住居→11・12号住居（奈良時代）→1号溝（道）

時　代　7世紀後半

白倉A区11号住居

位　置　27－21他

遺　構　図4　PL11　**遺　物**　図169　PL83

面　積　10.5m²　**主軸方位**　N－12°－E

形　状　短辺2.4～長辺3.7mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は20～40cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央より東側で検出された。構造材は煙道が燃焼部より傾斜を持たずに壁を放り込んで作られている。掘り方調査の際に調査時の位置から僅かに東側に寄った部分で旧カマドの痕跡。

壁周溝　一部検出された。西壁沿いに小穴が検出されている。

遺物出土状態　5の刀子はカマド一括として取り上げた遺物である。完形に近い土器はないが、1の丸甕破片は廃絶時に近い遺物である。(遺物観察表：11頁　出土遺物一覧表：V－125頁)

床下の状態　床下土坑が4基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：100～〈90〉×13cm、B土坑：85～〈62〉×99cm、C土坑：110～95×5cm、D土坑：210～100×12cm。

重　複　10号住居（7世紀後半）→11号住居　先後関係は出土土器の年代から。

備　考　手違いで本報告書に掲載したが、本来は『V』の報告書分である。

時　代　8世紀前半

白倉A区14号住居

位　置　25－26他

遺　構　図8　PL11・12

遺　物　図169～171　PL84

面　積　28.0m²　**主軸方位**　N－8°－W

形　状　短辺4.8～長辺5.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は30～37cm。床面は最大14cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。両袖石と天井石が鳥居状に組まれて検出された。また、支脚の上に甕(2)が置かれた状態で出土している。焚口幅は35cm、焚口高は18cmで袖石・支脚は結晶片岩、天井石は砂岩からなる。構造材はローム及び粘土である。

貯蔵穴　楕円形を呈す規模（長軸×短軸×深さ）は、42×35×49cmである。貯蔵穴周囲は他の床面より3～10cm程度掘り窪められている。

柱　穴　4本検出している。規模(径×深さ)は、P1：27×23cm、P2：26×22cm、P3：29×29cm、P4：32×22cm。

遺物出土状態　平面図中でカマド及び貯蔵穴周囲の遺物を絵で表現したものは、恐らく住居に帰属するタイプAであろう。なお、カマド右袖付け根部分では、長胴の甕の上に小型の甑が置かれた状態で出土しているが残念ながら脆く図化できなかった。15・18・21の3枚と9・12の2枚はいずれも坏で上からこの順で重なって出土した。3の甕は置き台として再利用されたものであろう。接合資料a・b・cは土師器の甕の破片でもは土師器の甑の破片である。(遺物観察表：12・13頁　出土遺物一覧表：161頁)

床下の状態　床下土坑が2基出土した。規模（径×深さ)は、A土坑：152～30×18cm、B土坑：90～70×80cm。

重　複　14号住居→13号住居(9世紀後半)→1号溝(中世以降)　15号住居(古墳時代後期)と重複し、土層断面からは14号住居の方が新しかった。しかしな

がら、15号住居出土土器(15号住居1)は7世紀前半で、切り合い関係と出土土器に矛盾が生じている。
時　代　6世紀後半

白倉A区15号住居

位　置　25—26他
遺　構　図6　PL12　**遺　物**　図172　PL85
面　積　—m²　　**主軸方位**　N—8°—W
形　状　短辺〈2.4〉～長辺5.6mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面**　残存壁高は22～24cm。床面は3cmの比高がある。
カマド　検出されていない。
遺物出土状態　床面直上で完形の小型甕(1)が出土している。炭化した軸を有する石製紡錘車が出土している。軸については炭化材分析Ⅳ—1(試料№476)によれば、クマシデ属クマシデ節とのことである。(遺物観察表：14頁　出土遺物一覧表：161頁)
重　複　15号住居→13号住居(9世紀後半)→1号溝(中世以降)　尚、14号住居(6世紀後半)と重複するが出土土器の先後関係と切り合い関係が矛盾する。詳しくは14号住居の記載を参照してほしい。
備　考　焼失住居の可能性がある。
時　代　古墳時代後期だが細別時期は不明。

白倉A区19号住居

位　置　27—26他
遺　構　図7　PL12・13　**遺　物**　図172　PL85
面　積　12.6m²　　**主軸方位**　N—2°—W
形　状　短辺3.0～長辺3.6mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面　残存壁高は35～40cm。床面は最大8cmの比高がある。
カマド　北壁の中央から東側で検出された。構造材は粘土質土壌である。燃焼部を18号住居に破壊される。
遺物出土状態　2の坏が廃絶時に近い遺物であろう。接合資料aは土師器の甕の破片である。
床下の状態　床下土坑が2基検出された。A土坑：73～59×13cm、B土坑：67～49×18cm。(遺物観察表：14頁　出土遺物一覧表：161頁)
重　複　20号住居(6世紀後半)・土層断面より→19号住居→18号住居(8世紀後半)・19号住居のカマドを破壊する。
時　代　7世紀後半

白倉A区20号住居

位　置　27—26他
遺　構　図9　PL13　**遺　物**　図172　PL85
面　積　—m²　　**主軸方位**　N—3°—W
形　状　短辺4.6～長辺4.7mの隅丸方形を呈する。
壁と床面　残存壁高は27～28cm。床面は最大8cmの比高がある。東壁の北側に寄った位置で、床面が少し掘り窪められている。
カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。構造材はロームブロックを主体とする。上面を2号土坑に破壊される。
貯蔵穴　上面隅丸長方形を呈す。北東隅を少し掘り窪め、貯蔵穴もテラス状の段を有する。規模(長軸×短軸×深さ)は、78×69×85cmである。
柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：35×56cm、P2：35×45cm、P3：40×〈25〉cm、P4：29×〈59〉cm。P3及びP4は掘り方調査の際に検出された。
遺物出土状態　8の須恵器坏は廃絶時に極めて近い遺物である。この坏の出土状態から、貯蔵穴が生活時に開口していなかった可能性もある。
床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：123～110×28cm。(遺物観察表：14・15頁　出土遺物一覧表：161頁)
重　複　20号住居・土層の切り合いより→19号住居(7世紀後半)→18号住居(8世紀後半)→2号土坑(近世)
備　考　部分的に焼土と炭化材が検出されている。焼土は、いずれも床上5～8cm程度であった。焼失住居の可能性が強い。
時　代　6世紀後半

白倉A区22号住居

位　置　29−26他

遺　構　図9　PL13　**遺　物**　図173　PL85

面　積　8.9㎡　　**主軸方位**　N−65°−E

形　状　短辺2.7〜長辺3.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は14〜24cm。床面は最大8cmの比高がある。

カマド　東壁の中央で検出された。焚口幅は50cm、焚口高は19cmで袖石・天井石は結晶片岩よりなる。支脚は検出されなかった。構造材は粘土である。

貯蔵穴　掘り方調査の際に検出された。円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、33×30×〈32〉cmである。

遺物出土状態　4はカマドに懸けられていたと思われる。残念ながら底部については残存状態の悪さから復元できなかった。接合資料aは土師器の丸甕の底部である。(遺物観察表：15・16頁　出土遺物一覧表：162頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：42〜〈35〉×16cm、B土坑：82〜80×42cm、C土坑：64〜56×10cm。

時　代　7世紀前半

白倉A区23号住居

位　置　30−26他

遺　構　図10　PL13・14　**遺　物**　図174　PL86

面　積　23.9㎡　　**主軸方位**　N−19°−W

形　状　短辺4.6〜長辺4.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は22〜44cm。床面は最大8cmの比高がある。焼失住居と思われ、下層に焼土と炭化物が検出されている。

カマド　北壁の中央から東側で検出された。焚口幅は45cm、焚口高は20cmである。結晶片岩の右袖石と天井石が検出された。支脚は検出されなかった。構造材は粘土である。カマド天井石から南側では他の住居で使用されたと思われる。礫が多数検出されている。この礫の下には炭化材が検出されていることから住居焼失後に廃棄された可能性が強い。

貯蔵穴　円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、80×65×69cmである。住居南東隅が方形に掘り窪められ、その中央で検出された。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：27×26cm、P2：21×33cm、P3：21×95cm、P4：18×53cm。

遺物出土状態　貯蔵穴底面出土のこも編石は生活時の状態を示しているのかもしれない。接合資料aは土師器の甑の破片である。(遺物観察表：16・17頁　出土遺物一覧表：162頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：59〜43×13cm、B土坑：70〜60×11cm。

重　複　21号住居(縄文時代)→23号住居

備　考　焼失住居。本住居出土のカマドについては成果と問題点で扱っているので参照してほしい。

時　代　6世紀後半

白倉A区24号住居

位　置　30−25他

遺　構　図11　PL14　**遺　物**　図174　PL−

面　積　5.6㎡　　**主軸方位**　N−1°−E

形　状　短辺2.2〜長辺2.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は20〜35cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東側で検出された。

遺物出土状態　住居中央部床上20cm程度で大型礫がまとまって出土している。図化した3点の土器も、この礫とともに遺棄されたものと思われる。(遺物観察表：17頁　出土遺物一覧表：162頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：113〜90×14cm。

時　代　7世紀前半

白倉A区25号住居

位　置　30−24他　　**遺　構**　図11　PL14・15

遺　物　図174・175　PL86

面　積　15.2㎡　　**主軸方位**　N−18°−E

形　状　短辺3.5〜長辺4.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は17〜47cm。床面は最大4.6cmの

比高がある。南西隅で粘土がまとまって検出されている。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。右袖から結晶片岩の袖石らしきものが検出されている。また、カマド調査の際被熱と攪乱による劣化が著しい砂岩が検出されているがこれが天井石と推測される。支脚は結晶片岩である。構造材は粘土とロームブロックからなる。右袖の大部分を時期不明の攪乱によって破壊されている。

貯蔵穴　上面で隅丸長方形を呈す。規模(径×深さ)は、91～65×98cmである。

柱　穴　10本検出された。規模(径×深さ)は、P1：33×56cm、P2：30×47cm、P3：40×49cm、P4：29×38cm、P5：31×34cm、P6：31×42cm、P7：32×74cm、P8：35×31cm、P9：28×57cm、P10：22×27cm。すべて床下調査の際検出された。位置から判断して、P2、P5、P7、P9が主柱穴の可能性が強い。

遺物出土状態　1・2の坏や17・18の甑は遺棄されたものと思われる。接合資料a・b・d・eは土師器の甕の破片、cは土師器の小型甕の破片である。

(遺物観察表：17・18頁　出土遺物一覧表：162頁)

床下の状態　床下土坑が6基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：65～57×9cm、B土坑：145～〈82〉×5cm、C土坑：110～105×25cm、D土坑：65～59×35cm、E土坑：62～〈42〉×7cm、F土坑：〈56〉～〈37〉×3cm。掘り方調査の際、26号住居の貯蔵穴が検出された。

重　複　26号住居（6世紀前半）→25号住居・出土土器の年代観から。

時　代　6世紀後半

の比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。左袖から結晶片岩の袖石が検出されている。カマド土層断面に痕跡があることから右袖にも袖石があったと思われる。結晶片岩の天井石が前方に落ちている。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。25号住居の床下で検出された。もう1基北東隅で検出されているが、床面が貼られていることから、古い貯蔵穴と思われる。規模（長軸×短軸×深さ）は、82×52×40cmである。

柱　穴　4本検出されている。P1・P3・P4では柱痕が確認された。規模（径×深さ）は、P1：29×64cm、P2：24×55cm、P3：33×71cm、P4：36×65cm。

遺物出土状態　15の垂飾や30の金具など稀少性のある遺物が出土。10の坏など廃棄された可能性が強い。30の金具は壁に張り付いて出土している。接合資料a・bは土師器の丸甕の破片で、cは土師器の台付甕の台部、dは土師器の高坏の脚端部である。(遺物観察表：19・20頁　出土遺物一覧表：162頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出された。C土坑は古い貯蔵穴と思われる。根太状の痕跡が3カ所検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑：105～69×25cm、B土坑：〈127〉～122×11cm、C土坑：90～68×46cm。

重　複　26号住居→25・27号住居（6世紀後半）

尚、25・27号住居との先後関係については出土土器の年代観から。また、48号住居（時期不明）との関係は不明。

備　考　部分的に重機による攪乱や時期不明の攪乱あり。焼失住居。

時　代　6世紀前半

白倉A区26号住居

位　置　30—25他

遺　構　図12・13　PL15・16

遺　物　図176・177　PL87

面　積　(26.9)㎡　　**主軸方位**　N—16°—W

形　状　短辺4.9～長辺(5.0)mの隅丸方形。

壁と床面　残存壁高は29～33cm。床面は最大4.4cm

白倉A区27号住居

位　置　28—25他

遺　構　図14　PL16・17・18

遺　物　図177・178　PL87・88

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N—19°—W

形　状　短辺4.9～長辺5.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は20～42cm。床面は最大6cmの

比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口高は19cmで、結晶片岩の袖石が左袖にのみ残存し、右袖は28号住居に破壊されている。他の構造材として粘土が用いられている。

貯蔵穴　28号住居の床下で検出された。楕円形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、57×38×〈55〉cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：41×〈50〉cm、P2：41×33cm、P3：43×43cm、P4：36×46cm。P1は28号住居の床下で検出された。

壁周溝　検出された。また、西辺からP3とP4に向かって根太状の痕跡が確認されている。

遺物出土状態　カマド左袖部周辺で完形土器がまとまって出土している。失火の際に、住居内に置いてあったのではなかろうか。また4は施設として使用されたのかもしれない。木の葉型坏(15)は覆土一括取上である。(遺物観察表：20・21・22頁　出土遺物一覧表：162頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：127～〈70〉×15cm。

重　複　26号住居(6世紀前半)→27号住居・土層断面より→28号住居(7世紀後半)　26号住居との先後関係は出土土器型式から。また、29号住居と重複し、土層断面からは27号住居の方が新しかった。しかしながら、29号住居出土土器(29号住居1)は7世紀後半で、切り合い関係と出土土器に矛盾が生じる。

備　考　炭と焼土はいずれも床面上5～8cm浮いている。焼失住居。

時　代　6世紀後半

白倉A区28号住居

位　置　28－24他

遺　構　図15・16　PL16・17・18

遺　物　図178・179・180　PL88

面　積　22.3m²　　**主軸方位**　N－88°－E

形　状　短辺4.5～4.6mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は32～45cm。床面は最大6.1cmの比高がある。

カマド　東壁の中央で検出された。焚口高は27cmで、結晶片岩の、右袖石と天井石が検出されている。構造材は粘土。また、カマド前方にはカマド材として使用されていたと思われる礫が多く検出されている。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、50×46×48cmである。

柱　穴　8本検出されている。規模(径×深さ)は、P1：30×16cm、P2：24×41cm、P3：30×26cm、P4：36×50cm、P5：27×33cm、P6：31×17cm、P7：40×46cm、P8：26×13cm。

遺物出土状態　カマド前方から多量の遺物が出土している。7の甕はカマドの天井石下から出土している。接合資料a・b・c・e・f・g・hは土師器の甕の破片、dは小型甕の口縁片、i・jは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：22・23・24頁　出土遺物一覧表：163頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：95～63×3cm、B土坑：85～72×6cm。

重　複　27号住居（6世紀後半）・土層断面から→28号住居

時　代　7世紀後半

白倉A区29号住居

位　置　28－25他

遺　構　図11　PL16・17　**遺　物**　図180　PL88

面　積　－m²　　**主軸方位**　N－14°－W

形　状　短辺〈1.8〉～3.0mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は20～23cm。床面は最大3.6cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　図化した2点はいずれも覆土一括取上である。(遺物観察表：24頁　出土遺物一覧表：163頁)

重　複　29号住居と48号住居と重複するが先後関係は不明。詳細は29・48号住居本文を参照してほしい。

時　代　古墳時代後期だが細別時期は不明。

白倉A区30号住居

位　置　29—23他

遺　構　図17　P L18　**遺　物**　図181　P L88

面　積　23.7㎡　　**主軸方位**　N—2°—E

形　状　短辺4.2～長辺4.5mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は10～34cm。床面は最大11cmの比高がある。南側で粘土が床面直上で検出されている。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口高は53cmで、結晶片岩の左袖石と支脚が検出された。構造材はローム ブロックである。

貯蔵穴　円形を呈す。南東隅を方形にわずかに掘り窪めて、その中央に作られている。規模（長軸×短軸×深さ）は、73×61×62cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：24×22cm、P2：20×20cm、P3：25×23cm、P4：38×35cm。

遺物出土状態　貯蔵穴内出土の坏(7)やこも編石などは遺棄された可能性が強い。接合資料a・bは、土師器の甕の胴部～底部の破片である。(遺物観察表：24・25頁　出土遺物一覧表：163頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：116～90×11cm。

重　複　41号住居（5世紀後半）・6号土坑（古墳時代後期）・土層断面より→30号住居　重機による攪乱が著しく、残存状態が悪い。

備　考　本住居床下からは41号住居の柱穴4本が検出された。

時　代　6世紀前半

白倉A区31号住居

位　置　31—23他

遺　構　図18・19　P L18・19

遺　物　図181・182・183　P L89

面　積　19.2㎡　　**主軸方位**　N—8°—E

形　状　短辺4.0～長辺4.1mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は20～45cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は43cm、焚口高は47cmで結晶片岩の袖石と支脚が検出された。構造材は、ローム ブロックを主体とする。甕が2つ懸けた状態で出土した。

貯蔵穴　円形を呈す。南東隅の床面を2～5cm程度方形に掘り窪め、その中央に位置する。規模(長軸×短軸×深さ）は、98×87×76cmである。

柱　穴　5本検出された。規模(径×深さ)は、P1：20×62cm、P2：25×54cm、P3：25×56cm、P4：21×53cm、P5：35×57cm。P5は掘り方調査の際に検出された。

壁周溝　検出された。

遺物出土状態　南西隅でまとまって完形土器及び礫が廃棄されている。接合資料a・b・c・d・e・fは土師器の甕の口縁片で、g・hは土師器の甑の胴部片である。(遺物観察表：26・27・28頁　出土遺物一覧表：163頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ）は、A土坑：170～116×15cm、B土坑：107～58×20cm。

備　考　本住居出土のカマド材については成果と問題点で取り上げているので参照してほしい。

時　代　6世紀前半

白倉A区33号住居

位　置　31—21他

遺　構　図20・21　P L19・20

遺　物　図184・185　P L90

面　積　27.1㎡　　**主軸方位**　N—15°—W

形　状　短辺4.7～長辺5.1mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は15～57cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は52cm、焚口高は29cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。天井石は袖石前方に墜ちて検出されている。構造材は粘土である。右袖内から7が出土。

貯蔵穴　円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、83×74×77cmである。礫で囲まれていたようである。また、坏(13)の上に丸甕(20)が置かれており、生活

時に貯蔵穴が開口していなかった可能性がある。

柱　穴　6本検出された。規模(径×深さ)は、P1：66×50cm、P2：52×64cm、P3：57×58cm、P4：53×59cm、P5：35×44cm、P6：36×28cm。P3及びP4では柱痕が確認されている。

壁周溝　検出された。

遺物出土状態　カマド右袖から貯蔵穴周辺にかけて完形土器がまとまって出土している。これらのほとんどが遺棄されたものと思われ、重ねて置かれていた様子や置き台として再利用されている甕(2)など、興味深い出土状態を呈している。(遺物観察表：29・30頁　出土遺物一覧表：163頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。A土坑：155～124×9cm。西壁からP3及びP4に直交するように根太状の痕跡が確認された。

備　考　焼失住居。

時　代　6世紀後半

白倉A区34号住居

位　置　30—21他

遺　構　図22・23　PL20・21

遺　物　図186・187　PL91

面　積　(35.4) m²　　**主軸方位**　N—86°—E

形　状　短辺5.3～長辺5.8mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は0～45cm。床面は最大8cmの比高がある。東側に傾斜する場所に立地するため東側では削平により壁が残存していなかった。

カマド　東壁の中央で検出された。砂岩の天井石と支脚が検出された。構造材はロームである。北壁のほぼ中央で旧カマドの痕跡が検出されている。

貯蔵穴　円形を呈す。南東隅を方形に少し掘り窪め、その中央部で検出された。規模(長軸×短軸×深さ)は、75×70×75cmである。遺物出土状態から、失火時に開口していなかった可能性が強い。

柱　穴　5本検出されている。P1：35×〈7〉cm、P2：26×68cm、P3：25×53cm、P4：25×57cm、P5：44×〈7〉cm。P1とP5は35号住居の床下で検出された。

壁周溝　東辺を除いて検出された。

遺物出土状態　炭化材が良好に残存。貯蔵穴周辺では、まとまって完形土器や置き台利用などの土器が検出されている。接合資料a・cは土師器の小型甕の胴部片、bは土師器の鉢と思われる破片。d・e・f・gは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表：30・31頁　出土遺物一覧表：163頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。B土坑は旧カマドの痕跡と思われる。規模（径×深さ）は、A土坑：125～90×75cm、B土坑：65～55×12cm。

重　複　34号住居・重複部分に34号住居の炭化材のないことから。→36号住居(6世紀前半)・土層断面より→35号住居(古墳時代後期)→10号土坑（中近世）

備　考　焼失住居。炭化材の残存良好。34号住居と36号住居の先後関係は出土土器（特に坏）を比較した場合も頷ける。

時　代　6世紀前半

白倉A区35号住居

位　置　30—20他

遺　構　図16　PL20・21　**遺　構**　図187　PL—

面　積　13.0m²　　**主軸方位**　N—104°—E

形　状　短辺3.2～長辺3.8mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は15～48cm。床面は最大12cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から南側で検出された。焚口高は（25）cmで、結晶片岩の右袖石と天井石が検出された。

柱　穴　1本検出された。規模(径×深さ)は、P1：46×27cm。

壁周溝　ほぼ全周検出された。

遺物出土状態　南壁際中央で、こも編石がまとまって出土している。(遺物観察表：32頁　出土遺物一覧表：164頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。A土坑：91～87×19cm。

重　複　34号住居（6世紀前半）・34号住居は焼失住居で重複部分に炭化材がないことから→36号住居（6世紀前半）・土層断面→35号住居

時　代　細別時期は不明。

白倉A区36号住居

位　置　29—20他

遺　構　図24　P L20・21　**遺　物**　図187　P L91

面　積　(26.1) ㎡　　**主軸方位**　N—94°—E

形　状　短辺4.7～長辺5.2mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は24～54cm。床面は最大12cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から南側で検出された。焚口幅は48cm、焚口高は26cmで、いずれも結晶片岩の両袖石・天井石・2つの支脚が検出された。構造材はロームブロックである。1の甕はカマドに懸けられていた。

柱　穴　4本検出された。規模（径×深さ）は、P1:26×〈36〉cm、P2:30×〈41〉cm、P3:29×49cm、P4:23×39cm。P1とP2は35号住居の床下で検出された。

壁周溝　検出された。

遺物出土状態　1の甕及び5の坏は遺棄された可能性が強い。（遺物観察表：33頁　出土遺物一覧表：164頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：143～110×20cm。

重　複　34号住居（6世紀前半）・土層断面はとっていないが34号住居は焼失住居で炭化材が多量に出土しており重複部分に炭化材がないことから→36号住居・土層断面から→35号住居（古墳時代後期）

備　考　34号住居は本住居と同じ6世紀前半に帰属する。出土土器（特に坏）を比較した場合、34号住居のほうによりよい様相が伺えよう。

時　代　6世紀前半

白倉A区41号住居

位　置　29—23他

遺　構　図25　P L18　**遺　物**　図188　P L—

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N—11°—E

形　状　短辺〈4.4〉～長辺5.3mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は0～18cm。床面は最大15cmの比高がある。

貯蔵穴　円形を呈する。規模（径×深さ）は、85×78×54cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：37×〈38〉cm、P2：28×〈33〉cm、P3：33×〈43〉cm。4本とも30号住居の床下で確認された。

遺物出土状態　図化したのは高坏破片1点である。（遺物観察表：33頁　出土遺物一覧表：164頁）

重　複　41号住居・土層断面から→30号住居（6世紀前半）

備　考　遺構の残存悪い。

時　代　5世紀後半であろう。

白倉A区42号住居

位　置　28—27他

遺　構　図26　P L21　**遺　物**　図188　P L92

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N—5°—E

形　状　短辺〈1.3〉～長辺8.3mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は24～32cm。床面は最大6cmの比高があるが大部分を破壊されている。

カマド　検出されなかった。炉を有する住居であった可能性が強い。

柱　穴　2本検出されている。P2では柱痕が確認された。規模(径×深さ)は、P1：40×89cm、P2：34×85cm。

遺物出土状態　土器は破片資料が主体だが、出土位置から廃絶時に近い遺物であろう。注目すべき遺物として高坏脚部(3)と鉄滓(6)の出土があげられよう。高坏脚部は羽口に再利用されたと思われ、上面が黒色に変色し、被熱による発泡が観察できる。鉄滓は出土位置を平面図(図26)中に示すのを遺漏してしまったが、C—C′ライン上の壁際で、床上29cmから出土している。3及び6の存在から、本住居の未調査区に小鍛冶があったのかも知れない。尚、本遺跡の西側丘陵に位置する下小塚遺跡（甘楽町教育委員会調査）では、同様の高坏脚部が12点出土している。本遺跡との関連が注目される。（遺物観察表：33・34頁　出土遺物一覧表：164頁）

床下の状態　根太状の痕跡が３カ所検出されている。いずれも壁と柱穴を結ぶような状況である。

重　複　21号住居（縄文時代）→42号住居　また３号土坑（時期不明）との関係は不明である。

備　考　本来は既刊『Ⅲ』の報告書で扱うべき住居であるが遺漏してしまった。

時　代　５世紀前半

白倉Ａ区44号住居

位　置　26－27他

遺　構　図27　ＰＬ22　**遺　物**　図189　ＰＬ92

面　積　－㎡　　**主軸方位**　Ｎ－５°－Ｗ

形　状　短辺〈2.6〉～7.6mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は30～45cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド　検出されなかったが、恐らく北カマドであろう。

貯蔵穴　２基検出された。新旧があると想定されるが、先後関係は不明。規模（長軸×短軸×深さ）は、１号貯蔵穴 80×77×45cm、２号貯蔵穴 101×97×101cmである。

柱　穴　２本検出された。規模(径×深さ)は、P1：57×87cm、P2：52×80cm。

壁周溝　残存部分では検出された。

遺物出土状態　１及び２は完形で出土位置から考えて、遺棄された可能性が強い。接合資料ａは土師器の甑の口縁片である。３はＡ土坑内出土。(遺物観察表：34頁　出土遺物一覧表：164頁)

床下の状態　床下土坑が３基検出された。規模(径×深さ）は、Ａ土坑：79～67×17cm、Ｂ土坑：69～〈67〉×22cm、Ｃ土坑：105～95×16cm。

重　複　44号住居→16号住居（８世紀前半）→１号溝（中近世）　また、５号土坑との関係は不明。

時　代　６世紀前半

白倉Ａ区45号住居

位　置　26－24他

遺　構　図25　ＰＬ22　**遺　物**　図189　ＰＬ92

面　積　－㎡　　**主軸方位**　Ｎ－23°－Ｅ

形　状　短辺〈2.6〉～長辺3.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は17～22cm。床面は最大３cmの比高がある。重機や耕作による攪乱のため、残りが悪い。

カマド　検出されなかった。炉を有する住居である可能性が強い。

貯蔵穴　不定形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、66×70×53cmである。東側が周提状に少し盛り上がる。

遺物出土状態　１の高坏は壁際に寄りかかって検出されている。(遺物観察表：34･35頁　出土遺物一覧表：164頁)

床下の状態　東壁の中央でＡ土坑が確認された。床下土坑と推測される。規模(径×深さ)は、Ａ土坑：62～〈42〉×25cm。

重　複　45号住居→１号溝（中近世）→１号土坑（中近世以降）

備　考　重機による攪乱が著しい。

時　代　５世紀前半。既刊『Ⅲ』の報告書で扱うべき住居であるが遺漏してしまった。

白倉Ａ区47号住居

位　置　22－23他

遺　構　図28　ＰＬ22　**遺　物**　図190　ＰＬ92

面　積　－㎡　　**主軸方位**　Ｎ－３°－Ｅ

形　状　短辺5.2～長辺5.5mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は19～30cm。床面は最大５cmの比高がある。南東部分で粘土がまとまって検出されている。

カマド　北壁の中央で検出せれた。大半を３号住居に破壊されており詳細は不明である。礫が集中しており、結晶片岩の支脚が特定できた。

貯蔵穴　隅丸方形を呈する。周囲が方形に最大４cm程度盛り上がる。尚、Ｃ土坑・Ｄ土坑は旧住居にかかわる貯蔵穴の可能性がある。規模（長軸×短軸×深さ）は、90×85×74cmである。

柱　穴　９本検出された。P1・P2では柱痕が見つ

かっている。規模（径×深さ）は、P1：30×58cm、P2：28×49cm、P3：42×49cm、P4：37×28cm、P5：35×19cm、P6：26×10cm、P7：34×11cm、P8：28×11cm、P9：30×41cm。P3～P5については3号住居の床下調査の際に検出された。P9は本住居を切るpitである。P7・P8は掘り方調査の際に検出された。

壁周溝　残存部分では検出されている。

遺物出土状態　貯蔵穴周辺で残存状態のよい土器が検出されている。(遺物観察表：35頁　出土遺物一覧表：165頁)

床下の状態　北辺と東辺の内側に旧住居と思われる痕跡が検出された。その東辺内側のほぼ中央で旧カマドの痕跡が検出されている。床下土坑が4基検出された。いずれも土坑の覆土はロームブロックと黒色土である。規模（径×深さ）は、A土坑：76×9cm、B土坑：64×30cmC土坑：85～73×57cm、D土坑：65～60×45cm。

重　複　47号住居・カマドを破壊することから→3号住居（7世紀前半）→40号住居（9世紀前半）

時　代　6世紀前半

白倉A区48号住居

位　置　29―25他

遺　構　図14　PL―　**遺　物**　図―　PL―

調査経過　48号住居は、南側を26号住居・北側を29号住居・東側を27号住居と重複しており、僅かな部分しか残存していない。床面レベル及び壁高は北側の29号住居とほぼ同じである。出土遺物はないが古墳時代後期の27号住居に破壊されたようなので古墳時代後期を下限とするが時期は不明である。とりあえず本報告書で扱うことにした。残存部の形状が鋭角を呈していることから住居でない可能性もある。あるいは、先後関係が把握できなかった29号住居と一連の遺構とも考えられる。重複関係にある3軒の住居（26・27・29号住居）は、いずれも古墳時代後期で調査時の所見では27号住居によって破壊されたことになっている。26・29号住居との先後関係は不明である。(遺物観察表：―　出土遺物一覧表：―)

白倉A区53号住居

位　置　26―19他

遺　構　図29　PL23　**遺　物**　図190　PL93

面　積　23.3m²　　**主軸方位**　N―17°―E

形　状　短辺4.3～5.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は18～49cm。床面は最大2cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は42cm、焚口高は24cmで、結晶片岩の両袖石と砂岩の切石の天井石が検出された。その他の構造材は粘土とロームである。

貯蔵穴　円形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、90×88×90cmである。方形に厚さ2から3cmの周提が巡る。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：20×57cm、P2：29×58cm、P3：29×41cm、P4：22×37cm。

遺物出土状態　カマド左袖の左側に天井石と長胴甕2個体（1と2）と丸胴の甕（3）がカマドからはずして置いたかのように整然とした状態で検出されている。他に貯蔵穴の南東部で7が検出されている。(遺物観察表：35・36頁　出土遺物一覧表：165頁)

重　複　53号住居→9号住居（8世紀後半）・2号柱穴群26号柱穴（古墳後期か）→7号土坑（時期不明）

時　代　6世紀後半

白倉A区54号住居

位　置　24―19他

遺　構　図30　PL23　**遺　物**　図191　PL93

面　積　―m²　　**主軸方位**　N―15°―E

形　状　短辺(3.2)～(3.5)mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は24～51cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

貯蔵穴　検出されていないが、C土坑がこれに該当すると推測される。規模（径×深さ）は、69～52×39cmである。

遺物出土状態　2の坏が遺棄された遺物であろう。

3と4については54号住居として図化したが出土位置から判断すると55号住居覆土からの出土とも考えられる。5はB土坑出土。(遺物観察表：36頁　出土遺物一覧表：165頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：122～98×〈13〉cm、B土坑：113～〈52〉×〈26〉cm、C土坑：67～55×〈19〉cm。

重　複　54号住居・土層断面より→55号住居（古墳時代後期）→50号住居（8世紀前半）→49号住居（9世紀前半）→8号土坑（平安時代・10世紀以降）

時　代　6世紀後半

白倉A区55号住居

位　置　24－19他

遺　構　図30　PL－　**遺　物**　図－　PL－

面　積　－m²　　**主軸方位**　N－22°－E

形　状　短辺〈1.3〉～長辺3.7mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は37～65cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　本住居としての実測遺物はないが、54号住居の3と4は恐らく55号住居覆土からの出土と考えられる。50号住居との床面レベルはほとんど同じである。(遺物観察表：－　出土遺物一覧表：165頁)

重　複　54号住居（6世紀後半）・土層断面より→55号住居・55号住居のカマドが50号住居に破壊されていることから→50号住居（8世紀前半）

時　代　細別時期不明

白倉A区57号住居

位　置　19－16他

遺　構　図30　PL23　**遺　物**　図191　PL93

面　積　－m²　　**主軸方位**　N－21°－W

形　状　短辺3.4～長辺〈3.5〉mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は9～14cm。床面は最大3cmの比高がある。東側に傾斜する立地で、東側は削平されている。

覆　土　土層注記がないため不明。

カマド　北壁の中央で痕跡のみが検出された。

遺物出土状態　1の坏は廃絶時に近い遺物であろう。(遺物観察表：37頁　出土遺物一覧表：164頁)

時　代　6世紀後半

白倉A区58号住居

位　置　31－18他

遺　構　図31　PL23　**遺　物**　図191　PL93

面　積　22.8m²　　**主軸方位**　N－1°－E

形　状　短辺4.3～長辺4.9mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は18～37cm。床面は最大15cmの比高がある。主柱穴に囲まれた部分の床は特に固い。

覆　土　壁際で焼土や炭化物が検出されている。

カマド　北壁の中央で検出された。構造材は灰青色の粘土及び焼土ブロックやロームブロックである。

貯蔵穴　上面隅丸長方形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、74×58×75cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：31×54cm、P2：22×47cm、P3：16×50cm、P4：18×46cm。

壁周溝　部分的に検出された。

遺物出土状態　こも編石がまとまることなく床面上で散布していた。(遺物観察表：37・38頁　出土遺物一覧表：165頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：123～110×13cm、B土坑：98～72×13cm。

重　複　59号住居（古墳時代後期）と重複。58号住居覆土上面との関係が問題になるが、59号住居の残存部分が恐らく掘り方であるため関係は不明。

時　代　7世紀前半

白倉A区59号住居

位　置　31－18他

遺　構　図31　PL23　**遺　物**　図－　PL－

面　積　－m²　　**主軸方位**　N－1°－E

形　状　隅丸方形を呈すると思われるが残存状態が

悪く詳細は不明である。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　遺物の出土なし。(遺物観察表：—出土遺物一覧表：—)

床下の状態　掘り方部分が4cm程度の痕跡として検出されたにすぎない。

重　複　58号住居（7世紀前半）と重複するがその関係は不明である。調査段階で古墳時代後期としたが、積極的な根拠は見あたらない。

時　代　細別時期不明

白倉A区61号住居

位　置　20—15他

遺　構　図31　PL24　**遺　物**　図192　PL93

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—9°—W

形　状　短辺〈1.1〉～長辺3.7mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は7～8cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出できた。極めて残存が悪く袖も確認されていない。

遺物出土状態　1と2は本住居のカマドに由来するものであろうか。(遺物観察表：39頁　出土遺物一覧表：166頁)

重　複　61号住居→60号住居（8世紀前半）　尚、64号住居（古墳時代後期）関係は不明である。

備　考　残存状態が悪く不明な点が多い。

時　代　細別時期不明。

白倉A区62号住居

位　置　21—15他

遺　構　図33　PL24　**遺　物**　図192　PL93

面　積　(9.4) m²　　**主軸方位**　N—13°—E

形　状　短辺2.8～長辺3.1mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は4～31cm。床面は最大9cmの比高がある。

カマド　検出されていないが北側中央部に焼土の分布が認められることから北カマドと推測される。

遺物出土状態　接合資料なし。(遺物観察表：39頁出土遺物一覧表：V—127頁)

備　考　手違いで本報告書に掲載したが本来は『V』の報告書分である。

時　代　8世紀前半

白倉A区64号住居

位　置　20—15他

遺　構　図32　PL24　**遺　物**　図—　PL—

面　積　(5.2) m²　　**主軸方位**　N—27°—E

形　状　短辺(1.6)～長辺(2.4)mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は3～13cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から西寄りで検出された。残存状態が悪く詳細は不明である。

遺物出土状態　土器は覆土から土師器破片を32点取り上げられているのみで、その他は西壁よりで礫が集中して出土している。実測遺物はない。(遺物観察表：—　出土遺物一覧表：166頁)

重　複　64号住居→60号住居（8世紀前半）　また、61号住居（6世紀後半）との関係は不明である。60号住居の床面より、本住居の床面が深いため60号住居東壁近辺の床を破壊したと考えられる。

時　代　細別時期不明。

白倉A区65号住居

位　置　25—17他

遺　構　図34　PL24　**遺　物**　図192　PL93

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—14°—E

形　状　短辺4.1～長辺〈3.8〉mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は12～16cm。床面は最大4.5cmの比高がある。

覆　土　覆土中に炭化物が比較的多く検出された。

カマド　北壁の中央で検出された。構造材はロームブロックを主体とする。

貯蔵穴　楕円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、47×26×18cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、

P1：20×63cm、P2：25×58cm、P3：23×46Cm、P4：21×56cm。

遺物出土状態　1～7は完形(もしくはそれに近い土器)であり、出土位置からも遺棄された可能性が強い。(遺物観察表：39・40頁　出土遺物一覧表：166頁)

床下の状態　床下土坑が6基検出されている。A土坑及びB土坑は焼土を主体とした覆土である。規模(径×深さ)は、A土坑：59～42×一cm、B土坑：60～37×一cm、C土坑：71～53×15cm、D土坑：90～75×13cm、E土坑：117～61×8cm、F土坑：96～56×15cm。

重　複　65号住居→69号住居(平安時代)・15号土坑

備　考　恐らく焼失住居であろう。

時　代　7世紀後半

白倉A区66号住居

位　置　24－16他

遺　構　図32　PL25　**遺　物**　図193　PL94

面　積　21.0m²　**主軸方位**　N－4°－E

形　状　短辺4.1～長辺4.6mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は29～50cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口高は10cmで、左袖石のみ検出されているが石材は不明である。その他の構造材は粘土である。

貯蔵穴　恐らく隅丸長方形と推測される。規模(長軸×短軸×深さ)は、〈75〉×〈68〉×(45)cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模(径×深さ)は、P1：31×46cm、P2：34×52cm、P3：20×66cm、P4：23×54cm。

壁周溝　西辺を中心に掘り方調査の際に検出された。

遺物出土状態　1はカマド脇の置き台に再利用された可能性が強い。2はエレベーション図から判断するとあるいは73号住居覆土出土に帰属すると考えられる。(遺物観察表：41頁　出土遺物一覧表：166頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：105～68×39cm、B土坑：92～68×24cm、C土坑：136～125×4cm。

重　複　73号住居(5世紀後半)・重複部分で66号住居のカマドが検出されていることから→66号住居

備　考　焼失住居と考えられる。

時　代　6世紀後半

白倉A区67号住居

位　置　28－19他

遺　構　図35　PL25　**遺　物**　図193　PL94

面　積　(44.8)m²　**主軸方位**　N－4°－E

形　状　短辺7.5～長辺11.5mの隅丸長方形を呈する。**壁と床面**　残存壁高は35～42cm。床面は最大12.7cmの比高がある。削平によって南東隅は検出されていない。

カマド　北壁の中央で痕跡が検出された。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、80×57×一cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模(径×深さ)は、P1：30×68cm、P2：29×61cm、P3：28×67cm、P4：29×84cm。

壁周溝　壁が確認できた部分では、ほぼ検出された。

遺物出土状態　6の手捏ね土器は遺棄された可能性が強い。また、4と5の坏は奈良時代の遺物である。(遺物観察表：41・42頁　出土遺物一覧表：166頁)接合資料a・bは土師器の甑の破片である。

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：72×16cm。

重　複　67号住居→12号住居(8世紀後半)→1・2号溝(中近世)→3号溝

時　代　6世紀前半

白倉A区72号住居

位　置　21－15他

遺　構　図33　PL25　**遺　物**　図194　PL－

面　積　－m²　**主軸方位**　N－14°－E

壁と床面　残存壁高は5.9～9.3cm。床面は最大6.5cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　出土位置を記録した遺物はなく、図

化したのは覆土一括取り上げの高坏脚部1点である。(遺物観察表：42頁　出土遺物一覧表：166頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：90～67×16cm、B土坑：70～60×20cm。

重　複　72号住居・出土土器から→71号住居（平安時代）

時　代　6世紀後半か

白倉A区73号住居

位　置　24—15他

遺　構　図35　PL25　**遺　物**　図194　PL94

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N－4°－E

調査経過　遺構平面図中の18号土坑とした遺構は調査時に置いて欠番とした遺構で近世以降のいわゆるイモ穴状土坑である。整理作業の際、18号土坑一括として取り上げた遺物が多数確認でき、すべてが古墳時代後期に帰属する遺物で、恐らく本住居に由来する可能性が強いと思われた。そこで、本報告書・土坑の項目で、18号土坑出土遺物として4点の土器を掲載することとしたが、前述したように出土土器とイモ穴状土坑とは直接的結びつきはない。

形　状　短辺(4.5)～長辺6.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は18～40cm。床面は最大13cmの比高がある。東側部分は、削平及び重複で不明。66号住居との重複が確認できた。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口高は25cmで結晶片岩の左袖石のみが検出された。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。74号住居の掘り方調査の際に検出された。規模（長軸×短軸×深さ）は、129×67×〈37〉cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：35×—cm、P2：33×—cm、P3：34×〈24〉cm、P4：35×47cm。

遺物出土状態　カマド左袖基部で検出された2・3・9はカマド材として使われたものと考えられる。尚、調査経過でもふれたように本報告書記載の18号土坑出土遺物は、本住居に由来する可能性がきわめて強い。18号土坑4とした須恵器は稀少性のある遺物である。また、鎌(10)が出土しているが覆土上層からの出土で、本住居に帰属するか不明である。接合資料aは土師器の高坏の脚部片である。(遺物観察表：42・43頁　出土遺物一覧表：167頁)

重　複　73号住居・66号住居のカマドが重複部分で検出されていることから→66号住居（6世紀後半）また、74号住居（古墳後期）との関係は不明である。

時　代　5世紀後半

白倉A区74号住居

位　置　24—15他

遺　構　図33　PL26　**遺　物**　図194　PL—

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N－4°－E

形　状　短辺(2.1)～長辺2.4mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は11～13cm。床面は最大22cmの比高がある。

覆　土　わずかな覆土はローム質の土壌であった。

カマド　検出されていない。

貯蔵穴　楕円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、72×50×〈40〉cmである。

重　複　73号住居（5世紀後半）と重複しているが関係は不明である。

遺物出土状態　鉢(4)を1点図化した。掘り方覆土からの出土であった。(遺物観察表：43頁　出土遺物一覧表：167頁)

時　代　細別時期は不明。

白倉A区76号住居

位　置　22—14他

遺　構　図37　PL26　**遺　物**　図194　PL94

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N－2°－W

形　状　短辺〈2.5〉～長辺5.4mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は0～23cm。床面は最大7cmの比高がある。西側に強く傾斜する場所に立地するため、西半分を消失する。

覆　土　僅かな覆土はローム質の土壌である。

カマド　北壁の中央で検出された。大部分を耕作溝

によって破壊される。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、66×45×〈45〉cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：26×〈32〉cm、P2：23×〈24〉cm、P3：19×32cm、P4：26×25cm。

壁周溝　西壁を中心に検出された。

遺物出土状態　こも編石がまとまって出土している。1の坏は完形で、住居に由来する可能性が強い。（遺物観察表：43・44頁　出土遺物一覧表：167頁）

備　考　炭化材が出土しており、焼失住居の可能性がある。

時　代　6世紀後半

白倉A区77号住居

位　置　26—17他

遺　構　図37　PL26　**遺　物**　図194　PL94

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—18°—E

形　状　短辺2.1～長辺〈3.2〉mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は9～20cm。床面は最大10cmの比高がある。東側の壁及び床面は斜面に立地するため検出できなかった。

カマド　検出されていない。

柱　穴　8本検出されている。P1：31×12cm、P2：59×29cm、P3：47×50cm、P4：28×16cm、P5：25×23cm、P6：52×24cm、P7：35×27cm、P8：23×24cm。掘り方調査の際に検出されたがあまり規則性がなく、すべてが本住居に帰属するかは不明である。

遺物出土状態　遺構の残存が悪かったためか、遺物の出土は少ない。石製模造品（2）はP2内からの出土である。（遺物観察表：44頁　出土遺物一覧表：167頁）

備　考　焼失住居の可能性がある。

時　代　6世紀前半か

白倉A区80号住居

位　置　23—14他

遺　構　図38　PL26　**遺　物**　図194　PL—

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—18°—E

形　状　短辺2.9～長辺3.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は10～22cm。床面は最大9cmの比高がある。南西隅で粘土がまとまって検出されている。

カマド　検出されていないが恐らく東カマドと考えられる。

柱　穴　4本検出されている。P1：29×〈25〉cm、P2：19×17cm、P3：22×18cm、P4：26×〈21〉cm。

遺物出土状態　1は甕の口縁部破片で接合資料aは土師器の甕の胴部片である。（遺物観察表：44頁　出土遺物一覧表：167頁）

重　複　83号住居（古墳時代後期か）と重複するが、関係は不明である。

時　代　1の甕が5世紀後半から6世紀前半であることから、住居もその時代の可能性が強い。

白倉A区81号住居

位　置　24—17他

遺　構　図38　PL26　**遺　物**　図195　PL—

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—13°—E

形　状　短辺6.2～長辺〈2.5〉mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は5～15cm。床面は最大13cmの比高がある。東側の床面及び壁は検出できなかった。

カマド　検出されていない。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模（径×深さ）は、70～34×65cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：35×34cm、P2：35×35cm、P3：50×40cm、P4：35×46cm。

壁周溝　西壁で部分的に検出されている。

遺物出土状態　1はP2内で出土し、2・3はP3内で出土している。（遺物観察表：45頁　出土遺物一覧表：167頁）

床下の状態　床下土坑が2基検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：109～105×19cm、B土坑：137～72×10cm。

重　複　西側で66号住居（6世紀後半）とほぼ接する。

備　考　炭化材が検出されており、焼失住居の可能性がある。

時　代　6世紀前半

白倉A区82号住居

位　置　28－16他

遺　構　図38　P L26　**遺　物**　図195　P L94

面　積　(19.4) m²　**主軸方位**　N－3°－E

形　状　短辺3.9～長辺4.5mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は8～34cm。床面は最大14cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

貯蔵穴　C土坑が貯蔵穴と考えられる。

柱　穴　4本検出されている。P1：33×49cm、P2：30×42cm、P3：32×45cm、P4：35×50cm。

壁周溝　西壁を中心として検出できた。

遺物出土状態　1の甑は廃絶時に近い遺物と思われる。鉄器が1点出土している(2)が一括取上の遺物である。(遺物観察表：45頁　出土遺物一覧表：168頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出されている。規模(径×深さ)は、A土坑：100～〈90〉×13cm、B土坑：90～48×8cm、C土坑：58～56×46cm。

重　複　98号住居(縄文時代)→82号住居→1号道(中近世以降)

時　代　6世紀前半か

白倉A区83号住居

位　置　21－14他

遺　構　図39　P L26　**遺　物**　図－　P L－

面　積　－m²　**主軸方位**　N－22°－E

形　状　隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は5～9cm。床面は最大8cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

壁周溝　西壁で検出されている。

遺物出土状態　全く遺物は出土していない。(遺物観察表：－　出土遺物一覧表：－

重　複　80号住居(5世紀後半から6世紀前半)と重複しているが関係は不明である。

時　代　調査段階では古墳時代後期として認定したが、積極的な根拠は見あたらない。

白倉A区84号住居

位　置　21－14他

遺　構　図39　P L27　**遺　物**　図－　P L－

面　積　－m²　**主軸方位**　N－18°－E

形　状　短辺〈0.6〉～長辺3.7mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は10～14cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

柱　穴　5本検出されている。規模(径×深さ)は、P1：29×34cm、P2：28×33cm、P3：21×16cm、P4：38×14cm、P5：35×50cm。いずれも掘り方調査の際に検出された。P3・P4は位置から考えて本住居に帰属するかは不明である。

遺物出土状態　遺物は全く出土していない。(遺物観察表：－　出土遺物一覧表：－)

備　考　西側のごく一部が検出されたにすぎない。

時　代　調査段階で本住居を古墳時代後期としたが積極的な根拠はない。

白倉A区85号住居

位　置　27－14他

遺　構　図40・41・42　P L27

遺　物　図195～198　P L94・95

面　積　17.8m²　**主軸方位**　N－6°－E

形　状　短辺3.8～長辺4.2mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は29～77cm。床面は最大4cmの比高がある。南壁中央部直下の床面は周囲より5cm程度褐色土を用いて盛り上げている出入り口施設にかかわる遺構であろうか。

カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口高は21cmで結晶片岩の右袖石と支脚が検出されている。その他の構造材はロームブロックである。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、71×51×41cmである。

柱　穴　5本検出された。規模(径×深さ)は、P1：32×29cm、P2：29×49cm、P3：26×28cm、P4：28×26cm、P5：22×39cm。

壁周溝　検出された。

遺物出土状態　多量の遺物が出土している。本来的に住居に帰属するものは少ない。カマド左袖基部で重なって検出された甕と甑（5・10）やカマド覆土出土の坏(14)などが住居に伴う可能性が強い。接合資料a・dは土師器の甕の破片、bは土師器の丸甕の胴部片、cは土師器の小型甕の胴部片、e・f・g・hは土師器の甑の破片、i・jは土師器の坏の破片である。kは土師器の高坏の破片である。(遺物観察表：45・46・47頁　出土遺物一覧表：168頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：61～50×43cm。調査時点は旧貯蔵穴と考えている。

重　複　78号住居（縄文時代）→85号住居　また、南側で86号住居（6世紀前半）とほぼ接する。この86号住居は本住居と同じ時期とはなるが、出土土器を比較すると85号住居（本住居）86号住居の時間的流れが想定できよう。

備　考　住居東側部分で多量の焼土が検出されている。焼失住居の可能性が強く、焼土は土屋根を示唆しているのかもしれない。

時　代　6世紀前半

白倉A区86号住居

位　置　27—14他

遺　構　図43　PL27　**遺　物**　図198　PL95

面　積　9.9m²　**主軸方位**　N—11°—E

形　状　短辺2.6～長辺3.2mの隅丸長方形を呈する。

カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。構造材はロームブロックを主体とする。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、49×31×35cmである。

遺物出土状態　4の坏は完形に近く、出土位置から遺棄された可能性が強い。(遺物観察表：48頁　出土遺物一覧表：168頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：73～32×20cm。

重　複　30cm北側には85号住居（6世紀前半）が検出されている。85号住居との関係は、85号住居事実記載を参照してほしい。また、複数の耕作溝に床面近くまで破壊されている。

備　考　平面図には示していないが、土層断面図(③層）には床上20cm程度で炭化材が記載されており、焼失住居かもしれない。

時　代　6世紀前半

白倉A区87号住居

位　置　21—18他

遺　構　図44　PL28　**遺　物**　図—　PL—

面　積　—m²　**主軸方位**　N—8°—E

形　状　短辺6.6～長辺〈5.7〉mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は12～22cm。床面は最大5.6cmの比高がある。東壁は大規模な攪乱によって破壊されている。

カマド　北壁の中央で痕跡が検出された。

柱　穴　5本検出されている。規模(径×深さ)は、P1:31×46cm、P2:36×42cm、P3:32×66cm、P4:30×54cm、P5:29×52cm。P1は88号住居内で検出された。

遺物出土状態　実測遺物・接合資料ともになく、小破片しか出土しなかった。(遺物観察表：—　出土遺物一覧表：168頁)

床下の状態　床下土坑が3基検出されている。規模（径×深さ)は、A土坑：132～105×19cm、B土坑：85～75×17cm、C土坑：95～75×18cm。

重　複　87号住居→90号住居（9世紀前半）　また、88号住居（古墳時代後期か）との関係は不明。ただし、88号住居の床面の方が87号住居より低い。

備　考　焼失住居の可能性がある。

時　代　古墳時代後期だが、細別時期は不明。

白倉A区88号住居

位　置　20—17他

遺　構　図44　P L28　**遺　物**　図—　P L—

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—12°—W

形　状　短辺3.0〜長辺〈2.5〉mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は10〜14cm。床面は最大6cmの比高がある。1/2以上を攪乱によって破壊されている。

覆　土　僅かな覆土はローム質の土壌である。

遺物出土状態　実測可能な遺物は出土していない。(遺物観察表：—　出土遺物一覧表：168頁)

重　複　87号住居と重複するがその関係は不明で、床面は本住居の方が10cm程度低い。尚、本住居を調査時で古墳時代後期としたが積極的な根拠はない。

時　代　古墳時代後期か

白倉A区91号住居

位　置　16—12他

遺　構　図44　P L28　**遺　物**　図—　P L—

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—16°—W

形　状　短辺〈0.7〉〜長辺2.2mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は18〜22cm。床面は最大4cmの比高がある。大部分を92号住居に破壊される。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　出土遺物なし。(遺物観察表：—　出土遺物一覧表：—)

重　複　91号住居・土層断面から→92号住居（7世紀前半)

時　代　本住居は出土遺物がなく時期決定ができない。調査時に古墳時代後期としたが、古墳時代後期の住居に破壊されること以外に時代を特定する根拠はない。

白倉A区92号住居

位　置　15—12他

遺　構　図43　P L28　**遺　物**　図198　P L—

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—15°—W

形　状　短辺〈1.3〉〜長辺4.4mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は23〜42cm。床面は最大8cmの比高がある。大部分を攪乱(民家)によって破壊される。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　図化した1・2は覆土土層からの出土である。(遺物観察表：48頁　出土遺物一覧表：168頁)

重　複　91号住居（古墳時代後期）・土層断面から→92号住居

時　代　7世紀前半か

白倉A区93号住居

位　置　13—12他

遺　構　図45　P L28　**遺　物**　図198　P L95

面　積　16.9m²　　**主軸方位**　N—14°—E

形　状　短辺3.6〜長辺3.8mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は25〜32cm。床面は最大84cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から西に寄った位置で検出された。焚口幅は39cm、焚口高は26〜34cmで、両袖石は結晶片岩であった。袖石以外にも構造材として、同礫が3点用いられている。その他の構造材は褐色土である。

貯蔵穴　不定形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、67×60×59cmである。

柱　穴　5本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：35×58cm、P2：32×55cm、P3：30×60cm、P4：22×48cm、P5：(30)×—cm。

壁周溝　西壁に沿って検出されている。

遺物出土状態　2の坏は完形ではないが、出土位置から見て、廃絶時に近い遺物と思われる。接合資料aは、土師器の坏の底部片である。(遺物観察表：49頁　出土遺物一覧表：169頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：175〜75×70cm。

備　考　高速道路建設に伴って移転した住居により大きな攪乱が2カ所ある。

時　代　6世紀前半

白倉Ａ区94号住居

位　置　14－8他

遺　構　図46・47　ＰＬ28・29

遺　物　図199　ＰＬ96

面　積　―㎡　　**主軸方位**　Ｎ－3°―Ｗ

形　状　短辺〈3.7〉～長辺4.5mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は27～32cm。床面は最大4.5cmの比高がある。比較的急な斜面上で検出され、東壁は検出できなかった。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口高は18cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　円形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、55×53×66cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：18×23cm、P2：18×10cm、P3：17×19cm、P4：23×18cm。

壁周溝　掘り方調査の際、西壁に沿って検出された。

遺物出土状態　1・3は置き台として転用されたものであろう。2・4～11は本住居生活時に伴う遺物と考えられる。また、土玉(12)は左袖の中から出土している。（遺物観察表：49頁　出土遺物一覧表：169頁）

備　考　焼失住居と思われ、西壁に直行するように多くの炭化材がほぼ床面直上で検出されている。

時　代　6世紀前半

白倉Ａ区95号住居

位　置　28―17他

遺　構　図43　ＰＬ29　**遺　物**　図200　ＰＬ96

面　積　―㎡　　**主軸方位**　Ｎ－1°―Ｅ

形　状　短辺〈1.3〉～長辺〈3.5〉mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は11～26cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

柱　穴　明確な柱穴は検出できなかった。

壁周溝　西壁の一部で検出された。

遺物出土状態　図化可能な土器は出土していない。1は石製紡錘車で一括取上。2～4はこも編石である。接合資料ａは土師器坏の口縁部片である。（遺物観察表：50頁出土遺物一覧表：169頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。底面には粘土が貼られていた。規模（径×深さ）は、Ａ土坑：95～〈43〉×16cm。

重　複　95号住居→1号溝（中近世以降）・1号道（中近世以降）

時　代　細別時期不明

白倉Ａ区99号住居

位　置　31―27他

遺　構　図47・48　ＰＬ29

遺　物　図200・201　ＰＬ96・97

面　積　(25.0) ㎡　　**主軸方位**　Ｎ－3°―Ｗ

形　状　短辺4.7～長辺5.2mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は28～35cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅38cm、焚口高は18cmで結晶片岩の両袖石と天井石が検出され、鳥居状に組まれていた。構造材は粘土質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、52×45×56cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：30×35cm、P2：26×61cm、P3：27×70cm、P4：25×65cm。

壁周溝　東西壁の一部と南壁に沿って検出された。

遺物出土状態　極めて多量の遺物が出土しているが住居廃絶後に廃棄されたものが主体を占める。カマド覆土内出土の9（坏）くらいが住居生活時に帰属すると考えられる。接合資料ａ～ｈは土師器の甕の胴部片、ｉは土師器の大甕の胴部片、ｊ～ｏは土師器の丸甕の胴部片、Ｐ・ｑ・ｒは土師器の小型甕の胴部片、ｓ・ｔ・ｕは土師器の甑の破片、ｖ・ｗは土師器の坏の破片、Ｘは土師器の高坏の脚である。（遺物観察表：50・51・52・53頁　出土遺物一覧表：169頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出されている。Ａ土

坑：105～100×10cm。床下は主柱穴を方形に結んだ線の外側が掘り窪められている。

時　代　6世紀前半

白倉A区101号住居

位　置　34－25他

遺　構　図49　PL29・30　**遺　物**　図201　PL97

面　積　25.7m²　**主軸方位**　N－15°－W

形　状　短辺4.2～長辺4.4mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は18～30cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。結晶片岩の支脚が検出された。その他の構造材はロームブロックで、火床面の下5cmで、もう一つの火床面が確認されている。

貯蔵穴　本来の貯蔵穴位置で検出されたP5・P6が新旧2つの貯蔵穴である可能性が強い。土層断面（C－C'）から判断するとP5(新)P6(旧)の可能性が強い。

柱　穴　39本検出されている。複数回の居住が行われた可能性が強いが、すべてが本住居に由来するとは考えられない。規模（径×深さ）は、P1:38×21cm、P2:25×30cm、P3:29×24cm、P4:45×49cm、P5:42×42cm、P6:45×50cm、P7:31×17cm、P8:27×13cm、P9:22×17cm、P10:25×32cm、P11:34×18cm、P12:32×17cm、P13:25×19cm、P14:30×6cm、P15:26×5cm、P16:20×6cm、P17:40×33cm、P18:20×16cm、P19:25×17cm、P20:23×27cm、P21:28×53cm、P22:30×38cm、P23:27×10cm、P24:24×32cm、P25:26×5cm、P26:28×5cm、P27:53×15cm、P28:33×13cm、P29:30×4cm、P30:32×19cm、P31:30×26cm、P32:25×36cm、P33:25×17cm、P34:35×32cm、P35:23×13cm、P36:27×32cm、P37:35×41cm、P38:32×43cm、P39:25×29cm。

遺物出土状態　1は置き台として転用されたもの。P5内出土の2・4や床に滑り込むようにして出土した3は本住居に伴う遺物であると考えられる。接合資料a・bは土師器の甕の口縁部片である。cは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表：54頁　出土遺物一覧表：169頁)

床下の状態　掘り方調査の際、版築状に印かれた2枚の床面と複数のPitが検出されたことから最低2回の居住が行われたものと考えられる。このことは、2枚の火床面が検出されたカマド部の所見と一致する。また、遺構平面図中の南壁の破線は、旧住居の壁に相当すると推測される。

時　代　7世紀後半

白倉A103号住居

位　置　35－24他

遺　構　図50　PL30・31　**遺　物**　図202　PL97

面　積　28.2m²　**主軸方位**　N－10°－W

形　状　短辺5.0～長辺5.4mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は12～20cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。結晶片岩の支脚が検出された。構造材は小礫を多く含む土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、65×50×88cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模(径×深さ)は、P1:25×31cm、P2:22×5cm、P3:20×59cm、P4:28×31cm。

壁周溝　掘り方調査の際に部分的に検出された。

遺物出土状態　1の甕はほぼ完形である。図化した遺物はいずれも住居廃絶時に近い段階を示していると思われる。接合資料aは土師器の坏の破片である。（遺物観察表：55頁　出土遺物一覧表：169頁）

床下の状態　掘り方調査の際、壁に直交する根太状の痕跡が検出された。

重　複　117号住居（6世紀前半）と重複するが、土器の時期もいっしょで先後関係は不明。117号住居の床面の方がかなり低い。また、東側20～30cmに同時期（6世紀前半）の112号住居が検出されている。

備　考　焼失住居と思われ、焼土の堆積と炭化材が検出されている。本住居を含め3軒の住居が6世紀前半で同時に存在し得ない位置で検出されている。この点については、117号住居の事実記載の際考えてみたい。

時　代　6世紀前半

白倉A区104号住居

位　置　31—25他

遺　構　図51　PL31　**遺　物**　図202　PL97

面　積　17.7㎡　　**主軸方位**　N－7°－E

形　状　短辺3.6～長辺4.1mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は5～43cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅は手前が31cm、奥が25cm、焚口高は21cmで、両袖から袖石が左右2個ずつ検出され、その間に真ん中で割れて、落ちている天井石が置かれたようである。支脚も検出された。石材はすべて結晶片岩で、その他の構造材はローム質土壌である。尚、手前の左右袖石を結ぶラインと壁のラインは平行になっていない。

貯蔵穴　未検出ではあるが、掘り方調査の際に検出したP5及びP6が該当すると考えられる。

柱　穴　6本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：38×52cm、P2：29×57cm、P3：36×59cm、P4：28×44cm、P5：34×23cm、P6：35×20cm。

遺物出土状態　2の甕及びカマド出土の坏（3）は住居廃絶に近い段階もしくは、遺棄された遺物であろう。また、南西隅でこも編石がまとまって出土している。（遺物観察表：55・56頁　出土遺物一覧表：170頁）

床下の状態　床下土坑が2基検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：140～119×14cm、B土坑：106～88×12cm。

重　複　105号住居（6世紀前半）・106号住居（6世紀前半）・土層断面より→104号住居

時　代　6世紀後半

白倉A区105号住居

位　置　33—24他

遺　構　図52　PL31　**遺　物**　図203　PL98

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N－11°－W

形　状　短辺4.9～長辺5.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は23～35cm。床面は最大4.5cmの比高がある。

覆　土　人為的な埋土の可能性がある。

カマド　104号住居に破壊されているが恐らく北カマドであろう。

貯蔵穴　円形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、65×45×54cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：25×46cm、P2：38×60cm、P3：30×66cm、P4：32×49cm。いずれも掘り方調査の際に検出された。

遺物出土状態　1～3の甕は貯蔵穴周囲で出土しており、遺棄されたものと推測される。2の甕は逆位で伏せた状態で検出された。貯蔵穴底面や南壁隅で、こも編石がまとまって出土している。（遺物観察表：57頁　出土遺物一覧表：170頁）

重　複　105号住居・104号住居にカマドが破壊されていることから→104号住居（6世紀後半）　本住居と同時期の106号住居（6世紀前半）と重複するが、先後関係は不明である。

備　考　住居中央南寄りで検出された焼土は床面から10cm程度の厚さを持つ覆土である。炭化材の様子から考えると、焼失住居の可能性があり、焼土は部分的に屋根を覆っていた土が焼土化したものと考えられる。

時　代　6世紀前半

白倉A区106号住居

位　置　31—24他

遺　構　図53　PL31・32　**遺　物**　図203　PL98

面　積　—㎡　　**主軸方位**　N－86°－E

形　状　短辺3.5～長辺3.8mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は16～28cm。床面は最大6.5cmの比高がある。北東隅には粘土が堆積している。

カマド　東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は36cm、焚口高は21cmで結晶片岩の両袖石と、同じく結晶片岩の天井石が袖石の手前に置くようにして検出された。支脚は痕跡のみ（⑭層）が検出された。その他の構造材はローム質の土壌と他に完形の甕が2個体（1と2）が検出された。

貯蔵穴　円形を呈する。上面方形の窪みがあり、中心は円形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、70×60×58cmである。

柱　穴　P1:36×55cm、P2:39×52cm、P3:30×24cm、P4:32×37cm。いずれも掘り方調査の際に検出された。

遺物出土状態　カマド右袖脇の甕（1と2）は、横位・斜位で検出されており、カマド材として使用された可能性が強い。また、3の甕の一部と6の坏はカマド左袖掘り方部分からの出土である。4の甑は、恐らく本来的には、遺構平面図の絵で表現されている部分に逆位に置かれていたものであったと考えられる。5の坏は、本住居の廃絶時を示す資料であろう。（遺物観察表：58頁　出土遺物一覧表：170頁）

床下の状態　床下土坑が3基検出された。B・C土坑内には粘土が充填されていた。規模（径×深さ）は、A土坑：137～〈97〉×13cm、B土坑：30～27×—cm、C土坑：36～31×—cm。

重　複　106号住居・土層断面から→104号住居（6世紀後半）　本住居と同時期の106号住居（6世紀前半）と重複するが、先後関係は不明である。

時　代　6世紀前半

白倉A区107号住居

位　置　36—28他

遺　構　図54　P L32　**遺　物**　図204　P L98

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—75°—E

壁と床面　残存壁高は9～10cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

柱　穴　2本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：49×62cm、P2：50×76cm。

遺物出土状態　1の坏は廃絶時に近い遺物であろう。石製模造品が2点出土している。（遺物観察表：59頁　出土遺物一覧表：170頁）

重　複　65・66号土坑（縄文時代）→107号住居→64号土坑（奈良時代）

備　考　床面直上に近い状態で炭化材が検出されており、焼失住居の可能性が強い。

時　代　6世紀前半

白倉A区109号住居

位　置　34—19他

遺　構　図54　P L32　**遺　物**　図204　P L—

面　積　(14.4) m²　　**主軸方位**　N—3°—E

形　状　短辺3.5～長辺3.6mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は20～23cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。構造材はローム質土壌である。

貯蔵穴　円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、56×52×82cmである。尚、掘り方調査の際に検出されている。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1:30×49cm、P2:27×27cm、P3:28×9cm、P4:28×42cm。

遺物出土状態　1の甕は住居中央部からの出土。（遺物観察表：59頁　出土遺物一覧表：170頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：102～91×14cm。

備　考　炭化材が検出しており、焼失住居の可能性がある。

時　代　古墳時代後期ではあるが細別時期不明。

白倉A区112号住居

位　置　35—23他

遺　構　図55　P L33　**遺　物**　図204　P L98

面　積　12.8m²　　**主軸方位**　N—4°—W

形　状　短辺3.1～長辺3.7mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は16～34cm。床面は最大4cmの比高がある。

覆　土　あるいは人為的な埋土なのかもしれない。

カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は39cm、焚口高は17cmで結晶片岩の両袖石と天井石が鳥居状に組んだ状態で検出された。支脚は倒れた状態で検出された。その他の構造材は粘土とロームである。

貯蔵穴　隅丸方形を呈する。東辺に沿って大型礫を

配している。規模(長軸×短軸×深さ)は、52×45×49cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模(径×深さ)は、P1：32×33cm、P2：32×14cm、P3：39×31cm、P4：27×33cm。いずれも掘り方調査の際検出された。

遺物出土状態　1の坏は床面直上に近いが住居中央に近い位置の出土で必ずしも住居廃絶時を示す資料ではない。2は桃の炭化種子である。接合資料aは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：59頁　出土遺物一覧表：170頁)

重　複　117号住居（6世紀前半）・117号住居のカマドの一部を112号住居が破壊することから→112号住居　尚、西側20～30cmに本住居と同時期の103号住居（6世紀前半）が検出されている。

備　考　103・112・117号住居はいずれも6世紀前半で、位置関係から同時には存在し得ない。この点については117号住居事実記載で触れることにする。

時　代　6世紀前半

白倉A区113・114号住居

位　置　33−23他

遺　構　図56　PL33　**遺　物**　図204　PL98

面　積　−㎡　　**主軸方位**　113号住居N−90°−E　114号住居　N−118°−E

形　状　113号住居・短辺3.8mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は113号住居は最大17cm、114号住居は最大8cmである。

カマド　113号住居は不明。114号住居は痕跡が東壁で検出された。

貯蔵穴　円形を呈する。掘り方調査の際に検出された。調査時には、113・114号住居貯蔵穴として調査したが、位置から114号住居に伴う。規模(長軸×短軸×深さ)は、40×35×〈64〉cmである。

遺物出土状態　炭化材は、出土レベルから113号住居に伴うものと考えられる。図化した1の甕及び2の坏は114号住居貯蔵穴出土である。(遺物観察表：60頁　出土遺物一覧表：171頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。どちらの住居に伴うかは不明である。土坑覆土はローム ブロックを斑状に含む土層。規模（径×深さ）は、A土坑：132～118×12cm。

重　複　113・114号住居→102号住居（奈良時代）

113号住居と114号住居との関係は不明であるが、113号住居の床面の方が低く、113号住居覆土中に114号住居床面が見あたらないことから114号住居→113号住居の先後関係が想定されるが残存状態が悪く確かなことは言えない。また、大きな3つの時期不明の攪乱による破壊も著しい。

備　考　113号住居は焼失住居と考えられる。

時　代　113号住居は古墳時代後期であるが細別時期不明。114号住居は貯蔵穴出土土器型式から6世紀後半。

白倉A区115号住居

位　置　33−21他

遺　構　図56　PL34　**遺　物**　図204　PL−

面　積　−㎡　　**主軸方位**　N−5°−E

形　状　短辺〈2.1〉～長辺4.2mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は6～41cm。床面は最大9cmの比高がある。東側は10号溝に破壊され、南側は11号溝に破壊される。

カマド　検出されていない。出土土器から考えて炉を有する住居であったと思われる。

遺物出土状態　覆土土層に大型の礫が多く出土している。炭化材の出土傾向も礫と似ている。接合資料aは土師器の甕の口縁片である。(遺物観察表：60頁　出土遺物一覧表：171頁)

重　複　115号住居→10号溝（中近世）・11号溝（時期不明）

備　考　本来は既刊『Ⅲ』の報告書で扱うべき住居であるが遺漏れしてしまった。

時　代　5世紀前半

白倉A区116号住居

位　置　32−23他

遺　構　図58　PL34　**遺　物**　図204　PL98

面　積　(12.9) ㎡　　**主軸方位**　N－4°－E

形　状　短辺3.2～長辺3.5mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は1～14cm。床面は最大11cmの比高がある。南西部分に時期不明の攪乱がある。また、残存状態が悪く床面上に細かな耕作に伴う攪乱がみられた。

覆　土　褐色土が僅かに覆っていた。

カマド　検出されていない。あるいは炉があったかもしれない。

貯蔵穴　隅丸方形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、65×60×60cmである。

遺物出土状態　図化した遺物の中で、1の甕は8世紀に帰属する。出土位置から考えて、攪乱の年代を示す遺物と思われる。他の遺物は5世紀後半に帰属しよう。(遺物観察表：60頁　出土遺物一覧表：171頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：140～115×14cm。

備　考　本来は既刊『III』の報告書で扱うべき住居であるが遺漏れしてしまった。また、8世紀代の攪乱であるが方形を呈しており、住居の可能性もある。

時　代　5世紀後半

白倉A区117号住居

位　置　36－23他

遺　構　図57・58　PL34　**遺　物**　図205　PL98

面　積　－㎡　　**主軸方位**　N－2°－E

形　状　短辺〈2.4〉～長辺7.2mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は18～41cm。床面は最大2.5cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅は38cm、焚口高は28cmで結晶片岩の左袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材はロームを主体とし、また、右袖内側にも礫が使用されている。崩れた状態で検出しているため不明な点が多いが、天井石は前方に落ちた状態であった。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。周辺が方形に5cm程度窪み、その中に長方形の土坑を掘り込んでいる。規模（長軸×短軸×深さ）は、84×55×74cmである。

柱　穴　2本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：56×51cm、P2：61×74cm。この2本は掘り方調査時に検出された。

壁周溝　残存部分で検出された。

遺物出土状態　1・2の甕及び入れ子状になって検出された4・5の小型甕はカマドに懸けられた可能性が強い。また、6はP1内から出土し、3は出土位置から住居内に遺棄されたものであると考えられる。接合資料a・bは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：61・62頁　出土遺物一覧表：171頁)

重　複　117号住居・カマドの一部分を112号住居が破壊することより→112号住居（6世紀前半）　また、同時期の103号住居（6世紀前半）と重複する。103・112・117号住居はいずれも6世紀前半の住居で、112号住居と117号住居は重複関係にあり、103号住居と117号住居は近接することから同時には存在し得ないと思われる。先後関係については117号住居→112号住居の関係は前述したように言えそうである。103号住居と117号住居の出土土器（特に坏）を比較した場合、103号住居の方が古い傾向を有していると思われることから、103号住居→117号住居が想定される。よって3軒の先後関係は103号住居→117号住居→112号住居と考えられる。

備　考　焼失住居と推測される。尚、出土カマド石については成果と問題点の中で触れているので参照してほしい。

時　代　6世紀前半

白倉A区120号住居

位　置　14－9他

遺　構　図58　PL34　**遺　物**　図205　PL98

面　積　－㎡　　**主軸方位**　N－11°－E

形　状　短辺〈1.2〉～長辺2.6mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は18～20cm。床面は最大10cmの比高がある。斜面に立地して東側に流れている。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　図化した坏は8世紀前半に帰属す

る。(遺物観察表：62頁　出土遺物一覧表：130頁)

備　考　本来は既刊『Ⅲ』の報告書で扱うべき住居であるが遺漏してしまった。

時　代　8世紀前半

白倉B区3号住居

位　置　26―30他

遺　構　図59・60　PL35

遺　物　図206・207　PL99

面　積　34.0㎡　　**主軸方位**　N－5°―E

形　状　短辺5.0～長辺5.5mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は32～48cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅は50cm、焚口高は27cmで結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材はローム質の土壌である。甕が2つ(1と2)懸けられた状態で検出されている。また、カマド覆土中から手鎚形土製品(21)が出土している。右袖外側基部では小型甕(8)の上に小型甑(10)が置かれていた。

貯蔵穴　隅丸方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、80×78×76cmである。①土層は裏込めした土と考えられる。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：38×93cm、P2：42×82cm、P3：45×77cm、P4：40×82cm。

壁周溝　検出された。

遺物出土状態　焼失住居で遺棄されたと考えられる土器が多い。カマド部分はカマド事実記載を参照してほしい。4(甕)の接合関係は焼失時に破壊された様子を示すものと推測される。貯蔵穴周辺の完形土器や壁周辺の完形土器及びカマド周辺の土器は恐らく遺棄されたものである。5・6の甕は置き台として再利用されたものと考えられる。尚、約2.5m南側に位置する10号住居との間で4例の接合事例が確認された。7・12・18は10号住居一括出土土器と接合し、11は10号住居の出土位置を記録した土器と接合している。また、カマド材として用いられたと思われる礫が多く出土している。接合資料a・bは土師器の甕の胴部片で、cは土師器の甑の破片で、dは縄文土器(黒浜式)の胴部片で3号住居と10号住居覆土一括取上の破片が接合した。(遺物観察表：62・63・64頁出土遺物一覧表：171頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(形×深さ)は、A土坑：175～120×39cm。

備　考　焼失住居。10号住居との共通点がかなり多いが、その点については10号住居備考にまとめたので参照してほしい。

時　代　6世紀前半

白倉B区10号住居

位　置　28―30他

遺　構　図61・62・63　PL36

遺　物　図208・209　PL99・100

面　積　57.7㎡　　**主軸方位**　N－1°―E

形　状　短辺7.2～長辺7.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は65～68cm。床面は最大4cmの比高がある。

覆　土　②土層は人為的な土層の可能性がある。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。2つ懸けの甕が鳥居状に組まれたカマドに固定されていた様子が良くわかる。焚口幅は55cm、焚き口高は75cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材は左袖付け根部分(外側)には多くの礫が集積されていた。

貯蔵穴　円形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、68×71×114cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：50×73cm、P2：42×78cm、P3：43×61cm、P4：42×80cm。

遺物出土状態　カマドに懸けられていた甕(1・2)やカマド出土の手鎚形土製品(18)及び壁際の坏(12)などは失火時にその位置にあったものと考えられる。土錘(19)は掘り方調査の際に出土した。また、3号住居の7・12・18は、本住居一括出土土器と接合し、3号住居の11は本住居内出土位置を記録した土器と接合している。接合資料aは土師器の甕の底部片である。(遺物観察表：64・65・66頁　出土遺物

一覧表：171頁）

床下の状態　北壁が全体的に掘り窪められている。

重　複　10号住居→2・15号住居（8世紀前半）→6号住居（8世紀後半）

備　考　多量の炭化材が検出された焼失住居である。炭化材の出土状態（図62）を観察すると、ある程度建築材としての部位が特定できるものが存在する。P1とP2を結ぶ材（試料№234）及び前述の材と直交するP2から西側にのびる材（試料№231）は梁や桁として使用されたと考えてよい。またP1から南東に倒れたと思われる材（試料№235）はP1の柱で、同様にP4から南東に倒れた材はP4の柱の可能性が強い。P1・P4の柱材（試料№223）は他の炭化材の上にのっており、最後に倒れたかのような状況である。また、西側ではヨシ属の炭化材（試料№237））が検出されている。屋根材と考えられる。また、意外に床面直上の材が少なく、先述した梁や桁なども床面からかなり浮いていた。また、床面からの高さを必要に応じて記載したので参考にしてほしい（単位cm）が、1つの材でもかなりのレベル差が存在する（例えば、P1の柱材・梁・桁）。焼失時に木が崩れた状況を反映していると考えられる。また、約2.5m北側に位置する3号住居は、住居主軸・出土土器の時期（6世紀前半）・カマド出土手鎌形土製品・掘り方形状・炭化材分析（Ⅳ－1）参照・焼失住居であること・住居間接合の事例など共通点が多く、有機的な関係を想定させる。同時に存在し、焼失時期も近接すると推測できる。

時　代　6世紀前半

白倉B区12号住居

位　置　29―33他

遺　構　図64・65　PL37

遺　物　図209・210　PL100・101

面　積　(28.8) ㎡　　**主軸方位**　N－3′－W

形　状　短辺4.9～長辺5.4mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は26～41cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は42cm、焚口高は22cmで結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出カマド石は鳥居状に組まれ、天井石は真ん中で割れていた。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。P1から東壁にかけてかに高まりを持つ。規模（長軸×短軸×深さ）は、94×86×70cmである。

柱　穴　4本検出された。規模（径×深さ）は、P1：43×81cm、P2：37×73cm、P3：39×55cm、P4：38×60cm。

壁周溝　重複部分以外では検出された。

遺物出土状態　カマドに懸けられた甕（3）や貯蔵穴周りの甕（1・2）さらにカマド袖の小型甕（4）などは住居に遺棄されたものであろう。南東隅で、こも編石がまとまって出土している。接合資料a・b・cは、土師器の甕の胴部片である。（遺物観察表：67・68頁出土遺物一覧表：172頁）

床下の状態　床下土坑が2基検出された。B土坑は、掘り方の際に検出されたが、もう1つの貯蔵穴と推測される。規模（径×深さ）は、A土坑：130～114×20cm、B土坑：79～75×78cm。

重　複　12号住居→11号住居（9世紀前半）

時　代　6世紀前半

白倉B区16号住居

位　置　24―41他

遺　構　図65・66　PL37

遺　物　図211・212　PL101・102

面　積　―㎡　　**主軸方位**　N－3′－E

形　状　短辺〈2.7〉～長辺5.1mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は49～56cm。床面は最大3cmに比高がある。

カマド　検出されていない。

柱　穴　2本検出された。規模（径×深さ）は、P1：30×70cm、P2：40×64cm。

壁周溝　調査部分では検出されている。

遺物出土状態　床面近くの土器で完形に近いものが多く出土した。また、明らかに住居に流入したような出土状態を示す坏（11・16・18・19）などもあった。ま

た、エレベーション図で示した住居南東隅出土の砂岩は（B－B′）、床面から浮いた状態で出土している。中央が赤化しており、明らかに天井石として使用された痕跡が確認できる。埋没過程で投棄されたものであろうか。また、2・8の甕は隣接地の地権者の方から農作業中に一部が出土したと連絡を受け、部分的に広げ調査し、出土したものである。（遺物観察表：68・69・70頁　出土遺物一覧表：172頁）

備　考　炭化材が多く検出されており焼失住居である。

時　代　6世紀前半

白倉B区17号住居

位　置　30—39他

遺　構　図67・68　P L38

遺　物　図212　P L102

面　積　（46.2）㎡　　**主軸方位**　N—92′—E

形　状　短辺6.2〜長辺7.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は55〜75cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド　検出できなかったが、恐らく東カマドであろう。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、81×69×82cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：33×35cm、P2：37×62cm、P3：39×86cm、P4：32×81cm。P1は1号土坑内で検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴付近の完形土器は住居に遺棄されたものと考えられる。接合資料a・b・c・dは土師器の甕の破片である。(遺物観察表：70頁　出土遺物一覧表：172頁)

重　複　17号住居→1号土坑（平安時代）

備　考　西側に多くの炭化材が検出されており、焼失住居であろう。西壁際中央から僅かに南に寄った位置で茅状の炭化材（炭化材分析Ⅳ－1によればヨシ属）が検出されている。

時　代　6世紀後半

白倉B区20号住居

位　置　28—40他

遺　構　図69・70・71　P L38

遺　物　図213　P L102・103

面　積　（29.3）㎡　　**主軸方位**　N－5°－W

形　状　短辺5.1〜長辺6.4mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は26〜45cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。右袖の一部しか検出されていない。構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。貯蔵穴の周囲が円形を呈しながら僅かに盛り上がっている。規模（径×深さ）は、76×66×45cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：32×71cm、P2：20×65cm、P3：30×78cm、P4：20×62cm。P4は19号住居内で検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴周辺で出土した完形土器は本住居に遺棄されたものであろう。6の甑は接合痕の刻みや、底部近辺と他の部位の胎土差が明瞭に観察できる。接合資料aは土師器の甑の破片である（遺物観察表：71・72頁　出土遺物一覧表：172頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。A土坑：200〜172×11cm。

重　複　20号住居→18・19号住居（9世紀後半）→4号掘立（時期不明）

備　考　炭化材がまとまって検出されており（図71）、焼失住居と考えられる。P1とP2を結ぶ線上で検出された材は梁と桁と思われる。

時　代　7世紀前半

白倉B区21号住居

位　置　29—41他

遺　構　図70・71　P L39

遺　物　図214・215　P L103・104

面　積　（18.7）㎡　　**主軸方位**　N—102′—E

形　状　短辺2.9〜長辺5.7mの隅丸長方形を呈する。短辺：長辺＝1：2で短辺側にカマドがつく住

居は、この遺跡の当該期ではめずらしい。

壁と床面　残存壁高は8～20cm。床面は最大26cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から南寄りで検出された。焚口幅は34cm、焚口高は28cmで、結晶片岩の両袖石・部分的な天井石・支脚が検出された。その他の構造材は粘土とローム質である。

遺物出土状態　1～4は本住居覆土出土の土器。5～8は重複する22号住居覆土の土器と本住居覆土の土器が接合したもので、接合関係及び土器の時期から恐らく22号住居覆土と考えてよいと思われる。9以降は22号住居覆土の出土遺物である。(遺物観察表：72・73頁　出土遺物一覧表：172頁)

重　複　22号住居（6世紀前半）・土層断面より→21号住居・土層断面より→95号住居（9世紀後半）

時　代　6世紀後半

白倉B区22号住居

位　置　38－41他

遺　構　図72　PL39

遺　物　図214・215　PL103・104

面　積　8.9m²　　**主軸方位**　N－15°－E

形　状　短辺2.5～長辺3.1m隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は16～29cm。床面は最大10cmの比高がある。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。左袖を耕作溝で破壊されている。焚口幅は33cmで、結晶片岩の右袖石・支脚が検出された。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　円形を呈す。貯蔵穴周囲はローム を貼り付けて盛り上がっている。また、貯蔵穴の西脇に小穴が検出された。規模（長軸×短軸×深さ）は、33×35×64cmである。

柱　穴　P1：28×39cm。

遺物出土状態　1～4は、重複する21号住居覆土出土。5～8は本住居と21号住居覆土出土の土器が接合したもので本住居覆土出土と考えてよい。9～22は本住居覆土内出土である。カマドにかかっていた甕(9)と坏(19)及び貯蔵穴南側でまとまって検出された土器群は、本住居に遺棄されたものと考えられる。また、鉢(?)とした7の口唇部は焼成前に整形されている。20は蓋としたが摘部がソケット状を呈しており、用途不明の土器である。(遺物観察表：72・73頁　出土遺物一覧表：172頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：85～73×9cm、B土坑：148～92×13cm。

重　複　22号住居・土層断面より→21号住居（6世紀後半）

備　考　炭化材が多く検出している。焼失住居である。

時　代　6世紀前半

白倉B区23号住居

位　置　28－43他

遺　構　図73・74　PL39・40

遺　物　図215・216　PL104

面　積　27.7m²　　**主軸方位**　N－98°－E

形　状　短辺4.8～長辺5.0mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は42～61cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から南寄りで検出された。焚口幅は43cm、焚口高は24cmで、結晶片岩の両袖石、牛伏砂岩の天井石、支脚は実測№2の甕（底部～胴下部残存）を逆位にして使用したと考えられる。その他の構造材は両袖材に甑(6・7)が割られて用いられている。北壁中央部が抉れ、下位の床面が焼土化していることなどから、北壁に旧カマドがあったと思われる。

貯蔵穴　円形を呈す。床下D土坑は旧住居の貯蔵穴と考えられる。　規模(長軸×短軸×深さ)は、61×58×67cmである。

柱　穴　9本検出された。P1：40×77cm、P2：41×90cm、P3：29×79cm、P4：42×81cm、P5：36×78cm、P6：37×－cm、P7：43×52cm、P8：45×65cm、P9：54×25cm。P5～P8は旧住居の柱穴と思われる。

壁周溝　西及び南壁に沿って検出された。

遺物出土状態　既に述べたように2・6・7はカマド施設の一部として用いられている。また、壁際の完形個体（4・9・10）は本住居に遺棄されたものであろう。3の甕や7の甑は接合痕の刻み図が明瞭に観察できる。接合資料a～dは土師器の甕の胴部片で、e・fは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：74頁　出土遺物一覧表：173頁)

床下の状態　床下土坑が4基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：103～75×9㎝、B土坑：72～69×12㎝、C土坑：54～49×20㎝、D土坑：80～74×74㎝。

重　複　23号住居→8号溝（時期不明）　また、25号土坑（古墳時代後期）との関係は不明である。

時　代　7世紀前半

白倉B区24号住居

位　置　24－38他

遺　構　図75　PL40　**遺　物**　図217　PL105

面　積　－㎡　　**主軸方位**　N－1°－E

形　状　短辺（1.8）～長辺4.5mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は55～60㎝。床面は最大6㎝の比高がある。

カマド　検出されていない。

柱　穴　2本検出されている。P1：43×54㎝、P2：50×43㎝。

遺物出土状態　3の甕は壁際の床面直上で、まとまって出土している。この土器には接合時の刻み目が明瞭に観察できる。4の坏は完形で出土位置から判断して遺棄されたものと思われる。接合資料aは土師器の鉢の破片で、b・cは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：75頁　出土遺物一覧表：173頁)

備　考　床上10～30㎝の高さで、炭化材が出土している。焼失住居と考えられる。

時　代　6世紀後半

白倉B区28号住居

位　置　31－44他

遺　構　図75・76　PL40・41

遺　物　図218　PL105

面　積　(14.6) ㎡　　**主軸方位**　N－102°－E

形　状　短辺2.7～長辺4.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は51～53㎝。床面は最大8㎝の比高がある。

覆　土　覆土の大部分を占める③土層は人為的埋土の可能性が強い。

カマド　東壁の中央から南寄りで検出された。耕作溝によって大部分が破壊されているが、僅かに奥壁部のみ検出された。覆土は焼土ブロックを主体としていた。

柱　穴　4本検出された。P1：37×9㎝、P2：42×8㎝、P3：28×17㎝、P4：40×38㎝。
いずれも、掘り方調査の際に検出され、位置的にも主柱穴とは考えにくい。

壁周溝　壁面が確認された部分では検出されている。

遺物出土状態　床面直上に近い6の坏と10の須恵器の坏蓋は、残存状態も良好なことから本住居に遺棄された可能性が強い。興味深いことに、完形の甕（1）は床面から10㎝以上浮いた状態であった。接合資料aは土師器の丸甕の胴部片で、b・c・eは土師器の甕の胴部片で、dは土師器の甑の口縁片である。fは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：75・76頁出土遺物一覧表：173頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：142～120×29㎝。

備　考　炭化材が多く出土しており(図76)、焼失住居と思われる。炭化材平面図中に示した破線は、調査段階では確認できた材のまとまりである。また、炭化材の脇に付した数値は床面からの高さ（㎝）を示している。屋根材と思われる炭化材(試料№258の一部）も検出されている。

時　代　6世紀後半

白倉B区29号住居

位　置　35－31他

遺　構　図77・78　PL41・42

遺　物　図219　PL105

面　積　(38.0) ㎡　　**主軸方位**　N－1°－E
カマド**主軸方位**　N－14°－W
形　状　短辺5.8～長辺6.2mの隅丸方形を呈する。
壁と床面　残存壁高は27～70cm。床面は最大1cmの比高がある。尚、P1～P4の内側には、厚さ10cm程度のローム塊が検出されている。
カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。珍しく住居主軸とカマド主軸が異なっている。カマド石は島状に組まれていたと思われるが、天井石が2つに割れて落ちかかっている。焚口幅は62cm、焚口高は20cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材は右袖の付け根部分で完形の甕(1)が埋め込まれるようにして検出されている。
貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。周囲には方形の提帯がめぐらされている。規模（長軸×短軸×深さ）は、68×57×115cmである。
柱　穴　12本検出された。規模(径×深さ)は、P1:68×68cm、P2:51×74cm、P3:77×71cm、P4:77×80cm、P5:71×57cm、P6:68×43cm、P7:65×44cm、P8:35×17cm、P9:42×37cm、P10:36×29cm、P11:35×4cm、P12:48×18cm。P1～P4までは主柱穴で、落ち込みの確認が極めて容易であった。主柱穴内側のローム塊と重ね合わせて考えると、ローム塊は柱を抜き取った際に掘り上げた土で、柱を抜き取ったため柱穴が大きく確認が容易であったと考えられる。ローム塊の量と柱穴の大きさも対応するように見受けられる。尚、このようなローム塊及び柱穴確認状況は同区34号住居でも確認されている。また、P5～P12は床下調査の際に検出されているが、いくつかの特徴がある。P5～P7の3本は明らかに上面に張り床の土層が確認できている。また、P11・P12は粘土が入っていた。
壁周溝　ほぼ全周する。南壁以外では壁面に直交するようにして、根太状の痕跡が2カ所ずつ確認された。
遺物出土状態　1は先述したようにカマド構築時を示す土器である。また、3・5・6は出土位置や高さから考えて、住居内に遺棄された土器であろう。尚、重複する30号住居出土遺物との接合事例が3例みられた。実測図はすべて30号住居扱いとしたので30号住居の挿図を見てほしいが、30号住居2・4・11がそれである。30号住居2は29号住居壁際出土の2点と30号住居の1点が接合している。出土レベルは、3点ともに30号住居廃絶時の早い段階でその位置に存在したことになり、29号住居と30号住居の先後関係も29号住居→30号住居の可能性が強いことを示す接合事例である。30号住居4と11については29号住居での出土位置が記録されていないので、詳細は不明である。(遺物観察表：76・77・78頁　出土遺物一覧表：173頁)
床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：135～90×19cm。東壁際では、焼土が確認できたことから（図78H－H′参照）旧段階のカマドがあったと推定できる。興味深いことにこのような複数回の居住を示す状況は柱穴ではみられない。
重　複　30号住居（6世紀後半）と重複する。調査時では、土層断面及び確認時の平面観察から30号住居→29号住居と判断した。しかしながら、出土土器型式は29号住居→30号住居の可能性を示唆する。また、遺物の出土状態の際にも触れたように30号住居2の接合事例も考え合わせれば29号住居→30号住居と考えられる。29号住居の床面が30号住居よりも10cm程度低く、重複部分が壁際1m程度であったことから調査時に誤認したようである。
備　考　右袖付け根部分の甕や、床面上のローム塊など興味深い事例である。また、カマドが東から北へ移動したとすれば、カマド主軸がずれていることとも関係すると推測できる。尚、本住居出土のカマド石についてはV－3で扱っているので参照してほしい。
時　代　6世紀前半

白倉B区30号住居

位　置　36－32他
遺　構　図79　PL42　**遺　物**　図220　PL106
面　積　(26.3) ㎡　　**主軸方位**　N－3°－W

形　状　短辺4.4～長辺4.6mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は7～75cm。床面は最大6cmの比高がある。誤って29号住居を先に調査したため、東壁は推定ラインである。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は25cm、焚口高は40cmで、結晶片岩の両袖石・天井石が検出された。煙道部が僅かに検出されている。

貯蔵穴　不定形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、80×67×57cmである。

柱　穴　8本検出された。規模（径×深さ）は、P1：20×73cm、P2：20×43cm、P3：24×73cm、P4：28×61cm、P5：47×20cm、P6：30×36cm、P7：45×18cm、P8：30×29cm。

壁周溝　西と南壁沿いで確認された。西壁では、直交するように根太状の痕跡が2つ見つかっている。

遺物出土状態　5の坏などは本住居に遺棄されたものであろう。また、重複する29号住居出土土器と2・4・11が接合している。この点については、29号住居記載を参照してほしい。接合資料aは土師器の丸甕の底部片、b・cは土師器の甑の破片である。（遺物観察表：79頁　出土遺物一覧表：173頁）

床下の状態　床下土坑が3基検出された。B土坑の床面には粘土が貼られている。規模（径×深さ）は、A土坑：143×16cm、B土坑：145～135×22cm、C土坑：125～115×16cm。

重　複　29号住居（6世紀前半）→30号住居　調査時は逆に考えたが30号住居の方が新しい。詳しくは29号住居に記載したので参照してほしい。

備　考　炭化材が検出されており、焼失住居である。

時　代　6世紀後半

白倉B区33号住居

位　置　33－32他

遺　構　図80　PL42

遺　物　図220・221　PL106

面　積　－㎡　　**主軸方位**　N－97°－E

調査経過　古墳時代後期の33・34・35・72号住居が複雑に重複している。本住居は（33号住居）は当初72号住居部分も含め一軒の家として調査された。その後、72号住居部分が33号住居の床面よりも30cm程度下がることがわかり72号住居とした。そのため、遺物の取り上げについては33号住居床面部分までは33号住居として取り上げ、重複部分の33号住居床面下の部分から72号住居として取り上げている。そのためか、住居の先後関係も調査時においては72号住居（旧）、33号住居（新）と考えたようである。しかしながら、72号住居部分として取り上げた12（高坏）や13（平瓶）などは比較的新しい様相を持っているし、土層断面も再度検討すると33号住居のA土坑を72号住居が破壊していること、さらに7の甕の接合関係からも33号住居（旧）→72号住居（新）の時間的変遷をたどったと考えるべきであろう。尚、遺物の接合は、33・72号住居を一緒に行った関係上33号住居と72号住居の実測遺物は通し番号としている。また、72号住居は34・35号住居を破壊しており、出土土器からもその先後関係は追認できる。また、奈良時代の33・32号住居との関係であるが32号住居は、33号住居の掘り方部分まで破壊している。31号住居の床面は、33号住居の約20cm上にある。

形　状　短辺〈2.1〉～長辺4.5mの隅丸長方形か。

壁と床面　残存壁高は27～34cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド　検出されていない。

遺物出土状態　調査経過に述べた事情により、72号住居出土遺物も含めて掲載している。1～6は33号住居として、10～13は72号住居として取り上げたもので、7～9は両住居として取り上げたものである。この中で、1～4・6は33号住居が72号住居に破壊される以前に破棄された遺物で、1・2は遺棄された可能性が強い。他の実測遺物は、72号住居廃絶後の遺物であろう。接合資料aは土師器の甕の破片で、bは土師器の小型甕の破片で、cは土師器の丸甕の底部片である。（遺物観察表：79・80頁　出土遺物一覧表：173頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：120×22cm。

重　複　33号住居→72号住居（7世紀後半）→31・

32号住居（奈良時代）　34・35号住居（6世紀前半）→72号住居（7世紀後半）　本住居（33号住居）と34・35号住居との関係は不明だが、出土土器型式から、この古墳時代の住居4軒は34号住居→35号住居→33号住居→72号住居の時間的流れが想定できる。調査経過を合わせて参照してほしい。

時　代　6世紀後半

白倉B区34号住居

位　置　34—31他

遺　構　図81　PL43

遺　物　図221・222　PL106・107

面　積　〈31.0〉㎡　　**主軸方位**　N—3°—W

形　状　短辺5.8～長辺5.9mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は31～45cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド　恐らく北カマドであろう。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、72×61×84cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：54×31cm、P2：（60）×34cm、P3：85×31cm、P4：54×31cm。P2の西側については、裁ち割り調査を行ったので推定である。これらの柱穴は主柱穴で落ち込みの確認が極めて容易であった。また、各柱穴の近くにはローム塊が確認されている。このような事例は先に29号住居でも見られたわけだが、同様に柱を抜き取ったための現象かもしれない。ちなみに29号住居は本住居と同じく6世紀前半で、南東約2mに位置している。

壁周溝　残存部分では、ほぼ検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴の周囲出土の1や5、また壁際の3、P4脇の6などは本住居に遺棄されたものであろう。住居中央で出土した2や4も同様に考えるべきなのかもしれないが、近接する位置で大型礫が床面直上で出土していることを考え合わせると住居廃絶後に捨てられた可能性の方が強いのではなかろうか。刀子(10)が出土している。（遺物観察表：80・81頁　出土遺物一覧表：174頁）

重　複　182号土坑（縄文時代）→34号住居→72号住居（7世紀後半）→32号住居（8世紀前半）このあたりの事情については33号住居の事実記載を参照。

時　代　6世紀前半

白倉B区35号住居

位　置　33—33他

遺　構　図82　PL43

遺　物　図222・223　PL107

面　積　〈13.3〉㎡　　**主軸方位**　N—2°—W

形　状　短辺3.3～長辺4.2mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は38～42cm。床面は最大4cmの比高がある。

覆　土　①層は人為的な埋土か。

カマド　31号住居に破壊されている。

貯蔵穴　円形を呈す。覆土中にはロームブロックの混入が目立つ。規模（長軸×短軸×深さ）は、58×50×82cmである。

柱　穴　2本検出された。規模（径×深さ）は、P1：35×41cm、P2：31×28cm。他の2本の主柱穴は確認できなかった。

壁周溝　検出されていない。

遺物出土状態　貯蔵穴脇の1・6の甕は本住居に遺棄されたものであろう。壁際の坏（9）もその可能性がある。接合資料aは土師器の坏の破片である。（遺物観察表：81・82頁　出土遺物一覧表：174頁）

重　複　35号住居→72号住居（7世紀後半）→31号住居（8世紀後半）住居の規模などから考えて、33号住居とも重複していた可能性が強い。その場合出土土器から判断して35号住居→33号住居の流れが想定される。詳しくは33号住居の事実記載を参照してほしい。

時　代　6世紀前半

白倉B区37号住居

位　置　32—32他

遺　構　図83　PL44

遺　物　図223・224　PL107

面　積　〈13.5〉㎡　　**主軸方位**　N－4°－W
カマド**主軸方位**　N－6°－W
形　状　短辺3.7～長辺4.1mの隅丸方形を呈する。
壁と床面　残存壁高は32～45cm。床面は最大2cmの比高がある。
覆　土　土層断面図を紛失してしまったが写真から判断すると自然堆積の可能性が強い。
カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅50cmで、砂岩の右袖石と、結晶片岩の左袖石・支脚が検出された。
貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、90×83×66cmである。
遺物出土状態　10の坏は支脚の上にのっており、カマド支脚の高さ調整に使われたと考えられる。鼎の破片が2点（5と6）出土している。接合資料aは土師器の甕の胴部片である。b・cは土師器の甑の胴部片である。（遺物観察表：82・83頁　出土遺物一覧表：174頁）
床下の状態　床下土坑が4基検出された。A土坑覆土はロームブロックを主体とする。規模（径×深さ）は、A土坑：70～53×38cm、B土坑：82～70×15cm、C土坑：95×7cm、D土坑：70～58×12cm。
重　複　187号土坑（縄文時代）→37号住居→229号土坑（古墳時代後期）→36号住居（8世紀前半）
時　代　6世紀前半

白倉B区38号住居

位　置　31－32他
遺　構　図84　PL44　**遺　物**　図224　PL－
面　積　6.9㎡　　**主軸方位**　N－10°－E
形　状　短辺2.9～長辺3.3mの隅丸方形を呈する。
壁と床面　残存壁高は42～50cm。床面は最大3cmの比高がある。
カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。構造材はローム質を主体とする。
柱　穴　1本検出された。規模（径×深さ）は、P1：64×16cm。床面精査の段階で確認されたのでP1としたが底面に粘土が覆っていることや深さなどから床下土坑の可能性が強い。
遺物出土状態　1の甕はカマド一括取上の破片とも接合している。（遺物観察表：83頁　出土遺物一覧表：174頁）
床下の状態　床下土坑が1基検出された。前述したようにP1も床下土坑と考えられる。規模（径×深さ）は、A土坑：121～110×26cm。
重　複　175・233号土坑（縄文時代）→38号住居
時　代　7世紀後半

白倉B区45号住居

位　置　30－30他
遺　構　図85・86　PL44・45
遺　物　図225　PL107
面　積　38.0㎡　　**主軸方位**　N－33°－E
形　状　短辺5.8～長辺6.0mの隅丸方形を呈す。
壁と床面　残存壁高は42～51cm。床面は最大4cmの比高がある。南西隅は重複住居によって、東壁は重機による攪乱のよって大きく破壊される。また東壁床面上で粘土がまとまって出土している。
カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅は53cm、焚口高は37cmで、結晶片岩の右袖石・支脚が、砂岩の左袖石・割れた状態の天井石が検出された。その他の構造材は粘土である。
貯蔵穴　不定形を呈す。規模（径×深さ）は、80×87×94cmである。
柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：42×105cm、P2：55×93cm、P3：45×105cm、P4：68×94cm。上面が鍋底状を呈してる。
壁周溝　ほぼ検出されている。
遺物出土状態　住居中央と北東部分に大型礫がまとまって廃棄されている。多くの礫が熱を受けている。また、出土土器はあまり多くなく貯蔵穴出土の甕（1）と甕（6）が廃絶時期に近いものであろう。接合資料a・cは土師器の甕の胴部片である。10は羽口の破片。bは土師器の甑の底部である。（遺物観察表：83・84頁　出土遺物一覧表：174頁）
床下の状態　床下土坑が1基検出された。内部から

粘土が検出されている。また、北・東南辺近くは他の部分より10cm程度深い。規模（径×深さ）は、A土坑：75～56×8cm。

重　複　45号住居→41号住居（8世紀前半）→44号住居（9世紀後半）

時　代　6世紀前半

白倉B区47号住居

位　置　30－34他

遺　構　図87・88　PL45・46

遺　物　図226　PL107

面　積　20.7㎡　　**主軸方位**　N－77°－E

形　状　短辺4.5～長辺4.7mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は61～70cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から僅かに南寄りで検出された。焚口幅は46cmである。

貯蔵穴　楕円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、60×45×80cmである。

柱　穴　4本検出された。調査段階では柱痕が確認された。以下の計測値は掘り方のものである。規模（径×深さ）は、P1：38×70cm、P2：38×72cm、P3：40×46cm、P4：41×69cm。

壁周溝　東辺を除いて検出された。

遺物出土状態　③層上面に遺物は集中するようで、遺棄されたと思われる土器はない。4の甕の接合から埋没時の覆土形成の様子を伺い知ることができよう。接合資料aは土師器の甕の胴部片である。（遺物観察表：84・85頁　出土遺物一覧表：174頁）

床下の状態　北壁を中心にコの字状に掘り窟められている。

重　複　183号土坑（弥生時代）→184号土坑（縄文時代）→47号住居

備　考　炭化材がまとまって検出されており、焼失住居である。

時　代　6世紀前半

白倉B区50号住居

位　置　28－34他

遺　構　図84　PL46　**遺　物**　図227　PL－

面　積　(13.2) ㎡　　**主軸方位**　N－102°－E

調査経過　平安時代の48号住居が入れ子状に重複しており、ほとんど本住居の状況はわからない。

形　状　短辺3.0～長辺3.4mの隅丸方形を呈す。

カマド　位置も含めて不明。

遺物出土状態　器形を復元できた土器は甕1個体（1）のみであった。（遺物観察表：85頁　出土遺物一覧表：175頁）

重　複　50号住居→48号住居（平安時代）

時　代　6世紀後半か

白倉B区51号住居

位　置　34－46他

遺　構　図88　PL46　**遺　物**　図227　PL108

面　積　14.9㎡　　**主軸方位**　N－8°－W

形　状　短辺3.4～長辺3.8mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は38～42cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。右袖及び覆土の大部分を耕作溝によって破壊される。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、70×70×71cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：30×45cm、P2：28×51cm、P3：30×38cm、P4：30×44cm。

壁周溝　ほぼ全周する。

遺物出土状態　南壁際及びP3の周囲でこも編石と思われる礫や袖石に使用されたと思われる礫（P3西側の礫）が出土している。土器は、右カマド袖上で出土した坏（4）などは住居に遺棄されたものと考えられる。9の鋼椀は一括取り上げである。接合資料aは土師器の甕の胴部片である。（遺物観察表：85・86頁出土遺物一覧表：175頁）

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模（径×

深さ）は、A土坑：122～110×38cm、B土坑：138～〈90〉×16cm。

重　複　最近の耕作溝による破壊が著しい。

時　代　6世紀後半

白倉B区52号住居

位　置　33－42他

遺　構　図89・90　PL46・47

遺　物　図227・228・229・230　PL108・109

面　積　(20.0) m²　　**主軸方位**　N－20°－W

形　状　短辺4.2～長辺4.3mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は51～66cmと残りがよい。床面は最大3cmの比高がある。P2の南側には粘土がまとまって出土している。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。鳥居状に組まれたカマドに2つ懸けの甕が置かれ、煙道部には棒状の礫が配置されている。焚口幅38cmで結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出されている。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　不定形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、58×38×72cmである。

柱　穴　3本検出している。規模（径×深さ）は、P1：29×75cm、P2：27×35cm、P3：23×69cm。もう1本の主柱穴は攪乱によって破壊されている。

遺物出土状態　遺構図中に大きさを表示できなかったが、礫は大型のものが多い。カマド前方や住居南側から東にかけての部分では、これら大型礫とともに完形に近い土器も多い。出土レベルが壁際で高く中央に向かうように従って低くなることから、まとまって廃棄されたものであろう。他の住居のカマド材に由来するものも多いのではなかろうか。その中で本住居カマドに使用された2・3・12・25（2の甕の中には12の小型甕が逆位で入っていた）置き台として再利用された13、その上に置かれた小型甕(11)、さらにその上の小型甑(18)、また貯蔵穴脇の1などは本住居に遺棄されたものであろう。(遺物観察表：86・87・88頁　出土遺物一覧表：175頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：172～120×13cm。

備　考　攪乱は昭和30年代のリンゴ苗木を保管するための施設である。炭化材が僅かに出土している。焼失住居と考えられる。

時　代　6世紀前半

白倉B区54号住居

位　置　34－34他

遺　構　図91・92・93　PL48

遺　物　図230・231　PL109

面　積　52.3m²　　**主軸方位**　N－7°－W

形　状　短辺6.8～長辺6.9mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は70～73cm。床面は最大3cmの比高がある。カマド右脇及び西壁沿いには、厚さ10cm程度の焼土層が確認された。場所によっては壁が焼土化していた。

覆　土　①⑤⑥層は自然堆積で②～④層は人為的な埋め戻しの可能性がある。

カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。焚口幅は53cm、焚口高は60cmで結晶片岩の両袖石・天井石が検出された。また、右袖石脇に小さな砂岩が用いられている。その他の構造材は天井石の上にさらに2つの砂岩が出土している。カマド前方にも同様の礫が出土している。袖石の状況は右側に倒れた様子を示していた。

貯蔵穴　2基検出された。いずれも隅丸方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ)は、1号貯蔵穴：55×52×55cm、2号貯蔵穴：60×48×89cm。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：45×75cm、P2：44×72cm、P3：36×74cm、P4：47×58cm。

壁周溝　ほぼ全周する。

遺物出土状態　2号貯蔵穴脇出土の甑（4）の中には小型甕が2個体（2・3）入っていた。2は逆位で甑の口縁部近くに入っていた。この3個体は出土レベル・位置から住居に遺棄されたものと思われる。8の坏は壁に貼り付くようにして出土している。手鎚形土製品(15)はカマド覆土出土だが一括取上のため位置は確認できない。同区3号住居・10号住居に続

いて3例目の出土である。ちなみに3軒ともに6世紀前半である。7（鉢）であるが、口唇部に刻みがあり、内外面に焼成前に刻んだ際できた粘土の盛り上がりが観察できる。口唇部に接合して剝がれた痕跡は見られない。よって、この土器は丸甕底部に刻み目を施した段階で焼成し、鉢などに用いられた土器と思われる。丸甕の製作過程を考える上で、示唆に富む資料である。尚、7は覆土一括取上で出土位置は確定できない。（遺物観察表：88・89・90・91頁　出土遺物一覧表：175頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：100〜92×12cm。

備　考　カマド石についてはV－3で扱っているので参照してほしい。焼土層が形成されていることから焼失住居の可能性もあるが、炭化材は検出されていない。

時　代　6世紀前半

白倉B区55号住居

位　置　33－44他

遺　構　図94　PL49

遺　物　図232・233　PL110

面　積　22.3㎡　　**主軸方位**　N－9°－W

形　状　短辺4.2〜長辺4.3mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は42〜62cm。床面は最大2cmの比高がある。

P1の東側で検出された粘土は、厚さ1〜4cm程度であった。

カマド　北壁の中央で検出された。焚口幅32cm、焚口高は45cmで結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。天井石は中央で割れて右袖石下（前方）に落ちている。煙道が部分的に確認できた。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、68×38×50cmである。甕（2）と甑（7）の出土状態から、廃絶時には既に埋まっていたと考えられる。

柱　穴　4本検出された。規模（径×深さ）は、P1：33×60cm、P2：30×63cm、P3：28×72cm、P4：27×48cm。

壁周溝　南壁及び東壁に沿って検出されている。

遺物出土状態　カマド内出土の1・10や貯蔵穴上の2・7などは住居内に遺棄されたものと考えられる。同様に左袖脇出土の3枚重ねの坏（上から12・13・14）や甕（5）の上に重ねた状態で出土した甑（8）も住居内に遺棄されたものと考えられる。3は置き台として再利用されたものである。鉢（?）とした9の土器は、甑底部未完成品を焼成した可能性がある。（遺物観察表：91・92頁　出土遺物一覧表：175頁）

時　代　6世紀後半

白倉B区56号住居

位　置　32－48他

遺　構　図95　PL49　**遺　物**　図233　PL110

面　積　11.2㎡　　**主軸方位**　N－90°－E

形　状　短辺3.1〜長辺3.3mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は10〜35cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　東壁の中央から南寄りで検出された。構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、47×42×73cmである。

遺物出土状態　住居内に遺棄されたと考えられる土器はないが、出土位置から住居廃絶に近い時期と思われる。また、木の葉形坏が一点出土する。7の有孔土製品については縄文時代に帰属する可能性もある。（遺物観察表：92頁　出土遺物一覧表：175頁）

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：146〜124×45cm。

重　複　254号土坑（古墳時代後期）と重複するが関係は不明である。

時　代　6世紀後半

白倉B区58号住居

位　置　33－39他

遺　構　図96　PL50

遺　物　図234・235　PL111

面　積　（37.4）㎡　　**主軸方位**　N－6°－W

形　状　短辺5.5〜長辺5.8mの隅丸方形を基本とす

るが南側に130cmほどの張り出し部を持つ。

壁と床面　残存壁高は49～64cm。床面は最大7cmの比高がある。張り出し部の底面には粘土が貼ってある。また、住居本体と張り出し部が接する東側では粘土ブロックが床面直上で検出された。また、P3の南側にはローム塊が検出さている。57号住居と重複するが本住居の床面の方が低く、ほぼ形状が確認できた。

カマド　北壁の中央で石袖の一部が検出された。構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、80×70×70cmである。

柱　穴　5本検出された。規模(径×深さ)は、P1：61×64cm、P2：55×58cm、P3：58×69cm、P4：55×63cm、P5：61×20cm。

壁周溝　張り出し部を除けば、ほぼ検出された。

遺物出土状態　カマド右袖脇の甕（1）や、貯蔵穴周囲の土器（2・3・4）などは本住居に遺棄されたものと考えられる。高坏(23)や、その中に入れられた坏(8)も同様である。7の坏はP4覆土内からの出土である。(遺物観察表：92・93・94頁　出土遺物一覧表：176頁)

重　複　59号住居（時期不明）→58号住居→57号住居（9世紀後半）

備　考　攪乱は昭和30年代のリンゴ苗の穴。張り出し部を有する住居は本遺跡調査区内では唯一である。

時　代　6世紀前半

白倉Ｂ区59号住居

位　置　33－29他

遺　構　図96　ＰＬ－　**遺　物**　図－　ＰＬ－

調査経過　古墳時代後期の58号住居に大部分を破壊され、本来あるべき遺構の西側一部が検出されたにすぎない。残存壁高は10cm前後で覆土も僅かであった。出土遺物はなく、時期を確定できない。重複関係から、下限を58号住居時期に設定できるため、本報告書の中で取り扱うこととした。

白倉Ｂ区61号住居

位　置　36－46他

遺　構　図97　ＰＬ51

遺　物　図235・236　ＰＬ111・112

面　積　14.5㎡　　**主軸方位**　Ｎ－7°－Ｅ

形　状　短辺3.4～長辺4.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は52～55cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出された。カマド両袖先端部には2つの小穴が確認された。黒色土が覆土で袖石が抜き取られた痕跡と考えられる。構造材はローム質の土壌である。

壁周溝　北側では検出されなかった。

遺物出土状態　こも編石がまとまって検出している。また、北壁に近い位置で出土した完形個体（1・4・8・11・12）は、本住居に遺棄されたものであろう。接合資料ａは土師器の甑の胴部片で、ｂは土師器の坏の破片である。(遺物観察表：94・95・96頁　出土遺物一覧表：176頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ）は、Ａ土坑：144～130×25cm。

重　複　62号住居（6世紀後半）・土層断面から→61号住居→60号住居（9世紀後半）

時　代　7世紀後半

白倉Ｂ区62号住居

位　置　36－46他

遺　構　図98　ＰＬ51

遺　物　図236・237　ＰＬ112

面　積　(26.3) ㎡　　**主軸方位**　Ｎ－30°－Ｅ

形　状　短辺4.5～長辺5.1m。床面は最大4cmの比高がある。床面上で数カ所粘土が検出されている。いずれも床面直上1cm程度の厚さである。

カマド　北壁の中央で左袖の一部が検出された。結晶片岩の袖石が検出された。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸方形を呈す。規模(長軸×短軸×深さ）は、62×61×80cmである。

柱　穴　4本検出された。P1：30×59cm、P2：25×83cm、P3：35×68cm、P4：42×49cm。

壁周溝　東西壁に沿って検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴から出土した小型甕と小型甑（1・5）は遺棄されたものか、あるいは廃絶時に近い遺物と考えられる。接合資料aは丸甕の胴部片である。(遺物観察表：96・97頁　出土遺物一覧表：176頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。西壁に直交するように根太状の痕跡が検出されている。規模（径×深さ）は、A土坑：120～104×31cm。

重　複　156・294号土坑（古墳時代前期）→62号住居→61号住居（7世紀後半）→60号住居（9世紀後半）→292号土坑（時期不明）292号土坑については既刊の報告で古墳時代前期としたが、本住居のカマドを破壊することから時期不明としたい。また、60号住居ラインは繁雑になるので加えなかったが、61号住居図（図97）に加えてあるので参照してほしい。

時　代　7世紀後半

白倉B区65号住居

位　置　33—40他

遺　構　図99　P L51・52

遺　物　図237・238　P L112

面　積　23.1m²　　**主軸方位**　N—98°—E

カマド主軸方位　N—128°—E

形　状　短辺3.7～長辺5.2mの隅丸長方形を呈す。カマドがコーナーにあることや、極端な長方形プランなど、この時代としては例外的な形状である。

壁と床面　残存壁高は14～37cm。床面は最大9cmの比高がある。床面中央近くの焼土部分は焼土の堆積ではなく焼け込みにより赤化した部分である。

カマド　東壁の南に寄った位置で検出された。焚口幅は50cm、焚口高は21cmで、砂岩の両袖石と天井石が検出されている。天井石は左前方に落ちた状態であった。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、62×55×55cmである。

遺物出土状態　住居壁際近くの床面直上から完形個体が多く出土している。焼失住居であることを考え合わせると失火時の状況が反映されたものではないかと考えられる。6（鉢）は丸甕の底部未完成品を焼成したものと思われる。また、底部に木葉痕を持つ坏が出土しているが、これらの坏は外面にひび状の痕跡が見られる。同様の坏は、本住居の3.2m東側に位置する65号住居（本住居と同じく6世紀後半）からもまとまって出土している。炭化材も良好に残り壁際のものは、壁に掛かった状況で中央部に向かってレベルが低くなって出土している。北西部分で茅状の炭化材が多く出土している。(試料262・263で炭化材分析Ⅳ－1によればクマシデ属とのことである。)接合資料a・bは土師器の甑の口縁片である。(遺物観察表：97・98頁　出土遺物一覧表：176頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模（径×深さ）は、A土坑：187～75×26cm。

重　複　65号住居→64号住居（平安時代）

備　考　焼失住居である。

時　代　6世紀後半

白倉B区69号住居

位　置　35—49他

遺　構　図100　P L52　**遺　物**　図238　P L113

面　積　24.2m²　　**主軸方位**　N—10°—W

形　状　短辺4.2～長辺4.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は35～57cm。床面は最大3cmの比高がある。

カマド　北壁の中央で検出されたが大部分をイモ穴状土坑に破壊される。左袖のみ残存している。

貯蔵穴　不定形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、62×50×56cmである。

柱　穴　4本検出された。規模(径×深さ)は、P1：34×52cm、P2：26×61cm、P3：22×58cm、P4：28×52cm。

壁周溝　ほぼ全周する。

遺物出土状態　出土土器はあまり多くないが木の葉形坏（3・4）が注目される。3と5の坏は出土位置から考えて、住居に遺棄されたものと考えられる。

4については一括取上のため出土土器位置が不明である。(遺物観察表：98頁　出土遺物一覧表：176頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：175～145×8㎝。

重　複　256号土坑（古墳時代後期）→69号住居

時　代　6世紀後半

白倉B区70号住居

位　置　34―39他

遺　構　図98　PL52・53

遺　物　図239　PL113・114

面　積　〈7.0〉㎡　　**主軸方位**　N－5°－E

形　状　短辺2.3～長辺2.7mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は24～26㎝。床面は最大4㎝の比高がある。

カマド　北壁が大きく破壊されていることから北カマドであったと考えられる。

壁周溝　残存部では全周する。

遺物出土状態　住居南壁近くで16個体の坏が重ねて検出されている。いずれも床面から10㎝ほど上の部分であることから住居埋没の早い段階で置かれたものと考えられる。この16個体の坏は類例をあまり見ないが住居東壁際出土の坏(9)も同じ形状である。この坏(9)と西壁近くの坏(2)は本住居に遺棄されたもので2の坏が年代を示してくれると考える。この特徴的な坏は、本住居の西側3.2mに位置する65号住居からもまとまって出土している。(遺物観察表：99・100頁　出土遺物一覧表：176頁)

備　考　撹乱は昭和30年代のリンゴ苗に関する土坑である。本住居と同種の坏がまとまって出土した65号住居は、本住居と同じく6世紀後半である。主軸方位などは、全く異なっている。

時　代　6世紀後半

白倉B区72号住居

位　置　33―32他

遺　構　図101　PL53

遺　物　図220・221　PL106

面　積　(11.6)㎡　　**主軸方位**　N－94°－E

調査経過　33号住居の事実記載に経過を述べたので参照してほしい。

形　状　短辺2.9～長辺3.4mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は29～62㎝。床面は最大6㎝の比高がある。

カマド　北壁の中央で右袖の一部が検出された。大部分を32号住居に破壊される。構造材は灰色粘土を主体とする。

貯蔵穴　楕円形を呈する。規模（径×深さ）は、83～74×72㎝である。

遺物出土状態　33号住居と重複する関係で33号住居の遺物図版に出土遺物を掲載しているので、そちらを見ていただきたい。5・7～13が本住居廃絶後の遺物であろう。11の坏は古い様相を持っており、周辺住居に由来するのではなかろうか。接合資料aは土師器の甕の胴部片で、bは土師器の小型甕の胴部片で、cは土師器の丸甕の底部片である。(遺物観察表：79・80頁　出土遺物一覧表：176頁)

重　複　34・35号住居（6世紀前半）→33号住居（6世紀後半）→72号住居→31・32号住居（奈良時代）

備　考　様々な事実関係も含む33号住居事実記載を参照してほしい。

時　代　7世紀後半

白倉B区73号住居

位　置　36―33他

遺　構　図102　PL53　**遺　物**　図239　PL114

面　積　―㎡　　**主軸方位**　N－6°－W

形　状　短辺〈2.7〉～長辺5.1mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は32～41㎝。床面は最大5㎝の比高がある。南半分は調査区外である。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。構造材はローム質の土壌である。煙道の一部が検出された。

柱　穴　3本検出された。規模(径×深さ)は、P1：51×80㎝、P2：50×79㎝、P3：50×26㎝。P1とP2が主柱穴。この2本は床面では確認できず、掘り方調

査の際に検出された。

壁周溝　残存部分では全周する。

遺物出土状態　ほぼ完形の坏(2)は炭化材の下からの出土で焼失以前に住居内床面直上にあった遺物である。また、大型甕は調査時の所見から炭化材(物)の上から出土している。(遺物観察表：100頁　出土遺物一覧表：177頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：100～〈55〉×12cm。

時　代　6世紀前半

白倉B区75号住居

位　置　37－37他

遺　構　図103・104・105　PL54・55

遺　物　図239～246　PL114・115・116

面　積　〈24.2〉m²　　**主軸方位**　N－109°－E

カマド主軸方位　N－101°－E

形　状　短辺4.7～長辺5.0mの隅丸方形を呈す。

壁と床面　残存壁高は18～28cm。床面は最大5cmの比高がある。床面中央部では厚さ10cm程度の粘土が検出されている。また、床面上で3カ所の浅く窪むところがあった(A－A')

カマド　東壁の中央から南に寄った位置で検出された。焚口幅は45cm、焚口高は30cmで、花崗岩と考えられる両袖石・砂岩の天井石・結晶片岩の支脚が検出された。天井石は前方に落ちた状態で出土している。その他の構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　不定形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、74×68×65cmである。

柱　穴　12本検出された。規模(径×深さ)は、P1：50×69cm、P2：17×46cm、P3：90×30cm、P4：74×23cm、P5：25×63cm、P6：24×79cm、P7：22×79cm、P8：26×70cm、P9：16×35cm、P10：17×36cm、P11：15×25cm、P12：16×44cm。P3・P4は掘り方調査の際に確認されたが、位置からP1～P4が主柱穴と考えられる。主柱穴の内側にはそれぞれ2本ずつ小柱穴があく。これらの2本の柱穴は興味深いことに内側は浅く(P9～P12)、外側は深い(P5～P8)。

壁周溝　掘り方の際に西壁際の一部で検出されている。

遺物出土状態　滑石のチップや滑石製白玉に関わる未製品や製品が多量に出土している。その点については、白玉製作工程も含めV－7で後述したい。出土土器の中で1の甕はカマドにかけられていたものと考えられる。また、支脚にかぶさるようにして坏(11)が出土している。4の小型甕は底部を欠いて逆位して置き台に再利用され、その上に坏(12)が置かれていた。6の甑も恐らく右袖脇に置かれたものと推測される。1の甕は胴下部を境にして整成形が異なっている。また、2の甕は接合時の刻み目が良好に観察できる。15のミニチュア土器は類例があまりない器形である。接合資料aは土師器の甕の口縁片である。実測遺物の出土状態は図105に示したが、滑石の出土状態は前述したようにV－7に掲載してある。(遺物観察表：100・101・102・103・104・105頁　出土遺物一覧表：177頁)

床下の状態　床下土坑が1基検出された。周囲が全体に掘り窪められる。また、根太状の痕跡が4カ所検出され勾玉(31・32)が出土している。規模(径×深さ)は、A土坑：152～70×24cm。

重　複　75号住居→4号溝(平安時代)

備　考　遺構を調査した際、4号溝は西壁から東に1mほどの部分として確認されたが、土層断面から平面図に記載した部分まで破壊が及んでいたものと判断した。滑石もその部分からの出土はあまり見られない。攪乱は昭和30年代のリンゴ苗に関する農業遺構。

時　代　5世紀後半

白倉B区78号住居

位　置　37－39他

遺　構　図106　PL55・56

遺　物　図246・247・248　PL117

面　積　－m²　　**主軸方位**　N－2°－W

形　状　短辺〈1.5〉～長辺(5.3)m。

壁と床面　残存壁高は33～45cm。床面は最大2cmの

比高がある。床面上では焼土の堆積が３カ所確認された。厚さが異なり西から順に12cm、９cm、３cmである。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。焚口幅は40cm、焚口高は50cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材は褐色土である。

柱　穴　２本検出された。規模(径×深さ)は、P1：25×35cm、P2：32×54cm。

壁周溝　北西部分で検出された。

遺物出土状態　カマド周囲から完形個体が多く出土している。また、焼失住居であることから４・６・８・11・12・14・19～21の下からは藁状の炭化物が確認された。また、前述した焼土内から８・12・14・20が出土している。また、住居覆土内からカマドに使用されたと思われる礫が出土している。床面直上の出土であり、これらの実測した土器は本住居内に遺棄されたものであろう。(遺物観察表：105・106・107頁　出土遺物一覧表：177頁)

床下の状態　東側が掘り窪められる。

重　複　304号土坑（時期不明）→78号住居→77号住居（平安時代）

備　考　炭化材が出土しており、焼失住居である。P2から東に向かって検出された材は残存良好である。前述した藁状の炭化物は床面の密着することから敷物と考えられる。尚、攪乱は昭和30年代のリンゴ苗に関する農業遺構である。カマド石については Ⅴ－３で取り扱っているので参照してほしい。

時　代　６世紀前半

白倉Ｂ区82号住居

位　置　36―44他

遺　構　図107　ＰＬ56　**遺　物**　図248　ＰＬ118

面　積　14.6㎡　　**主軸方位**　Ｎ－15°－Ｗ

形　状　短辺3.3～長辺3.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は40～57cm。床面は最大３cmの比高がある。灰色粘土の固まりが３カ所で検出されている。

カマド　北壁の中央から東寄りで検出された。焚口幅・焚口高ともに45cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材は粘土とローム ブロックである。煙道の一部が検出されている。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、71×53×51cmである。

柱　穴　４本検出され、柱痕が明瞭に確認できた。規模(径×深さ)は、P1：15×30cm、P2：25×45cm、P3：16×33cm、P4：19×41cm。この値は柱痕部分を示している。

壁周溝　ほぼ全周する。

遺物出土状態　カマドに懸けられていた甕(１・２)やカマド脇の土器５・６は本住居に遺棄されたものと考えられる。また、６の小型甕はカマド袖脇の粘土中から出土している。接合資料ａ・ｂは丸甕の胴部片である。(遺物観察表：107・108頁　出土遺物一覧表：177頁)

床下の状態　床下土坑が２基検出された。土層断面に示したようにＡ土坑をＢ土坑が切る。規模（径×深さ）は、Ａ土坑：142～117×23cm、Ｂ土坑：113～98×10cm。

時　代　６世紀後半

白倉Ｂ区84号住居

位　置　36―43他

遺　構　図108　ＰＬ56・57

遺　物　図249・250　ＰＬ118

面　積　21.2㎡　　**主軸方位**　Ｎ－10°－Ｗ

形　状　短辺4.1～長辺4.6mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は57～60cm。床面は最大３cmの比高がある。

カマド　攪乱によって破壊されているが恐らく北カマドと考えられる。

貯蔵穴　円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、47×〈36〉×20cmである。

柱　穴　４本検出されている。規模(径×深さ)は、P1：27×40cm、P2：27×36cm、P3：42×36cm、P4：60×53cm。柱痕と根固めの様子がP2・P4で良好に観察できた。

遺物出土状態　貯蔵穴脇の小型甕（４）やP4脇の坏

(10)などは遺棄されたもので4は台として再利用されたものと考えられる。南壁を中心にこも編石が多く出土した。接合資料aは土師器の丸甕の胴部片である。(遺物観察表：108・109・110頁　出土遺物一覧表：177頁)

床下の状態　壁際が掘り窪められている。

重　複　84号住居→66・83号住居（9世紀前半）

備　考　撹乱は昭和30年代のリンゴ苗に関するものである。

時　代　7世紀後半

白倉B区85号A・B・C住居

位　置　38−39他

遺　構　図109・110　PL57・58

遺　物　図250　PL118

面　積　A住居27.0㎡　B住居25.5㎡　C住居9.3㎡

主軸方位　N−5°−W

カマド主軸方位　N−3°−E

調査経過　床下の調査を行った段階で当初の住居以外に2軒の住居が確認された。この3軒の住居の名称は最初に調査したものから順にA住居・B住居・C住居とした。興味深いことにC住居→B住居→A住居の順で面積は広がっており、僅かに存在するB住居及びC住居覆土は人為的な埋土であったことから順次2回の拡張が行われたと考えられる。

C住居内には柱穴はなく、A・B住居の柱穴位置は同じであった。

形　状　A住居―短辺（4.8）～長辺5.3m。B住居―短辺4.4～長辺（4.7）m。C住居―短辺2.9～長辺3.2mの隅丸方形である。

壁と床面　A住居の残存壁高は20～25cm。床面は最大6cmの比高がある。3軒の住居ともに床面は堅く締まっている。

覆　土　A住居は自然埋没で、B・C住居は人為的埋土である。

カマド　3住居ともに北壁の中央で検出された。B・C住居は痕跡のみであることから以下の記載はA住居のものである。尚、B住居のカマドの痕跡は火床面がA住居のカマドの掘り方調査の際に確認されている。結晶片岩の支脚が検出されている。構造材は灰色粘土が用いられている。また、前方が大きく崩れており、袖前方は明瞭に確認できなかった。

貯蔵穴　A住居のみ検出された。隅丸長方形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、67×54×60cmである。

柱　穴　4本検出された。規模（径×深さ）は、P1：48×62cm、P2：66×61cm、P3：61×72cm、P4：75×75cm。

壁周溝　B住居の一部で検出された。

遺物出土状態　B・C住居覆土からも土器は出土しているが、小片で図化できなかった。A住居カマド前方で出土した甕（1）は、カマド材として使用されたと考えられる。2はB土坑覆土とA住居覆土出土土器が接合している。また、8～10のこも編石もB土坑出土である。接合資料aは土師器の甕の胴部片で、bは土師器の小型甕で、cは土師器の甑の口縁部片である。(遺物観察表：110・111頁　出土遺物一覧表：177頁)

床下の状態　床下土坑が5基検出された。この中でA土坑はA住居に、B・C・D土坑はB住居に、E土坑はC住居に伴うものである。規模（径×深さ）は、A土坑：64～56×13cm、B土坑：109～81×28cm、C土坑：154～90×25cm、D土坑：60～59×18cm、E土坑：124～118×20cm。

時　代　7世紀後半（A住居）

白倉B区94号住居

位　置　40−60他

遺　構　図111　PL58　**遺　物**　図251　PL118

面　積　−㎡　　**主軸方位**　N−94°−E

形　状　短辺〈1.5〉～長辺4.5mを呈す。

壁と床面　残存壁高は42～54cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　東壁の中央で検出された。焚口幅は43cm、焚口高は20cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。その他の構造材は粘土質の土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈す。周囲が3～4cmほど盛

り上がる。規模（長軸×短軸×深さ）は、62×47×76cmである。

柱　穴　1本検出された。規模(径×深さ)は、P1：45×37cm。掘り方調査の際検出されたが柱痕や裏込めの様子が明瞭に観察できる。

壁周溝　部分的に検出された。

遺物出土状態　カマド内の甕(1・2)は本来懸けられていたものであろう。また、カマド周囲の完形土器(3・4・6・7・8)は住居に遺棄されたものであろう。また、9の坏は右袖内から出土している。接合資料a・bは土師器の甑の破片である。(遺物観察表：111頁　出土遺物一覧表：177頁)

時　代　6世紀後半

白倉C区2号住居

位　置　36—72他

遺　構　図112　PL59・64

遺　物　図252　PL119

面　積　16.7m²　　**主軸方位**　N—14°—W

形　状　一辺が3.65～4.02mの隅丸方形。

壁と床面　地形が西側に緩やかに傾斜する場所に立地するために、残存壁高は西側で5cm、東側で28cmである。床面は中央部を中心に堅く締まっており、地形の傾斜に対応して西側と東側では、最大6cmの比高がある。

覆　土　ロームブロックの混入が目立つ。自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。両袖部先端には結晶片岩が据えられ、その間には構架体に使用されたと思われる同種の礫が割れて検出されている。焚口幅は42cmである。構築材は、礫以外では粘土とロームが使用されている。左袖部の中から、ミニチュアの坏(6)が出土した。

貯蔵穴　楕円形を呈する。他の貯蔵穴と比較して小規模である。規模(長軸×短軸×深さ)は、42×30×38cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：28×33cm、P2：29×50cm、P3：36×58cm、P4：33×28cmである。

壁周溝　検出されなかった。

遺物出土状態　出土位置を記録した遺物の中で、床面直上のものは少ない。1はで覆土一括の土器片と、4は掘り方一括の土器片と接合している。また、5は覆土と掘り方一括が接合したもので位置を記録した破片はない。図化はできなかったが、他に甕の口縁部破片が覆土一括と掘り方一括で接合している。タイプAは、カマド袖部内から出土した6のみである。タイプBaは2、タイプBは1と3である。4と5のタイプは不明。(遺物観察表：112頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は検出されなかった。

重　複　117号土坑(縄文時代)→2号住居

時　代　6世紀後半

白倉C区3号住居

位　置　35—69他

遺　構　図113　PL59

遺　物　図253・254　PL119

面　積　24.2m²　　**主軸方位**　N—11°—W

形　状　一辺が4.50～4.82mの隅丸方形。

壁と床面　地形が比較的平坦な場所に立地しており、残存壁高は42～44cmと高い。床面は、比較的平坦で堅く締まっているが、最大8cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。焚口幅は27cmである。構築材は、ロームを主体とする。カマドに懸けられていたと思われる2個体の長胴甕が、前方に倒れるようにして検出されている（1と2）。

貯蔵穴　中心を耕作溝によって破壊されるが隅丸長方形を呈する。周囲は、幅21～42cm、高さ2cmの周堤帯が巡る。規模(長軸×短軸×深さ)は、71×50×48cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：〈33〉×〈34〉cm、P2：33×42cm、P3：32×41cm、P4：44×64cmである。

壁周溝　南東隅では検出されなかった。

遺物出土状態　覆土一括の土器片が接合しているのは、4．5．13である。また、22は本住居の約2.2m南側に位置する18号住居（7世紀前半）覆土一括土器（一片）との接合例である。接合資料a．d～fは甕の胴部破片でb．cは坏の破片である。タイプAは、1．2．3．8．9．14、タイプBaは8、タイプBは、4～7．10～13.22である。15は覆土一括1点のみでタイプは不明である。（遺物観察表：112・113頁出土遺物一覧表：178頁）

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。A土坑は住居中央で検出され、底面には褐色の粘土が貼られていた。土坑の規模（径×深さ）は、98～107×11cmである。なお、床下調査の際に、重複する6号住居の柱穴2本とD土坑1基が検出された。

重　複　69号土坑（縄文時代）→6号住居（6世紀後半）→3号住居。また、2本の耕作溝によって破壊される。溝の深さは、床面下12～18cmに及ぶ。

時　代　7世紀前半

白倉C区4号住居

位　置　33－68他

遺　構　図114・115　PL59・60

遺　物　図254・255・256　PL120・121

面　積　23.6m²　　**主軸方位**　N－18°－W

形　状　一辺が4.45～4.96mの隅丸方形。

壁と床面　地形が、平坦な場所に立地しており、残存壁高は32～42cmである。床面は、最大9cmの比高がある。住居南東隅とカマド右袖の前方で粘土がまとまって検出されている。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。左側の袖部先端には2つの結晶片岩が袖石として使用されている。焚口幅は31cmである。構築材は、礫以外にはロームと粘土を主体としている。

貯蔵穴　不正円形を呈し、断面がロート状である。規模（長軸×短軸×深さ）は、71×64×43cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模（径×深さ）は、P1：25×24cm、P2：18×17cm、P3：(25×25)cm、P4：(30×28)cmである。

壁周溝　ほぼ全周するように検出されている。

遺物出土状態　住居廃絶後からあまり時間をおかずに住居北西隅を中心に多くの遺物が廃棄されたようである。この中には、大形の礫も含まれている（PL59参照）。また、土器の接合線から廃棄の状況や方向を想定できるようなものも見られる。覆土一括の土器片が接合しているのは、2．4．6．8．11～13．15．16である。接合資料d．eは坏の破片で、他のa～c．f．gは甕の破片。タイプAは14．18～21でタイプBaは10、残りすべてはタイプBである。また、1と17は、重複関係にある5号住居の覆土一括の土器片各1点と接合関係をもつ。1と17はいずれもタイプBであることから、1と17が廃棄された後に、調査では確認できなかった後世の攪乱があった可能性が強い。（遺物観察表：113・114頁　出土遺物一覧表：178頁）

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は2基検出され、A土坑の底面には粘土が貼られていた。土坑の規模（径×深さ）は、A土坑140～125×14cm、B土坑170～150×19cmである。3の甕は土師器製作時の刻みが良好に観察できる。また、17の甑は口縁に向かって大きく広く器形で類例の少ない土器である。

重　複　7号住居（弥生時代）→5号住居（6世紀前半）→4号住居。また、2本の耕作溝によって破壊される。溝の深さは、床面下10～12cmに及ぶ。

時　代　6世紀後半

白倉C区5号住居

位　置　33－67他

遺　構　図116　PL60

遺　物　図257・258　PL121・122

面　積　〈20.5〉m²　　**主軸方位**　N－70°－E

形　状　一辺が4.70～4.75mの隅丸方形。

壁と床面　地形が緩やかに北側に傾斜しており、残

存壁高も南側では41cm、北側では25cmである。床面は、平坦で最大4cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁の中央から若干南側にずれた位置で検出された。焚口幅は39cmである。構築材は、粘土質の土壌とロームで、袖部周辺から結晶片岩が出土していることから、これらもその一部なのかもしれない。燃焼部左奥で土製支脚(25)が使用時の状態で検出された。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、63×54×34cmである。

柱　穴　掘り方調査時に4隅で各1本検出したが、図面に記すのを遺漏し、規模等は不明である。

壁周溝　重複によって破壊される部分を除き検出されている。

遺物出土状態　カマドから貯蔵穴近辺と南壁の中央部付近で完形の土器が多く出土している。位置を記録しなかった土器片が接合しているのは、5．9．10．15．17．23である。15．17．23は覆土一括が接合している。5と9は掘り方一括の破片が接合しているが、他の接合する破片の多くが床面直上の出土であることから、調査時の誤認があったのかもしれない。10はカマド一括の破片1点と接合しており、カマド構築材あるいはカマドに使用されていたのかもしれない。接合資料a～cは甕の破片である。タイプAは、2．4．6．16．18～22．24で、タイプBaは10～14．23である。タイプBは、3．5．7～9．15．17である。1は覆土一括1点のみでタイプは不明である。(遺物観察表：114・115頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は検出されていない。

重　複　5号住居→4号住居（6世紀後半）→6号土坑(平安時代)。4号住居重複部分は柱穴を除き破壊され、6号土坑は確認面から5cmの深さで5号住居を破壊している。

時　代　6世紀前半

白倉C区6号住居

位　置　35―69他

遺　構　図117　PL61

遺　物　図258・259　PL122

面　積　(22.0)㎡　**主軸方位**　N－6°－E

形　状　一辺が4.48～4.85mの隅丸方形。

壁と床面　地形が北西に緩やかに傾斜しており、残存壁高は北西で16cm、南東で44cmである。床面は平坦で、最大4cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。袖部先端では、左側で2個、右側で3個の結晶片岩を袖石として使用している。奥壁左部の遺構確認面で大形礫が検出されている。焚口幅は42cmで、焚口高は28cm、構築材は、礫以外に焼土を含む粘土やロームである。

貯蔵穴　底面形状は隅丸長方形を呈する。上面での規模(長軸×短軸×深さ)は75×72×56cmである。

柱　穴　4本検出できた。この中で、P2とP3は3号住居の掘り方調査時で確認できた。また、調査時の所見では、すべての柱穴について2回使用された可能性が強いとのことである。なお、P1とP4の平面形状及び計測値は掘り方調査によるものではない。規模(径×深さ)は、P1：29×23cm、P2：54×45cm、P3：72×50cm、P4：27×24cmである。

壁周溝　カマドを境として、東側では検出されなかった。

遺物出土状態　覆土一括の土器片と接合しているのは2～5と7である。接合資料aは甕、b，cは坏の破片である。タイプAはなく、タイプBaは貯蔵穴底面近くから出土した1．6．9で、他はタイプBである。(遺物観察表：115・116頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は4基検出され、D土坑は3号住居掘り方調査時に確認された。また、BおよびC土坑底面には粘土が貼られていた。土坑の規模(径×深さ)は、A土坑：59×28cm、B土坑：〈85〉～93×22cm、C土坑：〈112〉×20cm、D土坑：104～150×

24cmである。

重　複　7号住居（弥生時代）・77.78号土坑（時期不明）→6号住居→3号住居（7世紀前半）。また、2本の耕作溝によって破壊される。

備　考　柱穴の所見及び重複する床下土坑の状況から、2回の居住が行われた可能性が強い。

時　代　6世紀後半

白倉C区11号住居

位　置　33―66他

遺　構　図118・119　PL60・61

遺　物　図259・260　PL122・123

面　積　28.2㎡　　**主軸方位**　N―19°―W

調査経過　遺構確認の後、ベルトを設定し、20cmほど掘り下げたところ、中央部において部分的に硬化面（結果的には22号住居床面であった）があらわれた。土層観察及び出土遺物の観察を行ったところ、当初の遺構プラン（11号住居）の内側に入り込むようにして、平安時代（10世紀後半）の住居が確認できたため、この住居を22号住居として調査し、その後に、11号住居の調査を行った。

形　状　一辺が5.06～5.48mの隅丸方形。

壁と床面　比較的平坦な場所に立地しており、残存壁高は38～46cmである。床面は堅く締まり、最大19cmの比高がある。住居南西隅には、床直で厚さ10cmほどの粘土がまとまって検出されている。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。袖部先端の残存状態は悪く、焚口幅は不明。構築材は、焼土を含む粘土質の土壌。

貯蔵穴　底面形状は、ほぼ隅丸長方形を呈する。周囲は、幅19～49cm、高さ2cmの周堤帯が巡る。上面の規模（長軸×短軸×深さ）は、62×45×65cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模（径×深さ）は、P1：31×63cm、P2：26×60cm、P3：25×61cm、P4：40×67cmである。

壁周溝　北東隅（貯蔵穴）周辺を除き、検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴周辺で残存状態が良好な土器が、比較的まとまって出土している。覆土一括の土器片が接合しているのは、2.5.7.8である。タイプAは1.3.12～14、タイプBaは2.4.6.9.11.14で、タイプBは5.7.8.10である。また、線刻文様のある紡錘車(16)は、南西隅の粘土下で床面直上から出土し、もう1点の紡錘車(17)は、床下B土坑からの出土である。（遺物観察表：116頁　出土遺物一覧表：178頁）

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は4基検出され、A～C土坑の底面には粘土が貼られていた。また、D土坑としたものは、カマドの掘り方である。A～E土坑は重複関係にあり、C→B→AとC→Eの先後関係が確認されている。土坑の規模（径×深さ）は、A土坑：87～77×14cm、B土坑：166～(154)×15cm、C土坑：90～(83)×10cm、D土坑：70～30×7cm、E土坑：165～161×13cmである。

重　複　1号方形周溝墓→11号住居→22号住居（10世紀後半）。2本の耕作溝によって破壊されるが、溝の深さは、住居床上10cm程度までであった。

時　代　6世紀後半

白倉C区12号住居

位　置　32―64他

遺　構　図120　PL61・62

遺　物　図261・262　PL123

面　積　〈35.5〉㎡　　**主軸方位**　N―69°―E

調査経過　調査期間の関係で、最初に住居の約南半分を掘り方まで調査し、9カ月後に残りの部分を調査した。北側は発掘調査区外にあたるため、住居北辺部分は調査できなかった。

形　状　一辺が約6mの隅丸方形を呈すると思われる。

壁と床面　平坦な場所に立地しており、残存壁高は42～48cmである。床面は、堅く締まっているが、最大8cmの比高がある。また、南側において5～7cmの厚さで粘土が確認されている。

覆　土　④⑤層は自然堆積の可能性が強いが、②③

層は人為的な埋土の可能性が強い。

カマド　良好な状態では検出されていない。東壁のほぼ中央で痕跡が確認できた。また、この部分では粘土及び焼土がかたまって検出されたことから、壊されたのちに住居が廃絶したのかもしれない。また、北東貯蔵穴の存在と柱穴の重複状況から、北辺にもカマドがあった可能性が強い。

貯蔵穴　北東と南東で検出された。北東貯蔵穴は人為的な埋土の可能性が強く、南東貯蔵穴は自然堆積と思われる。住居覆土では、第一次埋没土が自然堆積の可能性が強いことを考え合わせると、北東貯蔵穴→南東貯蔵穴の変遷が考えられよう。いずれも隅丸長方形を呈し、規模(長軸×短軸×深さ)は、75×60×72cm（北東）、76×49×66cm（南東）である。また、南東貯蔵穴の周りは、2cm程度の厚さで、ベルト状に盛り上がる。

柱　穴　4本検出できた。掘り方調査によって、P1とP2では旧住居の柱穴が確認できた。規模(径×深さ)は、P1：50×60cm、P2：36×72cm、P3：58×54cm、P4：53×66cmである。

壁周溝　壁が確認できた部分では、ほぼ検出された。

遺物出土状態　覆土一括の土器片が接合しているのは、2．4．8．10．15である。タイプAは9．11．13．15、タイプBaは6．10．12．17、タイプBは2．3．5．7．8．14．16、タイプCは4、タイプDは1である。(遺物観察表：117頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は3基検出され、A土坑の底面には粘土が貼られていた。また、C土坑は旧住居のカマド掘り方なのかもしれない。各土坑の規模(径×深さ)は、A土坑：143～145×10cm、B土坑：103～116×25cm、C土坑：124～〈52〉×19cmであった。

重　複　12号住居→93号住居(10世紀後半)

備　考　柱穴及び2基の貯蔵穴の状況から、2回の居住が行われた可能性が強い。

時　代　6世紀後半

白倉C区13号住居

位　置　31—63他

遺　構　図121・122　PL62

遺　物　図262・263　PL124

面　積　29.9m²　　**主軸方位**　N—1°—E

形　状　一辺が5.15～5.38mの隅丸方形。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は35～41cmである。床面は平坦で最大3cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。袖部先端には砂岩の袖石が使用されている。焚口幅は44cmで、焚口高は23cmであった。構築材はロームを主体とする。

貯蔵穴　隅丸方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、87×82×71cmである。カマド右袖から東壁に至る貯蔵穴周りは、2～3cm程度盛り上がる。

柱　穴　5本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：52×74cm、P2：42×76cm、P3：41×69cm、P4：56×75cm、P5：28×36cmである。

壁周溝　東壁に沿って検出された。

遺物出土状態　覆土一括の土器片と接合しているのは、1．2．4．5．7．14．16．17である。タイプAは3．6．8～11、タイプBaは1．4．5．7．12で、タイプBは2．14～17である。13は覆土一括出土のみでタイプは不明である。6（高坏）の内面にはヘラ描きが見受けられる。(遺物観察表：118頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部の中で南側が深く掘り込まれている。床下土坑は2基検出された。土坑の規模(径×深さ)は、A土坑：98～143×20cm、B土坑：162～172×16cmである。

重　複　13号住居→1号掘立柱建物（時期不明）

時　代　6世紀後半

白倉C区15号A住居

位　置　38—72他

遺　構　図123　PL62　**遺　物**　図264　PL124

面　積　26.7m²　　**主軸方位**　N—20°—W

調査経過　2軒の重複する住居である。旧住居を15号B住居、新住居を15A住居とした。両住居における床面のレベル差は15cm程度である。新旧住居は柱穴位置が踏襲され、新住居のほうが僅かに面積が多いことなどから、調査時においては拡張と解釈されたが、上記の理由以外に積極的な根拠はない。また、調査工程の都合により、当初住居の北側2/3を調査した。この段階では、A住居のカマドを残して、B住居の床面まで掘り下げた。結果的にこの段階で重複関係にあることが確認された。その約1カ月後に残った南側約1/3を調査した。

形　状　一辺が4.52～5.44mの隅丸方形。

壁と床面　地形が西側に傾斜する場所に立地しており、残存壁高は22～48cmである。床面は、B住居まで掘り下げてしまったために細かな状態は不明である。B住居の③層が貼り床の土層となろう。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。残存状態が悪い。

貯蔵穴　不定形であるが、調査時に掘り過ぎた可能性もある。規模(長軸×短軸×深さ)は、99×50×28cmである。

柱　穴　4本検出できた。B住居の柱穴が踏襲されているため、深さは不明。径は、P1：58cm、P2：43cm、P3：40cm、P4：60cmである。

壁周溝　北壁沿いの一部で検出された。

遺物出土状態　多くの遺物を覆土一括として取り上げてしまっている。なお、出土遺物の一覧表に示した一括遺物の数値は、B住居分も含まれている。図化した土器はいずれもタイプBである。(遺物観察表：118・119頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、確認できなかった。

重　複　15号B住居(7世紀前半)→15号A住居

時　代　7世紀前半

白倉C区15号B住居

位　置　38—72他

遺　構　図124　PL62　**遺　物**　図264　PL124

面　積　23.0m²　**主軸方位**　N—22°—W

調査経過　15A住居を参照

形　状　一辺が4.21～4.70mの隅丸方形で、A住居より一回り小さい。

壁と床面　西側に傾斜する場所立地する。遺構確認面からの残存壁高は41～64cmで、A住居との床面レベル差は約15cmである。

覆　土　③層は、A住居の貼り床であるが、④層が人為的な埋土とする観察は得られなかった。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。A住居による破壊が著しい。

貯蔵穴　一部をA住居の貯蔵穴によって破壊され、柱穴状のピットが確認された。規模(長軸×短軸×深さ)は、67×(55)×41cmである。

柱　穴　4本検出できた。位置はA住居に踏襲される。規模(径×深さ)は、P1：57×49cm、P2：60×42cm、P3：50×40cm、P4：60×44cmである。

壁周溝　東壁に沿った部分のみに検出された。

遺物出土状態　位置を記録した破片は12点と少ない。また、A住居とともに覆土一括として取り上げてしまったために、覆土中の遺物量は不明である。位置を記録した破片の中で、図化に耐え得る遺物はなかったが、A住居で図化した遺物と型式的には同じと思われた。(遺物観察表：118・119頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、確認できなかったが、床下土坑が1基検出された。土坑の規模(径×深さ)は、67～55×40cmである。覆土は粘土ブロックとBPの混合土である。

重　複　15号B住居→15号A住居（7世紀前半）

時　代　7世紀前半

白倉C区16号住居

位　置　30—61他

遺　構　図119　PL63　**遺　物**　図264　PL125

面　積　(26.1)²　**主軸方位**　N—5°—W

形　状　一辺が(4.79)～5.25mの隅丸方形。

壁と床面　緩やかに北側に傾斜する場所に立地し、

残存壁高は7～14cmと残存状態は悪い。床面は比較的平坦で、最大11cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強いが、後世の破壊が著しく住居覆土は僅かである。

カマド　残存状態が悪く検出できなかったが、焼土分布や貯蔵穴位置などから北壁のほぼ中央に位置したものと思われる。焼土中から土製支脚(2)が検出されている。

貯蔵穴　上面を時期不明のA土坑によって破壊されるが、ほぼ下半分が残存していた。残存部は隅丸方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、〈56×50×17.5〉cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：36×47cm、P2：32×40cm、P3：32×39cm、P4：32×41cmである。

壁周溝　西壁に沿って検出された。

遺物出土状態　住居間での接合が1例確認できた。9(須恵器甕破片)が本住居の約6m北東に位置する21号住居覆土一括取上げの破片と接合している。21号住居は本住居と同時期の6世紀後半である。位置を記録しなかった破片が接合しているのは5～7で覆土一括の破片と接合している。タイプBaは2.5.8で、タイプBは1.3.4.6.7.9である。(遺物観察表：119頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　明確な掘り方は確認できなかった。床下土坑は1基検出されているが、形状から3基が重複したものと思われる。

重　複　88号住居(5世紀後半)→16号住居→33号土坑(古墳時代後期か)・A土坑(時期不明)

時　代　6世紀後半

白倉C区17号住居

位　置　36―70他

遺　構　図125　PL63・64

遺　物　図265・266　PL125

面　積　〈18.2〉m²　**主軸方位**　N―27°―W

形　状　一辺が4.18～4.20mの隅丸方形。

壁と床面　比較的平坦な場所に立地し、残存壁高は13～20cmである。床面は最大14cmの比高がある。住居南東隅では、床に密着して2～4cmの厚さで粘土が分布している。また、床面精査の際に住居の南西隅に不定形土坑が確認され、坑底部出土の破片が床直の破片と接合したこと(2)などから、住居に伴う施設と考えた。

覆　土　土層観察をおこなっていないため不明。

カマド　北壁の中央から僅かに東に寄った位置で検出された。右袖部先端には袖石が使用されている。焚口幅は24cmで、礫以外の構築材はロームと粘土を主体とする。また、左袖部中から坏の破片(15)が検出されている。

貯蔵穴　上面は隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、77×69×59cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：33×25cm、P2：38×32cm、P3：28×33cm、P4：32×30cmである。

壁周溝　18号住居に破壊される部分を除いて検出された。

遺物出土状態　覆土一括の土器片と接合しているのは、1～4.6.7.10.15.17である。タイプAは5.8.11.12.13、タイプBaは1.2.10.14.15.16で、タイプBは3.4.6.7.17である。また、9は覆土一括でタイプは不明である。(遺物観察表：119・120頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は2基検出された。土坑の規模(径×深さ)は、A土坑：78～65×23cm、B土坑：84～74×16cmである。

重　複　17号住居→18号住居(7世紀前半)。なお、両住居の新旧関係は遺構確認時に想定したが、17号住居の南東隅粘土が18号住居部分に及ばないこと、さらに出土土器型式などからも追認されよう。

時　代　6世紀前半

白倉C区18号住居

位　置　37―69他

遺　構　図126・127・128　PL64

遺　物　図267・268・269・270　ＰＬ126・127

面　積　26.2㎡　　**主軸方位**　Ｎ－72°－Ｅ

調査経過　調査工程の都合により、最初に住居の北側約1/2(図中セクションライン)の覆土を掘り下げ、その約１カ月後に北側床面精査も含め残りの南側部分を調査した。

形　状　一辺が4.65～5.23mの隅丸方形。

壁と床面　比較的平坦な場所に立地し、残存壁高は54～64cmで良好な残存状態であった。床面は最大12cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁のほぼ中央で出された。袖部の残存状態はあまり良好ではなかったが、壁高の残存状況が良好であったので煙道(幅18cm長さ〈50〉cm)が検出された。構築材はロームと粘土を主体とする。

貯蔵穴　ほぼ隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、82×69×40cmである。

柱　穴　４本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：34×51cm、P2：54×43cm、P3：39×38cm、P4：44×45cmである。

壁周溝　検出されなかった。

遺物出土状態　住居南側部分を中心に多量の遺物が廃棄されている。廃棄は南側から北側に向かって行われ、個々の遺物接合線(関係)も、廃棄の状況を示唆している。覆土一括の土器片と接合しているのは、１．３～５．８．10.12.14.15.18.21.23.24.26.29である。タイプＡはなく、タイプＢａは３．８で、タイプＢは１．２．４．５～７.11.15～17.20～26.29である。また、タイプＣは10.12～14.18.19である。接合資料ａ～ｎは甕の破片である。覆土一括の土器が17号住居及び３号住居出土土器と接合している（17号住居３、３号住居22)。17号住居との接合関係は重複に由来するものであろう。また、３号住居は本住居の北側約2.2mに位置し、本住居と同時期の７世紀前半である。(遺物観察表：120・121・122頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　掘り方は、住居内全体が掘り込まれている。床下土坑は検出されなかった。

重　複　59.61.62号土坑(縄文時代)・２号方形周溝墓(弥生～古墳時代初頭)・17号住居(６世紀前半)→18号住居

時　代　７世紀前半

白倉Ｃ区19号住居

位　置　37－71他

遺　構　図129　ＰＬ64・65

遺　物　図270・271・272　ＰＬ127・128

面　積　22.42m　　**主軸方位**　Ｎ－12°－Ｗ

形　状　一辺が4.15～4.65mの隅丸方形。

壁と床面　西側に傾斜する場所に立地し、残存壁高は13～35cmである。床面は最大８cmの比高があり、床面直上の２カ所で粘土の分布がみられた。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁の中央から西側によった位置で検出された。右側の袖部先端には結晶片岩の袖石が、左側の袖部先端には胴下～底部を欠損する甕(２)が使用されている。右袖石に接して、構架体に使用されたと思われる甕が３個体（４．６．７）検出された。右袖石の南東で近接して検出された結晶片岩も被熱が著しく、さらに床面から僅かに浮いていることから構架体として使用されたのかもしれない。奥壁の右よりでは、結晶片岩の支脚が使用時の状態で検出され、支脚と接するように重ねた坏(21.22)が出土している。焚口幅は37cmで、焚口高は18cmであった。礫と甕以外の構築材はロームと粘土を主体とする。

貯蔵穴　貯蔵穴としてカマド右前方と北西隅で２基調査されている。右前方のピットはほぼ隅丸方形を呈し、規模(長軸×短軸×深さ)は56×51×42cmである。北西隅のピットは楕円形を呈し、規模(長軸×短軸×深さ)は82×62×29cmである。

柱　穴　４本検出できた。P4の位置が不自然ではあるが、掘り方調査でも新たな柱穴は検出されていない。規模(径×深さ)は、P1：34×29cm、P2：33×20cm、P3：35×27cm、P4：41×26cmである。

壁周溝　南壁及び東壁1/2に沿う部分では検出されていない。

遺物出土状態　覆土一括の土器片と接合しているのは８と10である。タイプＡは、２．４．７．12～14．18～22と多い。タイプＢａは１．３．５．９．15で、タイプＢは８．10である。こも編石も15点出土している。
(遺物観察表：122・123頁　出土遺物一覧表：178頁)
床下の状態　掘り方は、住居内周辺部が深く掘り込まれている。床下土坑は中央で１基検出された。土坑の規模(径×深さ)は、123～116×15cmである。
重　複　28号土坑(時期不明)・29号土坑(弥生時代)・38号住居(６世紀後半)→19号住居。38号住居と19号住居の新旧関係は、調査時の遺構確認段階で行われたもので、土層からは不確定な要素が多いが出土土器の様相から判断すると上記の新旧関係の可能性が強いと思われる。
時　代　７世紀前半

白倉Ｃ区21号住居

位　置　29―59他
遺　構　図122　ＰＬ65
遺　物　図272・273　ＰＬ128・129
面　積　〈16.6〉㎡　　**主軸方位**　Ｎ－１°－Ｗ
形　状　おそらく一辺が、約(4.50)ｍの隅丸方形。
壁と床面　残存壁高は12～23cmと残存状況は良好ではない。床面は最大10cmの比高がある。
覆　土　覆土は薄く、埋没過程については不明。
カマド　北壁のほぼ中央に位置する。右袖部前方に礫が据えられ、奥壁部右側では礫を利用した支脚が使用時の状態で検出された。焚口幅は42cmである。カマド構築材は、礫以外に粘土とロームが使用されている。
貯蔵穴　底面形状は隅丸方形を呈する。上面の規模(長軸×短軸×深さ)は、62×52×81cmである。
柱　穴　４本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：42×49cm、P2：39×63cm、P3：36×77cm、P4：56×59cmである。
壁周溝　検出できなかった。
遺物出土状態　住居南側及び貯蔵穴から坏がまとまって検出されており(４．９～18)、これらはタイプＡである。タイプＢは１～３，６～８である。また、覆土一括の土器片と接合しているのは２と３である。５は覆土一括で取り上げたためタイプは不明。４の床面には「Ａ」状のヘラ描きが施されている。
(遺物観察表：123・124頁　出土遺物一覧表：178頁)
床下の状態　住居内の周辺部が深く掘り込まれる。床下土坑は中央で１基検出され、規模(径×深さ)は、103～85×23cmである。
重　複　21号住居→20号住居(８世紀)→87号住居(９世紀後半)
時　代　６世紀後半

白倉Ｃ区25号住居

位　置　34―62他
遺　構　図130　ＰＬ65
遺　物　図273・274　ＰＬ129
面　積　26.2㎡　　**主軸方位**　Ｎ－２°－Ｗ
形　状　一辺が4.43～5.44ｍの隅丸長方形。
壁と床面　北東方向に緩やかに傾斜する場所に立地し、残存壁高は14～25cmと良好ではない。床面は最大16cmの比高がある。
覆　土　自然堆積の可能性が強い。
カマド　北壁の中央から東に寄った位置で検出された。構築材は粘土とロームを主体とする。
貯蔵穴　楕円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、75×44×39cmである。
柱　穴　５本検出できた。住居外及び掘り方調査において、不規則なピットが住居内外において検出されていることから、５本の柱穴すべてが住居に伴うとは思えない。規模(径×深さ)は、P1：40×38cm、P2：38×57cm、P3：39×46cm、P4：35×39cm、P5：44cm×46cmである。
壁周溝　検出されていない。
遺物出土状態　覆土一括の土器片と接合しているのは１～３，５，６，８である。タイプＡは７で、タイプＢａは２～６，９で、タイプＢは１，５である。また、本住居は平安時代の26,27号住居と３号溝によって破壊されており、８は上記の平安時代における破壊

に伴う可能性が強くタイプCである。(遺物観察表：124・125頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　住居内の周辺部が深く掘り込まれる。床下土坑は中央で1基検出されており、規模(径×深さ)は101～94×22cmである。坑底部からは粘土が検出されている。

重　複　25号住居→20号土坑(奈良～平安時代)・26、27号住居・3号溝(平安時代)・耕作溝・イモ穴状土坑

時　代　7世紀前半

白倉C区28号住居

位　置　37－77他

遺　構　図131　PL－　**遺　物**　図274　PL130

面　積　(18.2)㎡　**主軸方位**　N－75°－E

形　状　一辺が4.10m前後の隅丸方形で、南東部分は検出できなかった。

壁と床面　西側に傾斜する場所に立地し、残存壁高は0～12cmと良好ではない。床面は最大18cmの比高がある。貯蔵穴、柱穴、壁周溝は検出できなかった。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁のほぼ中央に位置する。カマド方位は住居主軸方位と若干異なりN－86°－Eである。

遺物出土状態　小片が主体を占め器形を図化できたのは1のみである。1は覆土一括であるためタイプは不明である。(遺物観察表：125頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　明瞭な掘り方は検出できなかった。

重　複　耕作溝2本に破壊される。

時　代　7世紀前半

白倉C区33号住居

位　置　40－66他

遺　構　図132・133・134　PL61・65・66

遺　物　図274・275・276・277　PL130・131

面　積　(29.1)㎡　**主軸方位**　N－95°－E

形　状　一辺が4.98～5.40mの隅丸方形。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は33～42cmである。床面は貼り床によって堅く締まり最大12cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。③層中には炭化物が多く検出されているが、床面が焼けた状況は観察できなかった。

カマド　東壁の中央から南側によった位置で検出されている。右袖部先端には結晶片岩が、左袖部先端には安山岩が袖石として据えられている。カマド前方には構築体に使用されたと思われる砂岩が出土している。また、奥壁部ほぼ中央では使用時の状態で砂岩の支脚が検出されている。礫以外の構築材は、焼土を含むロームが主体を占める。焚口幅は51cmで、焚口高は22cmであった。

貯蔵穴　不正円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、78×67×74cmである。周囲は2cm程度盛り上がる。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：40×66cm、P2：40×67cm、P3：39×67cm、P4：39×66cmである。

壁周溝　検出されなかった。

遺物出土状態　出土遺物は多く、③層が堆積する段階に積極的な廃棄活動が行われたようである。タイプAはカマドに懸けられていたと思われる3だけである。タイプBaは1，13～16，21，23，25，28，30で、タイプBは2，5，6，20，22，24，26，27，33である。タイプCは、4，7，9～12，17，19，29，31，32，35である。覆土一括の土器片と接合しているのは1，5～7，9，12～14，17，19，26，29，32～35である。2は覆土一括及びカマド一括と接合している。また、8と18は掘り方一括と覆土一括が接合しているが、この2個体のタイプは不明である。接合資料a～gは甕の破片で、fは埝の破片である。(遺物観察表：125・126・127頁　出土遺物一覧表：178頁)

床下の状態　住居内の周辺部が深く掘り込まれる。

重　複　81号住居・88号土坑(縄文時代)→33号住居

備　考　覆土観察から、焼失住居の可能性がある。

時　代　6世紀前半

白倉C区36号住居

位　置　37—63他

遺　構　図135　PL66

遺　物　図277・278・279・280・281　PL131・132・133

面　積　9.0㎡　　**主軸方位**　N—13°—W

形　状　一辺が2.48～2.95mの隅丸長方形を呈する小形の竪穴式住居。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は23～42cmである。床面は最大9cmの比高がある。なお、柱穴及び壁周溝は検出されなかった。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出されている。両袖部先端には結晶片岩が袖石として据えられている。焚口幅は38cmで、焚口高は30cmであった。礫以外の構築材は、ロームが主体を占める。

貯蔵穴　床面精査の段階では確認できなかったが、掘り方調査の段階で隅丸長方形を呈する落ち込みが北東隅で検出された。ピットの規模(長軸×短軸×深さ)は、71×62×〈22〉cmである。

遺物出土状態　床面中央が僅かに埋没した段階で器形復元可能な土器も含め多量の遺物が廃棄されたようである。図化した土器の中で32,34がタイプCで、他はタイプBである。覆土一括の土器片と接合しているのは1～5，7，10～14,17～26，28～31である。接合資料a，bは、甕の破片である。(遺物観察表：127・128・129頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　全体に掘り込まれる。中央部に床下土坑らしきものが検出されたが、位置から35号住居の柱穴の可能性が強い。

重　複　138号土坑(縄文時代)・35号住居(弥生時代)→36号住居

時　代　6世紀後半

白倉C区37号住居

位　置　36—64他

遺　構　図131　PL66　**遺　物**　図281　PL133

面　積　(13.1)㎡　　**主軸方位**　N—94°—W

形　状　一辺が3.68～3.72mの隅丸方形。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は29～37cmである。床面は最大9cmの比高がある。貯蔵穴周辺以外に、南側で1～5cm程度盛り上がる箇所がある。また、床面が焼土化している場所がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁の南側によった位置で右袖部だけが検出された。他の部分はイモ穴状土坑によって破壊される。構築材は、ロームが主体を占める。

貯蔵穴　不正円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、54×48×49cmである。周囲は最大5cm程度盛り上がる。

柱　穴　1本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：39×75cmである。

壁周溝　検出されなかった。

遺物出土状態　2は出土位置からカマドに関係すると思われタイプBaである。他の実測土器は、タイプBに含まれよう。南西隅のほぼ床面上で、こも編石がまとまって遺棄されていた。覆土一括の土器片と接合しているのは1である。また、5は覆土一括で取り上げておりタイプは不明である。接合資料a，bはともに甕で、bは完形に近い個体ではあったが遺存状態が悪く図化できなかった。(遺物観察表：129頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　全体が掘り込まれる。

重　複　176号土坑(時期不明)→37号住居→イモ穴状土坑（3基)。また、111号土坑(古墳時代後期)との先後関係は不明である。

時　代　6世紀前半

白倉C区38号住居

位　置　39—62他

遺　構　図136・137　PL65・66・67

遺　物　図282・283　PL133・134

面　積　28.8㎡　　**主軸方位**　N—76°—E

形　状　一辺が5.22～5.46mの隅丸方形。

壁と床面　残存壁高は36～51cmである。床面中央部が周辺部よりも7cm程度高くなっている。また、住居南西隅では床に密着するように厚さ2cm程度の粘

土が検出されている。

覆　土　①～③層は自然堆積の可能性が強いが、⑥～⑩層については、混入物などから調査段階で人為的な埋没土の可能性が強いとしている。

カマド　東壁のほぼ中央で検出された。右袖部の中央で小形甕が検出され、左袖部から北側にかけて被熱した結晶片岩が出土しているが、あるいは構築材として使用されたのかもしれない。煙道が僅かに検出された(幅16cm×長さ24cm)。構築材は、ロームが主体を占める。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、84×53×38cmである。周囲は最大2cm程度盛り上がる。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：25×69cm、P2：43×47cm、P3：26×46cm、P4：26×45cmである。

壁周溝　壁に沿って検出された。

遺物出土状態　貯蔵穴周辺で遺棄されたと思われる坏が重なった状態で出土した。10.11.6.5は上からこの順番で4枚重ねて出土し、7の上に16が重なって出土している。タイプAは5～8.10.11.16で、タイプBaは2.4.9.13～15、タイプBは3.12.19～22、タイプCは17.18である。覆土一括の土器片と接合しているのは13.15である。接合資料d.gは甕の破片で、他の接合資料は坏の破片である。(遺物観察表：129・130頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれる。

重　複　56・224・225号土坑(縄文時代).29号土坑(弥生時代)→38号住居→19号住居(7世紀前半)→51号住居(8世紀後半)

時　代　6世紀後半

白倉C区42号住居

位　置　39－73他

遺　構　図138　PL67　**遺　物**　図284　PL134

面　積　22.0㎡　　**主軸方位**　N－11°－W

形　状　一辺が4.20～4.45mの隅丸方形。

壁と床面　西側に傾斜する場所に立地し、残存壁高は東側では50cmであるが、西側では壁が検出できなかった。床面は最大6cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁の若干東側によった位置で検出された。構築材は、焼土粒子を僅かに含むロームが主体を占める。奥壁部左よりで、結晶片岩の支脚が出土している。

貯蔵穴　楕円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、68×59×37cmである。周囲は最大2cm程度盛り上がる。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：29×48cm、P2：32×44cm、P3：32×48cm、P4：26×42cmである。

壁周溝　南壁及び東壁に沿って検出された。

遺物出土状態　タイプAはなく、タイプBaは貯蔵穴から出土した坏(2)だけである。タイプBは1.3～5が該当しよう。覆土一括の土器片と接合しているのは4と5で、1はカマド覆土一括の土器片と接合している。1の甕は土器製作時の刻みが良好に観察できた個体である。(遺物観察表：131頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれ、中央部に粘土を張った土坑が検出されたが図化するのを遺漏してしまった。

重　複　170号土坑(縄文時代)→42号住居→41号住居(10世紀後半)

時　代　6世紀後半

白倉C区48号住居

位　置　38－62他

遺　構　図139　PL67・68

遺　物　図285・286　PL135

面　積　10.9㎡　　**主軸方位**　N－74°－E

形　状　一辺が3.38～2.80mの隅丸長方形。

壁と床面　東側に僅かに傾斜する場所に立地し、残存壁高は36～40cmである。床面は最大9cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁の中央から南側によった場所で検出された。カマドの主軸方位はN－85°－Eである。カマド左袖部先端には袖石が据えられ、構架体の天井石も袖石に接して検出されている。床面から天井石までの焚口高は18cmであった。右袖の大半はイモ穴状土坑によって破壊されている。礫以外の構築材は、焼土粒子を僅かに含むロームが主体を占める。奥壁部のほぼ中央で土製支脚(26)が使用時の状態で出土し、その上面には接して甕(11)が検出された。

貯蔵穴　上面では隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、53×44×49cmである。

柱穴と壁周溝　検出できなかった。

遺物出土状態　南壁際のほぼ中央部でこも編石がまとまって出土している。タイプAは4．5．10．11で、タイプBaは2．3．8、タイプBは1．6．7．9である。覆土一括の土器片と接合しているのは5と6で、8はカマド覆土の土器片と接合している。(遺物観察表：131・132頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれ、床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：107〜87×28cmでB土坑：124〜74×25cmある。

重　複　140・196号土坑(縄文時代)→48号住居。139号土坑(時期不明)との先後関係は不明である。

備　考　カマド部分を中心に炭化材が検出されている。焼失住居かもしれない。

時　代　6世紀後半

白倉C区49号住居

位　置　39—62他

遺　構　図140・141　PL68

遺　物　図286・287・288　PL136

面　積　28.8m²　　**主軸方位**　N—95°—E

形　状　一辺が5.08〜5.16mの隅丸方形。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は35〜44cmである。床面は最大8cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁の中央から南側によった位置で検出された。残存状態は良好で先端部では袖石(結晶片岩)と天井石(牛伏砂岩)が鳥居状に組まれた状態で検出されている。また、カマドに架けられていた甕(7と9)が僅かに前方に倒れた状態で検出され、坏(5)が甕(7)の口縁部内側で入れ子状になって出土している。また、結晶片岩を支脚として使用しているが、使用時の状態を示しているものと思われる。焚口幅は42cm、焚口高は19cmである。礫以外の構築材は、焼土粒子を僅かに含むロームと粘土が主体を占める。

貯蔵穴　上面は隅丸長方形を呈し、床面から20cm程度下がった部分でテラス状に段をもつ。規模(長軸×短軸×深さ)は、95×75×58cmである。南側で検出された棒状の結晶片岩は、貯蔵穴の南側を囲っていたものであろう。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：30×42cm、P2：28×39cm、P3：26×45cm、P4：22×52cmである。

壁周溝　検出できなかった。

遺物出土状態　タイプAは1．5．7．9、タイプBaは4．7．11．13．14、タイプBは2．3．10である。覆土一括の土器片と接合しているのは4と11で、12と15は覆土一括で取り上げてしまったために、タイプは不明である。また、稀少性のある遺物が3点(12・14・15)出土している。12は魚もしくは動物意匠の土製品、14は完形の土鈴、15は木の葉型坏の破片である。(遺物観察表：132頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　全体が浅く掘り込まれ、床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：128〜121×30cm、B土坑：65〜64×30cmである。

重　複　204号土坑(時期不明)→49号住居

時　代　6世紀後半

白倉C区50号住居

位　置　40—65他

遺　構　図142・143　PL69

遺　物　図288・289・290・291　PL137・138

面　積　25.1m²　　**主軸方位**　N—91°—EW

形　状　一辺が4.20〜5.12mの隅丸長方形。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は39〜55

cmである。床面は最大6cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁の中央から南側によった位置で検出された。左袖部先端には袖石が据えられている。また、右袖部先端では甕(1)が横位で出土しており、構架体に使用されたのかもしれない。構築材は焼土粒子を僅かに含むローム及び粘土が主体を占める。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、73×52×48cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：55×33cm、P2：45×43cm、P3：45×56cm、P4：62×54cmである。

壁周溝　検出されなかった。

遺物出土状態　住居南東隅から中央にかけて多量の土器が廃棄されている。図化した土器の中で、この廃棄活動に伴うものは、すべてタイプBとした。タイプAは1と8と30で、タイプBaは1,16,22,23,25,28、タイプBは2～5,7,9～12,14,15,17,18,20,24,26,27,29,31～35、タイプCは6,13,19,21である。覆土一括の土器片と接合しているのは2,4,5,6,7,11～19,20,23である。また、7,14,35の出土レベルを図に示すのを遺漏してしまったが、それぞれ床上10cm程度であった。接合資料a,bは甕の破片で、cは坏の破片である。(遺物観察表：133・134頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれる。2基の床下土坑が検出され、中央部のA土坑覆土は粘土を主体とする。規模(径×深さ)は、A土坑：173～154×19cm、B土坑：102～81×35cmである。

重　複　194号土坑(縄文時代)→50号住居

時　代　6世紀後半

白倉C区52号A住居

位　置　41―67他

遺　構　図144・145　PL69

遺　物　図291　PL139

面　積　15.5㎡　　**主軸方位**　N－9°－E

調査経過　2軒の重複する住居である。旧住居を52号B住居、新住居を52号A住居とした。B住居はA住居の掘り方調査の際に確認されたが、A住居内に入り込むような状態で検出されている。後述するように、A住居に固有の掘り方が確認されないことと、B住居の覆土がブロック土を主体とすることを考え合わせるとB住居の廃絶とA住居の構築は、あまり時間を置かない活動であった可能性が強い。

形　状　一辺が3.85～3.98mの隅丸方形。

壁と床面　平坦な場所に立地し、残存壁高は32～48cmである。数箇所で粘土が確認された。床面は最大10cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁の中央から東によった位置で検出された。左袖の約1/2は耕作溝によって破壊され、右袖部先端は甕を逆位に設置して袖材としている。焚口幅は41cmである。また、煙道(幅20cm×長さ65cm)が確認されている。構築材は、焼土粒子を僅かに含むロームが主体を占める。

貯蔵穴　楕円形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、(57)×45×53cmである。

柱　穴　3本検出できた。本来は4本であったと思われることから、検出できなかった1本は耕作溝によって破壊された可能性が強い。各柱穴の規模(径×深さ)は、P1：25×48cm、P2：39×71cm、P3：35×47cmである。

壁周溝　壁に沿って検出された。

遺物出土状態　多くの遺物を覆土一括として取り上げてしまっている。なお、出土遺物の一覧表に示した一括遺物の数値は、B住居分も含まれているが、多くはA住居覆土一括に帰属する可能性が強い。タイプAは1、タイプBaは2,3,5,6、タイプBは4である。1はカマド一括の土器片と接合している。(遺物観察表：135頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　A住居に伴う固有の掘り方は確認できなかった。

重　複　89・90・91号土坑(縄文時代)，52号B住居(6世紀後半か)→52号A住居，耕作溝による破壊が著しい。

時　代　6世紀後半

白倉C区52号B住居

位　置　41—67他

遺　構　図144　PL69　**遺　物**　図291　PL139

面　積　10.8㎡　**主軸方位**　N－8°－E

調査経過　52号A住居を参照

形　状　一辺が3.02～3.48mの隅丸方形。

壁と床面　残存壁高は6～9cmである。床面は最大10cmの比高がある。

覆　土　人為的な埋土の可能性が強い。

カマド　北壁の中央から東によった位置で検出された。残存状態が悪く不明な点が多い。

貯蔵穴　円形を呈する。規模(径×深さ)は、46×38cmである。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：36×48cm、P2：26×60cm、P3：23×38cm、P4：33×61cmである。

壁周溝　検出できなかった。

遺物出土状態　出土位置を記録した破片は5点と少なく、図化に耐え得る遺物はなかったが、A住居の遺物と型式的には同じと思われた。また、A住居の記載でも触れたように、出土遺物の一覧表に示した一括遺物の数値は、B住居分も含まれているが多くはA住居覆土一括に帰属する可能性が強い。(遺物観察表：135頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれる。

重　複　52号B住居→52号A住居（6世紀後半)

時　代　6世紀後半か

白倉C区58号住居

位　置　35—61他

遺　構　図133　PL－　**遺　物**　図291　PL139

面　積　〈4.7〉㎡　**主軸方位**　N－4°－E

形　状　一辺が2.85m前後の隅丸方形と思われる後出する56・57号住居に破壊されるため、不明な点が多い。

壁と床面　残存壁高が6～15cmと遺存状態が悪い。床面は最大11cmの比高がある。

覆　土　ロームブロックの混入が目立つ。

カマド　北壁の中央から東によった位置で検出された。構築材はロームを主体とする。

貯蔵穴　掘り方調査の際に検出された。円形を呈し規模(径×深さ)は、35×43cmである。

柱穴と壁周溝　検出できなかった。

遺物出土状態　遺構の遺存状態が悪かったこともあるが、遺物出土量は少ない。1と2がタイプBである。接合資料aは甕の破片である。(遺物観察表：135頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　中央部で床下土坑が1基検出されている。規模(径×深さ)は110～100×26cmである。坑底部からは粘土が検出されている。

重　複　58号住居→56.57号住居(奈良～平安時代)

時　代　6世紀後半

白倉C区60号住居

位　置　43—70他

遺　構　図146・147　PL69・70

遺　物　図292・293　PL139

面　積　〈30.4〉㎡　**主軸方位**　N－8°－E

形　状　南側が発掘調査区外であるために、北辺および東辺の一部が不明であるが、一辺が5.61～6.04mの隅丸方形を呈すると思われる。

壁と床面　西側に傾斜する場所に立地し、残存壁高は28～51cmである。床面は最大13cmの比高がある。なお、床面精査の段階で、貼り床に明瞭な差異が認められので、平面図上(図147)にA.B.Cとして記入したので説明しておきたい。A部分は硬くロームとBP粒子によって貼り床される。B部分はロームによって貼り床される。C部分はロームと黒色土によって貼り床され、他の箇所と比較して軟質である。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。なお、各柱穴を結ぶように壁面と平行する炭化材が検出されていることから、焼失住居の可能性が高いと思われる。

カマド　北壁の中央から東によった位置で検出された。両袖部先端には牛伏砂岩が据えられ、構架体に

使用された牛伏砂岩が崩れ落ちていた。また、カマドに架けられていたと思われる甕(1と2)が下に落ちた状態で検出されており、甕(1)の中から坏(9)が出土している。焚口幅は54cmで焚口高は20cm前後であったと思われる。礫以外の構築材は、焼土粒子を僅かに含むロームが主体を占める。

貯蔵穴　検出されなかった。

柱　穴　3本検出できた。1本は調査区外にあるものと思われる。規模(径×深さ)は、P1：28×66cm、P2：33×53cm、P3：30×56cmである。

壁周溝　北壁及び東壁に沿って検出された。

遺物出土状態　焼失住居の可能性が高いことから、遺棄されたと思われる遺物が多い。タイプAは1．2．4．6．9．14．15、タイプBaは3．11、タイプBは5．8．12．13．16～18、タイプCは10である。覆土一括の土器片と接合しているのは4～8で、カマド覆土一括の土器片と接合しているのは1．5．17で、覆土一括とカマド覆土一括の土器片と接合しているのは3と16である。接合資料aは甑、bは高坏、cは坏の破片である。また、覆土一括として取り上げた須恵器の蓋が65号住居(6世紀後半)覆土一括の土器と接合した(65号住居5)。(遺物観察表：135・136頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれる。

重　複　54号土坑(古墳時代後期)→60号住居

備　考　炭化材の樹種についてはⅣ－1で分析しているので参照にしてほしいが、アカガシ亜属が多い。

時　代　6世紀前半

白倉C区61号住居

位　置　41―66他

遺　構　図141　PL70　**遺　物**　図294　PL140

面　積　10.4㎡　　**主軸方位**　N－13°－E

形　状　一辺が3.16～3.29mの隅丸方形。

壁と床面　比較的平坦な場所に立地し、残存壁高は45～57cmである。床面は最大17cmの比高がある。カマド前方及び住居南東部で厚さ2cm程度の粘土分布がみられた。なお、貯蔵穴と柱穴及び壁周溝は検出できなかった。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁の中央から東によった位置で検出された。両袖部先端には袖石が据えられ全面を粘土などによって固定されている。焚口幅は32cmとややせまい。ちなみに、両袖石間の距離は41cmである。カマド内からは架けられていたと思われる甕(1)が前方に倒れた状態で出土している。礫以外の構築材は、焼土粒子を僅かに含む粘土が主体を占める。

遺物出土状態　タイプAは1、タイプBaは5、タイプBは2と6である。3は覆土一括として取り上げており、4は掘り方一括の土器片と接合しておりタイプは不明である。(遺物観察表：136・137頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれ、住居東側で粘土を含む土坑が検出されている。規模(径×深さ)は90～84×15cmである。

重　複　92・97号土坑(縄文時代)，93号土坑(古墳時代後期)→61号住居→イモ穴状土坑

時　代　7世紀前半

白倉C区62号住居

位　置　43―72他

遺　構　図148・149　PL70・71

遺　物　図294・295・296　PL140

面　積　(27.8)㎡　　**主軸方位**　N－3°－E

形　状　一辺が5.02～5.20mの隅丸方形。

壁と床面　西側に傾斜する場所に立地し、残存壁高は44～52cmである。床面も地形に応じて傾斜し最大16cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　重複する65号住居によって破壊されている。おそらく北壁の中央から東側によった位置にあったものと思われる。

貯蔵穴　検出できなかった。

柱　穴　4本検出できた。規模(径×深さ)は、P1：39×44cm、P2：34×34cm、P3：29×35cm、P4：26×33cmである。P3・4は掘り方調査の際、断面ロート

状を呈し上面を粘土やロームブロックなどで固めていたことが確認された。

壁周溝　壁に沿って検出されている。

遺物出土状態　③層が堆積した後に、住居中央部に完形土器も含めてまとまって遺物が廃棄されている。これらの遺物はいずれもタイプBで13,14,16を除く図化遺物すべてがあてはまる。この中で覆土一括の土器片と接合しているのは1～6，9～11,15,17,19である。14は住居縁辺の床面直上から出土しておりタイプAに含まれよう。また、13と16は掘り方から出土しておりタイプAとしておきたい。また、掘り方一括として取り上げた須恵器が重複関係にある65号住居出土の土器と接合した(65号住居1)。接合資料aは長胴甕、b，cは丸甕、dは甑の破片である。(遺物観察表：137･138頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれ、中央部から土坑が検出されている。規模（径×深さ）は192～172×21cmである。坑底部からは粘土が検出されている。

重　複　42号土坑(縄文時代)・34号住居(弥生時代)・35号土坑(時期不明)→62号住居(本住居・6世紀後半)→65号住居(6世紀後半)。本住居と同時期の65号住居との先後関係は、本住居のカマドを65号住居が破壊することから確実である。

時　代　6世紀後半

白倉C区65号住居

位　置　42－72他

遺　構　図145　PL70・71

遺　物　図296　PL140

面　積　9.9m²　　**主軸方位**　N－90°－E

形　状　一辺が2.59～3.12mの隅丸方形。

壁と床面　西側に傾斜する場所に立地し、残存壁高は39～59cmである。床面は最大5cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　東壁の中央から南側によった位置で検出された。構築材は、焼土粒子を僅かに含むロームが主体を占める。

貯蔵穴　カマド右側に円形を呈するピットが検出されている。貯蔵穴かどうかは不明である。規模(径×深さ)は、27×36cmである。

柱　穴　検出できなかった。

壁周溝　南壁に沿って検出された。

遺物出土状態　住居南側を中心に③層堆積後に大型の礫がまとまって廃棄されている。この中には、縄文時代の石器も含まれている。図化した土器の出土位置をみると、1は掘り方出土の2点と本住居によって破壊されている65号住居掘り方一括出土の1点が接合した壺であるが、出土位置から取り合えずタイプBaとしておきたい。2と3はタイプBである。5は覆土一括の土器片と60号住居(6世紀前半)覆土一括の土器片が接合した個体でタイプは不明である。接合資料aは甕の破片である。(遺物観察表：138頁出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：104～100×15cm、B土坑：140～135×11cmである。

重　複　42号土坑(縄文時代)・62号住居(6世紀後半)→65号住居(本住居・6世紀後半)。62号住居との先後関係は土層断面から判断。

時　代　6世紀後半

白倉C区74号住居

位　置　36－62他

遺　構　図150　PL71　**遺　物**　図297　PL140

面　積　〈8.5〉m²　　**主軸方位**　N－95°－E

調査経過　本住居を切る奈良～平安時代の44・45・47号住居及び耕作溝を調査した後に、本住居を調査した。大部分を前述した遺構によって破壊され、残存する壁高も低く、遺存状態は極めて悪かった。カマド、貯蔵穴、柱穴、壁周溝は検出できなかった。

形　状　一辺が5.06～5.09mの隅丸方形を呈する可能性が強い。

壁と床面　比較的平坦な場所に立地し、残存壁高は12～17cmである。床面は最大12cmの比高がある。

覆　土　残存する覆土が少なく不明な点が多い。

カマド　北壁では検出されなかったことから、おそらく東カマドであった可能性が強い。

遺物出土状態　大部分の土器を覆土一括として取り上げてしまったために不明な点が多い。図化した1は、本住居掘り方一括として取り上げた1点と、本住居を破壊する45号住居覆土内から出土した7点が接合した個体である。タイプは不明である。接合資料aは甕の破片である。(遺物観察表：138頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれ、床下土坑が4基検出されている。各土坑の規模(径×深さ)は、A土坑:44～38×15cm、B土坑:79～57×26cm、C土坑:99～80×28cm、D土坑:180～85×12cmである。

重　複　74号住居→44・45・47号(奈良・平安時代)

時　代　不明

白倉C区79号住居

位　置　43―68他

遺　構　図151　P L71　**遺　物**　図297　P L140

面　積　〈6.7〉m²　**主軸方位**　N―10°―E

形　状　約1/2が発掘調査区外であるが、一辺が(3.10)m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

壁と床面　比較的平坦な場所に立地し、残存壁高は33～36cmである。床面は最大5cmの比高がある。

覆　土　自然堆積の可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。耕作溝によって左側1/2を破壊されている。全長57cmの煙道が検出されている。構築材は、焼土粒子を僅かに含む粘土及びロームが主体を占める。

貯蔵穴　隅丸方形を呈する。規模(長軸×短軸×深さ)は、59×50×56cmである。

柱穴と壁周溝　検出できなかった。

遺物出土状態　大半の遺物を覆土一括として取り上げてしまったために、不明な点が多い。図化できた個体は甕1点(№1)のみである。この甕はタイプBで覆土一括の6片と接合している。(遺物観察表：138頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　住居内周辺部が深く掘り込まれ、床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑:99～〈55〉×13cm、B土坑:〈100〉～〈70〉×7cmである。

重　複　耕作溝によって破壊されている。

時　代　7世紀後半

白倉C区88号住居

位　置　31―61他

遺　構　図150　P L71　**遺　物**　図297　P L140

面　積　〈4.4〉m²　**主軸方位**　N―32°―W

調査経過　本住居を一部破壊する6世紀後半の16号住居を調査した後に発掘を行った。遺構の大部分が発掘調査区外であることから、不明な点が多く、カマド・柱穴・壁周溝・貯蔵穴は検出されていない。

形　状　南辺しか検出されていないが、一辺が4.40m前後の隅丸方形を呈すると思われる。

壁と床面　残存壁高が6cm前後と、残存状況は悪かった。床面は最大7cmの比高がある。

覆　土　覆土が薄く不明な点が多い。

遺物出土状態　図化できた個体は甕1点(№1)だけでタイプBである。(遺物観察表：138頁　出土遺物一覧表：179頁)

床下の状態　掘り方の状態を記録する作業を遺漏したために詳細は不明だが、写真から判断する限り床下土坑は検出されていない。

重　複　88号住居→16号住居(6世紀後半)

時　代　5世紀後半

天引7号住居

位　置　28—37他

遺　構　図152　ＰＬ72　**遺　物**　図298　ＰＬ—

面　積　—㎡　　**主軸方位**　Ｎ—14°—Ｗ

形　状　短辺〈1.9〉～長辺3.9mを呈する。

壁と床面　東側に傾斜する場所に立地するため、東半分は消失している。残存壁高は24～40cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　前述したように消失している。

壁周溝　残存部分では検出された。

遺物出土状態　北壁付近に遺物の集中がみられる。本住居に遺棄されたと思われる遺物はみられない。接合資料ａ～ｃは土師器の甕の破片である。(遺物観察表：138・139頁　出土遺物一覧表：180頁)

床下の状態　貼り床のみ存在し、掘り方は確認できなかった。

時　代　6世紀後半

天引44号住居

位　置　49—40他

遺　構　図153　ＰＬ72　**遺　物**　図298　ＰＬ141

面　積　15.8㎡　　**主軸方位**　Ｎ—16°—Ｅ

形　状　短辺3.5～長辺3.7mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は22～44cm。床面は最大6cmの比高がある。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。結晶片岩の支脚が検出された。その他の構造材はロームブロックである。

貯蔵穴　円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、56×44×54cmである。

柱　穴　4本検出された。全体的に浅めである。規模（径×深さ）は、P1：33×21cm、P2：35×23cm、P3：33×56cm、P4：44×19cm。

遺物出土状態　2の坏はカマド前方の床面直上から出土しており本住居に遺棄されたものと考えてよいと思われる。この坏は恐らく飛鳥Ⅱ畿内産坏Ｃである。接合資料ａ～ｃは土師器の甕の破片である。ｄは土師器の椀の口縁片であろう。(遺物観察表：139頁　出土遺物一覧表：180頁)

床下の状態　床下土坑はなかった。重複する粘土採掘坑との区別がつけずらかった。

重　複　21・22・74号粘土採掘坑（6世紀前半）→44号住居　この先後関係は、21号粘土採掘坑の場合は本住居のカマドが存在することから明らかである。また、22・74号粘土採掘坑の場合は土層断面及び覆土観察から明らかである。

備　考　粘土採掘坑群と重複する古墳時代後期の住居は他に141号住居（7世紀前半）がある。

時　代　7世紀後半

天引50号住居

位　置　45—39他

遺　構　図154　ＰＬ72・73

遺　物　図298　ＰＬ141

面　積　10.9㎡　　**主軸方位**　Ｎ—22°—Ｅ

形　状　短辺2.9～長辺3.2mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は18～36cm。床面は最大4cmの比高がある。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。両袖石上に天井石が鳥居状に組まれて出土している。また、煙道部が良好に残存していた。焚口幅は50cm、焚口高は20cmで、結晶片岩の両袖石・天井石・支脚が検出された。支脚は左側に寄った位置で検出された。

遺物出土状態　1の甕は出土状態からみて、カマドに使用されていたものと考えられる。また、滑石のフレイク・チップがまとまって出土している。(遺物観察表：139頁　出土遺物一覧表：180頁)

床下の状態　床下土坑は検出されなかったが、掘り方平面プランはコの字状に掘り窪められている部分が確認できた。

備　考　炭化材がまとまって検出されており、焼失住居と考えられる。また、本住居の周囲には粘土採掘坑が多数検出されている。

時　代　7世紀前半

天引52号住居

位　置　46―44他　　**遺　構**　図152　ＰＬ73
遺　物　図298・299　ＰＬ141
面　積　5.8㎡　　**主軸方位**　Ｎ―１°―Ｅ
カマド主軸方位　Ｎ―55°―Ｅ
形　状　短辺2.2～長辺2.3mの隅丸方形を呈する小型の住居。
壁と床面　残存壁高は13～25cm。床面は最大８cmの比高がある。住居平面図中に示した粘土は床上10cmの部分で検出されており、住居廃絶後に廃棄されたものである。
覆　土　調査時の土層注記において、土が一括埋土であり、焼土及び炭化材が覆土中に含まれることから火災にあった可能性が指摘されている。
カマド　北東隅で検出された。古墳時代としては珍しい位置で、主軸も住居とは異なっている。結晶片岩の支脚上には甕（２）が懸けられていた。１の小型甕も前方に倒れるように出土しておりカマドに懸けられていた可能性が強い。また、４の土器についてはカマドに懸けられていたものか、カマド材として用いられたのか判然としない。焚口幅は25cmである。
遺物出土状態　１・２の甕についてはカマドに懸けられたものと考えられる。３の甑は床上２cmからの出土で本住居に遺棄されたものと推測できる。５（鉢）は、甕の底部（未製品）を焼成した可能性が強い（遺物観察表：139・140頁　出土遺物一覧表：180頁）
床下の状態　床下土坑が２基検出された。規模（径×深さ）は、Ａ土坑：60～32×14cm、Ｂ土坑：40～30×18cm。
重　複　53・56号住居（弥生時代）→52号住居
備　考　焼失住居である。
時　代　５世紀後半

天引57号住居

位　置　46―46他
遺　構　図155・156　ＰＬ74・75
遺　物　図299・300　ＰＬ141・142
面　積　13.7㎡　　**主軸方位**　Ｎ―84°―Ｅ
形　状　短辺3.3～長辺4.2mの隅丸長方形を呈する。
壁と床面　残存壁高は18～34cm。床面は最大６cmの比高がある。凹凸が見られるが、床面中央部が高く周囲が窪む。恐らく掘り方形状に対応した結果である。また、弥生時代の43号住居内に入れ子状で確認された関係で、北東隅及び西壁については、掘り方調査時に本来の形状が確認された。焼失住居で壁が一部焼失化している。また、炭化材が北東部分で出土している。
カマド　東壁の中央で検出された。焚口・天井部の崩落状況や、袖材などを検討すると粘土が多用されているカマドである。
貯蔵穴　円形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、66×61×92cmである。
柱　穴　６本検出された。主柱穴と考えられるP3は掘り方調査の際に検出された。規模（径×深さ）は、P1：31×27cm、P2：25×18cm、P3：17×10cm、P4：36×26cm、P5：32×42cm、P6：35×21cm。
遺物出土状態　住居西側において坏と甕がまとまって出土している（図156）。いずれも完形もしくはそれに近い残存状態で炭化物の層より上位で出土しており、床面10cm以上のレベルである。坏が重なって出土していることから、焼失後に置かれたと考えてよい。住居内に遺棄されたと思われるものは６の甕と11の甑、９の小型甕、31の高坏（置き台として再利用か）などである。また、34・35の須恵器蓋は壁際の出土で遺棄された遺物であろう。（遺物観察表：140・141・142頁　出土遺物一覧表：180頁）
床下の状態　床下土坑が１基検出された。粘土混じりの覆土である。また、掘り方は周囲が掘り窪められる形状であった。
重　複　43号住居（弥生時代）→57号住居
備　考　焼失住居である。
時　代　５世紀後半

天引71号住居

位　置　44―48他
遺　構　図157　ＰＬ75　**遺　物**　図301　ＰＬ142

面　積　—m²　　**主軸方位**　N—11°—W

形　状　短辺(3.0)〜長辺3.5mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は6〜18cm。床面は最大5cmの比高がある。

カマド　耕作溝及び66号住居に破壊されるため、何処にあったか不明である。

遺物出土状態　図化した遺物はいずれも床上10cm程度の出土である。住居中央部から出土した1・2・5・6はいずれも小破片が分布するような状態で出土している(PL75参照)。7の坏及び8の須恵器蓋はほぼ完形である。接合資料a・bは土師器の甕の胴部片である。

床下の状態　床下土坑が2基検出された。規模(径×深さ)は、A土坑：80〜51×80cm、B土坑：69〜58×21cm。

重　複　71号住居→66号住居（8世紀前半）

時　代　5世紀後半

天引73号住居

位　置　40—46他

遺　構　図158・159　PL75・76

遺　物　図302　PL142・143

面　積　33.3m²　　**主軸方位**　N—4°—W

形　状　短辺5.4〜長辺5.8mの隅丸方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は42〜45cm。床面は最大4cmの比高がある。東壁際南よりの床面上で粘土が検出されている。

カマド　北壁の中央から少し東に寄った位置で検出された。左袖脇に天井石に使われた可能性がある結晶片岩が出土している。焚口幅は35cm、焚口高は23cmで、結晶片岩の両袖石・支脚が検出された。その他の構造材はローム質土壌である。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、75×60×54cmである。

柱　穴　4本検出されている。規模（径×深さ）は、P1：38×44cm、P2：30×38cm、P3：26×49cm、P4：32×46cm。

壁周溝　ほぼ全周する。

遺物出土状態　3の小型甕は貯蔵穴から出土しており、廃絶時に近い遺物である。また、西壁近くで手捏ね土器が3点（12・13・14）出土している。いずれも床上10cm程度のレベルで出土していることから何らかの関連性を考えるべきだろう。15はカマド一括取上の遺物である。管玉（16）が覆土上層から出土している。(遺物観察表：143・144頁　出土遺物一覧表：180頁)

床下の状態　床下土坑は検出されていないが中央部と周囲が窪む。また、根太状の痕跡が2カ所で確認されている。

重　複　103号住居（縄文時代）→73号住居→64号住居（9世紀後半）

時　代　6世紀後半

天引87号住居

位　置　40—44他

遺　構　図157　PL76　**遺　物**　図303　PL143

面　積　9.8m²　　**主軸方位**　N—92°—E

形　状　短辺2.7〜長辺3.1mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は42〜47cm。床面は最大4cmの比高がある。

覆　土　重機による攪乱を受けている。

カマド　東壁の中央で検出された。全体的に重機による攪乱を受けており、燃焼部等不明な点が多い。左袖上で1と4が出土している。

貯蔵穴　隅丸長方形を呈する。規模（長軸×短軸×深さ）は、53×41×48cmである。

壁周溝　南及び西壁に沿って検出されている。

遺物出土状態　1・3・4は出土位置から見て本住居に遺棄されたものと思われる。南壁際で、こも編石がまとまって出土している。接合資料aは土師器の小型甕の破片である。(遺物観察表：144・145頁　出土遺物一覧表：181頁)

重　複　62号住居（弥生時代）→87号住居

時　代　7世紀前半

天引115号住居

位　置　38—48他

遺　構　図160　ＰＬ77　**遺　物**　図303　ＰＬ143

面　積　16.7㎡　　**主軸方位**　Ｎ－８°－Ｗ

形　状　短辺3.6～長辺4.0mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は18～22cm。床面は最大３cmの比高がある。南東隅で粘土が出土している。床面直上ではなく、若干浮いているが平面的に分布することから住居に伴う可能性が強い。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。煙道が良好に残存する。構造材はローム質の土壌である。

貯蔵穴　円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、70×66×20cmである。

柱　穴　４本検出された。規模(径×深さ)は、P1：25×38cm、P2：27×28cm、P3：25×53cm、P4：20×22cm。

遺物出土状態　粘土上面から出土した坏（２）は粘土がいつ置かれたかに左右されるが、粘土が住居に伴う可能性が強いことから本住居に遺棄されたものであろう。１の甕はカマドに由来する可能性が強い。石製模造品（８・９・10）が出土している。(遺物観察表：145・146頁　出土遺物一覧表：181頁)

床下の状態　床下土坑が３基検出された。掘り方は周囲が掘り窪められている。規模（径×深さ）は、Ａ土坑：90～80×11cm、Ｂ土坑：55～56×16cm、Ｃ土坑：85～71×93cm。

重　複　114号住居（古墳時代前期）・116号住居（弥生時代）→115号住居

時　代　６世紀後半（２の坏の年代観より）

天引124号住居

位　置　40—42他　　**遺　構**　図161　ＰＬ77・78

遺　物　図304　ＰＬ144

面　積　(31.2) ㎡　　**主軸方位**　Ｎ－２°－Ｗ

形　状　短辺5.0～長辺(5.6)mの隅丸長方形を呈する。

壁と床面　残存壁高は25～30cm。床面は最大７cmの比高がある。柱材と思われる炭化材や量根材が床面直上で検出されている。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。91号土坑や123号住居に大きく破壊され痕跡程度しか確認できなかった。構造材はロームブロックが用いられている。

貯蔵穴　楕円形を呈す。規模（長軸×短軸×深さ）は、107×92×75cmである。

柱　穴　６本検出された。主柱穴１本は91号土坑に破壊される。また、P4～P6は旧住居に伴う可能性が強い。規模(径×深さ)は、P1：37×54cm、P2：50×53cm、P3：40×52cm、P4：22×66cm、P5：40×22cm、P6：43×44cm。

遺物出土状態　南西部でこも編石がまとまって出土している。遺棄されたと考えられる土器としては２の甕や１の甕（置き台として再利用か）がある。接合資料ａは土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表：146・147・148頁　出土遺物一覧表：181頁)

床下の状態　周囲が掘り窪められている。柱穴から旧住居が想定された。

重　複　119・121号住居（弥生時代）→124号住居→91号土坑（平安時代）→120・123号住居（平安時代）

備　考　焼失住居である。

時　代　７世紀前半

天引141号住居

位　置　52—43他

遺　構　図162　ＰＬ78・79

遺　物　図304・305　ＰＬ144

面　積　—㎡　　**主軸方位**　Ｎ－３°－Ｗ

形　状　短辺〈1.6〉～長辺4.5mの隅丸方形か。

壁と床面　残存壁高は17～48cm。床面は最大15cmの比高がある。東側に向かって床面も傾斜する。

カマド　北壁のほぼ中央で検出された。両袖石上に中央で２つに割れている天井石が鳥居状に組まれている。甕が２つ懸けられた状態で検出された。煙道部も確認できた。支脚は左側の甕（１）の下で斜めに倒れた状態で出土した。袖石・天井石・支脚はいずれも結晶片岩である。焚口幅は48cm、焚口高は25cmである。

貯蔵穴　円形を呈す。周囲が僅かに盛り上がる。規模（長軸×短軸×深さ）は、55×46×57cmである。

柱　穴　2本検出された。規模(径×深さ)は、P1：40×60cm、P2：43×72cm。

壁周溝　北壁沿いの一部と西壁に沿って検出された。

遺物出土状態　カマドに懸けられていた2つの甕(1と2)は明らかに本住居の生活時を示す資料である。また、4の坏はカマド右袖下の掘り方部分から出土している。3の甑はカマド材として用いられている。接合資料は土師器の甕の胴部片である。(遺物観察表：148頁　出土遺物一覧表：181頁)

床下の状態　周囲が掘り窪められている形状である。**重　複**　151号住居（弥生時代）→75号粘土採掘坑（6世紀前半）→141号住居

備　考　北西部分でまとまって炭化材が出土しており焼失住居の可能性が強い。

時　代　7世紀前半

天引148号住居

位　置　52—45他

遺　構　図161　PL79　**遺　物**　図—　PL—

面　積　—m²　カマド**主軸方位**　N—11°—W

調査経過　調査区の南端に位置する。149号住居の調査をしていたところ調査区境にかかるようにしてカマド材の礫が出土した。149号住居覆土中に確認できたため明らかに149号住居より後のカマドである。調査区外に接する場所であるためカマド部分のみの調査となってしまい時期も含め不明な点が多い。このカマド脇に貯蔵穴が確認でき3点の土器(149号住居11・12・13)が出土している。調査時にはこの貯蔵穴を148号住居貯蔵穴としたが整理作業の際に再度確認したところ、カマドと重複関係になることと、位置及びカマド下から検出された149号住居P2などとの関係から149号住居の貯蔵穴に変更した。149号住居14については148号住居覆土一括として取り上げた遺物であるが、他の土器と時期的差異があまり見られないことから149号住居覆土出土と考えた方が妥当であろう。あるいは148号住居に由来する土器。カマド材は結晶片岩で両袖石及びその奥にも用いられ、カマド構造からみると奈良時代以降の可能性もある。時期については不明。(遺物観察表：—出土遺物一覧表：181頁)

重　複　149号住居（6世紀前半）→148号住居

時　代　細別時期不明

天引149号住居

位　置　52—45他

遺　構　図159　PL79　**遺　物**　図305　PL144

面　積　—m²　**主軸方位**　N—23°—W

調査経過　大部分を奈良時代の145号住居と重複し、南端は148号住居カマドに破壊される。148号住居との経過については148号住居事実記載を参照してほしい。

形　状　短辺4.3～長辺〈3.8〉mを呈す。

壁と床面　残存壁高は9～24cm。床面は最大7cmの比高がある。

カマド　北壁の中央近くの床面で焼土面が検出されたことから、恐らくこの位置がカマドだったと考えられる。

貯蔵穴　円形か。規模(長軸×短軸×深さ)は、65×〈38〉×33cmである。

柱　穴　3本検出された。P2については148号住居カマド下から検出された。底面レベルはP3と同じであった。規模（径×深さ）は、P1：38×75cm、P2：26×—cm、P3：38×87cm。

遺物出土状態　甕（1）と坏（3・4）及び貯蔵穴出土の甕（11）は出土位置及び残存状態から住居内に遺棄された可能性が強い。(遺物観察表：148・149頁　181頁)

重　複　149号住居→145号住居（8世紀前半）・148号住居（時期不明）

備　考　天引地区の6世紀前半期は、粘土採掘坑群が多数検出された時期である。この地区内で当該期の竪穴住居は本住居のみであった。

時　代　6世紀前半

3 土　　坑

総数67基を古墳時代の土坑として認定した。本巻で扱うのは6・7世紀の200年間であるが、今回の整理作業を通じて、4世紀代の土坑1基（天引C区67号）と、5世紀後半の土坑1基（白倉A区18号）が含まれていることが判明した。このうち、白倉A区18号土坑は長方形の深い土坑で、5世紀後半代の白倉A区73号住居を切っていることから、遺物は同住居のものである可能性もあるが、本遺跡で確認された4～5世紀の土坑の特徴に形態が一致することから、5世紀代の土坑と考えたい。以上の2基も含めて一覧表を作成した。

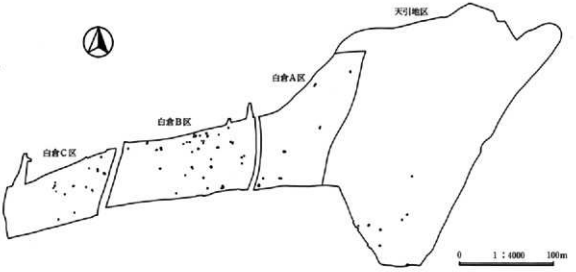
本遺跡では、縄文時代から近世にわたる多数の各種遺構がほぼ同一面で発見されており、重複の頻度もはげしい。そのため、各期遺構の分別は容易でなく、特に各期を通じて同じような形態をとる土坑に至っては、至難の業となる。しかも古墳時代以降の住居には床下土坑をもつものが多く、ここで扱う土坑のなかにも、床下土坑がかなり含まれていると考えざるを得ない。最終的には出土遺物で判断せざるを得ず、多量の土坑の中から67基を選出したというのが実態である。

土坑の分布は各地区にまんべんなく散在しており、白倉A区の土坑数がやや少ないものの、6・7世紀の住居分布とほぼ合致している。

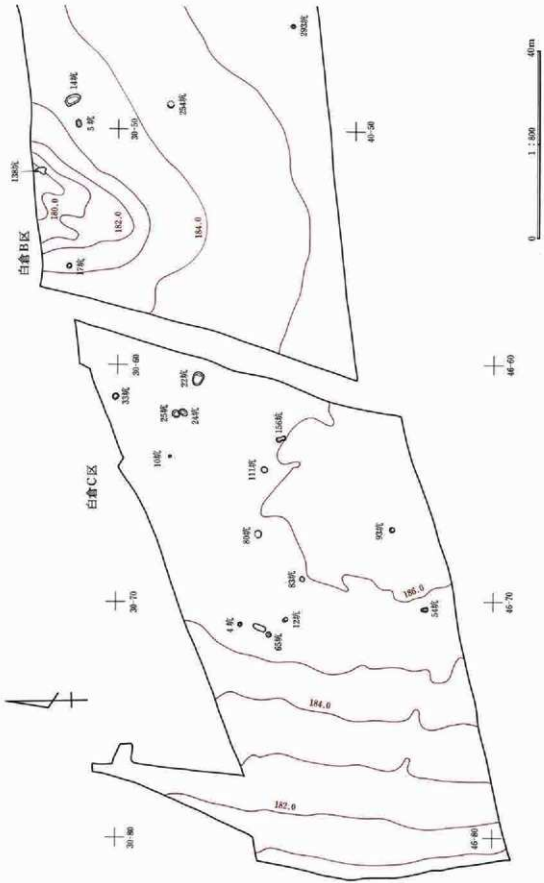
平面形状は、円形のものを中心に楕円形、隅丸長方形、隅丸方形などがあり、不定形を呈するものも多い。不定形のものは複数の遺構が重複したケースが多く、例えば白倉B区206号や同区221号などはその形態が良くわかる。

断面形状は逆台形、方形のものを主体とするが、なかには柱穴状を呈するものもあり、これについては一覧表備考欄に記入した。

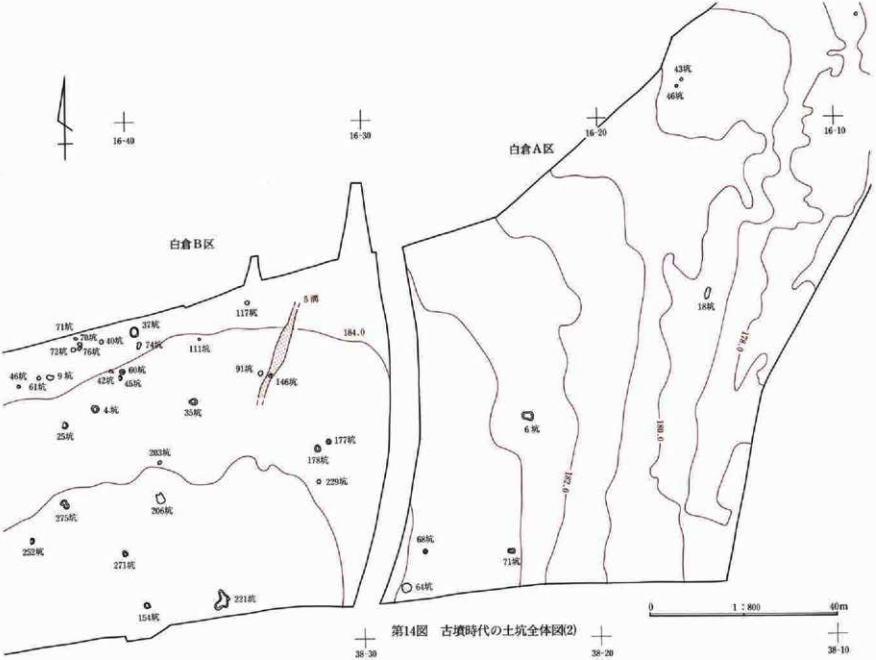
以上のうちから、特異な形態のものをいくつか取り上げておきたい。白倉B区37号は直径2mにおよぶ大型の土坑で、断面形はフラスコ形を呈する。この形態と同じものは、先に報告された弥生時代中期前半期に数多く確認されており、白倉B区でも、6基発見されている。覆土中から古墳時代の土器が出土しているが、この形態の土坑は古墳時代に例がないことから、弥生時代中期前半期の土坑と位置づけておきたい。天引C区174号も直径2.46m、深さ1.42m以上の円形状の大型土坑で、底面までの確認がはたせなかったものである。この土坑が位置する天引C区の台地東側縁辺は、6世紀前半期の粘土採掘坑が集合する地点であり、土坑の形態や出土遺物の時期もそれに一致することから、粘土採掘坑としてま



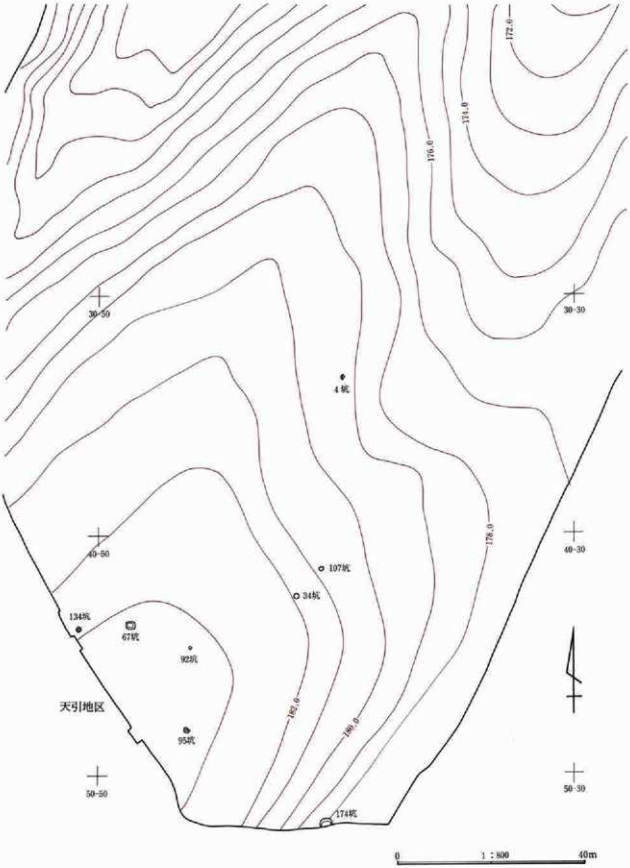
第12図　古墳時代の土坑分布



第13図　古墳時代の土坑全体図(1)



第14図　古墳時代の土坑全体図(2)



第15図　古墳時代の土坑全体図(3)

表3　土坑一覧(67基)

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物 観察表頁	備考 図番号及びPL番号
白倉A区 6号	隅丸長方形	逆台形	220×166×51	30住に切られる	縄文9、弥生3、古墳39（図349）	出土土器は5世紀末～6世紀前半。
白倉A区 18号	長方形	逆台形	268×95×74	66住、73住を切る	古墳73（図349）	出土土器は5世紀後半。73住の遺物の可能性あり。
白倉A区 43号	円形	鍋底形	65×62×30	—	古墳1（図349）	
白倉A区 46号	円形	逆台形	56×50×36	—	古墳1	
白倉A区 47号	不正円形	逆台形	77×68×43	—	古墳3	大型鑿3点を伴う。
白倉A区 64号	隅丸方形	方形	205×190×31	107住を切る	縄文15、古墳73（図349）	鏃多数出土。出土土器は6世紀前半。
白倉A区 68号	不正円形	不正方形	95×73×11	—	縄文2、古墳3	
白倉A区 71号	不正長方形	逆台形	103×86×44	102住	古墳1	不定形な落込みと重複。
白倉B区 4号	隅丸長方形	逆台形	173×136×31	—	縄文3、古墳35	底面から獣胴半部がつぶれた状態で出土。
白倉B区 5号	不正楕円形	逆台形	156×116×32	—	縄文34、古墳49（図349）	
白倉B区 9号	不定形	逆台形	—×103×28	10坑を切る	古墳7	
白倉B区 14号	不正楕円形	逆台形	320×204×51	15坑に切られる	縄文7、古墳11	底面に凹凸が認められる。
白倉B区 17号	円形	逆台形	131×118×22	—	弥生1、古墳1	
白倉B区 25号	円形	方形	138×—×30	23住、切り合い不明	縄文5、弥生1、古墳17	
白倉B区 35号	円形	逆台形	148×133×17	14住	縄文1、古墳2	
白倉B区 37号	円形	フラスコ形	200×170×92	—	縄文12、弥生5、古墳27	中央部の覆土中位から大型の鏃出土。
白倉B区 40号	円形	逆台形	80×73×15	—	古墳5	
白倉B区 42号	楕円形	方形	—×—×33	18住、切り合い不明	古墳7	
白倉B区 45号	楕円形	鍋底状	102×—×28	18住、切り合い不明	古墳23（図349）	底面に凹凸あり。出土土器は6世紀前半。
白倉B区 46号	円形	逆台形	66×61×32	—	古墳4	
白倉B区 60号	円形	逆台形	98×90×35	—	古墳1	
白倉B区 61号	円形	尖底状	47×47×41	—	古墳1	柱穴の可能性が高い。
白倉B区 70号	不正楕円形	鍋底状	108×90×30	—	縄文3、古墳4	東側隅に円形のくぼみが付く。
白倉B区 71号	不正楕円形	不定形	90×63×32	—	縄文6、弥生4、古墳1	中央部に深いくぼみが付く。
白倉B区 72号	楕円形	不定形	98×—×32	75坑、切り合い不明	古墳1	
白倉B区 74号	長楕円形	逆台形	126×60×27	—	縄文1、弥生1、古墳8	
白倉B区 76号	不正長方形	逆台形	101×68×26	—	古墳2	
白倉B区 91号	円形	逆台形	90×75×83	—	古墳2	土坑内に深い柱穴4本前後が含まれる。重複するかは不明。
白倉B区 111号	円形状2穴	柱穴状	64×48×58	—	古墳6	大小2本の柱穴であろう。

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物 観察表頁	備考 図番号及びPL番号
白倉B区 117号	不正楕円形	不定形	109×82×35	116坑、柱穴、切り合い不明	縄文7、古墳27、フレイク1	底面に凹凸あり。
白倉B区 138号	不定形	不定形	―×126×43	―	古墳3、フレイク3、礫2	三日月状を呈し、北側が溝状にのびる。
白倉B区 146号	不正楕円形	不定形	100×74×41	―	縄文2、古墳4	底面に凹凸あり。土坑2基の重複か。
白倉B区 154号	円　形	逆台形	112×110×26	柱穴を切る	古墳12	
白倉B区 177号	円　形	方　形	103×95×26	―	縄文1、古墳3	
白倉B区 178号	円　形	逆台形	140×136×43	―	縄文2、古墳1	
白倉B区 203号	楕円形	鍋底状	75×54×17	―	古墳1、羽口1	
白倉B区 206号	不定形	不定形	232×171×66	―	縄文62、古墳25	土坑数基の重複の可能性が、高い。南側底面から土器片出土。
白倉B区 221号	不定形	不定形	366×340×48	―	古墳4	土坑数基の重複か。
白倉B区 229号	不正円形状	逆台形	78×60×27	37住	縄文1、古墳1	底面中央に円形の浅いくぼみ。柱痕か。
白倉B区 252号	楕円形	逆台形	―×―×22	55住	縄文1、古墳9	覆土上面から土器片出土。
白倉B区 254号	円　形	方　形	―×―×37	56住	縄文17、古墳15	
白倉B区 271号	円　形	逆台形	116×102×60	―	縄文1、弥生5、古墳13	
白倉B区 275号	楕円形状	逆台形	188×102×21	―	古墳7	円形土坑2基の重複であろう。柱穴状のピット数本重複か。
白倉B区 293号	円　形	逆台形	83×74×18	―	古墳5	
白倉C区 4号	楕円形	方　形	98×95×38	―	土器1	
白倉C区 10号	円　形	逆台形	60×(252)×43	―	―	
白倉C区 12号	不定形	不定形	127×104×44	南縁に柱穴が重複	土器2（図349、6世紀後半）	浅い円形坑と長方形坑の重複。土器2点は円形坑に伴う。
白倉C区 22号	隅丸長方形	不定形	285×226×38	―	土器112	東縁の深い部分は重複か。土器片・礫を多量に伴う。
白倉C区 24号	楕円形	鍋底状	165×112×25	―	―	
白倉C区 25号	不正楕円形	逆台形	152×(132)×62	―	―	
白倉C区 33号	円　形	袋　状	(147)×133×34	16住	―	底面中央に柱穴状の穴あり。
白倉C区 54号	長楕円形	逆台形	―×80×8	60住、78住	―	
白倉C区 65号	円　形	―	193×187×48	―	―	底面中央に柱穴状の穴あり。
白倉C区 66号	楕円形	逆台形	316×112×38	―	―	南側の低い部分は別遺構か。
白倉C区 80号	円　形	―	(180)×159×8	9住	土器1（図349）	出土土器は7世紀前半。
白倉C区 83号	不正楕円形	方　形	132×100×67	2方周溝	―	柱穴は別遺構。
白倉C区 93号	不正円形	逆台形	120×―×23	61住	縄文1	
白倉C区 111号	隅丸方形	鍋底状	128×124×63	37住	―（図349）	底面中央に柱穴状の穴あり。出土土器は7世紀前半。
白倉C区 156号	長楕円形	逆台形	208×100×48	1円周溝	―	

土坑番号	平面形	断面形	たて×よこ×深さ (cm)	重複関係	主な出土遺物 観察表頁	備考 図番号及びPL番号
天引C区 34号	円形	方形	106×100×20	—	古墳31	
天引C区 41号	円形	逆台形	—×—×31	28坑、42坑	古墳1	
天引C区 67号	方形	逆台形	168×148×40	—	弥生7、古墳52（図349）	出土土器は4世紀代。
天引C区 92号	円形	不定形	59×51×31	—	縄文2、古墳8	角柱状の大型礫を伴う。柱穴の可能性あり。
天引C区 95号	不正楕円形	鍋底状	133×89×23	96坑を切る	縄文1、古墳4	中央部に大型円礫を伴う。
天引C区 107号	円形	方形	82×78×20	—	古墳1	
天引C区 134号	ゆがんだ円形	方形	147×92×40	—	弥生1、古墳2	北側の柱穴は別遺構。
天引C区 174号	円形	袋状	246×—×142	—	縄文12、弥生2、古墳32、鞴1、フレイク1、石皿1、多孔石1（図350）	粘土採掘坑であろう。出土土器は6世紀前半。

ちがいないだろう。

その他に、長辺が2mほどの方形に近い隅丸長方形を呈する土坑が3基ある。白倉A区6号、同区64号、白倉C区22号がそれである。掘り込みの深さに違いが見られるが、その後の削平を考慮すれば、本来はA区6号の深さがあったと考えられる。いずれも覆土中から破片を中心とする比較的多くの土器が出土しており、A区64号では多量の礫を伴っている。このうちA区6号と64号は6世紀前半に比定される。用途は考える材料は得られてないが、この種の土坑は本遺跡では8世紀以降にも認められる。

4 溝

古墳時代の溝と認定できたものは、白倉B区5号溝の1条のみである。溝は白倉B区の北東隅にあり、南北方向より20°ほど東へ傾いた角度でほぼ直進する。確認面からの掘り込みが浅いため、検出できたのは長さ22mほどの部分にとどまった。溝の上幅は最大で2.7mほどで、深さは20cmたらずであった。断面形状は縁辺が斜めに立ち上がる逆台形状を呈し、下幅は1.5mほどでほぼ平坦な面をなす。底面中央部の幅50cmほどの範囲がカチカチに硬化していた。埋没土はくすんだ黒褐色土で、覆土中からは礫をまじえて多量の土器が出土した。土器は中央部に集中する傾向が見られ、内訳は縄文114点、弥生10点、古墳後期1484点、その他28点である。

溝幅に対する深さが浅いこと、底面が広く平坦で、中央部に硬化面があることなどから、本溝は道と考えるのが最も妥当であろう。白倉の台地には、B区北西端部を谷頭とするほぼ同方向の谷地が南へ伸びており、東側にはA区北東から回り込む谷地がある。つまりこの道は、白倉台地の北へぬける台地頂部を通っていることになり、本地区の主要道となる可能性が高い。この道を南へ直線で延長すると、146号土坑、50号住居、47号住居、75号住居をかすめることになる。このうち、50号住居と75号住居は本道に沿った。傾きで配置されている。なお、本道の西側7mには、本道と同じ方向に直進する4号溝（9世紀代の道）が確認されている。

5 円形周溝遺構

白倉C区の東側、36—62グリッドで1基のみ確認された。奈良・平安時代の45号・46号・47号・54号住居に切られ、確認できたのは円形にめぐる溝の約半分であった。古墳時代の遺構では、北側に74号住居、西側に36号住居が近接する。推定長軸6.4m、短軸5.6mの円形に近い楕円形を呈し、内部に施設などは見あたらない。周溝は幅40～45cm、深さ15cmほどの規模で、断面形は逆台形を呈する。時期を判定する材料は得られていない。

6　粘土採掘坑（第16図、第17図、表4・5、図317～346、図351～371）

合計69基を確認した。形態的特徴から発掘当初は井戸として扱われ、その後も混乱を避けるため、井戸名称で資料化されてきた。また、整理作業のなかで天引C区174号土坑も粘土採掘坑に該当することが判明したが、ここでは全体図（第16図）に掲載するにとどめた。個別図は土坑の部を参照されたい。

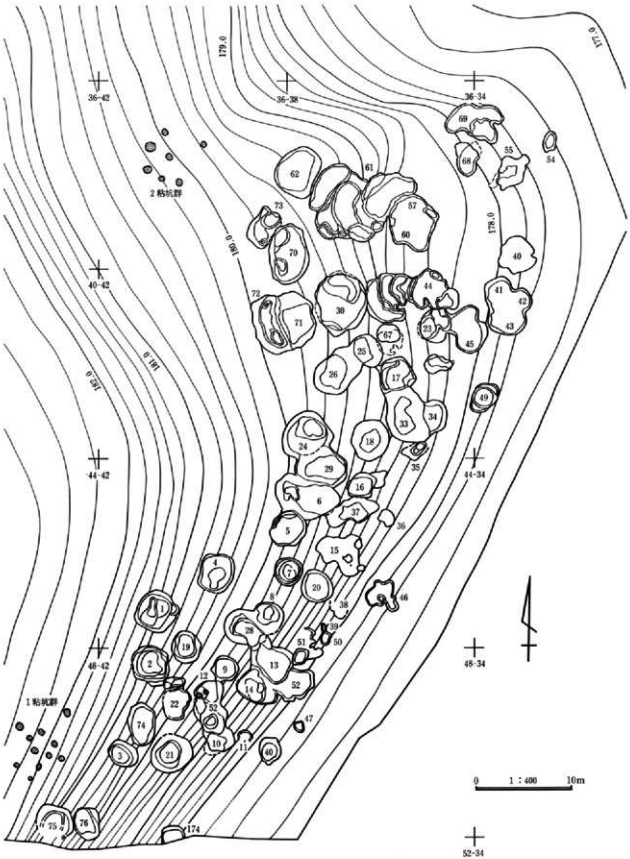
粘土採掘坑の分布は、天引C区台地の東側縁辺斜面に限られる。この地区は、本遺跡がのる上位段丘先端部から、南へ900mほど奥に入った地点で、東側の狐崎の台地との間には三途川に伴う深い谷地が入っている（下図）。谷地との比高は20mほどで、本遺跡側では崖で区切られている。

上位段丘面には南側の丘陵から運ばれた礫と青灰色粘土の互層（XV層）が厚く堆積し、その上にAT以下のローム層が安定した堆積を示している。本遺跡では礫層（XV層）とローム層（Ⅲ～X層）の間に粘土層が堆積しており、そのうちの下半に堆積しているXIV層が良質の青灰色～白色粘土層である。この粘土層は地区によって堆積状況が異なっており、本遺跡内でも台地中央部では50～60cmの層厚で認められるが、縁辺部ではまったく見られない。

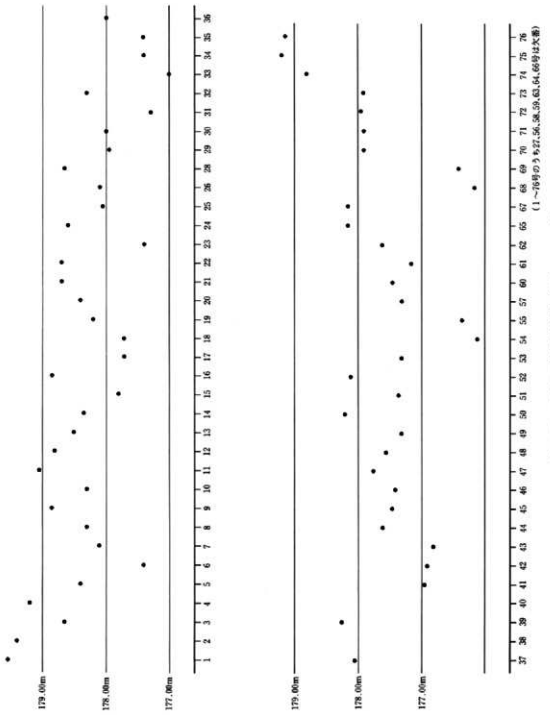
採掘坑は東側の崖に面した台地縁辺の、標高181.5mから177.5mの間に帯状に連なって群をなして分布する（第16図）。この地点は本来東側の狐崎台地と一連の台地であったと考えられ、採掘坑の分布する地点では白色粘土層が50cm前後の層厚で斜面に露呈している。つまり、粘土を採掘するのに最も適した地点であったといえよう。

確認された採掘坑は竪坑を基本としており、連続的に拡張しているものは少ない。平面形状は円形状を呈するものがほとんどで、3m前後から6m以上のものまで認められる。掘削深度は標高によって様々だが、いずれも青灰色～白色粘土層を掘りぬいており、底面のレベルは大半が標高179mから177mの間におさまっている（第17図）。重複するものも多いが、その多くは上面から竪坑で掘り込まれている。

粘土採掘坑群の位置と周辺の地形（1万分の1）



第16図　天引C区粘土採掘土坑群全体図



第17図　天引C区粘土採掘坑底面レベル一覧

表４　天引Ｃ区粘土採掘坑一覧(69基、27･56･58･59･63･64･66欠番)

遺構名	たて×よこ×深さ(cm)	平面形	重　複	備　考
1号	434×412×176	隅丸方形	なし	単独で１単位を示す。覆土は自然埋没。土器・鞴多し。
2	390×446×188	円形状	なし	１号と同様だが覆土に人為埋土。遺物少ない。
3	328×270×240	楕円形	なし	２号と同様に人為埋土。遺物少ない。
4	370×410×150	方形状	<49住(９Ｃ)、<32杭	下層出土の礫は地山礫。南側底面の穴は梯子穴であろう。
5	388×362×166	円形状	＞６号	底面はほぼ平坦。
6	697×472×247	楕円形	＜５号、<29号、<45号(11Ｃ)	中層から土器・木製品出土。
7	292×288×196	円形	なし	単独の小型タイプ。底面はほぼ平坦。
8	350×353×172	円形	28号	底面に落ち込みあり。
9	270×282×143	円形	12号	底部付近から土器出土。
10	198×－×190	円形状	32号	南西側オーバーハング。
11	－×154×74		なし	
12	302×264×180	ひさご形	＞32号、９号	南西側への落ち込みに梯子をかけた状態で確認。
13	388×472×148	台形状	＞52号、<14号、28号	北西側のオーバーハングした落ち込み付近から土器出土。
14	354×310×150	不定形	＞13号、＞52号	遺物の出土なし。
15	440×454×172	不定形	<102号(10Ｃ)	上面に102住がのる。覆土中から土器多数出土。
16	255×(288)×82	円形状	＞37号	底面はほぼ平坦。
17	420×384×224	方形状	<25号、33号	西壁下に周溝状、東壁下に円形状の落ち込みがある。
18	404×443×225	円　形	なし	底面中央の円形落ち込みに梯子がかかり、南東側へ伸びる。
19	308×358×258	楕円形	66坑	底面中央から東壁上へ梯子がかかる。下層から杭14本出土。
20	342×345×118	円　形	なし	南東側覆土中から土器がまとまって出土。
21	425×450×196	円　形	<44住(７Ｃ)	底面はほぼ平坦。
22	336×300×－	不定形	<44住(７Ｃ)	南側上面に44住がのる。北側壁外の落ち込み本坑に含む。
23	267×(207)×168	たまご形	>31号、<44号	底面に円形状落ち込み数個あり。
24	535×(520)×128	円　形	＞29号	北側深い掘り込みあり。東側の穴は梯子穴か。
25	375×(320)×156	楕円形	＞26号、＞67号、＞17号	遺物出土なし。
26	390×(515)×205	楕円形	<25号	東側底面から杭と曲物容器、その上面から甕と坏出土。
27				
28	380×410×167	楕円形	８号、13号	底面付近から土器・木器出土。
29	－×538×202	円形状	＞６号、<24号	底面の東西両隅に落ち込みがある。
30	510×630×237	円形状	65号	南北両側がオーバーハングし、北側では大きな掘込みを伴う。
31	－×275×72	不定形	>45号、<23号	遺物出土なし。
32	145×148×182	楕円形状	<12号、10号	底面付近から土器・木器出土。北側の深い部分は12号。
33	545×424×250	楕円形状	<17号、34号、35号	東側に重複する34号と一体の可能性あり。遺物出土なし。
34	395×(260)×126	円形状	33号	遺物出土なし。
35	182×95×168	長方形	33号	
36	166×160×27	円形状	なし	底面の一部のみ確認。
37	302×275×102	バナナ形	６号、16号	底面に凹凸あり。
38	－×－×	不定形		底面の一部のみ確認。
39	86×45×17	楕円形	50号	底面の一部のみ確認。
40	398×408×－	円形状		底面の一部のみ確認。
41	298×－×35	円形状	42号、43号	底面の一部のみ確認。42号、43号と一体の可能性あり。
42	－×257×－	円形状	41号、43号	底面の一部のみ確認。
43	412×－×55		41号、42号	底面の一部のみ確認。
44	－×450×135	不定形	23号、65号	底面の一部のみ確認。底面に凹凸あり。
45	－×328×96	円形状	<31号	遺物出土なし、底面はほぼ平坦。
46	382×338×34	不定形		底面の一部のみ確認。
47	113×106×26	円形状		底面の一部のみ確認。
48	240×298×76	円形状		底面の一部のみ確認。
49	258×304×58	円形状		底面の一部のみ確認。
50	118×138×18	不定形	39号	底面の一部のみ確認。
51	144×186×40	不定形	13号	最深部落ち込み底面から手捏ね土器２、坩２、甕１出土。
52	337×－×50	不定形	<13号、<14号	底面に凹凸がある。
53	188×290×53	不定形		底面の一部のみ確認。
54	166×206×100	楕円形		底面の一部のみ確認。一部に深い穴あり。
55	378×278×122	不定形		台地側の西へ掘り進んでいる状況が判る。
56				
57	－×－×115		60・61号	
58				
59				
60	－×－×113		57・61号	

遺構名	たて×よこ×深さ(cm)	平面形	重　　複	備　　考
61	―×―×175		57・60号	
62	535×432×166			
63				
64				
65	―×534×58	不定形	44号、30号	底面にバナナ形の掘り方が並ぶ。
66				
67	225×235×138	円形状	<25号	断面形が袋状で、底面は南側へ大きくオーバーハングする。
68	348×233×180			
69	638×398×174			
70	423×653×165		73号	
71	590×385×156		72号	
72	633×298×172		71号	
73	265×402×70		70号	
74	284×462×115			
75	―×397×153			
76	277×(345)×147			
174坑				

表5　天引C区粘土採掘坑出土遺物一覧(69基)

遺跡名	土器									木器								
	壺	壺	坩	甕	鉢	坏	高坏	その他	計	曲物	刳物	勝子	杭	棒	杖	板材	不明	計
1	4		1			1			6									
2	2								2									
3	2								2									
4	2				1				3									
5																		
6	1						1		2							1		1
7						1			1				1					1
8						1			1									
9	3					2			5									
10																		
11		1				1			2									
12							1		1			1	1					2
13	5		1	1		3			10									
14																		
15	6			2		1			9									
16	1								1									
17	1								1				2	1			1	4
18	1					1			2			1						1
19	2						1		3			1	14				9	24
20	2								2									
21	1								1									
22	1					1	1		3								1	1
23	1								1									
24			1					紡錘車1	2									
25																		
26	1				1	1			3	1			1					2
27																		
28	2				1	2			5		1		1			1		3
29						2			2									
30						1			1									
31																		
32	3					2			5					3			1	4
33																		
34																		
35																		
36																		
37	1																	
38																		

遺跡名	土器									木器								
	甕	壺	坩	甑	鉢	坏	高坏	その他	計	曲物	刳物	梯子	杭	棒	枝	板材	不明	計
39																		
40																		
41																		
42																		
43																		
44				1					1									
45																		
46						1	2		3									
47	1								1									
48	1					1			2									
49																		
50																		
51	1		2			2			5									
52	1								1									
53																		
54																		
55																		
56																		
57	1					1			2									
58																		
59																		
60																		
61	1								1									
62	12		5	1	1				19									
63																		
64																		
65	4								4									
66																		
67																		
68																		
69																		
70						1			1				1					1
71													11	1			4	16
72										1			2					3
73																		
74						1			1				4				1	5
75																		
76	1								1									
不明																		
計	65	1	10	5	4	27	6	1	119	2	1	3	38	5		2	17	68

覆土は掘削したブロック状混土で埋没するものが大半で、明らかに自然埋没と認定できたのは1号・4号の2基だけであった。

遺物は土器・木器が数多く出土しており、出土点数を表5にまとめた。土器は総計119点出土しており、一部に5世紀代の様相は見られるものの、おおよそ6世紀前半代のなかにおさまっている。大半は覆土中に投げ込まれた状態で出土しているが、51号では手捏ね状の土器2個、小型壺2個、甕1個が底面から出土しており注意を要する。木器は総計68点が出土しており、土器に較べて底面付近から出土しているものが多い。そのなかで特に注目されるものに梯子、曲物容器、杭がある。

梯子は12号、18号、19号で各1本ずつ、計3本が出土しており、いずれも底面中央のくぼみ穴にかけた状態で検出されている。滞水域に達しない上半部は腐食して失われているが、かけた方向は12号が南側、18号は南東、19号は東側で、いずれも比高の少ない方向から出入りしていたことがわかる。なお、4号や24号にも底面に同規模の穴があり、これらも梯子穴であった可能性が高い。

曲物容器は樹皮を使用した薄手のもので、26号と

72号から各１点ずつ出土した。いずれも底面に密着した状態で出土しており、かたわらに杭が置かれていた。曲物容器は樹皮をつる様のもので綴っただけの華奢な作りのもので、粘土を入れて運んだとは考えにくく、使用目的は不明である。

杭は11基の採掘坑から38点が出土している。尖端部の加工は４面前後の面取りをしたものとそれ以上の細かな面取りを施すものがあり、前者のなかには２面を大きくカットしてヘラ状に仕上げたものもある。これらは杭として打ち込まれたものはなく、いずれも粘土採掘の掘り具として使用されたと考えられる。26号と72号では曲物容器のかたわらに置かれた状態で出土しているが、その他は大半が投げ込まれた状態で出土しており、特に19号と71号では欠損品を中心に10本以上の杭が一括投げ込まれた状態で出土している。

なお、木器ではこれらの他に刳物容器(28号)、建築材（74号)、板材（６号･28号）などが出土している。

61号、65号は連続的に拡張しながら掘り進んだと考えられる例である。いずれもバナナ状に湾曲した堀形が連続しており、これが掘削の単位にあたる。61号では標高の低い西側から東側に向かってランダムに掘り進み、掘った土を後方の穴にかき出している状況が、断面図で確認できる(図340、図341)。65号も標高の低い西側から東へ掘り進んでおり、バナナ状の掘り方が規則的にならんでいる。

このような例は本遺跡では少なく、１時期に大量の粘土を採掘するような大がかりな活動ではなかったと考えられるが、一連の採掘活動は６世紀前半代に限られており、これを大がかりと考えるかどうかは目的しだいであろう。採掘の目的としては土器作り、カマド用粘土の採掘、埴輪製作などが考えられるが、カマド用粘土の採掘にしては規模が大きすぎる。６世紀前半は本遺跡の規模が拡大する時期であり、土器作りが最も妥当だが、分析結果はあまり思わしくない。(Ⅳ－４)。なお、６世紀前半期の住居は白倉Ａ･Ｂ区に集中しており、天引地区には149住が該当するにとどまる。

表６　天引Ｃ区粘土土坑一覧（20基）

遺構名	長軸×短軸×深さ（cm）	タイプ	備　　考
１号－１	76×62×10	C	
2	78×74×25	A	
3	65×62×22		
4	58×58×18	C	
5	62×58×14	C	
6	64×59×16		底面中央に穴
7	60×58×10		
8	57×52×20		
9	50×45×18		
10	64×56×9		
11	40×37×15		西側に深い穴
２号－１	113×95×9	A	
2	94×73×7	B	
3	71×70×8	B	
4	77×75×12	C	地山礫を少し含む
5	75×63×5	B	〃
6	66×63×12	B	地山礫を多く含む
7	75×70×10	C	〃
３号－１	68×65×12	D	地山礫を多く含む
2	62×60×10	D	〃

7　粘土土坑（第16図、表６、図347、図348）

粘土採掘坑の周辺で、粘土で埋まった小規模な土坑群を発見した。いずれも群をなしており、75号採掘坑北側の11基を１号、62号採掘坑西側の７基を２号、12号採掘坑に重複する２基を３号粘土土坑群とした。

平面形状は基本的に円形で、大きさは直径50～100cmほどである。上面をかなり削平されており、平面形の確認にとどまるものも多いが、最も深いものでも25cmほどである。覆土はほぼ白色粘土のみで埋まったもの(Ａタイプ)、粘土主体混土のみで埋まったもの(Ｂタイプ)、下層にローム主体混土、中位に白色粘土か粘土主体混土が堆積するもの（Ｃタイプ)、黒褐色土主体混土と粘土主体混土が混じるもの（Ｄタイプ）などがある。本地区特有の地山礫を含むものはあるが、遺物はまったく出土していない。

このような粘土土坑は、平安時代後半期の粘土採掘坑が調査された東京都多摩ニュータウン№146遺跡でも54基確認されており、そこでは水殿（すいでん）施設の可能性が指摘されている。本遺跡では使用目的を示すような結果は得られなかったが、№146遺跡の検討結果を支持し、同様の遺跡と考えたい。

Ⅳ　出土遺物の理科学的分析

1　竪穴住居跡出土炭化材の樹種分析

植田弥生（パレオ・ラボ）

今回報告対象となった竪穴住居跡は170軒であるが、その中で焼失住居の可能性がある竪穴住居跡は47軒と実に1／4以上にもなる。発掘調査時においても、上記の理由から多くの炭化材が検出されたのでサンプルをとり樹種分析を行うこととした。主に、竪穴住居の構造材となろうが、当時の植生を考えるうえでの基礎的なデーターとなるであろう。分析結果は以下を参照してほしいが、表7（炭化材樹種同定一覧）に示した番号について説明をしておきたい。試料№とは、分析した炭化材の通し番号で、遺構図に記載してある番号である。遺物番号は調査時における取り上げ番号である。

さて、分析結果を一瞥すると照葉樹が多いのは以外であった。本章3で分析を行った出土木製品も同様な結果を示しており、興味深い。また、試料№476は、白倉A区15号住居出土紡錘車の軸である。貴重な事例といえよう。（この部分のみ編集担当　木村文貴）

1　はじめに

ここでは古墳時代後期の住居跡から出土した炭化材試料238点と土坑から出土した炭化材試料1点の樹種同定を報告する。また当報告では、組織学的な検討結果のを記してあるので、故状については別章を参照されたい。

当遺跡からは炭化したわら状の稈の破片が複数の住居から炭化材に混じり出土した。この同定については、愛知教育大学の渡辺幹男博士に御教示頂いた事、ここに感謝いたします。

2　炭化材樹種同定の方法

まず炭化材を手で割り新鮮な横断面（木口）を作り実体顕微鏡で観察しおおよその特徴をとらえる。さらに詳細な観察をするために横断面・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の電子顕微鏡用の試料を作成する。接線断面と放射断面は片刃の剃刀を軽くあて弾くように割り新鮮な面を出す。3断面の試料はそれぞれ直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定しその周囲を導電性ペーストで塗る。試料を充分に乾燥させた後、金蒸着を施し走査電子顕微鏡（日本電子　製　JSM T-100型）で観察・撮影した。

3　結果および考察

樹種同定結果を試料番号ごとに表に示した。一試料に異なる種類が含まれているものについては中点を打ち並記した。各遺構ごとに出土した樹種が判るよう、地区ごとに表8を示した。

住居跡から出土した樹種は、針葉樹が4分類群、落葉広葉樹が12分類群、常緑広葉樹が6分類群、樹種が判明できなかった散孔材と半環孔材が各1点づつ出土した。針葉樹はカヤ・イヌガヤ・モミ属、そして試料が薄片のため針葉樹であることしか判らなかったものである。落葉広葉樹は、クマシデ属イヌシデ節・クリ・コナラ属コナラ節・ケヤキ・サクラ属・コクサギ・アカメガシワ・カエデ属・トチノキ・ケンポナシ属・タラノキ・トネリコ属である。常緑広葉樹はコナラ属アカガシ亜属・クスノキ科・ツバキ属・サカキ・ヒサカキ・アオキ

である。ただしクスノキ科の多くは常緑性であるが落葉性のものもあり、材組織では区別できないので落葉性の可能性もある。

樹木の他に２種類の異なるイネ科が出土している。一つはいわゆるタケ・ササの仲間であるイネ亜科である。№282は破片であり完形の直径は判らないが、№283は直径1.5cmであった。もう一種類はイネ科Ａで、草本性で軟らかく直径約0.5cmで節部を取り囲む葉鞘が残っている試料もあった。

4　考　　察

アカガシ亜属はほとんどの住居跡から出土しており、出土点数も圧倒的に多い。このことから当遺跡の古墳時代後期には住居材にアカガシ亜属が多く用いられていたことが明らかになった。そのほかの樹種は各住居から散点的に出土しており特に出土点数が多い樹種はないが、合計23分類群が出土しており多種多用な材を利用していたといえる。また当遺跡では、常緑広葉樹が多く６分類群が出土している。これらの樹種は林の中で高木層を形成するアカガシ亜属・クスノキ科・ツバキ属・サカキ、そして亜高木になるヒサカキ、低木のアオキであり、身近な林から利用目的に応じて材を調達したように見受られる。

従来の遺跡報告からは北関東の住居材は縄文時代はクリが多く、弥生時代以降はクヌギ節とコナラ節が用いられ使用材が変化したことが知られている（山田、1993）。しかし当遺跡ではアカガシ亜属が最も多く出土し、コナラ節は１点が出土しただけでクヌギ節はまったく検出されなかった。また縄文時代に多用されたクリも住居からはまったく検出されず、土坑から１点が出土しただけである。山田（1993）の資料からは北関東の古墳時代後期の住居材でアカガシ亜属が多く、そのうえ常緑樹の利用種数が多い遺跡はみあたらない。当遺跡北部の高崎市の新保遺跡（鈴木・能城、1986、1988）や日高遺跡（鈴木・能城、1982）の自然木および加工木の樹種同定に基づく弥生時代から平安時代の古植生は、アカガシ亜属が生育してはいたが照葉樹林は成立はしておらず暖帯の落葉広葉樹林が想定されている。

当遺跡の古墳時代前期の住居材の同定結果は、12分類群中３分類群の常緑広葉樹が検出されている。木製品を含め、常緑広葉樹の種数が多いのは古墳時代後期に照葉樹林要素が増えたのか、もしくは遺跡の立地上の問題も考えられるが今後の資料の蓄積を待つ必要がある。

5　記　　載

カヤ　Torreya nucifera Sieb. et Zucc.　イチイ科　PL198　1a-1c（№147）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。仮道管に２本が対になる細いらせん肥厚があることからカヤと同定した。

暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、種子は食用になり、材は水湿に強く加工しやすい。

イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia　(Knight)　K.koch　イヌガヤ科　PL198　2a-2c（№178）

仮道管・・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。樹脂細胞は均一に散在し、仮道管にらせん肥厚がある。分野壁孔は小さく、トウヒ型とヒノキ型がみられ、１分野に１～２個ある。

暖帯から温帯下部の山林の下に生育する常緑小高木である。材は緻密で固く小型の器具や細工物などに使われる。種子からは油が取れるが悪臭がある。材は縄文時代から弓に用いられている。

モミ属 Abies マツ科　PL198 3a-3c（№207）　PL199　4a-4c（№140）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において細胞壁に数珠状肥厚がみられ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型で１～４個あり、炭化材では孔口の大きさが不揃いで、ヒノキ型やスギ型が混在して見える。接線断面において放射組織は比較的背が高い。

モミ属は常緑高木で暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの５種がある。いずれの材も有用である。組織は類似しており区別はできない。

クマシデ属イヌシデ節 Carpinus sect. Eucarpinus　カバノキ科　PL199 5a-5c（№262）

放射組織が集合する部分と２～数個の小型の管孔が放射方向に複合し配列する部分とがある放射孔材である。ピスフレックがあらわれる。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、１～３細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。集合放射組織があり、穿孔も単一であることから、イヌシデ節と同定した。なおクマシデ節は集合放射組織の出現頻度が低く、穿孔は横棒が10本以下の階段状のものが多いことで区別している。

クマシデ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木である。イヌシデ節にはイヌシデとアカシデがあり山野に普通である。クマシデ節には山地の谷沿いに多いサワシバ・クマシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。いずれの材も丈夫で有用である。

コナラ属アカガシ亜属 Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　PL199　6a-6c（№102）

中型～小型の管孔が単独で放射方向や斜状に配列し、年輪界は不明瞭、広放射組織をもち、木部柔組織の接線状配列が顕著な放射孔材である。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状・複合状の広放射組織があり、道管との壁孔は棚状・交互状で孔口は大きい。

アカガシ亜属は常緑でドングリをつけるカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、農具として用いられる代表樹種である。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 Q. subgen. Quercus sect. Prinus　ブナ科　PL200 7a-7c（№145）

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列のものと広放射組織とがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがあり、いずれも有用材であり、堅果は食用となる。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　PL200 8a-8c（№468）

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。果実は食用になり、材は耐朽性にすぐれ、縄文時代から柱材の使用例が有名である。

ケヤキ Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ニレ科　PL200 9a-9c (№33)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、その後小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管には螺旋肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材の用途は建築材や容器が多い。

クスノキ科　Lauraceae　PL201 10a-10c (№100)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細かな螺旋肥厚がある。放射組織は方形細胞を含む異性、1～2細胞幅、上下端に大きな油細胞が見られる。管孔が大きく、油細胞の出現頻度の高いクスノキ以外の樹種であるがこれ以上は区別できなかった。

暖帯に生育し多くは常緑の高木または低木である。葉や材に油細胞があるのが特徴である。

サクラ属 Prunus　バラ科　PL201 11a-11c (№331)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後放射方向・接線方向・斜状に複合して全体的にうねるように分布している散孔材である。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔に細い螺旋肥厚がある。放射組織は同性の試料と異性の試料があり、約5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯～温帯の山地に生育し、落葉広葉樹林の代表的な属であり多くの種を含む。ほとんどの種が落葉性の高木であり、果実が食べられるものが多い。材は粘り気があり強く、保存性も高いので用途は広い。

コクサギ Orixa japonica Thunb. ミカン科　PL201　12a-12c (№240)

2～数個が放射方向に複合した非常に小型の管孔が雲紋状に配列する紋様孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔には螺旋肥厚がある。放射組織は方形細胞を含む異性、単列である。暖帯～温帯の山野に普通の落葉低木でやや湿った所に生育し、葉には強い臭気がある。材は細工物に使われる。

アカメガシワ　Mallotus japonicus Muell. Arg. トウダイグサ科　PL202 13a-13c (№1)

年輪の始めに単独または2～3個が複合した中型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材部は数個の非常に小型の管孔が放射方向に複合して配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列異性、接線断面において放射柔細胞の断面はレンズ状であり、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

暖帯の日当りのよい山野に普通の落葉高木である。植物名は芽・若葉が紅色であることに由来しており、古代は葉に食物をのせた。材質はあまりよくなく、器具や薪炭材として利用される。

カエデ属　Acer カエデ科　PL202 14a-14c (№165)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭で、帯状の柔組織が顕著な散

孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細い螺旋肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

暖帯から温帯上部の山地や谷筋に生育し、落葉広葉樹林の代表的な属であり多くの種を含み、そのほとんどは落葉性である。材は有用で用途も広い。

トチノキ Aesculus turbinata Blume　トチノキ科　PL202　15a-15c（№13）

小型の管孔が単独または2～数個が複合して散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に螺旋肥厚がある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は交互状に密在する。本試料ではトチノキの特徴のひとつである放射組織の層階状の配列は見られなかった。

温帯の谷間に生育する落葉高木である。種子はアク抜きが必要だが食用となる。材は軽軟で緻密で加工し易いが耐久性は低く狂いがでやすい。材面は絹系光沢があり容器などによく使われている。

ケンポナシ属 Hovenia　クロウメモドキ科　PL203 16a-16c（№291）

年輪の始めに中型の管孔が1～2層あり除々に径を減じてゆき、晩材部は単独または放射方向に2～3個複合した非常に小型で厚壁の管孔が散在し、周囲状・翼状の柔組織が顕著な環孔材である。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～4細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞が単列で伸び、結晶細胞がある。

暖帯の山中に生育する落葉高木である。本州・四国に分布するケケンポナシと北海道から九州に広く分布するケンポナシがある。果実は食べられる。材質はよいほうで有用である。

ツバキ属 Camellia ツバキ科　PL203 17a-17c（№3）

非常に小型の管孔が単独または2～3個が複合して均一に散在し、年輪の始めの管孔はやや大きい傾向がある散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒が大く20本ほどの階段穿孔、内腔にはかすかならせん肥厚がある。放射組織は上下端に方形・直立細胞がある異性、1～3細胞幅、膨らんだ油細胞があり、道管との壁孔は階段状である。

暖帯の海岸から山中に生育する常緑の低木または高木である。地域により変種があるがヤブツバキが最も普通にみられ、材は強くて硬く建築材や器具に使われる。

サカキ Cleyera japonica Thunb. ツバキ科　PL203 18a-18c（№282）

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材である。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒の数が30前後の階段穿孔、内腔にほぼ水平の螺旋肥厚がある。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

亜熱帯・暖帯に生育する常緑小高木である。材は固く丈夫であり、農具の柄や小物器具類として使用されている。

ヒサカキ　Eurya japonica Thunb. ツバキ属　PL204 19a-19c（№264）

非常に小型で多角形の管孔が密に散在する散孔材である。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒の数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、2細胞幅が多く、道管との壁孔は交互状・階段状である。

暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。材は小物器具や薪炭材につかわれる。

タラノキ　Aralia elata Seem. ウコギ科　PL204 20a-20c (№190)

年輪の始めに中型から小型の管孔が数層配列し、晩材部は非常に小型の管孔が斜状・塊状・接線状・放射方向と様々に複合して紋様を描き配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、3細胞幅である。

暖帯から温帯の山野に普通で日当りのよい所に生育する落葉低木である。枝には多数の刺がある。材は丈夫ではなく木理も不斉であり小物器具に使われるぐらいである。

アオキ Acuba japonoca Thunb.　ミズキ科　PL204 21a-21c (№266)

非常に小型の管孔が幅の広い放射組織と放射組織の間に単独または放射方向に2～数個が複合して散在し年輪界にむけて除々に径を減じる散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数の多い階段穿孔、内腔には水平に走る螺旋肥厚が密にある。放射組織は異性、5細胞幅のものが多く、直立細胞が上下端や周囲にあり鞘細胞がみられ、放射柔細胞は大きい。

暖帯から温帯下部の林内に普通の常緑低木である。髄が大きく、材部は多くないので材の利用はあまり聞かない。

トネリコ属 Fraxinus　モクセイ科　PL205 22a-22c (№252)

中型～大型の管孔が2～3層配列し、単独または2個が複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材である。周囲状の柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1～3細胞幅である。

おもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難く、機械類・板材・棒・柄などに使われる。遺跡からは建築材・板・杭・柄・碗などの使用例があり、よく使用されている樹種である。

散孔材　PL205 23a-23c (№2)

単独または2～4個が複合した小型の丸い管孔が均一に散在する散孔材である。道管の壁孔は不明、穿孔は横棒数の非常に多い階段状である。放射組織は異性、3細胞幅が多く、上下端は方形・直立細胞が単列で伸びる。

半環孔材　PL205 24a-24c (№283)

直径0.5cmの中心に髄がある小枝である。年輪の始めに小型の管孔が2～3層配列し、その後は非常に小型の管孔が様々に複合して分布する半環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～3細胞幅である。繊維細胞にらせん肥厚がある。タラノキの小枝の可能性が考えられる。

イネ科タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科　PL206　25 (№283)

№282は破片であり完形の直径は不明だが、№283は直径1.5cmであった。不整中心柱で、3～4個の大きな管孔があり厚い維管束鞘で囲まれている。維管束は密在し多層ある。稈の破片から、属や種を同定する事は難しい。

ヨシ属　Phragmites　イネ科　PL206　26（№245）

草本性で柔らかく直径約0.5cmで、中心部は中空、節部はタケ・ササ類のように窪んだ一条の筋はなく少し「く」の字型に曲がる。節部を取り囲む葉鞘が残っている資料もある。稈の横断面の組織は維管束が散在する不整中心柱である。維管束は原生木部とその左右に後生木部、その間に師部があり、全体が繊維組織に囲まれている。稈の外縁の維管束鞘は層が厚いが、内側は少ない。イネ科タケ亜科に比べて維管束の分布密度は低い。

ヨシ属は、川岸や湿地に生育する大型の多年草でツルヨシ・ヨシ・セイタカヨシがあるが、稈の一部から区別するのは難しい。

引用文献
鈴木三男・能城修一、1982、日高遺跡出土木材の樹種　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　P.372-388
鈴木三男・能城修一、1986、新保遺跡出土加工木の樹種　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　P.71-94　PL.3-19
鈴木三男・能城修一、1988、新保遺跡出土自然木の樹種とそれによる古植生復元　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　P.435-453　図版190-211
山田昌久、1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成―用材から見た人間・植物関係史　植生史研究　特別第1号　P.242

表 7　出土炭化材樹種同定一覧

試料No.	遺物番号	樹種
1	白A14住－B土坑	アカメガシワ
2	白A20住－炭A	散孔材
3	白A20住－炭B	ツバキ属
4	白A23住－炭1	コナラ属アカガシ亜属
5	白A23住－炭2	ヒサカキ
6	白A23住－炭3	アカガシ亜属・サクラ属
7	白A23住－炭4	コナラ属アカガシ亜属
8	白A23住－炭5	コナラ属アカガシ亜属
10	白A23住－炭7	モミ属
11	白A23住－炭8	サクラ属
12	白A23住－炭9	コナラ属アカガシ亜属
13	白A23住－炭10	トチノキ
14	白A23住－炭11	コナラ属アカガシ亜属
15	白A23住－炭12	コナラ属アカガシ亜属
16	白A23住－炭13	コナラ属アカガシ亜属
17	白A23住－炭14	コナラ属アカガシ亜属
18	白A23住－炭15	コナラ属アカガシ亜属
19	白A23住－炭16	コナラ属アカガシ亜属
469	白A23住－炭17	コナラ属アカガシ亜属
470	白A23住－炭18	コナラ属アカガシ亜属
471	白A23住－炭19	コナラ属アカガシ亜属
472	白A23住－炭20	コナラ属アカガシ亜属
20	白A26住－炭1	カエデ属
21	白A26住－炭2	コナラ属アカガシ亜属
22	白A26住－炭3	コナラ属アカガシ亜属
23	白A26住－炭4	コナラ属アカガシ亜属
24	白A26住－炭5	コナラ属アカガシ亜属
25	白A26住－炭6	コナラ属アカガシ亜属
29	白A26住－炭10	コナラ属アカガシ亜属
30	白A26住－炭11	コナラ属アカガシ亜属
32	白A26住－炭13	カヤ
33	白A26住－炭14	ケヤキ
34	白A26住－炭15	コナラ属アカガシ亜属
35	白A26住－炭16	コナラ属アカガシ亜属
36	白A26住－炭17	コナラ属アカガシ亜属
37	白A26住－炭18	コナラ属アカガシ亜属
39	白A26住－炭20	コナラ属アカガシ亜属
40	白A26住－炭21	コナラ属アカガシ亜属
42	白A26住－炭23	コナラ属アカガシ亜属
43	白A26住－炭24	アカガシ亜属・アオキ
44	白A26住－炭25	コナラ属アカガシ亜属
45	白A26住－炭26	コナラ属アカガシ亜属
46	白A26住－炭27	コナラ属アカガシ亜属
47	白A26住－炭28	コナラ属アカガシ亜属
49	白A26住－炭30	コナラ属アカガシ亜属
52	白A26住－炭33	コナラ属アカガシ亜属
54	白A27住－炭1	コナラ属アカガシ亜属
55	白A27住－炭2	コナラ属アカガシ亜属
56	白A27住－炭5	コナラ属アカガシ亜属
58	白A27住－炭7	コナラ属アカガシ亜属
59	白A27住－炭8	コナラ属アカガシ亜属
60	白A27住－炭9	コナラ属アカガシ亜属
61	白A27住－炭10	コナラ属アカガシ亜属
62	白A27住－炭11	コナラ属アカガシ亜属
63	白A27住－炭12	コナラ属アカガシ亜属
66	白A27住－覆土	コナラ属アカガシ亜属
67	白A27住－B住穴掘部	コナラ属アカガシ亜属
68	白A34住－炭1	コナラ属アカガシ亜属
69	白A34住－炭2	コナラ属アカガシ亜属
70	白A34住－炭3	コナラ属アカガシ亜属
71	白A34住－炭4	コナラ属アカガシ亜属
72	白A34住－炭5	コナラ属アカガシ亜属
73	白A34住－炭6	コナラ属アカガシ亜属
74	白A34住－炭7	コナラ属アカガシ亜属
76	白A34住－炭9	コナラ属アカガシ亜属
77	白A34住－炭10	コナラ属アカガシ亜属
78	白A34住－炭11	コナラ属アカガシ亜属
79	白A34住－炭12	コナラ属アカガシ亜属
80	白A34住－炭13	コナラ属アカガシ亜属
81	白A34住－炭14	コナラ属アカガシ亜属
82	白A34住－炭15	コナラ属アカガシ亜属
83	白A34住－炭16	コナラ属アカガシ亜属
84	白A34住－炭17	コナラ属アカガシ亜属
85	白A34住－炭18	コナラ属アカガシ亜属
86	白A34住－炭19	コナラ属アカガシ亜属
87	白A34住－炭20	コナラ属アカガシ亜属
88	白A34住－炭21	コナラ属アカガシ亜属
93	白A34住－炭26	コナラ属アカガシ亜属
94	白A34住－炭27	コナラ属アカガシ亜属
95	白A34住－炭28	コナラ属アカガシ亜属
98	白A34住－炭31	コナラ属アカガシ亜属
99	白A34住－炭32	コナラ属アカガシ亜属
100	白A34住－炭33	クスノキ科
101	白A34住－炭34	モミ属
102	白A34住－炭35	コナラ属アカガシ亜属
103	白A34住－炭36	コナラ属アカガシ亜属
104	白A34住－炭37	コナラ属アカガシ亜属
105	白A34住－炭38	コナラ属アカガシ亜属
106	白A34住－炭39	コナラ属アカガシ亜属
107	白A34住－炭40	コナラ属アカガシ亜属
108	白A34住－炭41	コナラ属アカガシ亜属
109	白A34住－炭42	コナラ属アカガシ亜属
110	白A34住－炭43	コナラ属アカガシ亜属
111	白A34住－炭44	コナラ属アカガシ亜属
112	白A34住－炭45	コナラ属アカガシ亜属
113	白A34住－炭46	コナラ属アカガシ亜属
115	白A34住－炭48	コナラ属アカガシ亜属
118	白A34住－炭51	コナラ属アカガシ亜属
119	白A34住－炭53	コナラ属アカガシ亜属
120	白A34住－炭54	コナラ属アカガシ亜属

試料No.	遺物番号	樹種
121	白A34住一炭55	コナラ属アカガシ亜属
122	白A34住一炭56	コナラ属アカガシ亜属
123	白A34住一炭57	コナラ属アカガシ亜属
124	白A34住一炭58	コナラ属アカガシ亜属
125	白A34住一炭60	コナラ属アカガシ亜属
126	白A34住一炭61	コナラ属アカガシ亜属
127	白A34住一炭62	コナラ属アカガシ亜属
128	白A34住一炭63	コナラ属アカガシ亜属
129	白A34住一炭64	コナラ属アカガシ亜属
130	白A34住一炭65	ヨシ属
131	白A34住一炭66	コナラ属アカガシ亜属
132	白A34住一炭67	コナラ属アカガシ亜属
133	白A34住一炭68	コナラ属アカガシ亜属
134	白A34住一炭69	コナラ属アカガシ亜属
135	白A34住一炭70	コナラ属アカガシ亜属
137	白A34住一炭72	コナラ属アカガシ亜属
138	白A34住一炭73	コナラ属アカガシ亜属
139	白A34住一炭74	コナラ属アカガシ亜属
140	白A44住一炭	モミ属
141	白A65住一炭1	コナラ属アカガシ亜属
143	白A65住一炭3	コナラ属アカガシ亜属
144	白A81住一炭1	モミ属
145	白A85住一炭1	コナラ属コナラ節
146	白A93住一炭1	コナラ属アカガシ亜属
147	白A93住一炭2カマド	カヤ
148	白A94住一炭1	モミ属
150	白A94住一炭3	コナラ属アカガシ亜属
151	白A94住一炭4	モミ属
152	白A94住一炭5	カヤ
153	白A94住一炭6	ツバキ属
154	白A94住一炭7	モミ属
155	白A94住一炭8	ツバキ属
156	白A94住一炭9	カヤ
157	白A94住一炭10	ツバキ属
158	白A94住一炭11	ツバキ属
159	白A94住一炭12	ツバキ属
160	白A94住一炭13	モミ属
162	白A94住一炭15	モミ属
164	白A94住一炭17	コナラ属アカガシ亜属
165	白A94住一炭18	カエデ属
167	白A94住一炭20	コナラ属アカガシ亜属
169	白A94住一炭23	コナラ属アカガシ亜属
171	白A94住一炭25	モミ属
172	白A94住一炭26	モミ属
174	白A94住一炭28	モミ属
176	白A94住一炭30	コクサギ
177	白A94住一炭31	ケヤキ
178	白A94住一炭32	イヌガヤ
180	白A94住一炭34	イヌガヤ
181	白A94住一炭35	カヤ

試料No.	遺物番号	樹種
184	白A94住一炭38	イヌガヤ
186	白A94住一炭40	タラノキ
187	白A94住一炭41	コナラ属アカガシ亜属
188	白A94住一炭42	イヌガヤ・カエデ属
190	白A94住一炭44	タラノキ
191	白A94住一炭45	タラノキ
192	白A94住一炭46	コナラ属アカガシ亜属
194	白A94住一炭48	カエデ属
195	白A103住一炭1	コナラ属アカガシ亜属
196	白A103住一炭2	コナラ属アカガシ亜属
197	白A103住一炭3	コナラ属アカガシ亜属
198	白A103住一炭4	コナラ属アカガシ亜属
199	白A103住一炭5	コナラ属アカガシ亜属
200	白A103住一炭6	カエデ属
201	白A103住一炭7	コナラ属アカガシ亜属
202	白A103住一炭8	コナラ属アカガシ亜属
203	白A103住一炭9	コナラ属アカガシ亜属
204	白A103住一炭10	コナラ属アカガシ亜属
205	白A103住一炭11	コナラ属アカガシ亜属
206	白A103住一炭12	コナラ属アカガシ亜属
207	白A105住一炭1	モミ属
208	白A105住一炭2	モミ属
209	白B3住一№61	モミ属
210	白B3住一№76	モミ属
211	白B3住一№77	コナラ属アカガシ亜属
212	白B3住一№78	モミ属
213	白B3住一№79	コナラ属アカガシ亜属
214	白B3住一№80	モミ属
215	白B3住一№81	カヤ
216	白B3住一№82	コナラ属アカガシ亜属
217	白B3住一№83	モミ属
218	白B3住一№84	コナラ属アカガシ亜属
219	白B3住一№90	モミ属
220	白B3住一№93	コナラ属アカガシ亜属
221	白B10住一№62	コナラ属アカガシ亜属
222	白B10住一№63	コナラ属アカガシ亜属
223	白B10住一№64	コナラ属アカガシ亜属
224	白B10住一№65	コナラ属アカガシ亜属
225	白B10住一№66	コナラ属アカガシ亜属
226	白B10住一№67	コナラ属アカガシ亜属
227	白B10住一№68	アカガシ亜属・ヨシ属
228	白B10住一№85	アカガシ亜属・ヨシ属
229	白B10住一№86	コナラ属アカガシ亜属
230	白B10住一№87	コナラ属アカガシ亜属
231	白B10住一№88	コナラ属アカガシ亜属
232	白B10住一№89	モミ属
233	白B10住一№90	コナラ属アカガシ亜属
234	白B10住一№91	コナラ属アカガシ亜属
235	白B10住一№92	コナラ属アカガシ亜属
236	白B10住一№93	コナラ属アカガシ亜属

試料No	遺物番号	樹種
237	白B10住—No94	ヨシ属
238	白B12住—炭①	コナラ属アカガシ亜属
239	白B16住—No79	コナラ属アカガシ亜属
240	白B16住—No80	コクサギ
241	白B16住—No81	コナラ属アカガシ亜属
242	白B16住—No83	コナラ属アカガシ亜属
243	白B16住—No84	コナラ属アカガシ亜属
244	白B16住—No85	コナラ属アカガシ亜属
245	白B17住—No138	ヨシ属
246	白B17住—No139	コナラ属アカガシ亜属
247	白B17住—No140	コナラ属アカガシ亜属
248	白B17住—No141	コナラ属アカガシ亜属
249	白B20住—No70	コナラ属アカガシ亜属
250	白B20住—No71	コナラ属アカガシ亜属
251	白B20住—No72	コナラ属アカガシ亜属
252	白B22住—No45	トネリコ属
253	白B22住—No46	トネリコ属
254	白B22住—No47	トネリコ属
255	白B22住—No48	サクラ属
256	白B28住—炭1	カエデ属
257	白B28住—炭2	クスノキ科
258	白B28住—炭3	カエデ属・ヨシ属
259	白B28住—炭4	クスノキ科
260	白B61住—No48	サクラ属
261	白B65住—No50	カエデ属
262	白B65住—No51	クマシデ属
263	白B65住—No52	クマシデ属
264	白B73住—No 1	ヒサカキ
266	白B73住—No 9	アオキ
267	白C60住—No 1	サカキ
268	白C60住—No 2	コナラ属アカガシ亜属
269	白C60住—No 3	コナラ属アカガシ亜属
270	白C60住—No 4	ツバキ属
271	白C60住—No 5	カエデ属
272	白C60住—No 6	コナラ属アカガシ亜属
273	白C60住—No 7	アカガシ亜属・針葉樹
274	白C60住—No 8	カエデ属
275	白C60住—No 9	コナラ属アカガシ亜属
276	白C60住—No10	コナラ属アカガシ亜属
277	白C60住—No11	コナラ属アカガシ亜属
278	白C60住—No12	コナラ属アカガシ亜属
279	白C60住—No13	コナラ属アカガシ亜属
280	白C60住—No14	コナラ属アカガシ亜属
281	白C60住—No15	コナラ属アカガシ亜属
282	白C60住—No97	サカキ・タケ亜科
283	白C60住—No98	半環孔材・タケ亜科
475	白C65住—覆土	カエデ属
284	天C44住—炭1	ツバキ属
285	天C44住—炭2	カエデ属
288	天C44住—炭5	コナラ属アカガシ亜属

試料No	遺物番号	樹種
289	天C57住—炭1	コナラ属アカガシ亜属
290	天C115住—炭1	カエデ属
291	天C115住—炭2	ケンポナシ属
292	天C124住—炭1	コナラ属アカガシ亜属
293	天C124住—炭2	コナラ属アカガシ亜属
294	天C124住—炭3	コナラ属アカガシ亜属
295	天C141住—炭4	コナラ属アカガシ亜属
468	天C25土坑	クリ
476	白A15住3	クマシデ属クマシデ節

表８－１　白倉Ａ区住居別出土樹種

＼遺構 分類群＼	白A 14住	白A 20住	白A 23住	白A 26住	白A 27住	白A 34住	白A 44住	白A 65住	白A 81住	白A 85住	白A 93住	白A 94住	白A 103住	白A 105住
カヤ				1							1	3		
イヌガヤ												4		
モミ属			1			1	1		1			8		2
アカガシ亜属			15	21	11	58		2			1	6	11	
コナラ節										1				
ケヤキ				1								1		
クスノキ科						1								
サクラ属			1											
コクサギ												1		
アカメガシワ	1													
カエデ属				1								1		
トチノキ			1											
ツバキ属		1										1		
ヒサカキ			1											
タラノキ												3	1	
アオキ				1										
散孔材		1												
タケ亜科						1								
合　計	1	2	19	25	11	61	1	2	1	1	2	28	12	2

表８－２　白倉Ｂ区住居別出土樹種

＼遺構 分類群＼	白B 3住	白B 10住	白B 12住	白B 16住	白B 17住	白B 20住	白B 22住	白B 28住	白B 61住	白B 65住	白B 73住
カヤ	1				3	3					
モミ属	6	1									
クマシデ属										2	
アカガシ亜属	5	15	1	5							
クスノキ科								2			
サクラ属							1		1		
コクサギ				1							
カエデ属								2		1	
ヒサカキ											1
トネリコ属							3				1
ヨシ属		3			1			1			
合　計	12	19	1	6	4	3	4	5	1	3	2

表８－３　白倉Ｃ区・天引地区住居別および土坑墓の出土樹種

＼遺構 分類群＼	白C 60住	白C 65住	白C 44住	白C 57住	白C 115住	白C 124住	白C 141住	白C 25土坑
針葉樹	1						1	
クリ								1
アカガシ亜属	11		1	1		3		
カエデ属	2	1	1		1			
ケンポナシ属					1			
ツバキ属	1		1					
サカキ	2							
半環孔材	1							
タケ亜科	2							
合　計	20	1	3	1	2	3	1	1

2　遺構出土種実の分析

新山雅広（パレオ・ラボ）

1．はじめに

今回の発掘調査においては、竪穴住居跡覆土や完形土器内部の土のフローテーションを行った。その結果、僅かではあったが炭化種実を検出することができた。調査区が江戸時代以降畑作が行われた場所であることから、出土したものが全て古墳時代に帰属するかどうかは再度検討しなければならないが、基礎的データーを提示するために分析を依頼した。（この部分のみ編集担当　木村文貴）

2．出土した大型植物化石

木本ではオニグルミ、サクラ属、スモモ、モモ、サンショウ、ブドウ属、草本ではコムギ、イネ、ササゲ属、マメ類を出土した。出土した大型植物化石の一覧を表9に示した。

3．栽培・利用植物について

出土したもののうち、栽培植物と考えられるものは、木本ではスモモ、モモ、草本ではコムギ、イネ、ササゲ属(アズキ、緑豆の類)、マメ類であり、ササゲ属の中には吉崎(1992)によるアズキの仲間と思われるものがみられた(試料8)。他に、遺跡周辺に生育していたものと思われるオニグルミ、コナラ属、サンショウ、ブドウ属は食用になり、利用可能である。

4．大型植物化石の記載

オニグルミ　Juglans aillanyhifolia Carr. 炭化核

出土したものは全て破片であるが、完形であれば、核は側面観は卵形から円形、先端は鋭頭、上面観は円形。表面は、縦に不規則な隆起があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

スモモ　Prunus salicina Lindl. 炭化核

核はやや偏平な楕円形。表面は比較的滑らかで溝や孔のような明瞭なくぼみはない。

モモ　Prunus persica (Linn.) Batsch 炭化核

核は偏平な楕円形。一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則な流れるような溝と孔がある。

サンショウ　Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC. 炭化種子

種子は側面観は楕円形、上面観は卵形、表面には網目模様があり、一方の側面にはへそがある。

ブドウ属　Vitis 炭化種子

種子は側面観は卵形、上面観は楕円形、背面にはさじ状のへそがあり、腹面には穴が2つある。

コムギ　Triticum aestivum Linn. 炭化穎果、炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は偏平。

イネ　Oryza sativa Linn. 炭化穎果、炭化胚乳

側面観は楕円形、上面観は偏平。穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。

ササゲ属　Vigna 炭化種子

子葉の内面には、本葉につく長くて明瞭な柄の痕跡がみられる。なお、試料8のササゲ属は子葉の内面の幼根と初生葉が確認でき、幼根の立ち上がりの角度から吉崎(1992)によるアズキの仲間と思われる。

大型植物化石の同定にあたって、流通科学大学の南木睦彦助教授にご指導して頂いた。ここに感謝致します。

引用文献　吉崎昌一　「古代雑穀の検出」『考古学ジャーナル』No.355，1992

表9　遺構出土種実一覧表

№	分類群と個数	出土位置
1	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区3号住居2(甕)内
2	不明、2	白倉A区20号住居貯蔵穴
3	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉A区20号住居貯蔵穴
4	マメ類、炭化種子、1	白倉A区20号住居貯蔵穴
5	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉A区25号住居貯蔵穴
6	コムギ、炭化胚乳、40,イネ、炭化胚乳、1	白倉A区25号住居貯蔵穴
7	コムギ、炭化胚乳、1，イネ、炭化胚乳、1	白倉A区26号住居覆土
8	ササゲ属（アズキの仲間）、炭化種子、1	白倉A区27号住居床直上
9	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区27号住居床直上
10	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区27号住居2(小型甕)内
11	コムギ、炭化胚乳、1，イネ、炭化胚乳、1	白倉A区27号住居3(小型甕)内
13	不明、(1)	白倉A区31号住居貯蔵穴
14	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉A区31号住居貯蔵穴
15	コムギ、炭化胚乳、4	白倉A区31号住居貯蔵穴
16	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区31号住居8(甕)内
17	コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区33号住居10(坏)内
18	コムギ、炭化胚乳、5	白倉A区33号住居2(甕)内
19	モモ、炭化核、(1)，コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区33号住居26(甕)内
20	イネ、炭化胚乳、35	白倉A区34号住居覆土
21	コムギ、炭化胚乳、24,イネ、炭化胚乳、4	白倉A区34号住居覆土
22	コムギ、炭化胚乳、6	白倉A区34号住居貯蔵穴
23	コムギ、炭化胚乳、1，イネ、炭化胚乳、1	白倉A区34号住居貯蔵穴
24	ブドウ属、炭化種子、1	白倉A区34号住居貯蔵穴
25	コムギ、炭化胚乳、8	白倉A区34号住居貯蔵穴
26	不明、1	白倉A区34号住居貯蔵穴下層
27	イネ、炭化穎果、1，炭化胚乳、1，コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区34号住居覆土
28	コムギ、炭化胚乳、2	白倉A区34号住居覆土
29	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区34号住居覆土
30	ブドウ属、炭化種子、(1)	白倉A区34号住居覆土
31	不明、1	白倉A区34号住居覆土
32	コムギ、炭化胚乳、35	白倉A区34号住居覆土
33	草本の茎、1	白倉A区34号住居覆土
34	コムギ、炭化胚乳、1，不明、2	白倉A区34号住居覆土
35	イネ、炭化胚乳、1，不明、1	白倉A区34号住居覆土
36	コムギ、炭化胚乳、2	白倉A区34号住居覆土
37	モモ、炭化核、(1)	白倉A区34号住居覆土
38	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区34号住居8(甑)内
39	コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区34号住居8(甑)内
40	虫えい、1	白倉A区34号住居14(高坏)内
42	コムギ、炭化胚乳、1，イネ、炭化胚乳、1，不明、2	白倉A区43号住居貯蔵穴
43	不明、1	白倉A区65号住居1(甕)内
44	虫えい、1	白倉A区65号住居1(甕)内
45	虫えい、1	白倉A区81号住居貯蔵穴
46	イネ、炭化胚乳、1、(1)	白倉A区81号住居貯蔵穴
47	不明、1	白倉A区85号住居覆土
48	不明、1	白倉A区85号住居覆土
49	サンショウ、炭化種子、(2)，不明、1	白倉A区85号住居覆土
50	コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区85号住居覆土
51	オニグルミ、炭化核、破片多数（約1個分）	白倉A区85号住居覆土
52	コムギ、炭化穎果、1，炭化胚乳、35	白倉A区85号住居覆土
53	ブドウ属、炭化種子、1	白倉A区85号住居覆土
54	不明、(1)	白倉A区85号住居覆土
55	スモモ、炭化核、B1	白倉A区85号住居覆土
56	オニグルミ、炭化核、(1)，モモ、炭化核、破片多数（約3個分）	白倉A区85号住居覆土
57	虫えい、12	白倉A区85号住居覆土
58	イネ、炭化胚乳、48	白倉A区85号住居覆土
59	イネ、炭化胚乳、8	白倉A区85号住居覆土
60	モモ、炭化核、破片多数（約半分）	白倉A区85号住居覆土
61	コムギ、炭化胚乳、1，ブドウ属、炭化種子、2	白倉A区85号住居覆土

No.	分類群と個数	出土位置
62	サンショウ、炭化種子、1	白倉A区85号住居覆土
63	不明、(2)	白倉A区85号住居覆土
64	ササゲ属、炭化種子、1	白倉A区85号住居覆土
65	コナラ属、炭化子葉、1	白倉A区85号住居覆土
66	不明、(1)	白倉A区85号住居覆土
67	モモ、炭化核、約3個分（完形1＋破片多数）	白倉A区85号住居覆土
68	ササゲ属、6	白倉A区85号住居覆土
69	コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区85号住居覆土
70	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区85号住居覆土
71	虫えい、1	白倉A区85号住居覆土
72	モモ、炭化核、約半分（破片4）	白倉A区85号住居貯蔵穴
73	イネ、炭化胚乳、2	白倉A区85号住居貯蔵穴
74	コムギ、炭化胚乳、1	白倉A区85号住居貯蔵穴
75	イネ、炭化胚乳、1	白倉A区85号住居貯蔵穴
76	コムギ、炭化胚乳、2，イネ、炭化胚乳、1，不明、4	白倉A区86号住居貯蔵穴
77	虫えい、1，不明、1	白倉A区86号住居貯蔵穴
78	ササゲ属、炭化種子、2	白倉A区86号住居貯蔵穴
79	ササゲ属、炭化種子、1	白倉A区86号住居覆土
80	オニグルミ、炭化核、(1)	白倉A区105号住居3(壁)内
81	ササゲ属、炭化種子、1（破片2）	白倉A区105号住居3(壁)内
82	コムギ、炭化胚乳、3，イネ、炭化胚乳、2	白倉A区105号住居1(壁)内
83	モモ、炭化核、1	白倉A区112号住居2
84	モモ、炭化核、破片多数（約半分）	白倉B区73号住居3
85	モモ、炭化核、1	白倉B区73号住居4
86	モモ、炭化核、破片多数（約1個分）	白倉C区4号住居16(幅)内
87	モモ、炭化核、1	白倉C区42号住居覆土

3　粘土採掘坑出土木製品の樹種分析

㈱パレオ・ラボ　松葉礼子

1．はじめに

天引地区からは粘土採掘坑がまとまって検出されたことは既に述べたところである。この粘土採掘坑からは曲物やはしごなどの木製品が出土している。出土状態や一覧については、本文編粘土採掘坑の事実記載や観察表編木器観察表、曲物については成果と問題点を参照して欲しい。このレポートは、当事業団において作成したプレパラートについて分析を依頼した、その報告である。(以上文責　編集担当)

製品のうち曲物２点（遺物番号34,62）については、保存処理を行った後に樹種同定を試みた為サンプル処理法が異なり、３の項で別に扱う事にした。

これらの木質遺物の樹種を明らかにする事で、当時の木材利用を解明する一端となる事を目的として調査を行った。

2　方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、乾燥させ永久標本とした。樹種の同定には、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠は後述する。結果は、表２ 白倉下原・天引向原遺跡古墳時代後期出土木製品の樹種同定結果に示す。

なお、作成した木材組織プレパラートは、群馬県埋蔵文化財センターに保管されている。

同定根拠

モミ属 Abies sp.　PINACEAE　　写真ＰＬ208　1a～1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり単列。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、１分野に１～４個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。モミ属にはモミを始めとして、５種が含まれる。いずれも、常緑高木の針葉樹である。

アカマツ Pinus densiflora Sieb. et Zucc.　PINACEAE　　写真ＰＬ208　2a～2c

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、１分野に１～２個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯から暖帯にかけて分布し、材は脂分が多く重硬である。

スギ Cryptomerica japonica　(L.fil.)　D.Don　TAXODIACEAE　　写真ＰＬ208　3a～3c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり２個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯から暖帯、主として太平洋側に多く存在している。材は、木理が通直で、割裂性がよく加工しやすいことからさまざまな用途に使われている。

イヌガヤ Cephalotaxus harringtoia　(Knight)　K.Koch　CEPHALOTAXACEAE

写真ＰＬ209　4a～4c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は緩やかで、年輪界は不明瞭。樹脂細胞が散在する。放射組織は、放射柔細胞のみからなり、単列。仮道管内壁にはほぼ水平から斜め方向に走る螺旋肥厚が見受けられる。以上の形質から、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。イヌガヤは、常緑小高木で、岩手県以南～屋久島までの丘陵部から低山帯に分布する。

カバノキ属　Betula sp.　BETULACEAE　　写真ＰＬ209　5a～5c

中型の丸い道管が、単独あるいは放射方向に数個複合し、ややまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は、横棒の少ない階段状。放射組織は、同性で３細胞幅程度。道管相互壁孔は小さく密に配列する。

以上の形質により、カバノキ科のカバノキ属の材と同定した。日本に産するカバノキ属には、11種があるが、いずれも落葉性の高木から低木である。

クリ Castanea creneta Sieb. et Zucc.　FAGACEAE　　写真ＰＬ209　6a～6c

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から単接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道から九州までの温帯下部から暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木で、果実が食用とされる。材質は保存性に優れる為、建築材などに広く使用される。

アカガシ亜属　Subgen. Cyclobalanopsis sp.　FAGACEAE　　写真ＰＬ210　7a～7c

中型で厚壁の円形の道管が単独で、放射方向に幅を持って配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は１～３細胞幅程度の接線方向の帯状を呈す。放射組織は、単列同性と集合状となるものからなる。放射組織道管間の壁孔は柵状を呈す。

以上の形質により、ブナ科コナラ属アカガシ亜属の材であると同定した。日本に産するアカガシ亜属には８種が含まれ、いずれも常緑高木。材質は、重硬で強靱であり弾性に富む。

ケヤキ Zelkova serrata　(Thunb.)　Makino　ULMACEAE　　写真ＰＬ210　8a～8c

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線

方向～斜め接線方向に配列する管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周囲状～連合翼状を呈し、放射組織は１～８列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

以上の形質により、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州～九州の暖帯～温帯に広く分布する。材は、木目が美しく重硬で狂いが少なく、保存性が高い。

ヤブツバキ　Camellia japonica L.；Thea hozanensis Hayata；T.Nakaii Hayata　THEACEAE 9a～9c

小型の道管が単独、時に２～３個複合して年輪界に向かって径を減じながら散在する散孔材。道管穿孔は10～20本ほどの横棒からなる階段状で、木部柔組織は散在状。放射組織は異性で背は低く、２～３細胞幅。単列部分や直立細胞には、しばしば大型の結晶細胞が見受けられる。

以上の形質から、ツバキ科のヤブツバキの材と同定された。ヤブツバキは、青森県～琉球の暖帯に広く分布する常緑高木である。材質は木理が緻密で加工容易で重い。

サクラ属　Prunus sp.　ROSACEAE　　写真ＰＬ211　10a～10c

小型の丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁には明瞭な螺旋肥厚をもつ。放射組織は１～５細胞幅程度で、同性に近い異性。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定した。日本のサクラ属は、落葉・常緑の低木～高木の25種知られている。

コクサギ　Orixa japonica Thunb.　RUTACEAE　　写真ＰＬ211　11a～11c

きわめて小さな道管が斜め放射方向に雲紋状に配列する散孔材で、道管の穿孔は単一、微細で間隔の開いた螺旋肥厚があり、放射組織は単列、異性。以上の形質により、ミカン科のコクサギの材と同定した。コクサギは、本州～九州の低地の二次林に分布する落葉低木である。

カエデ属　Acer sp.　ACERACEAE　　写真ＰＬ211　12a～12c

中型の丸い道管が単独もしくは複合して年輪内に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁には微細な螺旋肥厚が見受けられる。放射組織は単列同性で、１～４細胞幅。木部柔組織はしばしば年輪界付近で結晶を持つ。以上の形質により、カエデ科のカエデ属の材と同定された。カエデ属は、日本に28種自生する。亜熱帯性のものを除いて、落葉広葉樹である。

ヤマウルシ　Rhus trichocarpa Miq.　ANACARDIACEAE　　写真ＰＬ212　13a～13c

中型で丸い管孔が単独あるいは２～３個年輪界に沿って配列し、晩材部では小型の管孔が単独あるいは放射方向に数個複合して散在する環孔材。道管の直径は年輪界に向けて緩やかに減少する。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁には螺旋肥厚が有る。放射組織は異性で、１～２細胞幅くらいで、道管との壁孔は大型の対列状。以上の形質から、ウルシ科のヤマウルシの材と同定した。ヤマウルシは、北海道～九州の山地の林内に分布する落葉小高木である。

トチノキ　Aesculus turbinata Blume　HIPPOCASTANACEAE　　写真ＰＬ212　14a～14c

小形で丸い管孔が単独あるいは数個複合して均一に分布する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管内壁に螺旋

肥厚が有る。放射組織は単列同性で、しばしば層階状に配列する。道管との壁孔は小形で密であるが、ヤナギ属のように蜂の巣状を呈す事はない。

以上の形質より、トチノキ科のトチノキの材と同定した。トチノキは、北海道～九州の主に低山帯に分布する落葉高木である。種子は、タンニンを取り除く事により食用となる。

アオキ　Aucuba japonica Thunb.　CORNACEAE　　写真ＰＬ212　15a～15c

きわめて小型の道管が年輪の始めに断続的につながり、晩材部では単独、時に放射方向に複合してまばらに散在する散孔材。道管の穿孔は、横棒の多い階段状、内壁にかすかな螺旋肥厚がある。放射組織は異性で、1～7細胞幅くらい、大型の細胞から構成され、まれに鞘細胞状を呈す。

以上の形質から、ミズキ科のアオキの材と同定された。アオキは、本州～四国の暖温帯林下に分布する常緑低木で、通常胸高直径3～4cm程度である。

トネリコ属　Fraxinus sp.　OLEACEAE　　写真ＰＬ213　16a～16c

大型の道管が、年輪の始めに並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小型の管孔が単独あるいは放射方向に複合して散在する。木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状に分布し、道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、1～3細胞幅。以上の形質により、モクセイ科のトネリコの材と同定された。トネリコ属には、9種が含まれ、琉球に分布するシマトネリコを除けば落葉高木～小高木で、柔軟性に優れた材を持つ。

ムラサキシキブ属　Callicarpa sp.　VERVENACEAE　　写真ＰＬ213　17a～17c

小型で厚壁の丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一、道管相互壁孔は交互状で、極めて小さく密に分布する。放射組織は2～3細胞幅の異性で、背が高く、しばしば上下につながる事がある。

以上の形質により、クマツヅラ科のムラサキシキブ属の材と同定した。ムラサキシキブ属は、落葉もしくは常緑の低木～高木の11種含まれる。

3．曲物の材質について

3－①方法と記載　ＰＬ213.214

今回、吉田生物研究所にて高級アルコール法により保存処理をされた曲物2点について、その材質を調べた。保存処理自体は、材を脱水処理のために50％メタノール溶液に5～10日漬け、さらに70％メタノール溶液中に移した後、水分をメタノールに置換する。メタノールにより脱水された材を含浸用特殊ワックス「オクタデカノール」に浸漬し更にアルコールをワックスに置換した跡、ワックスを58度に加温しアルコールを蒸発させ、表面調整を行っている。今回は、部分的にワックスを溶脱する事で変形が生じる事を避ける為、サンプルを切り欠き調査した。

サンプルから組織切片を作成するため、60度未満に加温された70％エタノールにサンプルを2～3時間程度浸し、ワックスを溶脱され軟化した所を、片歯剃刀にて手で切片を作成し、切片に含まれているアルコールを完全に水に置換した後、2. 方法と記載の項と同様の手順で封入し観察した。写真ＰＬ213.214№18～26に、各々の曲物側板、曲物底板、結合材の組織写真を貼付した。

記載

樹皮　Wood Bark

一般的に樹皮には、最も内側のコルク組織を境として生きている組織の内樹皮と死んだ細胞からなる外樹皮に区分される。(図18)この外樹皮は、内樹皮の組織が二次的に分裂機能を生じて、コルク形成層となり、コルク組織とコルク皮層を形成して周皮となる事によってできる。一般的にコルク形成層の分裂期間は短く、順次新たな周皮が内側に形成されるため、多くの樹種では横断面、放射断面では弧状あるいは三日月形、皿状になって、枯死した師部組織の一部を包み外側に向かって重なっている（重松 1985)。今回観察した資料は、この外樹皮の周皮が枯死した師部組織を包んでいる皿状の組織が見えている事から、樹皮と同定した。

植物

結合材は、植物の茎、蔓、若い枝等の細い部位ををそのまま割かずに使用している事は判明したが、植物体のどの部位であり、何の種であるのかは、維管束の形状が腐敗のためはっきりしない為不明である。ただ、丸い茎（仮に）の様なものを割かずにそのまま使用しており、処理中に茎の様な物の表面から、表皮状の物が剝がれ落ちたのを観察したところ、気孔の孔辺細胞が確認された。木本・草本を含めて表皮の多様性については知られていない事から、これ以上の同定は不明である。

3－②結果と考察　ＰＬ213.214

今回調査した保存処理済みの曲物の側板、底板どちらも樹皮製であった。樹皮の起源となる樹種は不明であるが、一般的に針葉樹の樹皮は、写真27（じん皮繊維が認められない例：アカマツ)、28（じん皮繊維のある例：ヒノキ）の様に、形成層に近い部分では師細胞、師部柔細胞、じん皮繊維が交互状に整然と配列する。それに対して、広葉樹は、写真29（ケヤキ）の様にじん皮繊維やファイバースクレレイドが、横断面で見ると接線方向の帯状に集まっている(コウゾ、ミツマタ、ガンピ、ハルニレ等を除く）（重松 1985)。これらを今回の横断面の樹皮の文中写真30と比較すると広葉樹に近いが、遺物である上に保存処理等の為変形しており、はっきりせず広葉樹である可能性を指摘するに止まる。結合材についても、孔辺細胞があり、二次木部が全く見受けられないことから木本ではないとする見方もできるが、当年のきわめて若い時の枝材の構造など他の可能性を指摘できる要素が多く、同定にはいたらなかった。

遺物の中で樹皮製の容器自体多くはないが、特に曲物に樹皮を用いた事例は、曲物出土例全体に対して非常に少なく、秋田県添川の縄文時代晩期の戸平川遺跡の底部に厚さ約3㎜樹皮が使用され、その周囲に厚さ約5㎜の樹皮が巻かれていた「曲物」(読売新聞 1996.9.5）や、中世末の長崎県の今福遺跡で３点、古墳時代の千葉県菅生遺跡で曲物もしくは小桶の様なもので、確認されている（島地他 1989)。今回の曲物はほぼ完形で出土しているが、定型化した曲物とは異なりより原始的な感じがする。結合材も、奈良・平安時代に見受けられるような、平たい樹皮（いわゆる樺皮、桜皮とされるもの）ではなく、丸い蔓や、茎、若い枝の様なものを裂くなどの加工をせずにそのまま使用しており、結合の方法も都城遺跡で見られるような方法とは異なる。

さて、容器への樹皮利用は民俗事例では、アイヌのヤラ・イタンキという白樺の樹皮製の器がある。ヤラ・イタンキはほぼ正立方体の器で、四角く切った白樺の樹皮の四隅を折り曲げて、四隅を桜皮で綴る事で容器となす。折り方さえ正しければ、水も漏らず加熱もでき、アイヌでは広く使用されていた。そのほか、樹皮以外の植物質の容器利用では、葉のなべ（沖縄のクバ)、ヒョウタンやユウガオなどもあり（姫野 1976)、木質部以外も積極的に利用されている。

曲物が樹皮で製作されて、どれだけ曲物としての機能を果したのかは不明だが、アイヌのヤラ・イタンキ等

の事例を見るかぎり、火にかけられるほどに丈夫で、十分に容器として使用できる。基本的に曲物は、薄い板状の木材を曲げる事により、刳物などに比べて少ない木材の量で大きな容量を得られる容器である。従来、曲げられる程度の薄板を切り出すためには鉄器の存在が不可欠だとされていたため、曲物製作は弥生時代以降とする見解が一般的であった。しかし、樹皮は形成層がある為に木質部と分離しやすく、木質部を削るよりも楽に薄い板状の樹皮が取れる。

現在では、樹皮の利用は、組織がコルク組織がコルク原料となる他、バーク堆肥、家畜敷料、マルチ（根覆い）等に、抽出成分は、動物の皮なめし用タンニンや、ベイマツのワックス等がある（善本 1982)。樹皮そのものを利用する事はなく、組織の一部分や成分を利用しているに過ぎない。

屋根葺材の、ヒノキの樹皮等が檜皮葺と称されて使用されていたほか、結合材など遺物で樹皮と同定されたものは、少なくないが目的不明なものが多く、今まであまり注目されていなかった。しかし、過去の植物利用を考える際には、現在の利用状態、適材等の考え方にとらわれず、広く考える必要がある。

4．考　　察

今回出土した木質遺物は、曲物(前述)、舟形容器、柄、杭、梯子、建築部材、板、棒、分割材、枝、木片である。特に杭が多く、全体の約半数を占め、棒がその次に多く、棒状の形状を占める製品が全体の８割を占める。

木製品は、ケヤキ材の舟形容器、モミ属の柄、杭、トチノキの梯子、モミ属とカバノキ属の板、アカガシ亜属の建築材であった。舟形容器は、いわゆる刳物と呼ばれる木製品で、原木を削る、えぐる等して整形する製品である。ケヤキは、材質としては硬いために挽物で使用される事は多いが、刳物の製作は困難である。材質が硬い分、製品としては丈夫である。ケヤキは枝材も出土している事から、付近に自生していた物を利用した結果であろう。梯子は、いずれもトチノキであった。これは、トチノキの材が柔らかく梯子のような複雑な形状した製品も加工容易である事が要因であると考えられる。梯子の出土例として弥生中期～古墳前期の遺跡である群馬県の新保遺跡の梯子材は、クリ２、クヌギ類１、ナラ類１、ヤマグワ１である(島地ら1985)。トチノキの事例はないが、新保遺跡の樹種がばらついている事から、樹種を決める決定的な要因がないと考えられる。

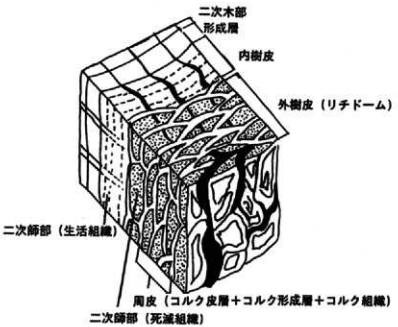
杭のような土木用材では、保存性が問題になる場合や水濡れがひどい状況では、保存性の良いクリ材を使用する事例が多いが、今回はアカガシ亜属が多い。アカガシ亜属材は重く強靭であり弾性に富むので、建築・器具材など強度を必要とされる部分に多く使用されるが、今回はアカガシ亜属が杭として６割強も占める。類似の傾向は炭化材においても見受けられる。しかし、群馬県の古墳後期の植生は、前橋市の元総社寺田遺跡の花粉分析によると浅間Ｃ軽石前後では、コナラ属コナラ節が、35%と高い頻度を示し、アカガシ亜属が10%出現すること（1994 藤根・鈴木)、館林市茂林寺沼の花粉分析結果でもコナラ亜属、クマシデ・アサダ属、アカガシ亜属を中心とした樹木構成となっている（1986 辻ほか）事から、コナラ亜属を主とした落葉広葉樹林とアカガシ亜属の照葉樹林の両者が卓越した時期である。本遺跡では、それら周辺植生中よりアカガシ亜属を選択して使用していたと考えられる。同様にアカガシ亜属が多い傾向を示す遺跡には、炭化材で吉井町のヌカリ沢Ａ窯跡がある。遺跡が近接していることや、同遺跡の炭化材中からシラカシ群落（1987環境庁）の林分であるツバキ属、ヒサカキが見られる事から局地的な植生とも取れるが、樹種同定からは不明である。

本遺跡のアカガシ亜属材は、杭以外に建築部材、棒状品、分割材、木片と、半製品からも出土しており、本遺跡では一般的な材であった事を示している。そのほか、板、柄でモミ属が使用されているほか、板に比較的標高の高い場所に生育するカバノキ属があり、当時の材の供給源が低山地におよんでいた事が示される。

群馬県の古墳時代では、コナラ亜属材が多く使用される事例が多い。炭化材では古墳時代中期の富岡市中高

瀬観音山遺跡（1995 鈴木）のクヌギ節への圧倒的な偏りや、元総社寺田遺跡でもコナラ節とクヌギ節が多く、新保遺跡でも同様の傾向が見られる。本遺跡とこれらの違いは、局地的な植生が反映したものか人為的な選択の差であるのかは不明であるが、興味深い。

引用文献
重松報生.1985.樹皮の細胞.「木材の科学・1　木材の構造」,207-217.文永堂.東京.
島地　謙・伊東　隆夫・林　昭三・鈴木　三男・光谷　拓実・布谷　知夫・能城　修一 .1988.日本の遺跡出土木製品総覧.296pp.雄山閣.東京.
鹿野忠義.1976.日本のうつわ その源流をたずねて.「季刊「銀花」春」,25：5-60.文化出版局.東京.
箭本知孝.1982.樹皮利用.「木材の事典」,431-433.朝倉書店.東京.
鈴木三男.1995.出土炭化材の樹種.「中高瀬観音山遺跡」,304-322.群馬県埋蔵文化財調査事業団.
藤根　久・鈴木　茂.1994.元総社寺田遺跡出土材の樹種同定と周辺植生.「元総社寺田遺跡　」,135-185.群馬県埋蔵文化財調査事業団.
辻　誠一郎・南木睦彦・小杉正人.1986.茂林寺沼及び低地湿原調査報告書　第２集　館林の池沼群と環境の変遷史.館林市教育委員会.110pp.



第18図　樹皮構造

表10　木製品の樹種別集計表

	曲物	舟形容器	柄	杭	梯子	建築部材	板	棒	分割材	枝	木片	計
モミ属			1				1					2
マツ属				1								1
ス　ギ				1				1				2
イヌガヤ				1								1
カバノキ属							1					1
ク　リ								3				3
アカガシ亜属				21		1		12	2		1	37
ケヤキ		1		1						1		3
ヤブツバキ								1				1
サクラ属				1				3				4
コクサギ								1				1
カエデ属				2				1				3
ヤマウルシ				2							1	3
トチノキ					3							3
アオキ								2				2
トネリコ属				2				1				3
ムラサキシキブ属				1				1				2
樹　皮	2											2
不　明				1								1
計	2	1	1	34	3	1	2	26	2	1	2	75

30　34-2横断面（横）　bar：1㎜

表11　木製品の樹種同定結果

番号	樹　種	製品名	出土遺構
1	カバノキ属	板状木製品	6井戸
2	アカガシ亜属	棒	7井戸
3	トチノキ	柵子	12井戸
4	アカガシ亜属	杭	12井戸
5	アカガシ亜属	杭	17井戸
6	アカガシ亜属	杭	17井戸
7	アオキ	棒	17井戸
8	アカガシ亜属	棒	17井戸
9	トチノキ	柵子	18井戸
10	アカガシ亜属	分割材	19井戸
11	アカガシ亜属	分割材	19井戸
12	トネリコ属	杭	19井戸
13	ムラサキシキブ属	杭	19井戸
14	ヤマウルシ	杭	19井戸
15	アカガシ亜属	棒	19井戸
16	アカガシ亜属	棒状木製品	19井戸
17	ムラサキシキブ属	杭	19井戸
18	ク　リ	棒	19井戸
19	アカガシ亜属	棒	19井戸
20	サクラ属	杭	19井戸
21	アカガシ亜属	杭	19井戸
23	アカガシ亜属	杭	19井戸
24	カエデ属	棒	19井戸
25	アカガシ亜属	杭	19井戸
26	サクラ属	棒	19井戸
27	ヤマウルシ	杭	19井戸
28	ケヤキ	杭	19井戸
29①	サクラ属	棒	19井戸
29②	コクサギ	棒	19井戸
30①	サクラ属	棒	19井戸
30②	アカガシ亜属	棒	19井戸
31①	アカガシ亜属	杭	19井戸
31②	カエデ属	杭	19井戸
32①	ヤマウルシ	炭化木片	22井戸　底面
32②	アカガシ亜属	炭化木片	22井戸　底面
33	トネリコ属	杭	26井戸
34	不　明	曲物	26井戸
35	モミ属	板	28井戸
36	アカガシ亜属	杭	28井戸
37	ケヤキ	舟形容器	28井戸
39	イヌガヤ	棒状木製品	32井戸
40	ケヤキ	小枝	32井戸
41	アカガシ亜属	棒状木製品	32井戸
42	ヤブツバキ	棒	32井戸
43	アカガシ亜属	杭	70井戸
44	アカガシ亜属	棒	71井戸
45	アカガシ亜属	杭	71井戸
46①	アカガシ亜属	杭	71井戸
46②	マツ属	杭	71井戸
46③	不　明	杭	71井戸
47	アオキ	棒	71井戸
48	ス　ギ	杭	71井戸
49	トネリコ属	棒	71井戸
50	アカガシ亜属	杭	71井戸
51	アカガシ亜属	杭	71井戸
52①	ク　リ	棒	71井戸
52②	ク　リ	棒	71井戸
53	アカガシ亜属	杭	71井戸
54	アカガシ亜属	杭	71井戸
55	アカガシ亜属	杭	71井戸
56	アカガシ亜属	杭	71井戸
57	カエデ属	杭	71井戸
58	アカガシ亜属	棒	71井戸
59	アカガシ亜属	棒	71井戸
60	アカガシ亜属	棒	72井戸
61	アカガシ亜属	杭	72井戸
62	不　明	曲物	72井戸
63	モミ属	柄	74井戸
64	アカガシ亜属	杭	74井戸
65	アカガシ亜属	建築部材か	74井戸
66	アカガシ亜属	杭	74井戸
67	アカガシ亜属	棒	74井戸
68	アカガシ亜属	杭	74井戸
69	トチノキ	柵子	不明
70	イヌガヤ	杭	

4　土器の胎土と地山粘土の分析

藤根　久・古橋美智子（パレオ・ラボ）

1　分析にあたって

今回の整理作業において、土器復元と観察を行う過程で土器製作に由来する特徴が２点認められた。１点は、粘土を積み上げる際に「粘土に刻みをつける技法」であり、もう１点は外見から判断して、「１個体の土器に異なる粘土が用いられている事例」である。

異なる粘土の使用は、特に甑について特徴的であり複数個体で確認できた。これらの個体は共通して、粘土の異なる部位が底部から数センチ程度上位であった。おそらくこの共通点は製作技法に由来する可能性が強いと考えているがその点については、「粘土に刻みをつける技法」とともに「成果と問題点」の中で考えて見ようと思う。土器胎土の理科学的分析を実施したのはこのような問題意識に由来している。分析をおこなった土器と、その位置は第19図に示してある。また、試料の切断面の写真はＰＬ215と216に掲載されているので、色調と混和材の粒子の大きさなどを見てほしい。

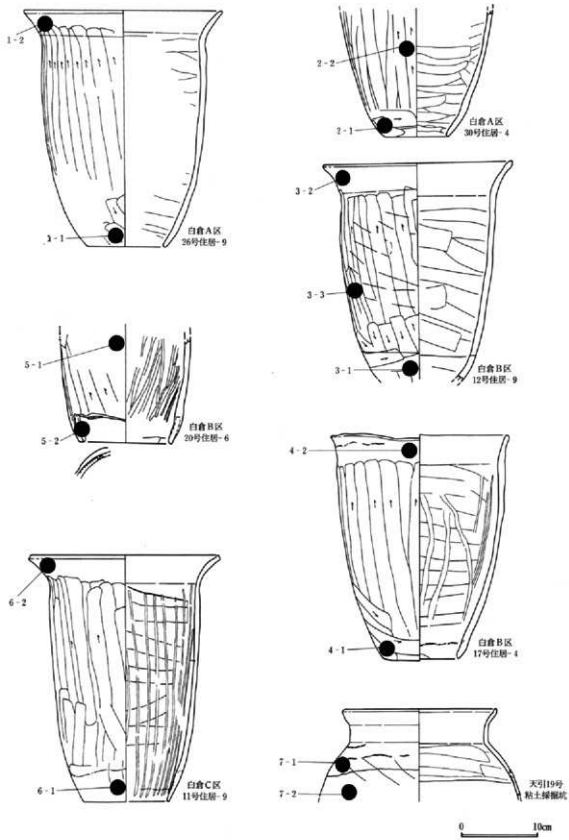
また、既に報告したように天引地区からは５世紀終末～６世紀前半の粘土採掘坑が約70基検出されている。そこで、当時採掘されていた粘土の理科学的特徴を明らかにしておくために粘土の分析を行った。この粘土の特徴が明らかになれば、この粘土が何に使用されたかの有力な手掛かりになると判断したからである。粘土試料を採集した地点については第20図に示しておいた。採集地点では層位ごとにＡ～Ｆ点の試料を採集しているが、当時採集目的とされた粘土は第20図⑩～⑫層にあたり試料番号Ｂ点（９）～Ｅ点（12）が該当する。　以上が、２つの分析を依頼した理由及び以下の分析報告の補足である。（この部分文責　編集担当木村）

2　分析試料

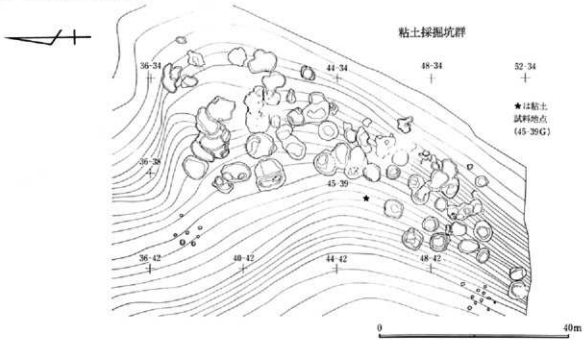
分析を行った土器は７個体15試料と粘土６試料である。（表12参照）

表12　分析した土器および粘土試料

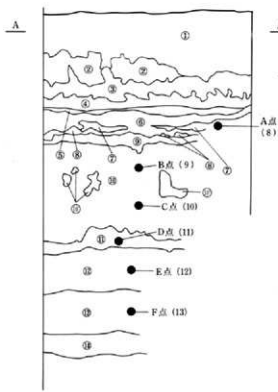
番号	遺構及び遺物番号	器種	備考
1	白倉Ａ区26号住居－９	甑	底部(1－1)、口縁部(1－2)
2	白倉Ａ区30号住居－４	甑	底部(2－1)、口縁部(2－2)
3	白倉Ｂ区12号住居－９	甑	底部(3－1)、口縁部(3－2)、胴部(3－3)
4	白倉Ｂ区17号住居－４	甑	底部(4－1)、口縁部(4－2)
5	白倉Ｂ区20号住居－６	甑	口縁部(5－1)、底部(5－2)
6	白倉Ｃ区11号住居－９	甑	底部(6－1)、口縁部(6－2)
7	天引９号粘土採掘坑－１	甕	砂粒少胴部(7－1)、砂粒多胴部(7－2)
8	天引向原地区粘土採掘坑	Ａ点	
9	天引向原地区粘土採掘坑	Ｂ点	採掘目的の粘土
10	天引向原地区粘土採掘坑	Ｃ点	採掘目的の粘土
11	天引向原地区粘土採掘坑	Ｄ点	採掘目的の粘土
12	天引向原地区粘土採掘坑	Ｅ点	採掘目的の粘土
13	天引向原地区粘土採掘坑	Ｆ点	



第19図　胎土分析をおこなった土器



粘土サンプル地点、土層断面
(45-39G)



( ) の数字は試料番号
⑩～⑫層が採掘対象粘土

① 褐色ローム層　MP粒子(基本土層)わずかに含む、再堆積ローム
② 黄褐色ローム層　MPをかなり含む、再堆積ローム、しまりやや悪い
③ 黄褐色ローム層　MPをかなり含む、再堆積ローム
①～③層は基本土層Ⅷ～Ⅹに該当
④ 暗褐色粘土層　黒色の鉄分の凝集層を下底部に5mm程の厚さに含む、層中にも鉄分をかなり混入
⑤ 赤褐色粘土層(5YR4/8)　黒色の薄い鉄分の凝集層を数枚間にはさむ、6層が水の作用によって変質したものか
⑥ 黄褐色粘土層(2.5Y5/6)　黒色の鉄分の凝集部分を若干含む、一部層状の褐色部を含む
⑦ 黄褐色粘土層(2.5Y5/6)　黒色の鉄分の凝集部分をわずかに含む
⑧ 褐色粘土層(10YR4/6)　黒色の鉄分の凝集部分をかなり含む
⑨ 黄褐色粘土層(10YR5/8)　黒色の鉄分の凝集部分をわずかに含む、8層10層に比べややしまり悪くやわらかい
④～⑨層は基本土層Ⅺ～Ⅻ
⑩ 灰白色粘土層(5Y7/2)　非常に均質でねばりの強い粘土層、上1/3ほどは褐色の部分を雨降り状に含む、風化した凝灰岩質の砂岩をわずかに含む
⑩′ 灰白色粘土層(5Y5/2)　10層中にブロック状に含まれる、紫灰色の細かな斑点をわずかに含む部分、礫等の風化した部分である可能性あり
⑪ 淡黄色粘土層(5Y8/3)　10層と比べやや粒度が粗い、褐色の細かな斑点をわずかに含む
⑫ 浅黄色粘土層(5Y7/3)　結晶片岩の岩片を少量含む、岩片はかなり風化し、多くは指先で簡単につぶされるほど
⑩～⑫層は基本土層Ⅳに該当
⑬ 黄褐色礫層(2.5Y5/4)　結晶片岩の岩片を多量に含む、礫の間は粘性の強い粘土で満たされている、礫種は結晶片岩が主体を占めるが、緑泥片岩、チャートなどもわずかに混入、片岩系の礫は風化しもろくなっている
⑭ 緑灰色礫層(10GY6/1)　結晶片岩の礫を主体とする、礫の間は粘性の強い粘土で満たされる、礫種、および風化の度合いは13層と同じ
⑬～⑭層は基本土層Ⅻに該当

第20図　粘土サンプル試料採集地点

3．処理と方法

ここでは、土器胎土の特徴を最大限に引き出すために、土器薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察による方法を行った。各土器胎土は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の土器薄片（プレパラート）を作成した。

(1)　土器試料は、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、平面を作成した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なう。

(2)　さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着する。

(3)　その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製する。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数する。同定・計数は、100μm格子目盛を用いて任意の位置における約50μm（0.5mm）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50μm前後）を対象とし、微化石以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、土器薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。さらに、ヨシ属からなる植物珪酸体化石について、約1cm²のプレパラート面積を計数した。

4．分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する（菱田ほか、1993）。なお、土器胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

［放散虫化石］

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

［骨針化石］

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充塡する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象と

した。

［胞子化石］

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2%の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

［雲母類］

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剝がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO_2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

［輝石類］

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にピールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2%が少ない深成岩、SiO_2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO_2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

［角閃石］

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO_2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

［ガラス］

透明の非結晶の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

［複合鉱物類］

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

［斑晶質・完晶質］

斑晶質は斑晶(鉱物の結晶)状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

［複合石英類］

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細とし、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

［砂岩質・泥岩質］

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

5．各胎土の特徴および計数の結果

土器胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(表2)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

1－1：50μm前後が多い。複合石英類〉複合石英類（含雲母類）、石英・長石類、斜長石（双晶）、珪藻化石（不明種：Diploneis属）、胞子化石少、ヨシ属植物珪酸体化石

1－2：50μm前後が多い。複合石英類〉石英・長石類、斑晶質、完晶質、放散虫化石1個体、骨針化石少、珪藻化石（不明種）、胞子化石少、ヨシ属植物珪酸体化石

2－1：50μm前後が多い。複合石英類≫石英・長石類、斑晶質、斜長石（双晶）、骨針化石少、ヨシ属植物珪酸体化石

2－2：50μm前後が多い。複合石英類〉石英・長石類、斑晶質、完晶質、ヨシ属植物珪酸体化石、骨針化石少

3－1：50μm前後が多い。複合石英類（含雲母類）〉複合石英類〉片理複合石英類（含雲母類）、石英・長石類、斑晶質、完晶質、斜長石(双晶)、珪藻化石(淡水種：Pinnularia gibba、Coscinodiscus属またはThalassiosira属、不明種：Diploneis属)、ヨシ属植物珪酸体化石、胞子化石多

3－2：50μm前後が多い。最大粒子6mm。複合石英類（含雲母類）〉複合石英類、石英・長石類、斑晶質、斜長石（双晶）、単斜輝石、片理複合石英類（含雲母類）、珪藻化石（淡水陸生種：Hantzschia amphioxys、不明種）、ヨシ属植物珪酸体化石、胞子化石少

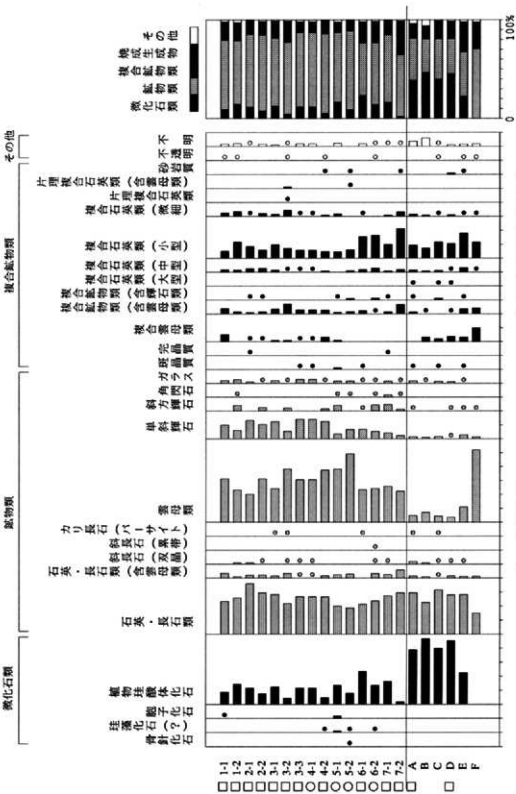
3－3：200μm～2mmが多い。最大粒子3.9mm。複合石英類（含雲母類）≫複合石英類、石英・長石類、斑晶質、

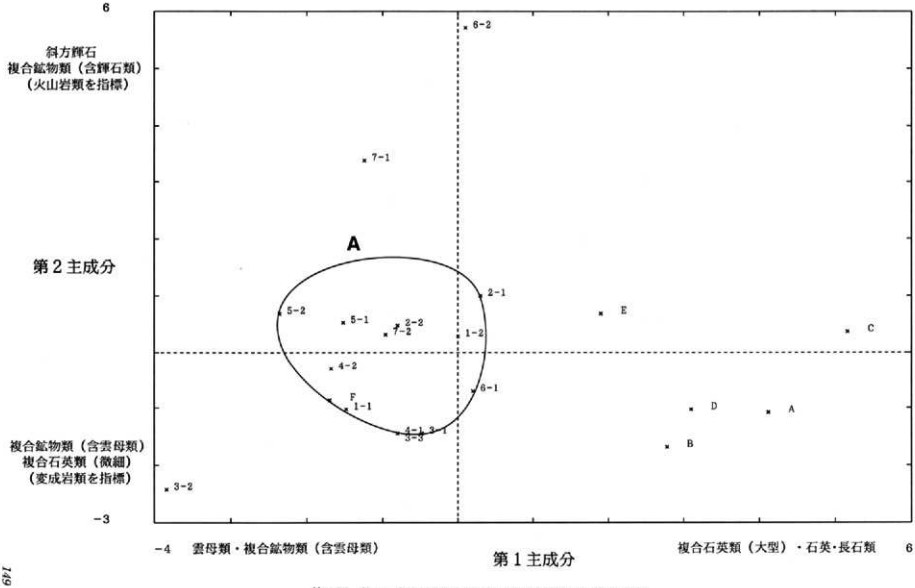
表13　土器胎土および粘土採掘坑試料中の粒子組成

分類群	1-1	1-2	2-1	2-2	3-1	3-2	3-3	4-1	4-2	5-1	5-2	6-1	6-2	7-1	7-2	A	B	C	D	E	F
微化石類																					
骨針化石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
珪藻化石（？）	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
胞子化石	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
植物珪酸体化石	20	28	22	14	24	8	24	24	9	23	14	48	28	31	4	104	132	91	115	55	-
鉱物類																					
石英・長石類	54	50	68	54	55	40	55	55	49	34	33	44	49	52	61	79	64	72	72	69	32
石英・長石類（含雲母類）	8	2	4	4	3	6	1	1	3	4	5	-	7	5	12	4	3	1	4	3	3
斜長石（双晶）	-	3	2	1	-	1	1	1	-	-	-	-	1	1	-	5	3	2	1	1	-
斜長石（累帯）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
カリ長石（パーサイト）	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-
雲母類	72	45	38	57	47	70	63	63	69	65	87	48	50	49	46	13	20	10	9	27	111
単斜輝石	23	12	25	19	24	10	29	29	23	6	12	14	11	8	5	4	3	4	1	7	3
斜方輝石	-	8	-	5	-	4	-	-	3	7	-	1	9	9	3	2	-	-	1	1	1
角閃石	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-
ガラス	5	5	2	1	4	1	6	6	1	3	3	1	1	3	1	5	2	3	3	1	-
複合鉱物類																					
斑晶質	-	-	-	-	-	-	1	1	-	2	-	1	-	-	-	1	-	1	-	1	-
完晶質	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
複合雲母類	12	-	1	1	2	2	1	1	6	2	-	-	-	-	-	-	9	5	10	8	21
複合鉱物類（含雲母類）	9	3	2	3	7	13	6	6	5	2	3	5	2	3	14	4	2	-	1	9	9
複合鉱物類（含輝石類）	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	2	-	3	1	-	1	-	3	-	2	-
複合石英類（大型）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-
複合石英類（中型）	4	3	5	5	3	1	2	2	2	-	2	4	6	2	4	4	3	3	1	8	2
複合石英類（小型）	12	23	16	11	19	13	12	12	9	8	11	32	34	19	44	25	21	27	27	44	25
複合石英類（微細）	6	7	1	4	3	8	1	1	2	3	-	2	-	2	7	4	3	2	3	2	1
片理複合石英類	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
片理複合石英類（含雲母類）	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
砂岩質	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	2	-	-	-	3	1	-
その他																					
不透明	1	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	1	1
不　明	4	4	1	3	2	1	4	4	-	4	-	4	1	1	2	10	17	1	3	4	4
総ポイント数	231	194	189	183	194	183	206	206	184	170	177	205	207	190	206	267	282	228	256	244	213

表14　土器胎土および粘土採掘坑試料中の粒子組成を対象とした主成分分析結果
（相関行列の固有値ベクトル：第１－第７主成分）

分類群 ＼ 主成分	1	2	3	4	5	6	7
鉱物類							
石英・長石類	0.40524	-0.03476	-0.02296	0.15764	-0.00189	-0.00583	0.14443
石英・長石類（含雲母類）	-0.12155	0.18017	0.25258	0.28810	-0.22387	-0.05706	0.06534
斜長石（双晶）	0.32002	-0.04715	-0.01716	0.16912	0.17215	-0.30149	-0.10841
斜長石（累帯）	0.00442	0.39684	0.14404	-0.14824	0.08091	-0.03378	-0.00798
カリ長石（パーサイト）	0.14668	-0.16105	0.14356	0.03132	0.43713	0.11291	0.16055
雲母類	-0.39479	0.00244	-0.08363	-0.13935	0.03324	0.14535	-0.17535
単斜輝石	-0.17578	-0.06968	-0.32749	-0.17385	0.15286	-0.08364	0.37078
斜方輝石	-0.11412	0.34999	0.02667	0.23294	0.10568	-0.09595	-0.33884
角閃石	-0.11418	0.34970	-0.10320	0.30196	-0.02253	0.00311	-0.21970
ガラス	0.11045	-0.13843	-0.33285	0.16381	0.16911	0.09090	-0.11729
複合鉱物類							
斑晶質	0.11183	-0.04793	-0.17055	-0.03066	0.27008	0.25324	-0.22426
完晶質	-0.03615	0.22980	-0.19932	0.23920	-0.03609	-0.15602	0.17270
複合雲母類	0.09233	-0.17273	0.15308	-0.22891	-0.35491	0.11809	-0.28141
複合鉱物類（含雲母類）	-0.23399	-0.21380	0.27574	-0.01389	-0.01027	-0.15230	0.17965
複合鉱物類（含輝石類）	0.16819	0.34785	0.07284	-0.09620	0.24276	0.25560	-0.00049
複合石英類（大型）	0.34698	-0.06231	0.07878	0.15350	0.05594	0.36975	0.00131
複合石英類（中型）	0.18350	0.22374	0.09047	-0.21710	0.02985	-0.35543	0.35368
複合石英類（小型）	0.28065	0.14380	0.26247	-0.02041	-0.10263	-0.02670	0.11989
複合石英類（微細）	-0.03170	-0.20340	0.25433	0.32600	0.07052	-0.22251	-0.12839
片理複合石英類	-0.17659	-0.16744	0.33495	0.17319	0.28714	-0.01257	0.02856
片理複合石英類（含雲母類）	-0.21162	-0.12876	0.27554	0.16041	0.25145	0.12465	0.05153
砂岩質	0.08340	-0.03693	0.14226	0.16956	-0.44062	0.36926	0.15959
その他							
不透明	0.01988	0.23478	0.32012	-0.27377	0.17931	0.04926	-0.13745
不　明	0.20873	-0.18984	-0.04521	0.02905	-0.07820	-0.41502	-0.33537
粘土の起源	-0.07712	0.09014	-0.14532	0.40124	-0.03129	0.12412	0.29136
固有値	4.98980	3.29336	3.09387	2.60622	2.27723	1.65074	1.58007
寄与率（%）	0.19958	0.13173	0.12375	0.10425	0.09109	0.06603	0.06320
累積寄与率（%）	0.19958	0.33132	0.45507	0.55932	0.65041	0.71644	0.77964


微化石類
岩石類
複合鉱物類
その他
珪藻化石
骨針（？）化石
植物珪酸体
石英・長石類
石英・長石類（含石灰岩）
石英・長石類（含石灰岩・チャート）
カリ長石
斜長石類（バーナイト）
斜長石類（含石灰岩）
角閃石類
斜方輝石類
単斜輝石類
角閃石類
斜方輝石類
単斜輝石類
複合鉱物類（含角閃石類）
複合鉱物類（含斜方輝石類）
複合鉱物類（含単斜輝石類）
複合鉱物類（含角閃石類）
複合鉱物類（含斜方輝石類）
複合鉱物類（含単斜輝石類）
複合鉱物類（含角閃石類）
複合鉱物類（含斜方輝石類）
複合鉱物類（含単斜輝石類）
複合鉱物類（含角閃石類）
複合鉱物類（含斜方輝石類）
複合鉱物類（含単斜輝石類）
片麻岩
複合石英類
複合石英類（含石灰岩）
複合石英類（含石灰岩・含雲母）
複合石英類（含雲母）
複合石英類（含雲母・含石灰岩）
複合石英類（含雲母・含石灰岩）
複合石英類（含雲母・含石灰岩



第22図　第１—第２主成分散布図（数字は試料№に対応する）

片理複合石英類（含雲母類）、砂岩質、複合鉱物類（含輝石類）、軽石型ガラス、斑晶質、珪藻化石（淡水種：付着珪藻化石、不明種）、ヨシ属植物珪酸体化石、胞子化石

4－1：50～100μmが多い。複合石英類〉石英・長石類、斑晶質、斜長石（双晶）、珪藻化石（淡水種：Eunotia praerupta var.bidens、Achnanthes inflata、不明種：Diploneis属など）、ヨシ属植物珪酸体化石、胞子化石少、骨針化石

4－2：50μm前後が多い。最大粒子2mm。複合石英類〉複合石英類（含雲母類）〉石英・長石類、斑晶質、完晶質、砂岩質、片理複合石英類、放散虫化石1個体、珪藻化石（不明種）、ヨシ属植物珪酸体化石、胞子化石少

5－1：50μm前後が多い。複合石英類〉石英・長石類、斑晶質、単斜輝石、片理複合石英類（含雲母類）、珪藻化石（淡水種：Eunotia pectinalis var.undulata、Hantzschia amphioxys、Eunotia属、Pinnularia属、Caloneis属、Diploneis属、その他不明種多）、ヨシ属植物珪酸体化石、胞子化石多、骨針化石

5－2：50μm前後が多い。最大粒子300μm。複合石英類（含雲母類）〉複合石英類〉石英・長石類、珪藻化石（淡水種：Pinnularia属、Cymbella属、その他大型不明種多）、胞子化石多、骨針化石、ヨシ属近似植物珪酸体化石

6－1：50μm前後が多い。複合石英類〉石英・長石類、単斜輝石、胞子化石、骨針化石、ヨシ属植物珪酸体化石

6－2：50μm前後が多い。複合石英類（含雲母類）〉石英・長石類、斜長石（双晶）、完晶質、珪藻化石（淡水種：Pinnularia viridis、Stauroneis acuta、Diploneis属、その他不明種多）、胞子化石多、ヨシ属植物珪酸体化石

7－1：50μm前後が多く、大型粒子少ない。複合石英類、石英・長石類、斜長石（累帯）、斑晶質、褐色粒子、珪藻化石（不明種：Diploneis属ほか）、胞子化石多、ヨシ属植物珪酸体化石、骨針化石

7－2：50μm前後が多い。最大粒子3mm。複合石英類（含雲母類）〉石英・長石類〉片理複合石英類（含雲母類）、カリ長石（パーサイト）、斑晶質、砂岩質、複合石英類（含雲母類）、斜方輝石、胞子化石、骨針化石、ヨシ属植物珪酸体化石

A：50～500μmが多い。最大粒子2.4mm。複合石英類〉石英・長石類〉斜長石（双晶）、複合鉱物類（含輝石類）、斑晶質、完晶質、砂岩質、単斜輝石、斜方輝石、骨針化石

B：少ない。50～600μm。複合石英類〉石英・長石類、複合鉱物類（輝石類）、斑晶質、ガラス

C：少ない。50～700μm。複合石英類〉石英・長石類、複合石英類（含雲母類）、斑晶質、黒色粒子、単斜輝石

D：砂粒少ない。50μm～3.2mm。複合石英類〉石英・長石類、単斜輝石、珪藻化石（不明種）、骨針化石

E：50μm～2.0mm。複合石英類〉石英・長石類、複合石英類（含雲母類）、複合鉱物類（含輝石類）

F：50μm～2.5mm。複合石英類（含雲母類）〉複合石英類〉石英・長石類〉複合雲母類

6．粘土材料による胎土の分類と粘土材料の違い

1）粘土の分類

検討した土器胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度）、放散虫化石が数百μm、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は、土器胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、土器製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により、a）淡水成粘土を用いた胎土、b）水成粘土を用いた胎土、c）その他粘土（粘土採掘坑試料のみ）、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。なお、珪藻化石の環境指標種群は、小杉（1988）および安藤（1990）が設定した指標種群に基づく。

a）淡水成粘土を用いた胎土（4－1、5－1、5－2、6－2）

胎土4－1、5－1、5－2、6－2では、沼沢湿地付着生指標種群のPinnularia viridisやEunotia praerupta var.bidensあるいはEunotia pectinalis var.undulataなどが検出され、また沼沢地などに見られるPinnularia属が検出される。これらは、水深1m内外の沼沢湿地で堆積した粘土と推定される。ただし、4－1は、検出される珪藻化石は少ない。

b）水成粘土と思われる胎土および粘土（1－1、1－2、2－1、2－2、3－1、3－2、4－2、6－1、7－1、7－2、粘土採掘坑粘土AおよびD）

これらは、水成環境に見られる珪藻化石や骨針化石が含まれる胎土である。ただし、珪藻化石は破片でかつ少なく、その種あるいは属すら同定することが出来ないため、具体的な粘土の性質は不明である。

なお、1－2や4－2には放散虫化石が含まれ、3－1には海水種Coscinodiscus属またはThalassiosira属が含まれる（少ないながら淡水種珪藻化石も含まれる）。この地域の丘陵部には、大型有孔虫化石を含む新第三紀中新世小幡層が分布するが（野村ほか、1981）。胎土中では放散虫あるいは海水種珪藻化石は1個体が検出されるのみであることから、この中新世海成層からの再堆積である可能性が高い。

c）その他粘土（粘土採掘坑粘土B、C、E、F）

これらの粘土は、白倉下原遺跡あるいは天引向原遺跡が立地する段丘の段丘礫直上の粘土層である。これらからは、水成を指標する化石類は検出されていない。ただし、F以外では、イネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体（プラント・オパール）が高率で検出されることから、堆積時に地表で堆積した粘土と思われる。

2）粘土材料の違い

粘土の起源について見ると、1～4と7では、概ね不明種珪藻化石などをわずかに含む水成起源の粘土を用いている。これらは、比較試料として検討した粘土採掘坑の粘土の特徴と似ていることから、これら粘土を用いた可能性が高い。

5－1および5－2は、明らかに沼沢地起源の粘土を用いている。この粘土は、粘土採掘坑の粘土（段丘堆積物）とは明らかに異なり、周辺の低湿地などで堆積した粘土と思われる。

6－1が不明種珪藻化石をわずかに含む水成起源の粘土に対し、6－2は5－1や5－2と同様の明らかな沼沢地起源の粘土であり、粘土材料に極端な違いが見られる。

7．主成分分析による砂粒の特徴

ここで設定した分類群のうち、50㎛以上の複合鉱物類（岩石片類）は構成する鉱物や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。これは、対象とする岩石片が細粒で、岩石名を決定するのに必要な大きさがないことが原因である。このため、示される土器胎土中の鉱物、岩石片の岩石学的特徴は、地質学的状況(遺跡周辺の地質など)に一義的に対応しない。ここでは、土器胎土の材料のうち砂粒組成の特徴を復元する目的で主成分分析を試みた。主成分分析とは、多くの変量の値をできるだけ情報の損失なしで、1個または総合的指標（主成分、ここでは、例えば堆積岩類などの源岩組成）で代表させる方法である(田中ほか,1984)。

ここでは、田中ほか(1984)による主成分分析プログラム“ＰＣＡ”を使用した。なお、プログラムは、主成分散布図の出力の一部を変更して使用した。個体数は21試料で、変量数は粘土以外の特徴を調べるため微化石類を除いた24分類群を用いた。なお、計算値は、百分率で小数1桁まで求めた数値を用い、相関行列の固有値および固有ベクトルを計算した。

主成分分析の結果、第7主成分までの累積寄与率は約78.0%である。そのうち第1、第2の寄与率はそれぞれ約20.00%と13.17%であり、第3主成分以下では寄与率が順次低くなる(表3)。ここでは、第1主成分および第2主成分ついて散布図を作成した（図2)。

第1主成分は、複合石英類（大型）や石英・長石類などにおいて正の相関が高く、雲母類・複合鉱物類（含雲母類）などにおいて負の相関が高い。一方、第2主成分は、斜方輝石や複合鉱物類（含輝石類）などにおいて正の相関が高く（火山岩類を指標)、複合鉱物類（含雲母類）や複合石英類（微細）などにおいて負の相関が高い（変成岩類などを指標)。

全体的としては、粘土採掘坑粘土からなる複合石英類（大型）や石英・長石類などを特徴的に含む一群（第1主成分右側）と雲母類や複合鉱物類（含雲母類）などを特徴的に多く含む一群（第1主成分左側）に分けられる。これらは、粘土採掘坑粘土Ｆを除いては、粘土と土器胎土の違いを反映しているものと考える。すなわち、粘土採掘坑粘土中には大きな砂粒が少ないことが原因と考える。したがって粘土Ｆは、大きな砂粒が多く、多くの土器胎土と似た組成を示している。

一方、土器胎土の砂粒組成は、第2主成分の火山岩類を示す正の軸と変成岩類を示す負の軸においてその違いが見られる。多くはＡ群とした両者の組成を持つ中間域に分布する。試料6－2や7－1あるいは3－2では、両軸の組成をやや強く反映している。しかしながら、これらの胎土の砂粒組成は、変成岩類や火山岩類からなる遺跡周辺の地質特性を反映した結果であり、他地域の特徴は示していない。

このように砂粒組成は、甑胎土間あるいは部位において大きな違いは見られないと判断される。

8．その他の特徴

ここで検討した甑胎土中には、イネ科植物のヨシ属の葉身で形成される植物珪酸体化石が多く含まれる胎土が見られる。また、このヨシ属植物珪酸体化石と思われる大型の珪酸体化石も見られる。ヨシ属には、ヨシ（Phragmites communis）、ツルヨシ（P.japonica）、セイタカヨシ（P.karka）があり、川岸や湿地などに生育する。このヨシ属の植物珪酸体は、いずれも縦長80μm前後で、他のイネ科植物の珪酸体に比べて大きいのが特徴である。このヨシ属あるいは近似種の出現は、他地域の土器胎土に比べ極端に多い（例えば、藤根ほか、1996）。ここでは、このヨシ属あるいは近似種の植物珪酸体化石について約1㎡程度のプレパラート面積について計測した（表15）。その結果、大半の土器胎土においてその密度が高いことが分かった。また、5－1・6－1・6－2・7－1では、ヨシ属近似種も含め高率のヨシ属の植物珪酸体化石を含む胎土があることが理解される。ヨシ属は、沼沢湿地などで多く見られる植物であるが、ここで用いられている沼沢地起源の粘土を用いた土器胎土中に多いといった傾向がないことから、粘土起源の化石ではない。可能性としては、ヨシ属の植物灰質が混入した場合や意図的に混入した場合などある。なお、古墳時代の住居からは、萱葺き材と思われる炭化材としてヨシ属の稈が出土していることから、周辺域にヨシ属の植物が存在したことは明らかである。このヨシ属からなる植物珪酸体化石は、いずれの土器胎土からも高率で検出されることから、偶発的な混入よりは意図的な混入の可能性が考えられる。

表15　土器胎土の部位ごとの特徴

番号	遺構	器種	部位	粘土の起源（＊珪藻の多産）	砂粒組成（A：中間域）	ヨシ属珪酸体密度（個/㎡）（ ）内はヨシ属近似の密度
1-1	白倉A区26号住－9	甑	底部	水成	A	20.6 (35.6)
1-2	〃	〃	口縁部	水成（海成？）	A	27.8 (41.6)
2-1	白倉A区30号住－4	甑	底部	水成	A	8.1 (23.4)
2-2	〃	〃	口縁部	水成	A	6.7 (30.2)
3-1	白倉B区12号住－9	甑	底部	水成（海成？）	A	24.0 (27.8)
3-2	〃	〃	口縁部	水成	変成岩類	7.5 (11.3)
3-3	〃	〃	胴部	水成	A	10.8 (15.7)
4-1	白倉B区17号住－4	甑	底部	沼沢湿地	A	23.9 (40.8)
4-2	〃	〃	口縁部	水成（海成？）	A	1.9 (23.0)
5-1	白倉B区20号住－6	甑	口縁部	沼沢湿地＊	A	41.8 (102.7)
5-2	〃	〃	底部	沼沢湿地類＊	A	0.0 (16.0)
6-1	白倉C区11号住－9	甑	底部	水成	A	15.0 (76.7)
6-2	〃	〃	口縁部	沼沢湿地＊	火山岩類	20.8 (97.4)
7-1	天引9号井戸－1	甕	胴部	水成	火山岩類	24.8 (110.8)
7-2	〃	〃	胴部	水成	A	1.9 (20.3)

9．ま　と　め

ここで検討した甑は、胴部と底部が異なった質観の胎土であることが、肉眼で観察されている。これは、肉眼的に片岩と分かるほど大きな砂粒が胴部で多く、底部ではほとんど見られない。しかしながら、この土器胎土の材料となる粘土と砂粒（凝和剤）に分けて検討すると、砂粒組成では大きな違いは見られなかった。しかし、粘土については試料間や部位による違いが見られた。さらに、他に類例がないヨシ属からなる植物珪酸体化石が高率で含まれ、土器制作時の意図的な混入の可能性が考えられる。

引用文献
安藤一男（1990）談水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42，2，73-88.
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）「増補改訂 地学事典」、平凡社、1612p.
菱田　量・車崎正彦・松本　完・藤根　久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について―弥生時代後　期の土器を例にして―。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集、34-35.
藤根　久・菱田　量・車崎正彦（1996）第２節　弥生土器の胎土分析。「下戸塚遺跡の調査―第２部　弥生時代から古墳時代前期―」、648-692.早稲田大学校地埋蔵文化財調査室
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究、27、1-20.
野村　哲・秋岡芸体研究グループ（1981）関東平野北西縁の地質。地質学論集、20，161-167.
田中　豊・乗木共之・脇本和昌（1984）「主成分分析」「パソコン統計解析ハンドブック　　多変量解析　編」、共立出版、160-175.

V　成果と問題点

1　土器の遺構間接合について

はじめに　今回の整理作業においては、土器の接合については遺構ごとに行っていった。しかしながら、個別遺構単位で土器接合が終了するわけではなく、遺構単位での接合作業終了した段階においても土器片の状態のものや、多くの欠損部位をもつ個体が大半であることは実態として認知されているところであろう。近年の報告事例によっても、時代を問わず同一個体の遺物が発掘調査区において広範に分布することが明らかになっていることからも、原則的には時間の許す限り、完形個体に近づける試みは行われるべきなのであろう。また、そのことによって個体の残存率を高めると同時に、接合関係によって想定される遺構の先後関係などの情報を得ることが重要なことである。一方、整理作業において接合作業にかけられる時間は限られており、遺構を越えて接合作業を行うことは遺構数と遺物量が多くなるに従って困難なものになっていってしまう。そこで、今回の接合作業では、重複関係にある遺構間については全てを試み、他の遺構については須恵器にのみ限って遺構間の接合作業を行ってみた。結果として重複関係にある遺構を除けば、僅か9事例しか見つけることができなかった。ここでは、この9事例について想定される状況について考えてみたい。なお、接合事例によって得られる遺構の時間的関係に拘わる考え方については、『白倉下原・天引向原遺跡II』で参考文献も含め述べたので参考にしてほしい。

同時存在が想定された事例

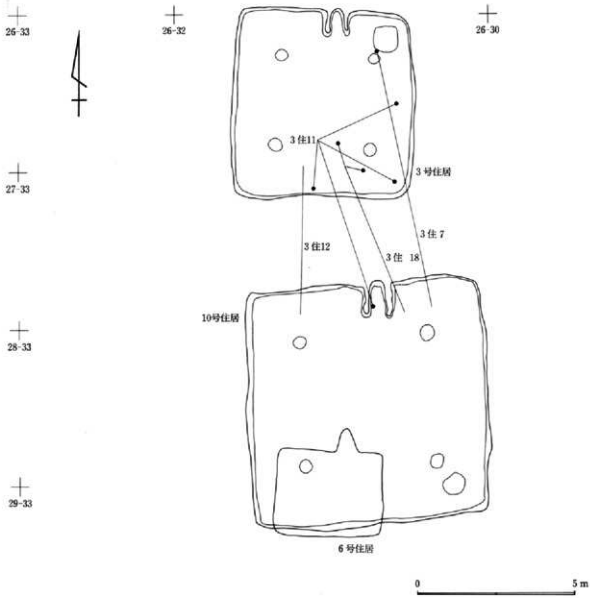
白倉B区3号住居と10号住居（第23図）

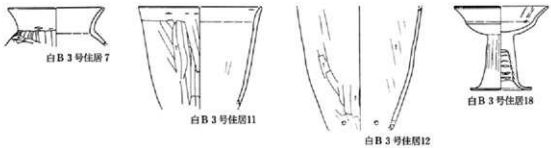
5例の接合事例が確認された。図示した4個体以外に両住居一括取り上げの黒浜式の土器片が接合している。さて、図示した4点の土師器であるが、11の甑を除いて他の3例は、3号住居の出土位置は記録してあるのだが、残念なことに10号住居は一括取り上げのため出土位置は不明である。この場合、3号住居の出土位置は住居廃絶後の早い段階での廃棄が想定できるような出土位置であった。

両住居の出土位置がわかっている11(甑の破片)は、3号住居からは3点の破片が出土している。そして、3点の破片はいずれも住居壁際の床面から僅かに浮いた状態で出土している。一方10号住居からは一片が出土しており位置はカマド内の燃焼面近くであった。出土位置から住居生活時もしくは住居廃絶の極めて早い段階での廃棄が想定されよう。この事例からは、10号住居で居住活動が行われていた段階では3号住居が廃絶している状況もしくは両方の住居廃絶時期が近接していた状況が想定できよう。また、他の両住居間接合も、この想定の状況証拠として考えられるのではなかろうか。この2軒の住居跡は、最短で2.5mしか離れておらず同時に存在する可能性は、住居間距離からは考えづらい。しかしながら、この2軒は接合事例以外にも、6世紀前半であること、手鏡形土製品がそれぞれカマドから出土していること、両住居ともに焼失住居で用いられる樹種も似ていること、など共通点が多い。おそらく、この2軒は廃絶時が近接することから同時に存在していた時期があると考えてよいのではなかろうか。

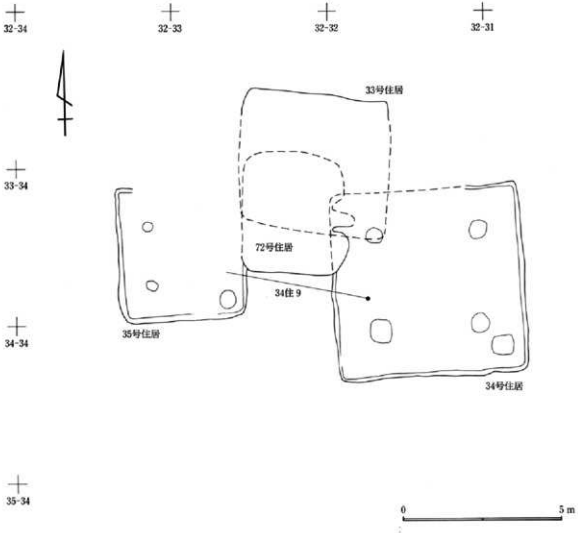
その他の接合事例

その他の接合事例として第24図～第28図に5例の接合関係を示しておいた。この5例の接合事例は、一括取り上げであるために出土位置が不明なものが含まれている。そのために、時間的な関係を想定することがむずかしくなっている。その中で、同時期住居の接合事例として、白倉B区34号住居と35号住居(第24図　6世紀前半)、白倉C区3号住居と18号住居(第26図　7世紀後半)、白倉C区16号住居と21号住居(第27図　6世紀後半)、以上3例が確認できた。


26-33
26-32
26-30
27-33
28-33
29-33
3住11
3号住居
3住12
3住 7
3住 18
10号住居
6号住居
0
5 m

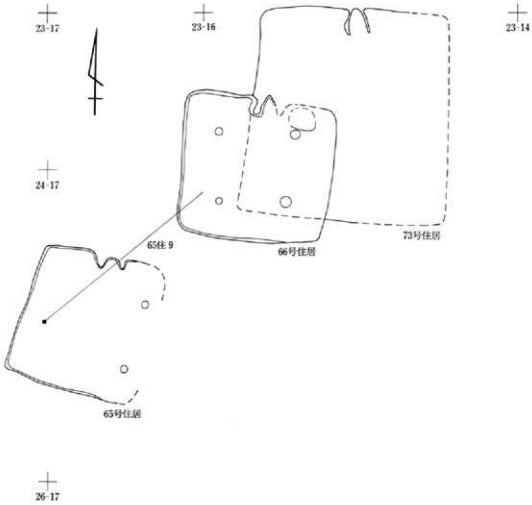

白B 3号住居 7
白B 3号住居11
白B 3号住居12
白B 3号住居18

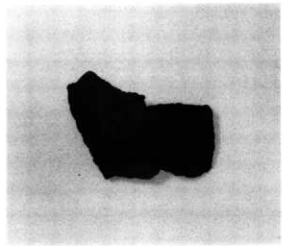
第23図　住居間接合(1)


32-34
32-33
32-32
32-31
33-34
34-34
35-34
33号住居
72号住居
34住9
35号住居
34号住居
0
5 m

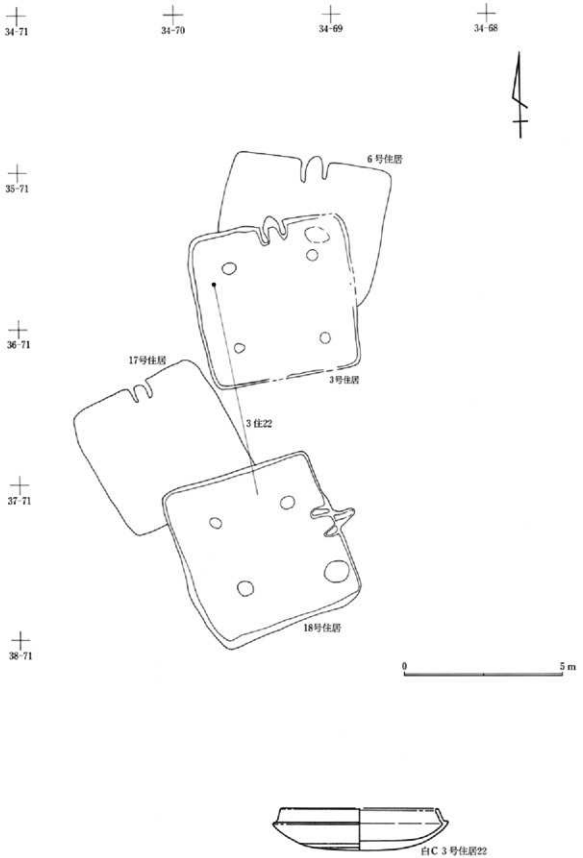
白B34号住居9

第24図　住居間接合(2)

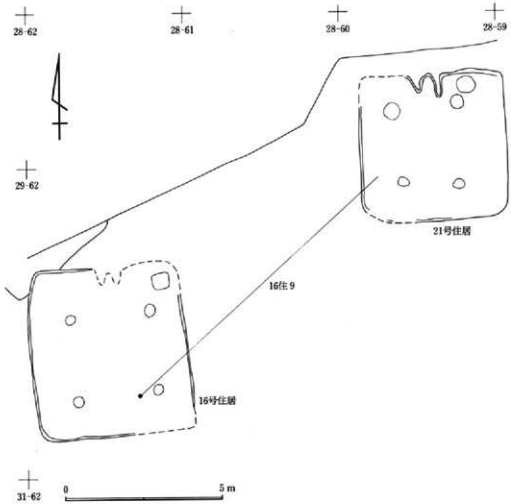


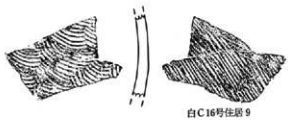


第25図　住居間接合(3)

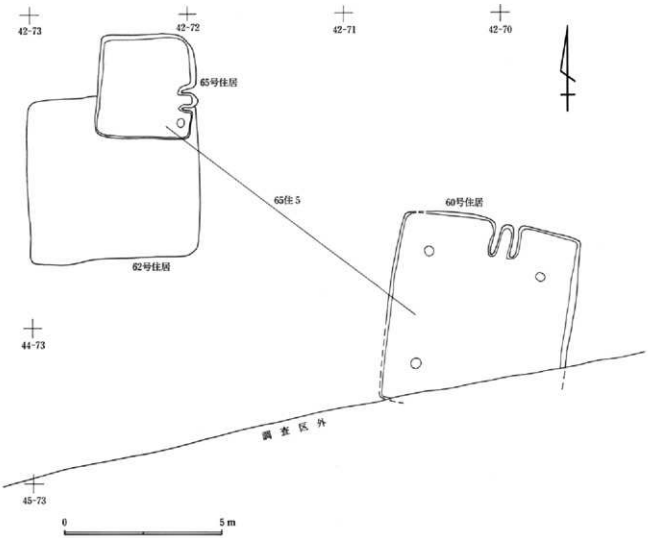

34-71
34-70
34-69
34-68
35-71
36-71
37-71
38-71
6号住居
3号住居
17号住居
3住22
18号住居
0
5 m
白C 3 号住居22

第26図　住居間接合(4)





第27図　住居間接合(5)


42-73
42-72
42-71
42-70
65号住居
65住5
60号住居
62号住居
44-73
調査区外
45-73
0
5 m

白C65号住居5

第28図　住居間接合(6)

2　土地利用変遷について

ここでは、古墳時代における半世紀ごとの土地利用変遷について述べていきたい。遺構分布図（第29～35図）も半世紀ごとに示したがその場合、時期の特定が難しい土坑については分布図に示すことができなかった。竪穴住居跡については分布とは別に、住居時期別一覧表（表16）と面積時期別一覧表（表17）カマド位置時期別一覧表（表18）も作成したので併せて参照して欲しい。これらの表には%表示のものがあるが、面積では計測不能住居を、カマド位置では位置不明住居を含めてしまったが、以下述べる際には、これらを除いた割合を示すことにしたい。

4世紀（第29図）　この時代（いわゆる石田川式土器の段階を指す）の個々の遺構については既刊『Ⅲ』に掲載してある。古墳時代全体の状況を示したかったためでこの図を作成した。22軒の竪穴住居が見つかっており、天引地区のみに分布している。当遺跡は弥生時代の集落遺跡でもあるが、後期樽3式期並びに後続する古墳時代樽式系土器の段階の竪穴住居跡分布も天引地区を中心に分布していたことから、4世紀の竪穴住居跡分布は前段階の分布域を踏襲したものといえそうである。

5世紀前半（第30図）　11軒の竪穴住居跡が見つかっている。この中で、白倉A区の3軒については本報告書に掲載してあるが、他の住居跡は既刊『Ⅲ』に掲載してある。住居分布は、今までが天引地区のみであったのが、新たに白倉A区及びB区にまで広がっている。全体の印象として、住居が散漫に分布する状況が見受けられよう。

5世紀後半（第31図）　見つかった住居軒数は9軒である。住居跡の分布は天引地区が3軒と減少し、白倉地区のほうに散漫な住居分布が見受けられる。この時代は炉に変わってカマドが新たな厨房施設として住居内に導入されたわけだが、カマドが検出された5軒のカマド位置をみると北が2軒、東が2軒、北東隅が1軒となっている。当遺跡の6～7世紀のカマド位置は7～8割が北で残りが東であるが、5世紀後半のカマド位置は、カマドが完全に定着する前の状況を示すようで興味深い。また、おそらく5世紀終末では天引地区において粘土採掘坑の掘削が開始されたと思われる。

6世紀前半（第32図）　6世紀前半は急激に竪穴住居跡数が増加したのが大きな特徴で48軒が見つかっている。分布の中心は前代の傾向を引き継いで白倉地区に分布の中心が移り、天引地区では1軒しか見つかっていない。そして、天引地区では粘土採掘坑が多数検出されている。白倉地区の分布は白倉C区でもまとまって分布するようになる。白倉A区やB区では軒を接するかのような検出状況であるが、同時期の重複例も多いことから分布図のような状況ではない。一方、先に住居間接合事例で紹介した白倉B区3号住居と10号住居は同時存在が想定され、しかも2.5mと近接している。中には、このように近接する場合もあったようである。

また、6世紀前半の大きな特色として焼失住居が多いことがあげられる。当遺跡の古墳時代の竪穴住居跡の焼失割合は25.9%と高いが、中でも6世紀前半は43.8%と高率である。

6世紀後半（第33図）　検出住居跡数は53軒と大変多い。住居の分布は前代を踏襲するが、白倉C区で検出住居数が多くなる。また白倉B区においても住居跡分布が以前は東寄り（A区寄り）であったのが全体に分布するようになった。また4世紀から6世紀では、一辺が6mを越す特大の竪穴住居跡が確実に存在したが、以後7世紀以降には見られなくなっていく。

7世紀前半（第34図）　検出住居跡数が18軒と一挙に減少し、各地区に散在するように分布している。白倉C区では重複事例も見られることから一時期はもっと少ない状況が想定されよう。

7世紀後半（第35図）　検出住居跡数はさらに減少して12軒となる。白倉C区と天引地区で各1軒が検出され、他は白倉A・B区に散在する状況である。

表16　竪穴住居時期別一覧表

	白倉C区	白倉B区	白倉A区	天引地区
4C 22軒	小計0軒	小計0軒	小計0軒	11・13・18・20・24・25・28・30・31・34・51・69・77・88・90・94・96・106・107・114・117・122　小計22軒
5C 前半 11軒	小計0軒	14 小計1軒	42・45・115 小計3軒	1・10・23・35・131・142・143 小計7軒
5C 後半 9軒	88 小計1軒	75 小計1軒	2・41・73・116 小計4軒	52・57・71 小計3軒
6C 前半 48軒	5・17・33・37・60 小計5軒	3・10・12・16・22・29・34・35・37・45・47・52・54・58・73・78 小計16軒	1・4・5・8・26・30・31・34・36・44・47・67・77・81・82・85・86・93・94・99・103・105・106・107・112・117　小計26軒	149 小計1軒
6C 後半 53軒	2・4・6・11・12・13・16・21・36・38・42・48・49・50・52・58・62・65　小計18軒	17・21・24・28・30・33・5051・55・56・62・65・69・70・82・94　小計16軒	7・14・20・23・25・27・33・53・54・57・61・66・72・76・104・114　小計16軒	7・73・115 小計3軒
7C 前半 18軒	3・15・18・19・25・28・61 小計7軒	20・23 小計2軒	3・22・24・58・92 小計5軒	50・87・124・141 小計4軒
7C 後半 12軒	79 小計1軒	38・61・72・84・85 小計5軒	10・19・28・65・101 小計5軒	44 小計1軒
時期 不明 20軒	74 小計1軒	59 小計1軒	15・29・35・48・55・59・64・74・80・83・84・87・88・91・95・109・113　小計17軒	148 小計1軒
合計 193軒	33軒	42軒	76軒	42軒

※ー は焼失の可能性のある住居である

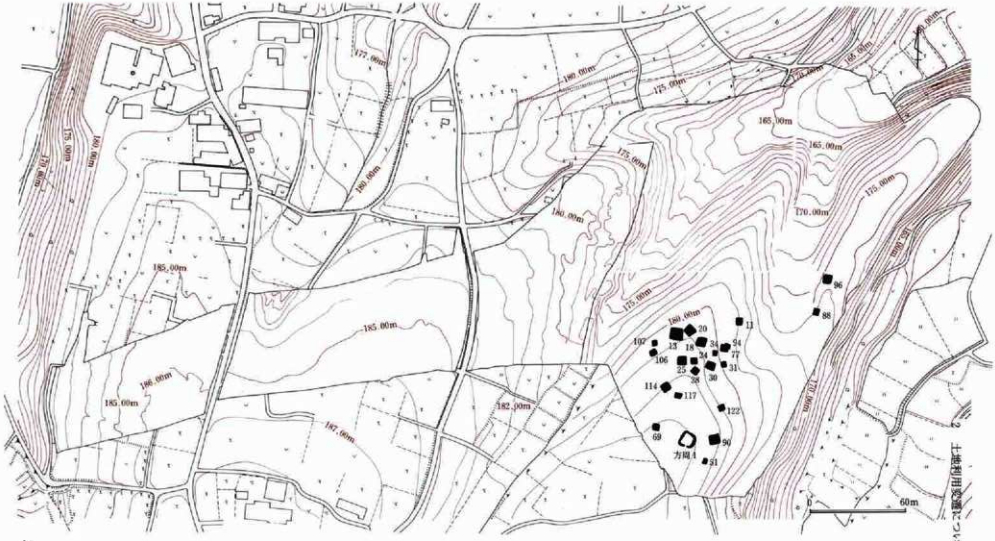
なお、白倉B区谷頭の水場は、古くから利用されていたと考えられる。また、白倉B区東側の台地上を南北に通過する道（5号溝）が、6世紀前半代には存在したようだ。この道は、つづく6世紀後半代には西側に8mほど移動し（4号溝）、その後長期にわたって本地区の主要道として機能していたと考えられる。

表17　竪穴住居面積時期別一覧表

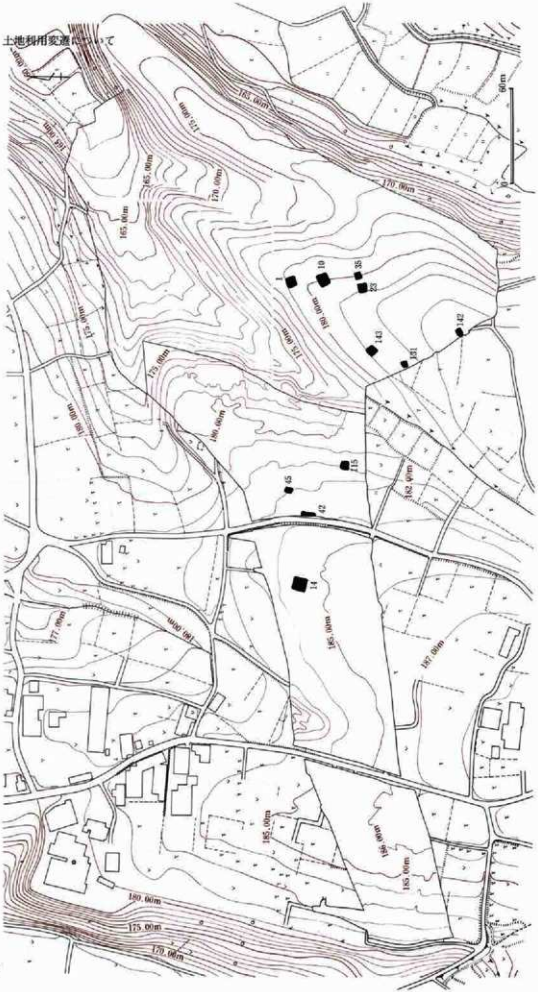
	小 (0～16m²未満)	中 (16～25m²未満)	大 (25～36m²未満)	特　大 (36m²以上)	計測不可能	合　計
4 C	7軒 (32%)	5軒 (23%)	7軒 (32%)	1軒 (5%)	2軒 (9%)	22軒
5 C 前半	3軒 (27%)	0軒 (0%)	3軒 (27%)	1軒 (9%)	4軒 (36%)	11軒
5 C 後半	3軒 (33%)	0軒 (0%)	1軒 (11%)	0軒 (0%)	5軒 (56%)	9軒
6 C 前半	4軒 (8%)	7軒 (15%)	9軒 (19%)	8軒 (17%)	20軒 (42%)	48軒
6 C 後半	11軒 (21%)	13軒 (25%)	12軒 (23%)	1軒 (2%)	16軒 (30%)	53軒
7 C 前半	5軒 (28%)	6軒 (33%)	5軒 (28%)	0軒 (0%)	2軒 (11%)	18軒
7 C 後半	5軒 (42%)	3軒 (25%)	1軒 (8%)	0軒 (0%)	3軒 (25%)	12軒
時期 不明	3軒 (15%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	17軒 (85%)	20軒
	41軒 (21%)	34軒 (18%)	38軒 (20%)	11軒 (6%)	69軒 (36%)	193軒

表18　カマド位置時期別一覧表

	北	東	南　東	南　西	北　東	不　明	合　計
5 C 後半	2軒 (22%)	2軒 (22%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	1軒 (11%)	4軒 (44%)	9軒
6 C 前半	26軒 (54%)	9軒 (19%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	13軒 (27%)	48軒
6 C 後半	31軒 (58%)	9軒 (17%)	1軒 (2%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	12軒 (23%)	53軒
7 C 前半	12軒 (67%)	5軒 (28%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	1軒 (6%)	18軒
7 C 後半	10軒 (83%)	2軒 (17%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	12軒
時期 不明	4軒 (20%)	1軒 (5%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	0軒 (0%)	15軒 (75%)	20軒
	85軒 (53%)	28軒 (18%)	1軒 (1%)	0軒 (0%)	1軒 (1%)	45軒 (28%)	160軒

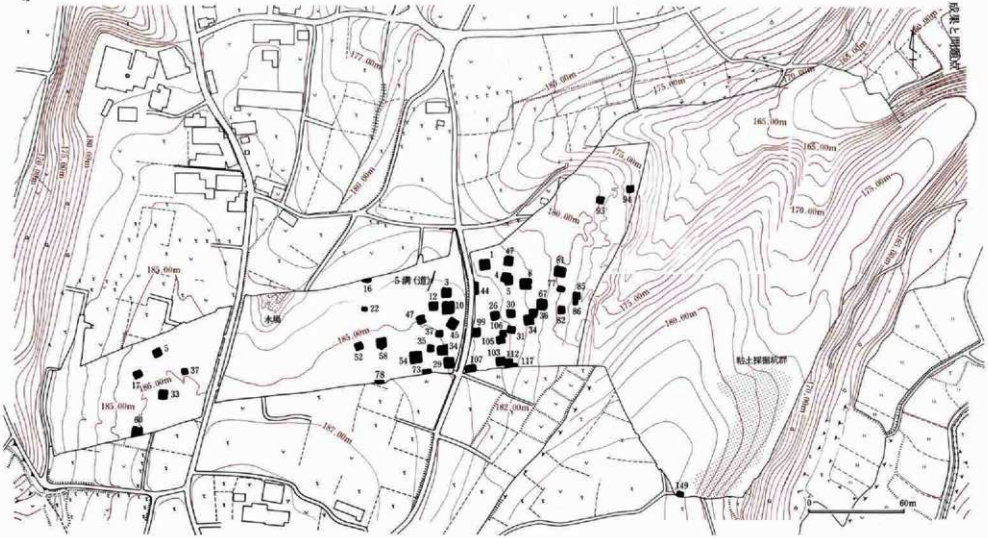


第29図　4世紀の遺構分布

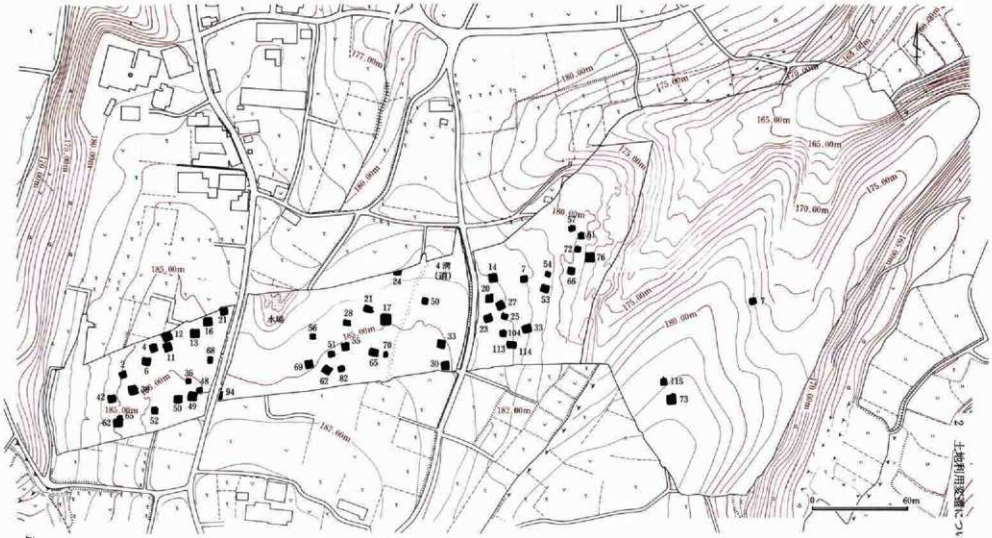


第30図　5世紀前半の遺構分布

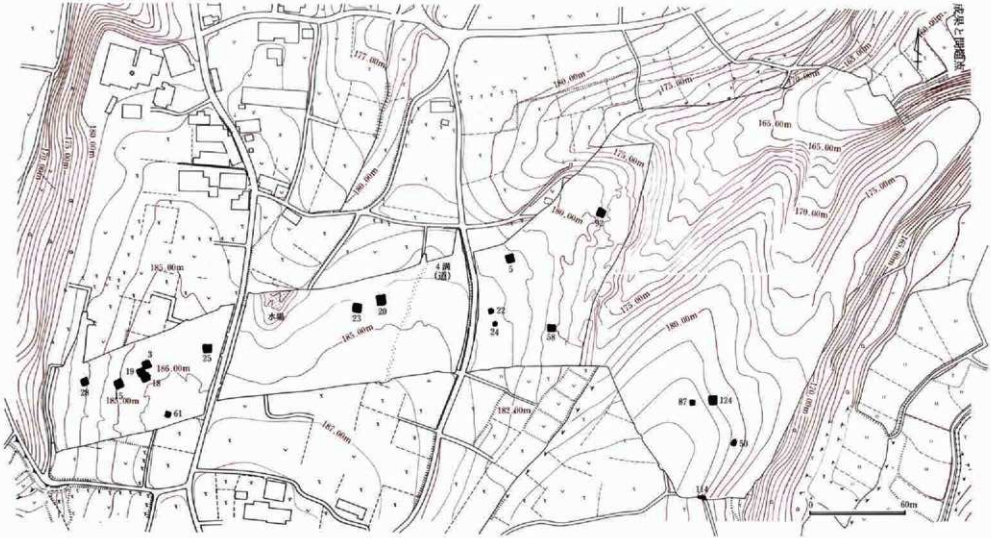
第31図　5世紀後半の遺構分布



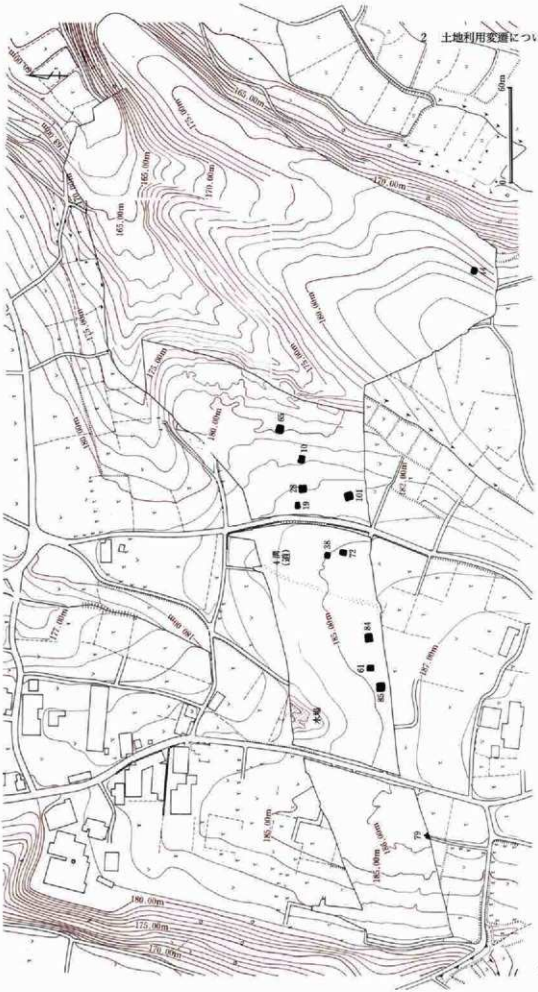
第32図　6世紀前半の遺構分布



第33図　6世紀後半の遺構分布



第34図　7世紀前半の遺構分布


60m
30
0
170.00m
175.00m
180.00m
185.00m
190.00m
195.00m
200.00m
205.00m
210.00m
215.00m
220.00m
225.00m
230.00m
235.00m
240.00m
245.00m
250.00m
255.00m
260.00m
265.00m
270.00m
275.00m
280.00m
285.00m
290.00m
295.00m
300.00m
305.00m
310.00m
315.00m
320.00m
325.00m
330.00m
335.00m
340.00m
345.00m
350.00m
355.00m
360.00m
365.00m

3　住居内に廃棄されたカマド構築石材について

—被熱痕跡の観察から—

外山　政子

1　はじめに

●経過と目的

白倉下原・天引向原遺跡では、古墳時代後期のカマドのある住居跡から、焼けて赤くなった石など明らかにカマド構築材と思われる石が散乱して見つかっている。出土の様子からは、住まいを移る際にカマドを壊した、あるいは他から捨てた等とさまざまに解釈出来る。当時の人々が家移りにあたってなにをしていったのかを知るには、「捨ててある物」の性格の確定が必要である。このため住居内から見つかった加工痕が認められない石類も遺物として取り扱い検討することとした。これらの石類については、まず統計的な処理を行って、後に検討を行うべきだが、膨大な数量のため今回は調査時点の選別をもとに、カマドに使った石はどれかという点に絞って検討する。さらにその結果から、家移り時のカマドの扱われ方を考えてみたい。

●研究の現状と方法

群馬県内の調査例でも、カマドが使用時点のままで確認できるのは稀で、ほとんどが壊れた状態で見つかっている。このため「壊れたのか、壊されたのか」を認識することは、カマドに対する当時の人々の行為を解釈する上で重要な問題となる。

県内でこうした観点で検討されているのは中沢悟氏で、平安時代のカマド構築材の出土状況に注目して、カマドの利用停止に伴って「壊される」行為があることを提示された。①支脚を抜き、②焚き口天井石をはずす、③他の天井石もはずす、④袖石を抜いたりするという一連の行為によってカマドの機能停止を確定する意志があったとされた。

私はカマドにカメが固定されている構造から、カメをはずせば必然的にカマドは壊れるので、壊されているとすればカメを取り外す経過の中で生じた事態であるとし、むしろカマドを使用状態で放置した住居に意味を求めるべきと考えてきた。

中沢氏の述べておられる支脚石の移設については、さらに検討すべき方法を探さねばならないが、住居内にカマド材の大部分を残していることから、「新しい家には新しいカマド材を使う原則があった」とする指摘は重要である。

さらに近年では、土器を中心とした編年研究の充実を基礎として、人々の行動や意識を遺構と遺物の出土状況から復原しようとする研究に向かっている。堤隆氏はカマドの機能停止後の経過を①解体、②構造材処理、③祭祀行為として「解体」あるいは「封鎖（祭祀行為A）」が信仰の存在を証明するとされた。このような解体行為を祭祀行為へ向かう一段階とした場合も、解体行為を認定するための基礎作業がさらに重要となるだろう。

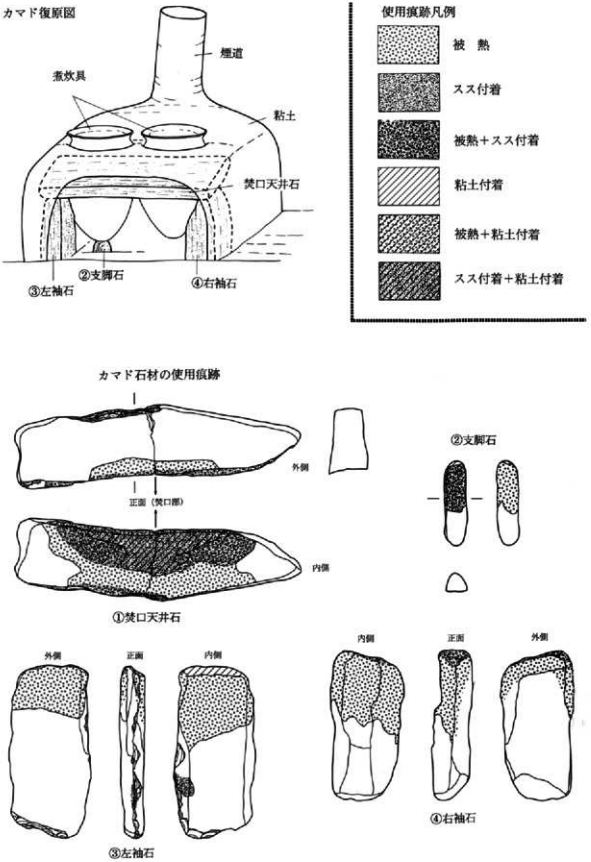
しかし、出土状況をある行為と解釈するための認識方法が共有されていないように思える。そこで一つの試みとして、カマド特有の使用痕跡、主として被熱痕跡を見つけだして、住居内に残された石類と対比検討して、カマド石の認定をおこなう方法を採ってみたい。

カマドの使用痕跡は、空気を一方から送る構造のために生じる。放熱にも方向性が生じ、固定された構築材の受ける熱にも反映される。このため構築材の被熱の痕跡から熱源の方向が特定されるので、壊れあるいは壊されて、原位置から移動していても、設置位置の復原が可能となる。石は復原のためには最適な素材といえる。

2　カマドの構造と被熱痕跡

●構　　造

カマドは基本的に、焚口・燃焼部・煙出しを備えている。燃焼部を包み込むように粘土などで土手を作る。土手両端部に袖石と呼んでいる石を据えて、



第36図　カマド復元図と使用痕跡凡例

上に長い石を渡して鳥居状に焚口部を確保する。袖石は所定の位置に穴を掘って据える場合と、叩いて打ち込む場合とがある。支脚は、燃焼室の幅の中心より左右どちらかにずれて設置されていることが多い。長さ20cm内外の棒状の石でカマド火床に埋め込んでいるが、床から出ている高さは10cm程である。このように周りを立ち上げてから、支脚の上に煮炊具のカメを据え、同時にカマド本体を粘土で補強しながらカメを固定し、天井部を作り上げてゆく。焚口は高さ15～20cm、幅40～50cmが中心である。従って焚口天井石は長さは50～60cmを中心に長くて70cm、幅は20cm程が必要とされる。燃焼部の幅は40～50cmで、支脚より奥で狭くなり煙道へ続く。以上のイメージを図にしたものが第36図である。

●被熱痕跡

カマド構築材の特徴を被熱痕跡と石の形状から検討する。

基本とした観察項目は、

①被熱痕跡の有無と種類・範囲

「被熱」～表面の赤変、「煤」～煤の付着、「粘土」～設置と使用による粘土・焼土の付着、各痕跡の複合

②石の形状

全体形状（板状・棒状）、断面形（長方形・円形・三角形）、平面形（長方形・両先端の細いもの・片端のみ細いもの・三角形・台形）、法量（長辺、短辺、厚さ）

③その他の痕跡（敲打痕、打ち欠き痕、たがね痕）

④石材　である。

（第36図下段は住居カマド構築材の被熱痕跡観察表示例である。）

これに従って代表的な住居内出土の石類とカマド石について観察をおこなったところ、次のように分類できた。なお石材については白倉川・天引川から採集できる片岩、牛伏砂岩（天引石）であり、材質より形の選択が優先していると判断できたため分類ではふれなかった。

1類　被熱痕跡が中央部に帯状に認められるもの。

（両端には被熱痕跡がみられない）

1類①・板状、断面長方形、平面形ほぼ長方形・楕円形、長辺50～70cm、短辺16～20cm

・被熱痕跡は中央部に幅広く、側面に煤の付着がある。被熱痕跡幅40～50cm程。（A31号住居24.28・B29号住居13）

a 被熱痕跡が主に片面のみのもの

b 被熱痕跡が両面にわたるもの

1類②・板状、断面長方形、平面形台形・三角形、長辺40～50cm、短辺30cm内外

・被熱痕跡は幅20～30cmと1類①より狭い範囲である。側面にも認められる。

（B54号住居18.19.22・B78号住居31）

a 片面のもの

b 両面のもの

1類③・細長い棒状　断面三角形や台形、1類①より長辺、短辺が短く30cm～45cm、10～15cmである。

・中央部に帯状に被熱痕跡があるもの、幅18～30cmと1類①より狭い範囲である。

（B78号住居32・A23号住居6.12.13）

2類　被熱痕跡が片側に認められるもの

2類①・板状、断面長方形、平面形不整台形、片端が細く対する端部は平坦で傾斜をもつ。長辺30cm前後、短辺20cm前後

・中央より幅の広い片端へ被熱痕跡のあるもの。長辺の側面にも被熱痕跡が認められる。

（A31号住居21.22.25.26.B29号住居12.16）

2類②・棒状、断面方形・三角形・円形、長さ20cm前後、一方の端部が平らなものが多い。

・被熱痕跡が片側に認められ、焼土・煤と複合した痕跡を残すものが多い。また被熱に斑があり一面が強く焼け、対する裏面は煤けている事が多い。

（A31号住居23.27・B29号住居17.18・A117号住居12）

3類　全体に被熱したもの

・板状断面方形、平面形は片端細長く羽子板状、焚き口天井石を半さ、分割したような形で、長辺20～50cmと大きさに幅がある。短辺は20cm前後。

・被熱痕跡はほぼ全体に認められる。

（A31号住居29.30・A23号住居3.4・B78号住居29）

●カマド石の認定

次に、以上のような各石類の特徴と、カマドに遺存していた石の被熱痕跡とを対比して、カマド石としての認定と設置位置を確定する。

○1類①は炊き口に鳥居状に据える天井石である。

焚き口天井石は、焚き口と燃焼室の天井確保のため安定した板状の形が選択される。焚き口に懸かっていたB29号住居13(第39図)、B54号住居17(第41図)は片面のみの被熱痕で、A31号住居のカマド前から出土した28、西側の石群の24(第37・38図)が同じ特徴を示す。A117号住居11とA23号住居5、B78号住居27は両面に被熱の痕跡が認められる(第40図・43図・45図)、1類①bである。

○1類②・③は、ともに被熱痕跡の幅が狭いことから、燃焼室奥から煙道にかけて横に渡す天井材とする。

カマドに遺存している例を図示できなかったが、B52号住居で遺存例がある(図89)。また、B54号住居の焚口天井石の上に重なって出土した22・19・18は、出土状況を参考に並べて見るとその被熱痕跡が連続した（第41図・42図)。焚口天井石の被熱幅は、焚口の幅を反映しているので、これらの石の被熱幅も施設のある部分の幅を反映していると考えて良いだろう。燃焼室はカメをかける手前の部分が中心で、支脚より奥は熱が回ってゆくことで加熱効果を上げる構造となっているが、煙道入り口に接するため天井部の幅は狭くなる。この部分は被熱痕跡の幅と良く合致する。

○2類―①は袖石の特徴である。

袖石は下端部が細く、上頂部は平坦でしかも手前から奥へ上がり傾斜を持つ形状が多い。これは

3　住居内に廃棄されたカマド構築石材について

天井部を支える場合の安定と、焚口より奥の燃焼室の天井が高くなるよう設計されているためであるが、カマドに遺存していたA31号住居26・22(第37図)、B29号住居12・16（第39図)、A117号住居13（第40図）などが共通の特徴を示す。ここで注目したいのは、片面と両面に被熱痕跡が認められるものがあることである。片面被熱はA29号住居12（第39図)、B78号住居34（第46図）がよくその特徴を見せている。B29号住居12・B78号住居34も右袖石で、カマド内側面に被熱痕跡を残すが、外側面の被熱痕跡は頂端部周辺にとどまっている。同じカマドの左袖石は両面に痕跡がある。両面に被熱痕跡が認められるのは長時間の使用か、高熱の使用か、裏返して再利用をしたことを示すのかにわかには断定できないが、両袖石のキャリアが異なることは確かである。

○2類②は支脚である。

A31号住居23(第37図)、B78号住居28(第45図)は粘土・焼土が付着し典型的な支脚の特徴を見せている。B29号住居17(第39図)はカマド内出土だが火床に埋め込まれていない。補助的な支脚と考えられる。

○3類は燃焼室側壁の補助材かと思われるが、カマドでの遺存例が無いため確定には至らなかった。たがねの痕跡のある石(A23号住居3・4　第44図)、分割したと思われるA31号住居29が当類に属する。

3　住居廃絶とカマドの廃棄

被熱痕跡の観察を通してカマド部材が認定できるとしたが、住居内の出土状況を参考にしながら住居廃絶とカマドの様子を検討したい。

○A31号住居（第37・38図)

焼失住居でカマドにカメを2個据えている。カマド外の左側にから出土した石が火床に据えてあった支脚と接合した。欠けた部分には被熱痕跡が認められない。カマド前の石はカマド材で、28は焚き口天井材、29は3類にあたり、両面に被熱

痕跡がある。焚き口天井石がやや離れた位置にあったことや、カメが倒れずに懸かっていることから、粘土で焚き口を作った可能性も考慮して観察したが、焚き口と思われる土は明確に出来なかった。このカマドでは焚き口天井石をはずして、カメを倒れないように固定したか、そのまま偶然に倒れなかったかである。カマド内土層の観察からは特別な作業は読みとれなかったが、支脚が欠けて取り除いた後はカマドで煮炊きをしなかったと思われる。焚き口天井材をはずしたのがどの時点かは不明である。厳密な意味で使用状態で放置したものではないといえる。

西側の石群は住居が使われなくなってまもなく一時期に棄てられている。カメ類その他もあって1軒分の煮炊き具が揃っている。土層の観察からこの場で使用されたものではないと判断できる。これだけの石類が抜かれた痕跡のある住居は周辺に見あたらないが、他の施設で使われたカマド具一式が投棄された例として注目される。竪穴住居以外の施設での使用とその後の投棄であろうか。

○B29号住居（第39図）

カメを抜き取り、焚き口天井石・袖石・支脚はそのままである。この状態のカマドは当遺跡古墳時代後期住居の16%で認められる。この住居で注目されるのは、柱穴を掘った土が残っていたことである。床の状態からも柱を掘取ったと推定できる。①柱の掘上げ、②除去、③カマド部材（15）が柱穴に落ちる、④焼失の順序である。作業の性格を考えると、柱の除去以前にカマド・カメ類の取り外しが行われたであろう。又焼失住居でもあり、柱を除去した後の焼失例として注目できる。

○B117号住居（第40図）

焚き口天井石とともにカメ2個がカマド内から手前に倒れ込んでおり、袖石は左側のみである。焚き口天井石は両面被熱で、表裏を返して使用している。補修や作り替えが考えられる。左袖石の左側面（出土状況でカマド外側にあたる）にも強い被熱痕跡を認める。カマド右外側にある石類には特別な痕跡は認められなかった。

○B54号住居（第41・42図）

支脚についてはカマド脇の石が所在不明のため検討できなっかった。焚き口天井石の上に他の天井石を重ねている。天井石被熱痕跡に矛盾は無い。右袖石は本来あるべき内側より外側に痕跡が顕著である。左の袖石との被熱時間の違いを推定させる。貯蔵穴が2ヶ所あるのでカマドも移設している可能性が高い。袖石の被熱痕跡差はこの事態を反映しているのだろう。住居中央から出土している石はカマド石と認定できなかった。B29号住居と同じような住居廃絶とカマドの扱いが見られる。

○A23号住居（第43・44図）

カメは取り外されている。支脚も外されており住居内からは見つからなかった。カマド前に天井石が散乱。被熱痕跡の観察からカマドは天井部を石で蓋するタイプであると判断。焚き口天井石は両面被熱しており、長期間の使用の際、必ずしも左右・表裏が固定していなかったことを示す。石を必要な大きさに割って使用していることと、天井材の1類③にあたる12には粘土が付着しており、粘土で固定されていたことがわかる。多量のカマド石を住居内に放置している好例である。

○B78号住居（第45・46図）

カメが2個据えてある。袖石・焚き口天井石・支脚はほぼ原位置。天井石は両面被熱痕跡で、下面の方が強い被熱痕跡を示すはずだが、実際は上面に強い痕跡があり、下面には煤の付着が認められる。上下を変えて後の使用回数が少なかったことを示す（上面の被熱痕跡が焼失の影響でないことは被熱範囲で明らかである）。カマド右手29・30は置かれた状態だが、29は焚き口天井石の転用、30は袖石であった。カマド手前の一群は放り出されたようにみえる。しかも明らかに炭化材の上から出土している。31・32は天井部材である。これらのことから①天井石の乗せ変え、②軽い煮炊き、③焼失、④カマド前に特別な土器群を配置（図

106・図246～248参照)、⑤天井部材の取り外しの順序に行われたと考えられる。住居廃絶にあたって複雑な行為を行っていたことが判明する住居である。

以上のように住居廃絶の際カマドに対する行為は、カメを取り外す行為と不可分で、むしろカメを据え置いた住居に何らかの追加行為が認められるようである。カメの抜かれたカマドではやはり支脚石の行方が問題とされるが、当遺跡ではおおよそ4割の住居で支脚石がカマド内に残されていた。これをどのように解釈するかは、さらに詳しい検討を必要とするだろう。

4　検討の結果から

検討によって明らかとなった事柄と今後の研究課題をまとめて列記すると以下のようである。

① カマド奥部の天井に石を渡している場合があることが判明した。こうした構造は調査時点では想定していなかった。石材の豊富な地域では、合理的な工夫の結果と解釈できるが、日常的な生活の場面では、材料の入手が容易かどうかが重要な問題である。しかし、入手の難易だけが地域のカマド構造の独自性を示すとは限らない。この構造が地域的な工夫の産物なのか検討してみる必要がある。本遺跡の場合でも時期によって構築材が変化していることは示唆的である。

② カメをはずしたカマドでは、カマド石材を住居内に放置していることが多いことが確認できた。中沢氏の提示されたように新住居には新しい石材を使ったとすれば、さらにカマド掘方の検討も加えて再考しなければならない。

③ カメをカマドに据え置いた住居では、カマド石の除去や住居内に土器の配置などの行為があることが確認できた。また、廃棄直前にカマド内にカメを据え直していることも判明した。特別な行為の見られない場合もあるが、カメが残された住居と焼失住居の関連を検討してみるとかなりの高率で関連性を指摘できることから、住居内遺物の出土状態の分析とともに再検討してみたい。

④ カマド石材は複数回使用されているものがあることが判明した。補修・改修にあたって左右の袖石の差し替え、焚き口天井石の裏返しなどが行われていたことが想定できた。再利用や転用の検証については実験が必要なことを再確認した。

⑤ 袖石・焚き口天井部とも打ち欠き調整を行っていることがある。また半分に割るために「たがね」を打ち込んだの痕跡も認められており、カマド石にも様々な造作を施していたこと明らかになった。

⑥ 支脚の行方　カマドを片付ける際に抜かれていることも多いが、他のカマド石と一括して棄てられている例もあり、基本的には他の石と同様な扱いをしていたとみえる。本遺跡ではカマドに石を使っている割合と支脚石がカマド内に残存している割合は、時期によって同じ変化傾向をたどる。そこから特別な意味を読みとることは現状では無理がある。

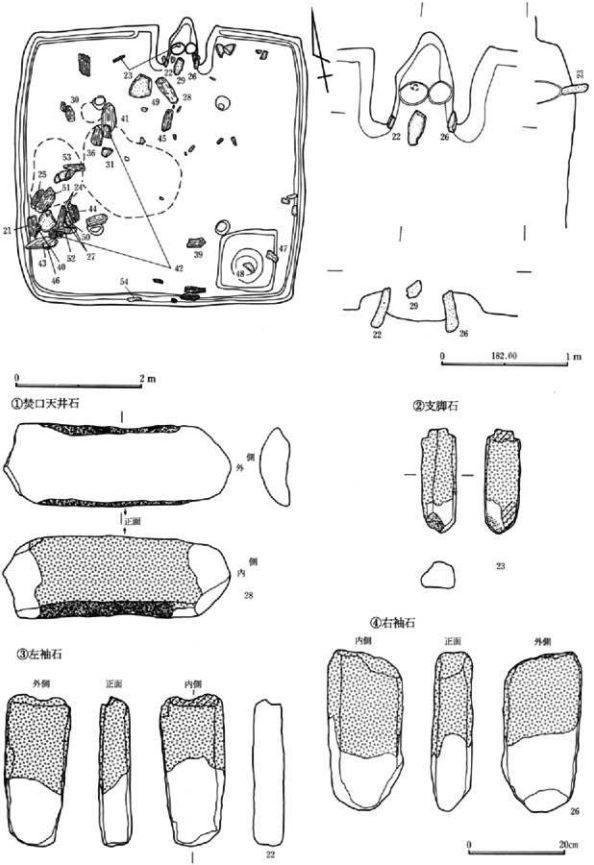
⑦ 使用石材は白倉・天引両河川から採集できる片岩と牛伏砂岩であった。カマドは、通例身近な周辺で入手できる材料を使って築いていることが多いため、本遺跡の住居で石をカマド構築材として活用していることは、石材の豊富な天引川・白倉川に挟まれた台地上の立地からしても当然と言える。カマドに使われていた石材は両河川から採集されたもので間違いない。現在でも両河川、特に白倉川では適当な石材が探せる。ある時期に急に入手が困難となる事態は想定し難い。本遺跡で石をカマド材とした住居は61軒で、およそ54%である。これを時期毎に見てみると、6世紀前半の75%をピークに、6世紀後半は56%、7世紀前半に38%、7世紀後半17%であった。7世紀後半以降急に減少することは注目すべきであろう。

5　おわりに

住居を使わなくなる時点でカマドに対して何らかの行為が行われることは確かであり、カマド祭祀の

存在も基本的には否定しない。特別な行為と普通の行為を区別する「目安」を明確に提示するべきだと考えているが、特別な行為が祭祀で普通の行為が祭祀でないのかというとそうも言えないだろう。例えば、家の神棚に供え物をするのは祭祀であり日常的行為でもある。これらを区分して検討するために前提となるべき資料の検討を多方面から加えてみたいと考えている。本検討の中で、まず資料への共通認識とその扱いに均質性が要求されると痛感した。これらの資料観察の蓄積は、行動や動作の復原の手掛かりとなり、当時の価値観理解の一助となるであろう。私自身の反省でもあるが、本遺跡の調査でも充分な配慮をせずに選別したため、不明な部分を残してしまった。当初、支脚石の行方を確定したいと思って始めた観察であるが、本来の目的は未だ明確にできないでいる。転用や再利用を明らかにするために復原実験を行い再検討してゆきたい。

参考文献
1　中沢　悟　1986「竈の廃棄について」『大原Ⅱ・村主遺跡』財・群馬県埋蔵文化財調査事業団
2　堤　隆　1995「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌７号』山梨県考古学協会
3a　外山政子　1987「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要６』財・群馬県埋蔵文化財調査事業団
b　外山政子　1991「三ッ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊き」『三ッ寺Ⅱ遺跡』財・群馬県埋蔵文化財調査事業団
c　外山政子　1992「炉かカマドか、もう一つのカマド構造について」『研究紀要10』財・群馬県埋蔵文化財調査事業団



第37図　白倉A区31号住居カマド石材